

磐越自動車道関係発掘調査報告書

おきの
沖ノ羽遺跡Ⅱ（B地区）

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

磐越自動車道関係発掘調査報告書

おきの は
沖ノ羽遺跡Ⅱ（B地区）

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

磐越自動車道いわき～新潟線は、太平洋側のいわき市と日本海側の新潟市を結ぶ高速道路として、現在、完成に向けて着々と工事が進められている。全線開通すると常磐・東北・北陸自動車道との連結が可能となり、地域社会の発展に貢献するものとなる。

新潟県教育委員会は、昭和59年以来磐越自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の調査を、事業主体である日本道路公団と協議を進めながら実施している。

本書は、磐越自動車道の建設に伴う、沖ノ羽遺跡の発掘調査報告書である。近年、新津市域では、磐越自動車道の建設や大規模開発により、埋蔵文化財の調査が沖積地にも及んでいる。これらの調査により、従来あまり明らかにされなかった沖積地における人々の生活の一端をうかがうことができるようになった。三年間にわたる調査の結果、沖ノ羽遺跡は古墳時代・平安時代・中世にわたる遺跡であることが確認された。また、貴重な資料も多く得ることができた。ここに報告する沖ノ羽遺跡B地区では、古墳時代の土坑群、平安時代の集落、中世の井戸・用水などが検出された。特に中世の井戸からは、漆加工された烏帽子という全国でも大変珍しい、貴重な遺物が出土した。

調査の成果を広く県民の方々に文化財についての認識を深めるために役立てていただくとともに、歴史を解明するための研究資料として活用いただければ幸いである。

最後に本調査に参加された地元の方々ならび新津市教育委員会には多大な御協力と御援助をいただき、日本道路公団新潟建設局・同新潟工事事務所には格別の御配慮を賜った。ここに深甚なる謝意を表するものである。

平成8年3月

新潟県教育委員会

教育長 平野清明

例 言

1. 本書は新潟県新津市大字七日町字沖ノ羽3255他に所在する沖ノ羽遺跡の発掘調査報告書の第2冊である。発掘調査は磐越自動車道いわき～新潟線の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
2. 本書は沖ノ羽遺跡の西部（B地区）の発掘調査報告書である。沖ノ羽遺跡は遺構の性格に応じて東より、A地区・B地区・C地区に大別し、調査面積が膨大であることから調査区別に順次報告することになった。今回はB地区について報告する。A地区の調査報告書は『沖ノ羽遺跡Ⅰ（A地区）』として既に刊行されている。
3. 発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、平成2年度から4年度にかけ実施した。なお、平成4年度の発掘調査については、新潟県教育委員会が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋蔵事業団と略す）に調査を委託した。調査体制は第Ⅰ章に記した。
4. 整理及び報告書作成にかかる作業は平成5～7年度に実施し、埋蔵事業団職員がこれにあたった。出土遺物及び調査にかかる資料は、すべて新潟県教育委員会が保管・管理している。遺物の注記は、略記号を「沖」として、出土地点・層位等を併記した。
5. 本書で示す方位はすべて真北である。観北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既製の図面を使用したものについては、それぞれにその出典を記した。
6. 遺構と遺物の実測図は巻末の図版に一括した。出土遺物には通し番号を付し、挿図と写真図版の番号は一致させた。
7. 文中の註はすべて脚註とした。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。第Ⅵ章は各節末に文献を記した。
8. 本書の作成は藤巻正信（埋蔵事業団調査課第一係長）の指導のもとに、星野信明（同調査員）が担当した。また、本書は星野を中心に分担執筆したもので、高橋保雄（同主任）・亀井功（同主任）・佐藤正知（同主任）・木村康裕（同調査員）・石川智紀（同調査員）・星野信明（同調査員）・田海義正（同主任）がこれにあたった。分担は、第Ⅰ章1 亀井・石川、第Ⅰ章2及び第Ⅱ章1・2 佐藤、第Ⅱ章3及び第Ⅳ章2 木村、第Ⅲ章1・2および第Ⅳ章3 星野、第Ⅳ章1 高橋・星野、第Ⅴ章1・3 高橋、2 田海、2 星野、第Ⅶ章1 星野、2 A・C 高橋、2 B 田海、要約は田海である。なお、本書の編集は星野が行い、田海が協力した。
9. 出土遺物の烏帽子の分析と検討（第Ⅵ章3）は永嶋正春氏（国立歴史民俗博物館助教授）に依頼し、玉稿を賜った。
10. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から貴重な御教示・御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略・五十音順）

伊藤秀和・阿本郁栄・川上貞雄・小川重蔵・金子正典・四柳嘉章・田村浩司・戸根富美江・新津市教育委員会・新津土地改良区・真柄慎平・横山勝栄・渡辺朋和・渡辺ますみ

目 次

第I章 序 説	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制と整理作業	1
第II章 遺跡の位置と環境	
1. 位置と地理的環境	4
2. 沖ノ羽遺跡周辺の微地形	6
3. 周辺の遺跡と歴史的環境	7
第III章 調査の概要	
1. 第一次調査	11
2. 第二次調査	11
A. 調査方法	11
B. 調査経過	14
第IV章 遺 跡	
1. 層 序	17
2. 概 観	19
3. 遺構各説	19
第V章 遺 物	
1. 古墳時代の土器	38
2. 平安時代・鎌倉時代	41
A. 土器の概観	41
B. 遺物各説	42
第VI章 自然科学分析	
1. 古墳時代の土坑覆土分析	52
2. 出土柱根の樹種同定・放射性炭素年代測定	57
3. 沖ノ羽遺跡出土の烏帽子について	59
第VII章 ま と め	
1. 遺 構	
A. 古墳時代	63
B. 平安時代・鎌倉時代	63
2. 遺 物	
A. 古墳時代	66
B. 平安時代	66
C. 鎌倉時代	67
《要 約》	68
《引用・参考文献》	80

挿 図 目 次

第1図	沖ノ羽遺跡の位置	4
第2図	沖ノ羽遺跡周辺の地形	5
第3図	沖ノ羽遺跡周辺の旧地割	7
第4図	沖ノ羽遺跡周辺の主要遺跡（古代・中世）	8
第5図	沖ノ羽遺跡一次調査試掘溝位置図	11
第6図	沖ノ羽遺跡グリッド設定図	12
第7図	沖ノ羽遺跡B地区土層柱状図	18
第8図	墨書土器(82)実測図	44
第9図	沖ノ羽遺跡B地区遺構配置模式図	64・65

表 目 次

第1表	沖ノ羽遺跡発掘調査実施状況	16
第2表	リン分析結果	54
第3表	樹種同定結果	57
第4表	沖ノ羽遺跡B地区の放射性炭素年代測定結果	58
第5表	遺物観察表	69

図 版 目 次

図面図版

図版1	遺構実測図1	全体図
図版2	遺構実測図2	全体図
図版3	遺構実測図3	古墳時代
図版4	遺構個別実測図1	古墳時代
図版5	遺構実測図4	平安時代・鎌倉時代
図版6	遺構個別実測図2	平安時代・鎌倉時代
図版7	遺構実測図5	平安時代・鎌倉時代
図版8	遺構個別実測図3	平安時代・鎌倉時代
図版9	遺構実測図6	平安時代・鎌倉時代
図版10	遺構個別実測図4	平安時代・鎌倉時代
図版11	遺構実測図7	平安時代・鎌倉時代

- 図版12 遺構個別実測図5 平安時代・鎌倉時代
 図版13 遺構実測図8 平安時代・鎌倉時代
 図版14 遺構個別実測図6 平安時代・鎌倉時代
 図版15 遺構個別実測図7 平安時代・鎌倉時代
 図版16 遺構個別実測図8 古墳時代・平安時代・鎌倉時代
 図版17 遺構個別実測図9 古墳時代
 図版18 遺構個別実測図10 平安時代・鎌倉時代
 図版19 遺構個別実測図11 鎌倉時代 SE104
 図版20 遺構個別実測図12 鎌倉時代 SK108・109
 図版21 遺構個別実測図13 古墳時代・平安時代・鎌倉時代
 図版22 遺構個別実測図14 平安時代
 図版23 遺構個別実測図15 平安時代
 図版24 古墳時代 出土遺物1 遺構
 図版25 古墳時代 出土遺物2 その他の遺構・包含層
 図版26 平安時代・鎌倉時代 出土遺物1 遺構
 図版27 平安時代 出土遺物2 遺構
 図版28 平安時代・鎌倉時代 出土遺物3 遺構
 図版29 平安時代 出土遺物4 遺構
 図版30 平安時代 出土遺物5 遺構
 図版31 平安時代・鎌倉時代 出土遺物6 遺構
 図版32 平安時代 出土遺物7 包含層
 図版33 平安時代 出土遺物8 包含層
 図版34 平安時代 出土遺物9 包含層
 図版35 平安時代 出土遺物10 包含層
 図版36 平安時代・鎌倉時代 出土遺物11 包含層
 図版37 木製品1
 図版38 木製品2
 図版39 石製品・土製品

写真図版

- 図版40 沖ノ羽遺跡周辺空中写真
 図版41 5区上層東側空中写真、5区上層西側空中写真、9区東側空中写真
 図版42 5区下層空中写真、10区全景、11区全景
 図版43 12区全景、13区全景、基本層序
 図版44 SB81空中写真、SB83空中写真、SB86完掘
 図版45 9区全景空中写真、SB164 空中写真、SE160 井戸側出土状況
 図版46 遺構 SK185、SK189、SK196、SK199、SK200
 図版47 SK205、SK207・SK208、SE104、SK58、SD67、SD69・56・57・71、SD68
 図版48 SK73・74、SD92、SD93、SD93・94、46E-p4、SE105
 図版49 SD111、SD127、SK130、SD131、SD111・120、SD120
 図版50 SD120・127、SK138、SD131、SD131・128・127、SD136、SK144
 図版51 SK145、SD149、SD150・151、SD151・159、SD151、SD157・159・151
 図版52 SX156、SD153、SD154、SD155

図版53	SD157, SD157・177, SD158, SK161, SD163, SK165
図版54	SE168, SK169, SD157, SD84, SK166, SD177
図版55	SK171, SK180, SK183, SD93, SK184
図版56	SD57, SK62, SD92, SD94, SK95
図版57	SD98, SE101, SK142, SK191, SK195
図版58	SK186, SK220, SK197, SK70
図版59	SK79, SE110, SE104, SK108, SK109
図版60	SK87, 47G-P1, 47G-P2, SE160, SD80
図版61 遺物	SK186, SK191, SK195, SK212, SK196, SK220
図版62	その他の遺構・包含層
図版63	SK58, SD67, SD68, SD60, SE69, SK71
図版64	SK87, SD93, SK79, SD120, SD127
図版65	SK154, SK136, SK158, SD151, 4E20P2, SK161, SK180, SK165, SD157
図版66	その他の遺構出土遺物
図版67	その他の遺構・包含層出土遺物
図版68	包含層出土遺物
図版69	包含層出土遺物
図版70	土器 成形・調整技法
図版71	木製品 SE160, SE106
図版72	木製品 SE69, SE104, SK109, SK108, 47G-P1, 47G-P2, SD127, 46E-P4
図版73	鳥帽子・曲物・石製品・土製品 SK184, SK70, SD151, SD93, 遺構外
図版74	沖ノ羽遺跡B地区出土木材の顕微鏡写真
図版75	井戸中から出土した中世の鳥帽子断片

第 I 章 序 説

1. 調査に至る経緯

磐越自動車道いわき～新潟線は、福島県いわき市を起点として常磐自動車道から分岐し、郡山市で東北自動車道に連結・交差する。さらに会津若松市、新潟県東蒲原郡津川町を通過し、新潟市に至って北陸自動車道と結ばれる。この総延長約212kmの高速道路は、太平洋側と日本海側を直結させ、産業・経済・文化の交流を促進させる重要な役割をもっている。

磐越自動車道のうち沖ノ羽遺跡にかかる区間（新潟～津川間）は、昭和53年12月に基本計画路線が決定され、昭和57年1月に整備計画に格上げされた。これより先、昭和56年12月には建設省北陸地方建設局により、新潟～津川間の路線概要・環境影響評価の説明が新潟県教育委員会（以下、県教委）及び関係6市町村に行われている。

昭和59年8月、日本道路公団新潟建設局（以下、公団）から県教委に、新潟～津川間の計画路線内及びその周辺の埋蔵文化財包蔵地の分布調査依頼がなされた。県教委は同年10月、分布調査を周知の遺跡の確認にとどめるが平野部や段丘上には未周知の遺跡の存在する可能性があり、今後とも分布及び第一次調査を実施する必要がある旨を回答した。

昭和60年2月、公団に新潟～津川間（約46km）の工事施工命令が出され、昭和61年8月には最後の路線発表を行った。県教委は新潟市～北蒲原郡安田町間の遺跡分布調査の依頼を受け、昭和62年4月、法線内の第1回遺跡分布調査を実施した。その結果、沖ノ羽遺跡を含めた計16ヶ所の第一次調査必要地点のあることとその調査面積を回答し、昭和63年1月に公団との間で新潟～安田間の文化財発掘工程打合せ会議を開催した。また同年2月、県教委は第一次調査の各地点の調査面積を回答した。昭和63年8月、県教委は「昭和63年度上半期発掘調査結果」の協議で、第2回分布調査の結果と今後の調査必要地点を示した。

平成元年1月の協議で沖ノ羽遺跡は調査発掘の対象地点とされ、平成2年1月、公団から沖ノ羽遺跡の第一次調査希望が提示され、同年4月の調査の決定に基づいて、県教委は4月から6月末日までの間に計4回延30日間、沖ノ羽遺跡の第一次調査を実施した。

平成3年1月、「磐越自動車道埋蔵文化財調査工程会議」において沖ノ羽遺跡の第二次調査必要面積61,600㎡を公団側へ示し、平成3年度・4年度に第二次調査を実施した。

2. 調査体制と整理作業

調査体制

発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり、下記の体制で実施した。

【平成3年度】

調査期間 平成3年4月15日～12月19日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）

2. 調査体制と整理作業

管 理 総 括	大輪 圭己（新潟県教育庁文化行政課長）	
管 理	吉倉 長幸（ 同 課長補佐）	
庶 務	藤田 守彦（ 同 主事）	
調 査 調査指導	横山 勝榮（ 同 埋蔵文化財第一係長）	
	本間 信昭（ 同 埋蔵文化財第二係長）	
調査担当	伊興部倫夫（ 同 文化財専門員）	
調 査 員	亀井 功（ 同 文化財主事）	
	望月 正樹（ 同 文化財主事）	
	澤田 教（ 同 文化財専門員）	
	春日 真実（ 同 嘱託）	
	上田 順二（ 同 嘱託）	
	木村 孝一（ 同 嘱託）	

作 業 員 新潟市・亀田町・横越村・京ヶ瀬村の有志

なお、平成3年度は全調査区（13区）のうち、1区・2区・3区・4区・8区及び7区一部の調査にあたった。

[平成4年度]

調査期間	平成4年4月9日～12月10日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）
管 理 総 括	高橋 秀雄（新潟県教育庁文化行政課長）
管 理	神田 久夫（ 同 課長補佐）
調査指導	本間 信昭（ 同 埋蔵文化財係長）
調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）	
管 理	藍原 直木（事務局長）
	渡辺 耕吉（総務課長）
	茂田井信彦（調査課長）
庶 務	藤田 守彦（総務課主事）
調査指導	戸根与八郎（調査課第一係長）
調査担当	高橋 保雄（ 同 主任）
調 査 員	亀井 功（ 同 主任）
	佐藤 正知（ 同 主任）
	須藤 高志（ 同 専門員）
	木村 康裕（ 同 専門員）
	石川 智紀（ 同 専門員）
	星野 信明（ 同 専門員）
	塩路 真澄（ 同 嘱託）
	上田 順二（ 同 嘱託）
	佐藤 恒（ 同 嘱託）

作業員 新津市・亀田町・横越村・京ヶ瀬村の有志

なお、平成4年度は5区・6区・9区・10区・11区・12区・13区及び7区一部の調査にあたった。

【整理作業 平成5年度】

主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

整理・報告 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理	藍原 直木（新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事・事務局長）
	渡辺 耕吉（〃 総務課長）
	茂田井信彦（〃 調査課長）
指 導	藤巻 正信（〃 調査第一係長）
庶 務	藤田 守彦（〃 主事）
整理担当	星野 信明（〃 文化財調査員）
	高橋 保雄（〃 主任調査員）

【整理作業 平成6年度】

主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

整理・報告 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理	藍原 直木（新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事・事務局長）
	渡辺 耕吉（〃 総務課長）
	茂田井信彦（〃 調査課長）
指 導	藤巻 正信（〃 調査第一係長）
庶 務	泉田 誠（〃 主事）
整理担当	星野 信明（〃 文化財調査員）
	田海 義正（〃 主任調査員）
	橋谷田裕治（〃 主任調査員）
	武田 孝昭（〃 文化財調査員）

神ノ羽遺跡の発掘調査は全体を13区に分割し、平成3～4年度の2年間実施したが、今回報告するのはそのうちの中央にあたる5区・9区～13区であり、「神ノ羽遺跡B地区」と呼称する。なお、1区～4区・6区はA地区、7区・8区はC地区と呼称する。

平成3年度には1～4区及び7・8区の発掘調査を実施したほか、調査の終了した12月下旬から3月中旬までの間、新潟県教育庁文化行政課曾和分室において、出土遺物の洗浄・注記及び遺構カード・図面の整理等を行った。

平成4年度は、出土遺物の洗浄は調査現場で発掘調査と並行して実施した。調査の終了した12月中旬からは曾和分室において、平成4年度発掘分の出土遺物の注記及び遺構カード・図面の整理に加え、『神ノ羽遺跡1（A地区）』に関わる1～4区・6区の本格的な整理を平成5年4月下旬まで行った。

平成5年度は本報告書に関わる5・9～13区の土器接合・復元・実測などを行った。

平成6年度は5年度に引き続き土器接合・復元・実測・トレース・写真撮影等の整理作業を行った。

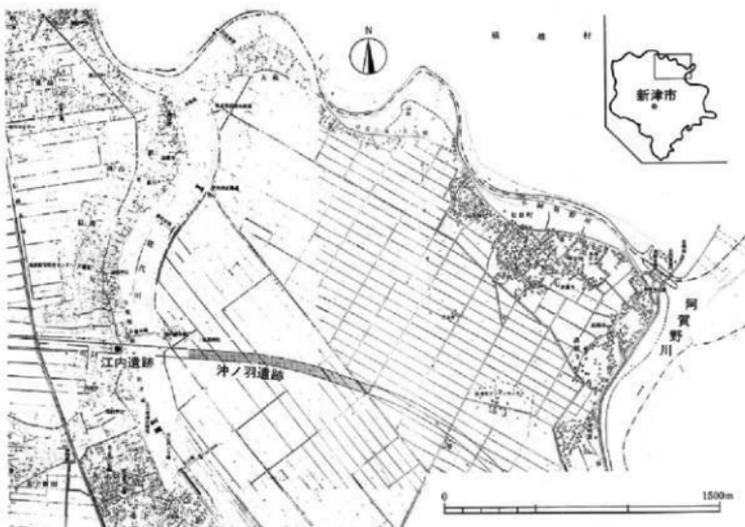
第II章 遺跡の位置と環境

1. 位置と地理的環境

沖ノ羽遺跡の所在する新津市は、新潟平野を東西に二分するように突出する第三系からなる新津丘陵を南端に、東は阿賀野川、西は信濃川、北は小阿賀野川に囲まれた地域に位置している。新津市の低地を含む新潟平野は、平野の出口を砂州の形成でさえぎられて発達してきたいわゆる潟湖充填平野であり、信濃川・阿賀野川等の流入河川で運搬、堆積された土砂が被覆している〔永田・神田ほか1973〕。

この新潟平野には北東から南西方向に約80kmにわたって新潟砂丘が発達している。新潟平野の形成と深い関わりを持つこの砂丘は、その配列により内陸側から第I（亀田砂丘を含む）、第II（沼垂砂丘）、第III（狭義の新潟砂丘）砂丘列に大別できる。この砂丘列の存在によって新潟平野の海岸線の移動が明瞭にとらえることができ、埋没する遺物からI列は縄文時代前期以前、II列は古墳時代以前、III列は室町時代以前に形成されたものと推定されている〔新潟古砂丘グループ1974〕。なお、沖ノ羽遺跡はこの第I砂丘列の約5km南方に位置している。

新潟平野は以上のような砂丘地を除けば低平な湿地帯であり、いたるところに準積の変遷を示す旧河道の氾濫原・蛇行跡・島畑・自然堤防等が見られる〔永田・神田ほか1973〕。この旧河川が作り出した蛇行跡や自然堤防がより明確に現れているのは、阿賀野川の流域であり、右岸では安田町・水原町南西部・京ヶ瀬村、左岸では阿賀浦橋付近から第2図の範囲外であるが五泉市にかけての地域である。この旧河道は、





第2図 沖ノ羽遺跡周辺の地形

土地分譲基本調査「新編」『新設』より作成
 国土地院院 1:50,000 地形図使用

米軍撮影の40,000分の1航空写真（昭和22年）からも容易に判読できる。

これらの旧河道の形成は、歴史時代以降と推定されている〔鈴木1974〕が、第2図にみられる水原町轉河原場から水ヶ曾根の旧流路は元文元年（1736）、横越村焼山のそれは大正2年（1913）に川の改修工事により形成された新しい〔鈴木1989〕ものである。また、寛永16年（1639）『横越島絵図』（新高市割野青木氏所蔵）には、そえ潟・べら潟・なべ潟等現在見られない潟湖が多数存在しているが、近世後期の新田開拓や治水事業による水田の拡大、昭和に入ってからの土地改良・基盤整備事業によって、多くの潟湖は消滅し、現在のような美田が広がる景観に度脱した〔植村ほか1978〕。

概観的に見ると、阿賀野川・信濃川・小阿賀野川・新津丘陵に囲まれた沖積地には、5万分の1の地形図に表現不可能な起伏の小さな微高地や自然堤防が存在している。第2図からも明らかのように①新津市街地から西方の小合まで続くもの、②新津市街地から北西方向の長割・覚路津まではほぼ連続するもの、③能代川左岸で新津市街地から北上・川口・福島・田島へと続くもの、④結の東方から満願寺へと断続的に追えるもの等が認められる。これらはかつて阿賀野川が形成した自然堤防と考えられ、阿賀野川が西から東へ流路を変化させてきた結果と推測されている〔鈴木1989〕。なお、沖ノ羽遺跡は④の自然堤防上に位置している。

新津市の南端に位置する新津丘陵は、金比羅山（134m）の北部を境として、高度の不連続性から護摩堂山地と区分される。護摩堂山地を取り囲むように発達する新津丘陵は、標高100m以下のきわめて定高性のよい丘陵である。なお、新津の近代産業を代表する石油鉱場はこの丘陵の東側に集中している。また、新津丘陵・護摩堂山地縁辺には、かならずしも明瞭ではないが台地が付随しており、縄文時代・弥生時代の遺跡が存在している。

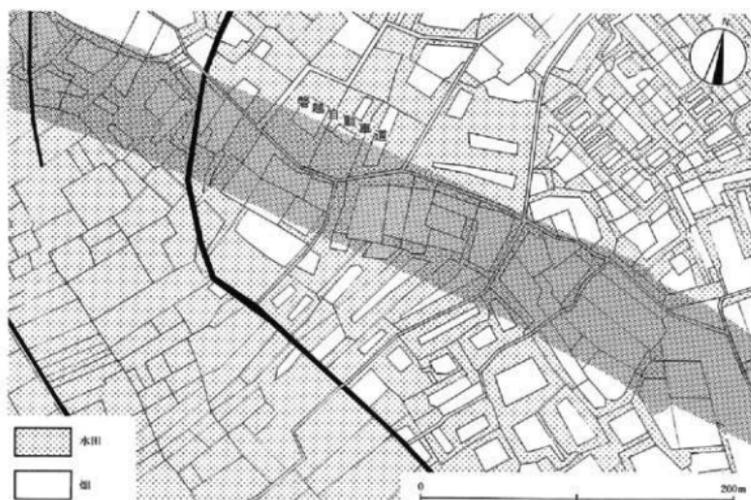
2. 沖ノ羽遺跡周辺の微地形

沖ノ羽遺跡は、能代川・阿賀野川・小阿賀野川に囲まれた沖積平野に立地し、付近の標高は4.0m～5.8mを測る。現在は耕地整理が進み、地形の起伏がほとんど認められず一面の水田地帯となっている。この景観は、昭和15年～25年に行われた土地改良事業によって形成されたものである。水田の中にわずかに残る畑は島状に分布しており、その比高は水田面より若干高く、50～80cmを測る。この比高差は、先述したように旧河川の作り出した自然堤防や微高地の一部が部分的に残存したことにより、生じているものと考えられる。

土地改良以前の状況については、『新津町東部整理組合現景図』（第3図）及び明治44年の1：25,000地形図から知ることができる。特に、前者は昭和15年（1940）に新津町東部整理組合によって作成されたものであるが、当時の土地利用の様子が明確に把握できる。第3図が示すように、遺跡の南西方には方形に区画された水田が広がり、遺跡が立地している地域やその周縁には、畑地一枚一枚を取り囲むように作られている「畑田」と呼ばれる水田が分布する。現在と比べると畑地の分布の多いことが指摘できるが、ここでは桑が栽培され、五泉市の絹織物を支えていた地域の一つであった。

以上のような土地利用の状況から、土地改良以前の沖ノ羽遺跡周辺の土地には微高地が散在し、現在のような平坦な地形ではなかったと考えられる。すなわち、当時の土地利用は自然地形を生かして、平坦部は水田に、微高地は畑に、微高地周縁は畑田と畑が混在するといった土地利用がなされたものと推察できる。以上のことから、沖ノ羽遺跡は、河川が形成した自然堤防・微高地または、微高地の周縁部に立地

していたものと理解される。



第3図 沖ノ羽遺跡周辺の旧地割

新潟市東部埋蔵文化財発掘調査
関係合作隊 1:1,800 昭和58年

3. 周辺の遺跡と歴史的環境

新津市域の主な古代・中世遺跡の分布は第4図のとおりである。縄文・弥生時代については数例であるが、新津丘陵周縁部の台地に立地している。古墳時代の遺跡としては、古津八幡山古墳を初めとする古津地域に集中しており、弥生時代から奈良・平安時代にかけての連続性が推定される地域である【木村宗1988】。奈良・平安時代になると、遺跡の数も増え、丘陵周辺や沖積地上の微高地に立地している。近年、大規模開発や磐越自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査により、沖積地において広大な範囲を持つ遺跡の存在が明らかになってきている。また、丘陵上には七本松窯跡群などの須恵器窯跡は丘陵東側に、古津初越B遺跡などの製鉄遺跡は丘陵西側に分布している。中世の遺跡はさほど多く確認されていない。当地域と関係のあった平賀氏一族に関わる新津城・東島城・金津城等の城跡跡が確認できる程度である。沖ノ羽遺跡周辺では、大正5年(1916)の阿賀野川改修工事で河中に没して遺構は確認できないが、大字満願寺に長崎城があったという【『温古の泉』34篇1892】。

古代の新津市域は、蒲原郡に属していた。現在の蒲原郡は北・中・西・東・南蒲原の5部に分かれていたが、古代における範囲は、およそ近代の中・西・南蒲原を含むものであったと考えられる。7世紀後半(690年頃)、蒲原郡は、頸城・古志・魚沼とともに越中国に属していた。なお、沼垂・磐船の2郡は越後国に属し、阿賀野川が両国の境となっていた。その後、8世紀初頭に越中国4郡の越後国併合(702年)、出羽国の分立(712年)により、後世の越後国の領域が定まったのである。これらは、評足播・磐舟播設



沖ノ羽遺跡周辺の主要遺跡（古代・中世）

1. 西前遺跡	奈良・平安	16. 江内遺跡	中世・	30. 大入遺跡	奈良・平安
2. 早通前遺跡	平安・中世	17. 沖ノ羽遺跡	古墳、平安、中世	31. 金津初越遺跡	奈良・平安
3. 八幡前遺跡	平安	18. 西越遺跡	平安	32. 古津初越B遺跡	奈良・平安
4. 周袋谷内西遺跡	平安、中世	19. 小戸下組遺跡	奈良・平安、中世	33. 七本松跡群	奈良・平安
5. 上堀心遺跡	中世	20. 寺尾遺跡	奈良・平安	34. 滝谷跡跡	奈良・平安
6. 上堀遺跡	平安・平安	21. 川原遺跡	奈良・平安	35. 筆本遺跡	奈良・平安
7. 上堀B遺跡	奈良・平安	22. 下新ノ木遺跡	奈良・平安、中世	36. 西江遺跡	平安
8. 天王杉遺跡	平安	23. 中堀遺跡	平安	37. 寺道上遺跡	奈良・平安、中世
9. 曾根遺跡	中世	24. 榎大門遺跡	平安	38. 榎池遺跡	奈良・平安、中世
10. 川原畑遺跡	平安、中世	25. 北堀遺跡	奈良・平安	A. 伏見岡城	
11. 下等列高遺跡	平安、中世	26. 舟戸遺跡	古墳、奈良・平安、中世	新津城（館）	
12. 真田遺跡	奈良・平安、中世	27. 大塚遺跡	奈良・平安	C. 程島跡	
13. 結遺跡	奈良	28. 堀平遺跡	奈良・平安	D. 東島跡	
14. 上陣遺跡	奈良・平安、中世	29. 古津八幡山古墳・	古墳、平安	E. 金津城	
15. 川口早遺跡	奈良・平安、中世	八幡山遺跡			

第4図 沖ノ羽遺跡周辺の主要遺跡（古代・中世）

国土庁国土地院発行 1:50,000
「新編」新津市、平成元・2年

置とともに、大和政権の蝦夷政策の中で位置づけられる。近年、三王山古墳（三条市）・古津八幡山古墳など、古墳の発見が相次いでいるが、このことは、4・5世紀の段階で大和政権の影響が蒲原郡に及んでいたこと、三条市から新津市にかけての丘陵沿いに一定の政治勢力が存在していたことをうかがわせるものである〔甘粕・荒木ほか1989、甘粕・川村ほか1992〕。

10世紀に成立した『倭名類聚抄』によれば、蒲原郡には「日置・桜井・勇礼・青海・小伏」の5郷が存在していた。また、延長5年（927）の『延喜式』神名帳には、「青海（2座）・宇都良波志・伊久礼・槻田・小布施・伊加良志・伊夜比古・長瀬・中山・旦那野・船江・土生田」の蒲原郡の式内社（12社13座）が記されている。これらの所在については、地名や遺跡の分布を手掛かりとして検討されているが、諸説一致をみていない。その中で、『大日本地名辞書』は日置郷を新津市あるいは村松町付近に比定している。式内社旦那野神社については、新津市朝日の旦那野神社、北蒲原郡征神村の旦那野神社の2説ある。しかし、北蒲原郡は古代において沼垂郡と考えられることから、征神村説は成立し得ない。古津八幡山古墳や弥生時代の高地性集落などの歴史的環境を考慮すると、新津市周辺に日置郷・旦那野神社の存在が考えられる〔木村宗1988〕。県内では、頸城郡が早くから開けていた地域であることが知られているが、遺跡の分布にみる歴史的環境や神位を有する神として『六国史』に見える頸城郡の居多神、大神神、蒲原郡の弥彦神の存在〔山田1981〕は、頸城郡とともに蒲原郡が他郡よりも政治・経済的に進んでいたことをうかがわせる。

古代末から中世にかけて、新津市域は金津保の保域であった。保域は、金津を中心に新津市から丘陵沿いに小須戸町・田上町を含んでいたと考えられる。保の成立は、越後の諸保と同様に、11世紀後半から12世紀の院政期と考えられる。金津保の地頭職を最初に得たのは、信濃源氏平賀氏である。史料の初見は、『吾妻鏡』承久3年（1221）6月8日条に見える「金津（平賀）藏人資義」であるが、地頭職を得たのはそれ以前にさかのぼる可能性がある。その後、資義の2人の子供にそれぞれ木津東方・新津西方が分割譲与された。鎌倉後期には、北条氏一門である越後守護名越時家が、幕府滅亡後の建武4年（1337）段階では、駿河・遠江守護今川氏の一族が地頭職を得ていた。『吾妻鏡』建仁元年（1201）3月4日条には「城四郎長茂并伴類新津四郎已下、於吉野奥被誅畢」という記事を載せる。城氏は、11世紀半ばから12世紀を通して阿賀野川以北の北越後に勢力を有していた。12世紀末の治承・寿永の内乱で平氏とともに滅亡するまで、越後最大の在地領主として、国衙から独立する存在であった。新津四郎について、詳細は不明であるが、平賀氏の一族と思われる。新津四郎が城長茂の伴類とされていることから、城氏の勢力が阿賀野川以南の金津保まで及んでいたことが考えられる。一方、時代は下がるが、応永18年（1411）8月19日の居多神社社領注文〔『新潟県史』資料編4-2121,1983〕に、金津保に含まれていたと思われる木津（横越村木津付近）・金沢西（新津市金沢付近）が国衙の在庁官人たちの所領（在庁名）として記されている。また、在庁名が金津保を北限として阿賀野川以北に及んでいなかったこともうかがえる。これらのことは、阿賀野川に接する金津保が在地領主である城氏と国衙の在庁官人層との競合の地としての性格を有する所であったことが推測できる。

15世紀末から16世紀初めに作成された「蒲原郡段銭帳」は金津保を初めとする新津丘陵周辺の所領状況をうかがうことができる史料である〔『新潟県史』資料編中世補遺-4450,1986〕。これによれば、金津保は約328町もの広大な田地を有し、平賀氏や平賀氏から分出したと思われる新津・木津氏が領有していた。しかし、その大半は、守護上杉氏直臣の長尾・飯沼氏等の所領や守護の御料所であった。鎌倉期以来、金津保を領有していたのは平賀氏一族であったが、鎌倉・室町を通して守護勢力の圧迫を受け、決して安定

した領有ではなかったようである。この間、14世紀半ばの南北朝の内乱、15世紀前半の応永の大乱、16世紀初頭の永正の乱など、蒲原郡を中心に戦いが展開している。特に、南北朝の内乱では、新津市域でも戦いが行われていたことがわかる。その後、平賀・新津氏を初めとする一族は戦国大名上杉氏の家臣としての道を歩む。

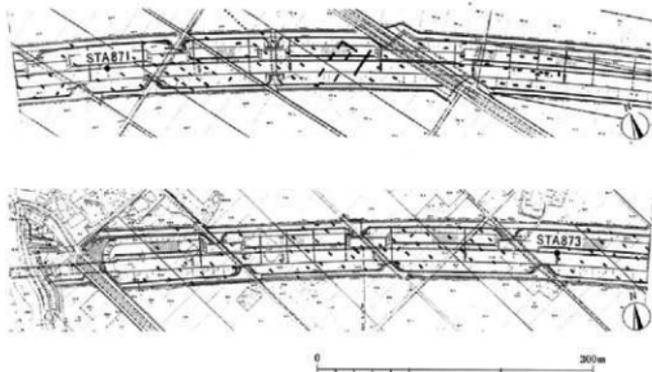
新津市域の地名を見ていくと、「古津」・「新津」という「津」（港の意味）の付された地名があることに注目できる。これらの地名は12世紀までさかのぼることができる。当地域は、地理的に、信濃川・阿賀野川の河口付近にあったとされる蒲原津と河川で結ばれていた。蒲原津は『延喜式』において国津的な性格をもって記されており、当初の越後国府の采譜を引くものであったとも推定されている。また、蒲原郡きっての交通の要衝であり、中世においては、蒲原津を押さえることが、蒲原郡を中心に展開した戦いでは重要であったようである。河川に囲まれた当地域は、蒲原郡さらには沼垂郡の河川交通の要衝として位置づけられよう。

沖ノ羽遺跡の所在する大字七日町はすでに中世において商業集落であり、近世に農村化した集落である〔小村1983〕が、その他の集落の開発は慶長・元和期といわれている〔『中蒲原郡誌』〕。当地域の集落の開発は近世初期にさかのぼり、これ以降、現在の景観が形成されたと考えられる。おそらく、古代・中世の新高平野は潟湖や湿地など未開拓地が広大に存在し、河川と潟湖の世界ともいべき景観を呈していた〔田村1988〕。新津市域の古代・中世遺跡の分布をみると、生産遺跡（製鉄遺跡・須恵器窯跡）は丘陵上にあるが、集落遺跡は丘陵裾、沖積地上の敷高地に拡大していることがわかる。このことは、「大開墾時代」といわれる平安時代後半から鎌倉時代初期の開発との関わりを想起させる。多様な開発について明らかにされているが、文献史料より指摘される旧流路・氾濫原に生じた敷高地（「島」）・自然堤防上の開発〔木村茂1982〕に相当するものととらえられよう。従来、信濃川・阿賀野川に囲まれた沖積地における人々の生活の状況は不明確な点が多く、信濃川沿いの白根市庄瀬地内の自然堤防の畑の地下から鎌倉時代の村落跡が発見された例がある程度である〔川上ほか1983〕。沖ノ羽遺跡を含めた沖積地の遺跡の調査は、河川と潟湖の世界の敷高地に居住した人々の生活を考える上で多くの示唆を与えてくれるであろう。

第三章 調査の概要

1. 第一次調査

第一次調査は、県教育委員会により平成2年4月12日～13日・5月14日～24日・5月30日～6月2日・6月18日～30日の4回行われた。調査方法は、対象地域全体に任意にトレンチ（試掘溝）を設定し、遺構・遺物の有無を確認するというものであった。トレンチの数は190基（2,048㎡）で、調査範囲面積73,020㎡に占める割合は約3％であった。結果、STA(センター杭)867付近からSTA870+80付近、及びSTA872+20付近からSTA877+30付近の範囲に遺物包含層が認められた。また西側（7・8区に相当）には遺物包含層が2枚存在した。遺構として、溝・土坑・ピットなどが検出されたが、特に東側（2区西側・6区東側に相当）には畦畔状遺構が集中して検出され、水田遺構が存在すると推定された。加えて、遺物包含層の2枚ある範囲の一部（8区北側に相当）には、土層観察及び遺物の出土状況から、住居跡の存在する可能性もあった。出土遺物は大半が土師器・須恵器であり、1点のみ近世陶磁器が存在した。土師器は甕・鍋など、須恵器は甕・杯・杯蓋などで、共に9～10世紀に属するものであった。この調査結果により、遺物包含層の確認された範囲に次年度第二次調査を実施する必要が生じた。また対象地域の西側の一部（STA877+30付近からSTA878+20付近）には耕作中の畑地等が存在しており、後日再度一次調査を実施し、その取扱いについて協議する必要が生じた。



第5図 沖ノ羽遺跡一次調査試掘溝位置図

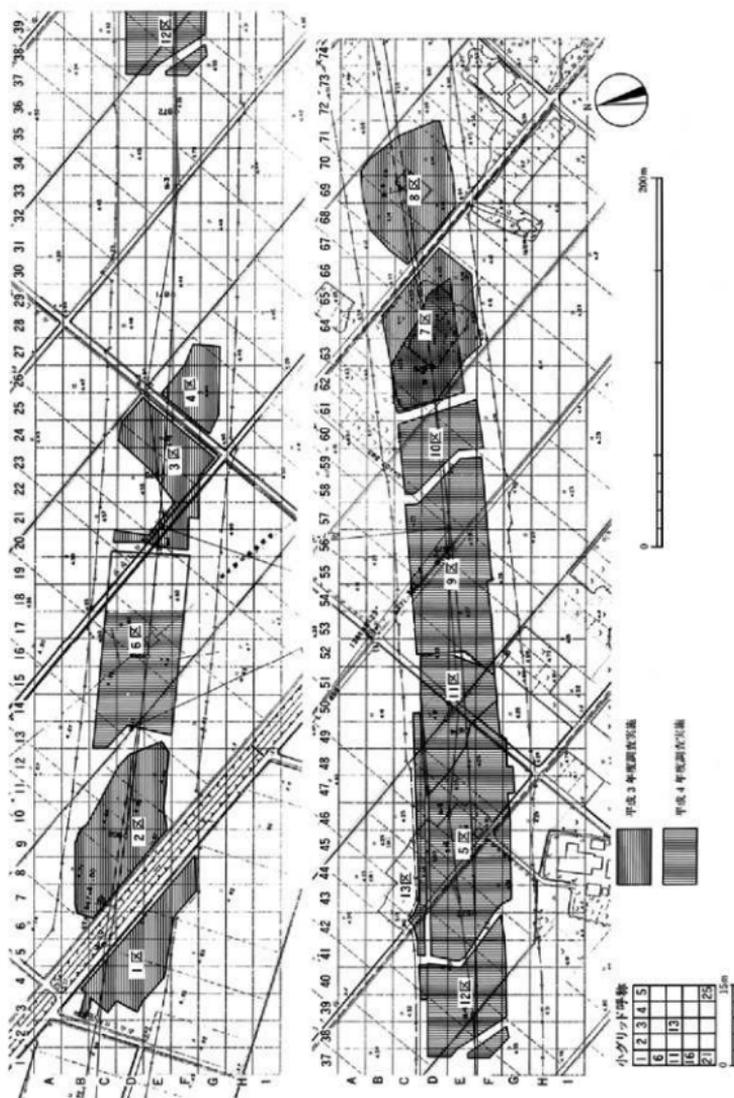
日本道路公団新羽建設局 調査工事事務所作成

1:500 昭和63年調査

2. 第二次調査

A. 調査方法

(1) 調査地の範囲と現況



第6図 沖ノ羽遺跡グリッド設定図

日本道路公団新島建設局 新島工事事務所作成
1:300 昭和63年夏図

沖ノ羽遺跡B地区は高速道法線に沿った東西長さ約360m・南北幅40～55mの範囲である。調査区割りの番号は、調査範囲全体の通し番号とした。カルバート-ボックス工事など公団側の工事が優先される区域から先に調査に入り、基本的にはその順番を区の番号とした。全体を13区に分けたが、B地区は東西に長く延びる沖ノ羽遺跡の中央にあたり、東側から12区・13区・5区・11区・9区・10区が位置する。12区と5区・9区と10区は工事に伴い作られた仮設農業水路により分けられる。また5区と9区を分けている11区は、調査期間の前半に調査用プレハブが建てられていた。13区は、農道の下であり、本来は2期線工事の際調査を行う場所であったが、古墳時代の遺構の分布が推定されたため、当年度の調査区に入れられた。

B地区の調査前の状況は大部分が水田で、所々に畑地が点在している。標高4.2～5.8mである。このうち水田は標高4.2～4.4mとはほぼ平坦であり、北東側から南西側に向かって多少の起伏をもってわずかに傾斜している。東西で約20cm、南北で10cm以内の高低差があった。畑地の位置は43～46D～Fグリッド、および49・50Dグリッドにあたる。前者は標高5.0～5.8m、後者は4.7mと、水田の中で微高地を形成している。

(2) グリッドの設定 (第6図)

グリッドは調査範囲全体に共通したものである。グリッドは大・小の2種あり、大グリッドは15m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを3m四方に25等分したものである。大グリッドの方向と区割りは、センター杭を基準にした。STA871 (X=201,670.2251 Y=55,802.8850) と STA873 (X=201,711.6923 Y=55,607.2689) を結んだ線を横軸とした。横軸は真西より11度58分07秒北偏しているものの、ほぼ東西を示すといえよう。横軸は南から順にアルファベットを付した。STA873を中心に横軸と直交する線を縦軸とした。これはほぼ南北を示し、東から順に算用数字を付した。両者の交点に杭を打ち、「1A」などと組み合わせて呼称した。大グリッドは南東側の杭番号優位で呼称した。小グリッドは、1～25の算用数字を「1A25」などと大グリッド表示の後に付けて呼称した。小グリッドの番号の呼称法は大グリッドに準じさせた。大グリッド及び調査区端のグリッド境界への杭打ちは業者に依頼して行った。

(3) 調査方法

本調査は、表土・包含層を重機により削平することから始めた。基本層序を確認し、遺跡の基本的状況を把握したのち、遺構精査を行った。遺構の検出・発掘により遺跡の全容を確認したのち、遺構の実測・写真撮影などで記録を残し、調査を完了した。

排水 調査区は沖積地である上、周囲に水田・農業用水路などがあることから、調査区内の排水が不可欠であった。公団側に依頼して調査前に各地区の周囲を巡る暗渠を設置し、集水枡からポンプを使い24時間排水を行った。これ以外にも、調査の際に必要な場所に排水溝を掘り、暗渠や集水枡に水を流した。

包含層削平 セクションベルト (畔) を土層観察のため調査区内を横断するよう残し、表土及び人力による発掘が不要と判断された遺物包含層の一部は、すべてバックホーで掘った。排土はダンプカーで調査区外に搬出した。なお、覆土らしい土や多くの出土遺物など、遺構を示すと考えられる要素が検出された場合、その場所の包含層を残して、人力による削平に切り替えた。包含層出土の遺物は小グリッドごとに取りあげた。

層序確認 前述のセクションベルトに加えて、排水溝の断面・調査区の周囲を巡る壁面などを精査し、

2. 第二次調査

土層観察に利用した。層序を決定したのち、セクションベルトの一部または全部を縮尺1/20で実測した。一部のみ実測する場合には、任意に数カ所を選び幅1mずつ実測した。

遺構精査 包含層削平が終了したのち、遺構の平面的な広がりを検出するために精査を行った。

遺構発掘と実測 遺構発掘は、セクションベルトを残して掘るか、半截した後、土層観察・写真撮影・縮尺1/20の土層断面図作成等を行い完掘した。遺構の平面実測は縮尺1/20の簡易遣り方で行った。また調査と平行して調査区の縮尺1/100略図を作成し、現場で利用し調査に役立てた。遺構番号は遺構の種類にかかわらず、調査当時は調査区別・検出順に通し番号を付けた。種別ごとの記号は、掘立柱建物＝S・溝＝SD・井戸＝SE・土坑＝SK・ピット＝P・性格不明遺構＝SXである。なお、整理にあたって、ピットを除く遺構番号は、東側から順番に、A～C地区全般にわたる沖ノ羽遺跡全体の通し番号に付け替えた。ピットは大グリッドごとの通し番号に付け替えた(例…10 A-P1)。

写真 フィルムは35mmカラーと白黒の2種類を使用し、どちらもベタ焼きをしてネガと共にアルバムに保存した。現場ではカラーフィルムのみメモ用写真として遺構カードに貼付するため現象し、メモ用写真のみ撮影する場合には白黒フィルムは使用しなかった。平成4年度の調査では、一部の調査区の全体写真撮影および測量(B地区では5区上層)、および写真撮影のみ(B地区では5区下層・9区)を業者に依頼して、ラジコンヘリコプターを使用して行った。

掘り残し確認 全調査が終了した後、バックホーで調査区の全域または一部を削平し、掘り残した遺構の有無を確認した。遺構を検出した際は、発掘・実測と写真撮影を行い記録に加えた。

B. 調査経過

(1) 平成3年度

平成3年4月15日～12月19日まで調査を行った。当年度の調査予定地区を8調査区に分割し、1・2区、3・4区、5・6区、7・8区上層の順に調査に入る予定であった。しかし公園との協議の結果、調査順序を変更し、7・8区を優先して公園に引き渡すため、3・4区と7・8区(次年度調査予定であった下層も含む)を並行して調査することになった。しかし天候不順と、7・8区から予想以上の遺構・遺物が検出されたことにより、調査途中の7区下層を残し当年度作業を終了させ、撤収せざるを得なかった。7区下層の残りとして5・6区は次年度の調査に回すことになった。

(2) 平成4年度

平成4年4月9日～12月10日に調査を行った。昨年度の5・6区を合わせて5区とし、2区と3区の間を6区と改めた。他の調査区は、調査に入った順に9～13区の名称をつけた。

9区(4月9日～7月12日)

包含層は、B地区全体を通して、本来2枚(中世、平安時代)存在していたが、後世の擾乱により平安時代のものしか残っていない。その結果、2つの時代の遺構確認面もほぼ同じとなった。遺構は、東西に延びる数条の溝が中心であった。これらは覆土から中世と推定された。6月初旬、52FグリッドからSK220が検出されるが、覆土からはほぼ完形の高杯をはじめとする古式土師器が多数出土した。これにより、これまで地山と解釈していたIV層を古墳時代の遺物包含層・遺構確認面として調査する必要が出てきた。

以後、平安時代の遺物包含層（中世の遺構も含む）を上層、古墳時代の遺物包含層を下層と呼称する。主要な遺構の調査は梅雨の時期に当たっていたため、周辺の水田・農業用水路からの水の流れ込み、地山からの湧出水や壁面の崩落などに悩まされ調査は難航した。7月初頭までに上層の遺構確認面についての遺構究極が完了し、空中写真撮影が行われた。終了後、52F グリッドを重機で、下層の遺構確認面まで掘り下げ、精査を行ったが、古墳時代の遺構としてはピットが2基検出されたのみであった。

5区（5月22日～9月11日）

調査区の面積が広いため、東西に二分し、西側から調査に入った。包含層は9区と同様、平安時代だけが残存していると推定されていたが、9区からの古墳時代の遺構・遺物出土のために、この調査区にも遺物包含層が二枚存在する疑いが出てきた。6月初旬より46D・E グリッドから古墳時代の土器が多く出土し始め、さらに古式土師器を覆土に含むSK212が検出されたことで、トレンチを設定して土層観察を行い古墳時代の包含層、遺構確認面を確認した。これにより平安・中世の調査完了のち古墳時代の調査を行わねばならなくなった。検出された遺構は溝が中心であり、井戸や土坑が加わる。これらは覆土・出土遺物により中世が主体と推定された。6月上旬、直径50cmをこえる木柱およびその掘り形を2基検出した。大型建造物の柱穴の可能性があったため、公団・企業体との協議のうえ、7月上旬に調査区を北側に拡張して精査を行う。しかしそれ以外の柱穴は検出されなかった。7月末に空中写真撮影および実測が行われ、上層の調査を終了した。下層の調査では46D グリッドに土坑を中心とした遺構群が検出されたが、遺物出土量は少なく細片が中心であった。8月中旬に調査を完了した。

東側の上層はピットが集中しており、その中から掘立柱建物2基が検出された。その付近より畝状小溝・井戸などが検出されたが、掘立柱建物に伴う遺構と推定される。ここでも古墳時代の土坑であるSK185が検出され、古墳時代の包含層・遺構がここまで広がっていることが確認された。8月下旬に空中写真撮影・実測が行われ、上層の調査を完了させたのち、重機で地山を削平し、下層の調査に入った。下層からは43E グリッドを中心に土坑群が検出された。包含層・遺構内部からの遺物出土量は西側に比較して多く遺存度も良好であった。9月中旬に空中写真撮影を行って調査を完了した。

10区（9月2日～10月9日）

上層の遺構は、9区から続いていると見られる、東西に延びる数条の溝が中心であった。重機による包含層削平の際、一部で包含層および遺構確認面が破壊されたため、遺構精査に支障をきたした。上層の調査完了後、重機により深掘りを行うが、下層の遺構・遺物は検出されなかった。

11区（9月2日～11月5日）

調査区は下層の存在する5区・9区間に位置しており、遺物包含層は2枚あると推定された。西側では南北にのびる数条の溝と人為的堆積の土坑群を中心に検出された。東側からは人為的堆積の土坑群と、5区から続く中世の溝数条が検出された。上層の調査が終了したのち、重機による地山剥ぎ取りが行われた。上層の覆土から古式土師器の細片が出土しており、下層の存在が推定されたが、精査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

2. 第二次調査

12区（9月10日～11月6日）

遺構は5区の続きと見られる溝敷条が中心であり、調査区の北側に集中する。南側には遺構は殆ど検出されなかったが、40Dグリッドを中心とした場所の包含層から、土師器・須恵器が大量に出土した。上層の調査完了後、重機により深掘りを行う。5区に隣接しているにもかかわらず、下層の遺構・遺物は検出されなかった。

13区（11月9日～12月8日）

上層の遺構は12区・5区・11区の溝の続きが大半であった。下層の遺構は5区の土坑群に近接した43D・Eグリッドに土坑が集中して出土した。これらの土坑群は土坑墓の可能性が考えられたため、2基の土坑を選び、バリノ＝サーヴェイ株式会社に自然科学分析を依頼し、その覆土からサンプルを採取した。12月8日で調査を終了し、当年度の全調査を完了した。9～10日で器材搬出など残務整理を完了し、調査現場を撤収した。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
平成2年度										
平成3年度										7区の未調査部分は、平成4年度へ繰り越す。
平成4年度										

第1表 沖ノ羽遺跡発掘調査実施状況

第IV章 遺跡

1. 層序

沖ノ羽遺跡全体の調査区は長さ約1,050m・幅約40～50mの広範囲に及び、標高4.0～5.8mを測る。現在の地形は耕地整理等の改変によりほぼ平坦であるものの、全体的に見ると西側に比べ東側がわずかに高い。その中で畑地として残された部分は島状（島畑）に高くなっている。旧地形は耕地整理前の土地更正図によれば、現在より畑地部分が多く、微高地及びその周縁部であったと推定される。基本層序は調査区の広さ、土地改良、旧地形の様子等によりそれぞれの地点で、層序・土質・色調等に若干の違いがあるものの、ほぼ旧地形の傾きに沿って堆積し、基本的にはI～V層に区分される。初めに調査区全体の層序について概観し、ついでB地区の層序について述べる。なお、III層については細分しアルファベットを付した。また、各地区の層序の説明が必要に応じてさらに細分したものについては、同様にアルファベットを付した。以下、各層について説明する。

I層 昭和15年以降に始まった耕地整理から現在までの堆積である。褐色～灰褐色シルトを基本とするものの、畑地と水田では性状が異なる。畑地では褐色を呈し、粘性・しまりにやや欠ける。水田では灰褐色を呈し粘性・しまりがややある。また、下層には酸化鉄・酸化マンガンの沈着が認められる。

II層 灰褐色～褐色シルトを基本とし、旧耕作土から中世までの堆積と推定される。色調・土質から何層かに分層できるが、耕地整理時の削平が激しいため完全に遺存している部分が少なく、分層された各地区の層の整合性は明確でない。II層中の下半に中世の遺構確認面があり、遺物包含層はこれより上層と推定されるが不明であった。

III層 平安時代・古墳時代の遺物が含まれる層である。耕地整理時の一部の削平部分を除き、ほぼ調査区全体に認められる。特にIIIb層は他の層と明瞭に識別でき、本遺跡の鍵層となっている。III層は色調・含有物等から3層に分層される。

III a 層 暗褐色シルト質粘土を基本とする。

III b 層 黒褐色シルト質粘土を基本とし、酸化マンガン結核が認められる。

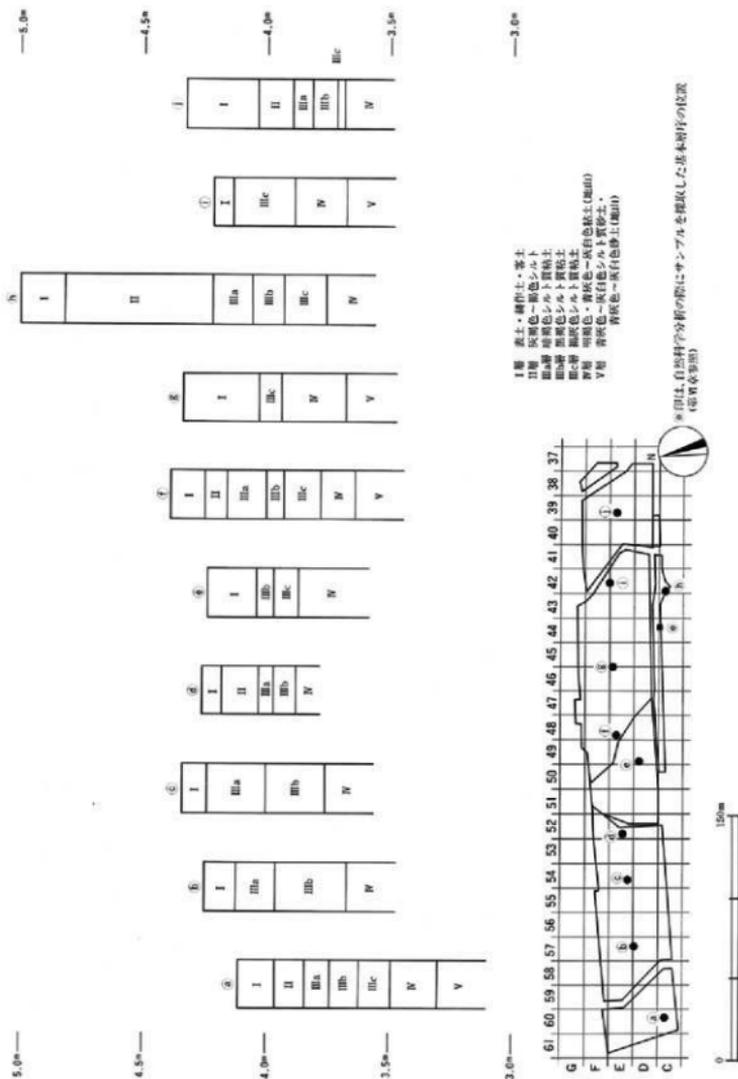
III c 層 褐灰色シルト質粘土を基本とし、酸化鉄・酸化マンガン結核が認められる。

平安時代の遺物は、III b層に多く含まれ、III a層・III c層は少ない。古墳時代の遺物は、III c層に多く、III b層に少なく、III a層には含まれない。平安時代の遺物は出土量の多少はあるものの、ほぼすべての調査区で認められる。

IV層 明褐色・青灰色～灰白色粘土を基本とする地山である。酸化鉄の酸化状態により部分的に色調が異なるが土質は同じ。おおむね明褐色粘土は上層に、青灰色～灰白色粘土は下層に堆積する。

V層 青灰色～灰白色シルト質砂土・青灰色～灰白色砂土を基本とする地山である。土性の違いにより二分されるが、青灰色～灰白色シルト質砂土が上層に、青灰色～灰白色砂土は下層に堆積する。

B地区の現地形は東側が西側に比べわずかに高く、比高は20cmを測る。耕地整理前の土地更正図によれば、B地区はA地区と同様に島畑と水田が混在し、北側は畑地が多く、南側は水田が多くなる。したがって、遺跡の北側にあった微高地の南縁部と推定される。この微高地は阿賀野側が形成した自然堤防と考え



第7図 沖ノ羽遺跡B地区土層柱状図

◎印は、自然科学分析の際にサンプルを採取した基本層序の位置 (第VI章参照)

られ、満願寺集落南方から鮎川河口方向に存在する。

層序は前述の層序とはほぼ同様であるが、若干の補足が必要である。Ⅲc層を若干削平した面が平安時代の遺構確認面となる。Ⅱ層の遺存状態が悪いので、中世の遺構確認は、実際には平安時代と同様Ⅲc層で行った。Ⅳ層は古墳時代の遺構確認面であるが、その土性は遺構の覆土に近似するため、この面での確認は困難である。実際にはⅤ層で遺構確認を行った。なお、場所によってはⅣ層からの古墳時代の遺物出土が見られた。その場合には一箇体に近い状態での出土が多かった。Ⅳ層中での遺構は検出できなかったが、それにとまらぬ遺物の可能性も考えられる。Ⅰ層は約10～20cm、Ⅱ層は約10cm、Ⅲ層は約20～50cmを測る。なお、Ⅱ層は調査区全体では遺存状態が悪いが、43～46D～Fグリッドの微高地では最大60cmを測る。地表面から約30～60cmで、前述の微高地では約120cmで地山面に達する。

2. 概観

今回調査のB地区では古墳時代、平安時代、鎌倉時代の遺構・遺物が検出された。その内容は古墳時代の土坑33基、溝2条、性格不明遺構2基、ピット7基で大半は5区43～46、D・Eグリッドに位置する。

平安時代と考えられる遺構は掘立柱建物跡4棟、土坑2基、井戸4基、溝24条、性格不明遺構2基が検出された。3棟の掘立柱建物跡(SB81・83・86)は42・43Dグリッドに集中している。建物の方向も等しいことから、同時期と推定される。

中世と思われる遺構は土坑2基、井戸2基、溝13条が確認された。このうちSE110から鳥帽子が珠洲焼と共に出土した。年代は土器から13世紀と考えられる。以下、各遺構について述べてみたい。

3. 遺構各説

古墳時代

SK184

5区42Dグリッドに位置する土坑で、排水溝に南側を破壊され全容は不明だが平面円形と推定される。長径0.96m・深さ7cm・底面標高3.74mを測る。断面形皿状で、底面は平らである。灰白色粘土を覆土とする。

SK185

5区43Eグリッドに位置する平面楕円形の土坑で、上層の遺構調査時に検出された。Ⅲc層から検出することができた少数の古墳時代の遺構である。長径1.78m・短径1.62m・深さ21cm・底面標高3.74mを測る。断面形皿状で底面は平らである。覆土は灰色粘土を主体としたレンズ状堆積を呈する。底面には壺などの土器が集中して出土する。

SK186

5区43D・Eグリッドに位置する平面楕円形の土坑で、長径1.65m・短径1.41m・深さ31～33cm・底面標高3.4～3.42mを測る。断面形皿状で底面は平らである。覆土は灰白色・青灰色の粘土・シルトのレンズ状堆積である。覆土内からは、古墳時代の遺構の中でも際立って多量の壺・小形丸底壺・高杯などの土器、または搬入礫が出土する。搬入礫では焼け跡が認められたものもある。土器の出土状況では壺・壺

3. 遺構各説

などは横倒しになっているものが多い。

S D187

5区43E・Fグリッドに位置する溝で、幅1.0～1.4m・深さ1～13cm・長さ約10m・底面標高3.5～3.68mを測る。断面形皿状で、灰白色粘土を覆土とする。

S K188・S K190・S X192

いずれも5区43D・Eグリッドに位置する、平面不定形の遺構である。S K188は長径1.16m・短径0.93m・深さ15cm・底面標高3.59mを測る。断面形皿状で灰白色シルトを覆土とする。S K190は長径0.65m・短径0.52m・深さ11cm・底面標高3.46mを測る。覆土は炭化物を含む褐色・青灰色の砂土によるレンズ状堆積である。S X192は暗渠排水溝に北側を破壊され全容は不明であるが、最大径0.76m・深さ11cm・底面標高3.62mを測る。暗灰色シルトを覆土とする。

S K189

5区43Eグリッドに位置する平面楕円形の土坑である。長径1.48m・短径1.12m・深さ6～7cm・底面標高3.61～3.62mを測る。断面形皿状で、灰白色シルトを覆土とする。北西側に土師器が集中して出土する。

S K191

5区43Eグリッドに位置する平面不定形の土坑である。長径1.45m・短径1.26m・深さ12cm・底面標高3.55mを測る。断面形皿状で灰白色シルトを覆土とし、土師器壺(6)が出土する。これは横倒しの状態で出土しており、人為的に配置されたか否か不明である。

S K193・S K194

5区43Eグリッドに位置し重複する土坑で、S K193がS K194を切る。ともに暗渠排水溝に北側を破壊され全容は不明であるが、判明する限りでは、S K193は最大幅0.75m・深さ17cm・底面標高3.54mを測る。S K194は最大径1.04m・深さ10cm・底面標高3.86mを測る。ともに断面形皿状を呈す。覆土はS K193が灰白色粘土、S K194が灰白色シルトである。S K194より搬入礫が出土する。

S K195

5区43・44Eグリッドに位置する平面不定形の土坑である。最大径1.45m・深さ21cm・底面標高3.53mを測る。断面形皿状で、灰白色シルトを覆土とする。土師器・搬入礫が比較的多く出土する。土器のうち小形丸底壺(9)はほぼ完形で立ったまま出土しており、埋没時その状態だった可能性が高い。

S K196

5区43Dグリッドに位置する土坑で、暗渠排水溝に南側を破壊され全容は不明だが、平面形は楕円形と考えられる。最大径3.52m・深さ17～21cm・底面標高3.48～3.51mを測る。断面形皿状で底面は平らである。灰白色粘土を覆土とし、土師器が出土する。

S K197

5区44Dグリッドに位置する平面隅丸方形の土坑である。長径1.67m・短径1.13m・深さ13cm・底面標高3.52mを測る。断面形皿状で底面は平坦である。覆土は灰白色シルトで、底面の北西隅に土師器甕(17)が一括出土する。出土状況は、甕の破片が一か所に折り重なり、口縁部が上に、底部が下になっていた。このことから、甕は埋没時には立っていた可能性が高い。

S K198

13区43Dグリッドに位置する平面楕円形の土坑で、長径0.68m・短径0.56m・深さ42cm・底面標高3.31

mを測る。断面形U字状で、灰白色シルト質粘土を覆土とする。

S K199・S K200

ともに13区44Dグリッドに位置する平面不定形の土坑であるが、いずれも調査区外に広がると考えられ全容は不明である。S K199は最大径2.82m・深さ18cm・底面標高3.47mを測る。S K200は最大径2.52m・深さ23cm・底面標高3.24mを測る。ともに断面形皿状で灰白色シルト質粘土を覆土とする。S K200より土師器・搬入礫が出土する。

S K201

5区44Eグリッドに位置する土坑である。暗渠排水溝に北側を破壊され全容は不明であるが、平面楕円形と推定される。最大径1.37m・深さ15cm・底面標高3.59mを測り、断面形皿状で、灰白色砂土を覆土とする。土師器が出土する。

S X202・S K203・S K204

5区44・45Fグリッドに位置する遺構である。202・203は平面不定形・断面形皿状に対し、204は平面楕円形・断面形U字状である。いずれの覆土も灰白色シルトが主体となる。S X202は最大径1.5m・深さ6～22cm・底面標高3.43～3.58mを測る。S K203は長径3.21m・短径0.71m・底面標高3.45～3.56mを測る。ともに東側にテラス状の段がある。S K204は長径1.26m・短径0.53m・深さ12～20cm・底面標高3.43～3.5mを測る。

S K205

5区45Dグリッドに位置する平面不定形の土坑で、長径2.55m・短径1.71m・深さ34cm・底面標高3.28mを測る。断面形皿状で、灰白色の粘土・シルトのレンズ状堆積を呈す。東側にテラス状の段をもつ。土師器が出土する。

S K206

5区44Dグリッドに位置する平面楕円形の土坑で、長径2.15m・短径1.11m・深さ10～14cm・底面標高3.37～3.43mを測る。断面形皿状で、灰白色粘土を覆土とする。土師器が出土する。

S K207・S K208

5区45Dグリッドに位置する平面不定形の土坑で、一断面でのみ重複するが新旧は不明である。ともに排水溝に北側を破壊され、全容は不明である。S K207は、最大径1.38m・深さ12～14cm・底面標高3.49～3.51mを、S K208は、最大径1.56m・深さ9cm・底面標高3.56～3.57mを測る。いずれも断面形皿状で、灰白色シルト質粘土を覆土とする。

S K209・S K210

5区45Dに位置する平面不定形の土坑である。S K209は最大径1.23m・深さ34cm・底面標高3.25mを測る。S K210は最大径0.76m・深さ18cm・底面標高3.42mを測る。いずれも断面形U字状で、灰白色粘土を覆土とする。

S K211

5区46D・Eグリッドに位置する平面不定形の土坑で、排水溝に東側を破壊されたため全容は不明である。長径3.39m・短径1.13m・深さ19～47cm・底面標高3.14～3.44mを測る。断面形U字状で、覆土は灰白色シルト質粘土を主体とする。

S K212

5区46Eグリッドに位置する平面円形の土坑である。直径1.69m・深さ27cm・底面標高3.55mを測る。

3. 遺構各説

断面形U字状で、覆土は灰白色粘土を主体としたレンズ状堆積を呈する。土師器が出土する。

S D213

5区46Eグリッドに位置する溝で、幅0.6～0.7m・深さ10～24cm・底面標高3.31～3.51mを測る。断面形皿状で、灰白色粘土を覆土とする。

S K214・S K215

5区46Dグリッドに位置する平面楕円形の土坑である。S K214は長径2.08m・短径1.95m・深さ30cm・底面標高3.38mを測る。S K215は長径3.11m・短径1.95m・深さ30cm・底面標高3.29～3.31mを測る。ともに断面形皿状で、灰白色粘土を主体とする覆土をもつ。

S D216

5区46D～13区46Cグリッドに位置する溝で、幅0.7～2.0m・深さ10～29cm・底面標高3.39～3.58mを測る。断面形皿状で、灰白色粘土を主体とした覆土をもつ。

S K217・S K218・S K219

5区47・48Eグリッドに位置する平面楕円形の土坑である。S K217は長径2.21m・短径1.08m・深さ29cm・底面標高3.24mを測る。S K218は長径0.38m・短径0.32m・深さ29cm・底面標高3.26mを測る。S K219は長径0.96m・短径0.66m・深さ65cm・底面標高2.83mを測る。いずれも断面形皿状で、灰白色あるいは明青灰色粘土を主体とする覆土をもつ。

S K220

9区52Fグリッドに位置する平面楕円形の土坑で、中央部が窪む。長径4.01m・短径1.73m・深さ13～28cmで中央部の窪み40cm、底面標高3.52～3.68m・中央部に窪み3.38mを測る。断面形皿状で、覆土は褐色・灰白色・暗青灰色の粘土・砂土を主体とするレンズ状堆積を呈す。高杯・甕などの土師器片が多数に出土する。高杯(16)はねぼ完形の状態で横倒しになって出土したが、人為的に配置されたものか不明である。

47G-P1・47G-P2

5区47Gグリッドに位置する柱穴で、大形の柱根が出土する。いずれも断面形皿状で円筒形を呈し、平らな底面の中央に柱根が配置される(P1は232・P2は233)。IV層から検出されるが、この付近はI～III層まで圃場整備・耕地作成により破壊されており、正確な掘り込み面は不明である。柱根以外の出土遺物はない。

P1は排水溝に重複したため北側の上場が破壊され、正確な平面形は不明であるが、円形と推定される。判明する範囲では、直径1.3m・深さ78cm・底面標高2.93mを測る。東側に自然木の立ち木が存在する。覆土は灰白色粘土を主体とする。

P2は、P1の西1m前後の位置から検出されており、平面形は円に近い隅丸方形である。直径1.36m・深さ79cm・底面標高2.83mを測る。覆土は明褐色粘土・灰白色シルト質粘土などを主体とする。

科学分析の結果、材質はクリで時期は5世紀前半から6世紀前半の遺構と考えられる。

平安時代 鎌倉時代

S D51

12区39G～38Fグリッドに直線的にのびる溝である。幅0.3～0.5m・深さ1～5cm・底面の標高は3.57～3.64mを測る。覆土は黒褐色シルト質粘土を主体としたレンズ状堆積である。

S D52

12区40F グリッドに位置する直線の溝で、S D57と平行する。幅0.7～0.8m・深さ5～8cm・長さ約3mを測る。底面標高は3.69～3.74mであり、底面の凹凸が著しい。覆土は暗灰色粘土である。

S D53

12区40F グリッドに位置し、平面形がコの字状を呈する溝である。幅0.4～0.8m・深さ2～8cm、底面の標高は3.68～3.8mを測る。底面の凹凸著しい。覆土は暗灰色粘土である。土師器片が出土する。出土遺物から時期は平安時代と推定される。

S D54・S D55

S D54は12区40E～F グリッドに、S D55は40E グリッドに位置する、ともに直線の溝である。方位は若干異なるが、ともにS D57に平行する。S D54は幅0.4～0.6m・深さ3～5cm・長さ約4.6mである。底面の標高は3.64～3.78mを測る。S D55は幅0.2～0.3m・深さ3～5cm・長さ3m・底面の標高3.7～3.76mを測る。ともに底面の凹凸が著しく、暗灰色粘土を覆土とする。S D55から土師器片が出土する。出土遺物から推定される時期は平安時代だが、位置からはS D57との関連も考えられる。

S D56

12区40F グリッドから5区を経て13区41D グリッドに至る溝である。S D57に平行するが、40E グリッドでコの字状に湾曲する。幅0.3～0.7m・深さ1～10cm・底面の標高3.64～3.80mを測る。底面は凹凸しながら南西から北東に傾斜しているが、これは地山の地形による見かけ上の傾きであろう。覆土は暗灰色粘土で、土師器片が出土する。S D76に切られる。出土遺物から推定される時期は平安時代だが、位置からはS D57との関連も考えられる。

S D57

12区41G グリッドから5区を経て13区42C グリッドに至る溝である。幅1.1～1.8mである。深さは28～46cmと、変化があるが北側から南にかけ浅くなる傾向がある。底面標高は3.31～3.53mで、凹凸があるが南から北に傾斜する。覆土は暗灰色粘土を基本とし、堆積はレンズ状を呈する。炭化物を多く含む層を持つ。両側の側壁にテラス状の段がある。出土遺物は、須恵器・土師器・白磁・青磁・古式土師器・搬入線がある。S D80（S B81の雨落ち溝）より新しい。S D71との新旧は不明だが、これもS D80より新しいため、同時期の可能性もある。出土遺物から、時期は鎌倉時代と推定される。

S K58

13区40C グリッドに位置する楕円形の土坑である。長径3.12m・短径2.0m、深さ17cm、底面標高3.63mを測る。覆土は褐色シルト質粘土で、断面形皿状である。須恵器・土師器が出土する。出土遺物から時期は平安時代と推定される。

S D59

13区41D～5区41D グリッドにかけて延びる溝である。溝の半ばが調査区境界外に出ているため明確ではないが、U字状にめぐると推定される。幅0.5～1.3m・深さ3～16cm・底面標高3.67～3.78mを測る。底面は凹凸著しいが、北から南に傾斜する。覆土は暗灰色粘土を主体とし、レンズ状堆積を呈す。出土遺物は須恵器・土師器・古式土師器・丸太杭がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定されるが、位置からS D57との関係がある可能性もある。

S D60・S D61

ともに12区41E～F グリッドを延びる溝で、S D57と平行する。S D60は幅0.3～0.5m・深さ2～9cm・

3. 遺構各説

底面標高3.72～3.80mを測る。底面は凹凸著しいが北から南に傾斜する。SD61は幅0.3～0.4m・深さ2～7cm・底面標高3.75～3.85mを測る。底面凹凸著しい。いずれの覆土も暗灰色粘土で、土師器片が出土する。出土遺物から推定される時期は平安時代だが、その位置からSD57との関連も考えられる。

SK62

12区41Fに位置する長楕円形の土坑である。包含層削平の段階から遺物が集中して出土しており、実際には遺構掘り込み面はもっと高いレベルだったと考えられる。長径1.16m・短径0.34m・深さ13cm・底面標高3.80mを測り、断面形皿状である。覆土は黒褐色シルト質粘土で、炭化物を多量に含む。出土遺物としては須恵器・土師器がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SK63

12区41Fグリッドに位置する円形の土坑である。断面形はフラスコ状を呈す。地表面は長径0.73m・短径0.85m、底面では長径0.87m・短径0.65mとなる。深さ73cm・底面標高2.97mを測る。覆土は黒褐色粘土を主体とし、下部に青灰色粘土が混入する。出土遺物としては土師器がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SD64・SD65・SD66・SD67・SD68

これらは5区41～42Eに位置する溝で、N-55°-Wと、ほぼ同一の方位を示す。何れも、幅0.3～0.5m・深さ5～12cm・底面標高3.73～3.82mの範囲内にある。断面形皿状を呈し、覆土は褐色粘土を主体とし炭化物が混入している場合が多い。出土遺物は須恵器・土師器・兼入礫がある。特にSD68からの出土が多い。方位はSB83などの方位にほぼ等しく、これら建物跡との何らかの関連が考えられる。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SE69

5区41Eグリッドに位置する井戸跡である。側面が一部崩落したため正確な本来の形状は不明であるが幅1.95m・深さ135cm・底面標高2.48mを測る。断面形U字状と推定される。実測前に土層断面が崩落したため、覆土の堆積堆積は不明である。出土遺物としては土師器片・須恵器片が多く、木製品としては、斎車の他、曲物片、曲物の緩紐が見られる皮紐が出土しており、この遺構が井戸であることを裏付けている。SB83などの建物に近く、これらと併存して機能していた可能性がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SK70

5区41D・Eに位置する土坑である。長軸2.54m・短軸1.76m・深さ22cm・底面標高3.65mを測り、断面形皿状を呈する。覆土は暗灰色粘土で、上層は酸化鉄を含み明褐色を呈す。出土遺物としては土師器・砥石がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SD71

5区41E～13区42Cグリッドに延びる溝である。SD57から枝分れし平行して延びるが新旧は不明である。SD57と同様にSD80を切る。幅0.3～0.7m・深さ5～12cm・底面標高3.72～3.78mを測る。底面の凹凸著しい。断面形皿状で暗灰色粘土を覆土とする。出土遺物としては須恵器・土師器がある。SD57と同じく中世の遺構と推定されるが、出土遺物から判断はできない。

SD72

5区41Dグリッドに位置する溝で、SD71に平行する。幅0.3～0.7m・深さ5～12cm・底面標高3.72～3.78mを測る。断面形皿状で、覆土は暗灰色粘土である。須恵器が出土する。出土遺物から推定される平

安時代であるが、位置からSD57との関連も考えられる。

SK73・SK74

いずれも5区41Dグリッドに位置する平面楕円形の土坑で、SK73がSK74を切る。SK73はSD68と切り合っていたが、壁面が崩落したため新旧は不明となる。SK73は全容は不明だが、最大幅0.9m・深さ27cm・底面標高3.57mを測る。SK74は長軸1.06m・短軸0.74m・深さ31cm・底面標高3.61mを測る。ともに断面形皿状で、覆土は炭化物を含む暗灰色粘土を主体とする。特にSK74は暗灰色粘土の間に炭化物層が挟まっている。SK73から土師器が出土する。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SD75

5区41Dグリッドに位置する溝で、幅0.2～0.3m・深さ5cm・底面標高3.78mを測る。断面形皿状で覆土は暗灰色粘土である。

SD76

13区41C～Dグリッドに位置する溝で、幅0.9～1.9m・深さ11～14cm・底面標高3.66～3.72mを測り底面の凹凸は著しい。断面形皿状で、覆土は暗灰色粘土である。土師器が出土する。出土遺物から推定される時期は平安時代であるが、中世の可能性もあるSD56より新しいことから、時期は不明瞭である。

SK77

13区42C～Dグリッドに位置する不定形の性格不明遺構である。調査区外に広がるかと推定され、全容は不明だが、最大径3.84m・深さ2cm・底面標高3.78～3.8mを測る。非常に浅く底面の凹凸が著しく、断面形状も不定形である。覆土は暗灰色粘土である。

SD78

13区42Cグリッドに位置する溝で、SD57に平行する。幅0.3m・深さ8cm・底面標高3.73mを測る。断面形皿状で暗灰色粘土の覆土をもつ。

SK79

5区42Eグリッドに位置する平面隅丸方形の土坑である。包含層発掘以前からプランと出土遺物が明瞭に検出されており、実際には遺構確認面より高いレベルから掘り込まれたものと推定される。長軸2.27m・短軸1.66m・深さ30cm・底面標高3.64mを測り、底面は平らである。断面形U字状で、上部に炭化物・焼土・灰、下部に黒褐色土・明褐色土・明灰色粘土がレンズ状に堆積する。出土遺物は須恵器・土師器が多数に出土しており、その他敷入礫が出土している。土坑内で火を焚いた可能性が高く、覆土から多量の土師の破片が出土したことは、この土坑がゴミ捨て穴であった可能性を示している。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SB81・付SD80

5区42Dに位置する独立柱建物跡で、SD80はその兩落ち溝と推定される。全容は不明だが、判明しただけで、桁行3間(4.47m)・梁間2間(5.4m)を測り、桁側に庇があり、桁行と梁間は歪んでいる。桁間柱間は西から1.34m・1.52m・1.61m、梁間柱間は北から2.13m・2.27mを測る。庇の出は1.0mで柱間は不規則である。西から1.47m・3.2mを測る。柱穴のは平面円形・断面形U字状で、直径28～40cmを測る。深さは10～25cmで底面標高3.52～3.73mを測る。柱穴の規模では桁・梁・庇の区別は見られない。覆土は暗灰色粘土を主体としており、炭化物を含む場合が多い。土師器が出土する。

SD80は、幅0.4～0.5m・深さ20～30cm・底面標高3.51～3.62mを測り、掘り込みは北東から南西にかけて深くなる。SB81の桁間とはほぼ平行しており、距離は0.38～0.46mである。断面形U字状であり、覆

3. 遺構各説

土は灰白色粘土・暗灰色粘土がレンズ状に堆積しており、底部には炭化物が多量に含まれる。土師器が出土する。SD57・SD71に切られる。

SB81・SD80の位置を観察すると、中世の遺構であるSD57と共存していたとは考えにくく、実際にSD80はSD57より古いため、SB81もそれより古い可能性が高い。また、SB81・SD80ともにN-45°-Wと、SB83の桁方位とはほぼ同一であり、何らかの関係があった可能性がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SD82

5区42Eグリッドに位置する溝で、北側の側面が暗渠排水溝に破壊され、全容は不明である。判明している規模は、深さ2cm・底面標高3.83mを測る。土師器が出土する。方位はSB83の桁方向と等しいがSD84より離れており、関連があるか不明である。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SB83・付SD84

5区42・43D・Eグリッドに位置する、桁行6間(11.65m)×梁間2間(5.36m)の掘立柱建物跡でSD84はその雨落ち溝と見られる。桁行は両側にある庇も含めた長さであり、身舎桁行8.0mを測る。庇の出は、西側1.75m・東側1.9mである。桁行柱間は、北側は等間隔で2.0mを測るが、南側は西より2.17m・2.17m・1.9m・1.76mを測る。梁間柱間は、西側が北より2.58m・2.78m、東側は北より2.81m・2.55mを測る。庇の柱元は、両側とも北より2.79m・2.57mを測る。

柱穴は平面円形・断面形U字状で、桁間の場合、直径0.46~0.79mを測る。梁間と庇は0.24~0.38m・0.49~0.82mの2種がある。深さでは、桁・梁・庇の区別18~46cmの範囲にある。底面標高は3.44~3.74mを測る。断面U字状で、底面に柱痕跡が窪んで残っているものもある。また、柱痕が確認できるものもあり、柱の直径は20cm前後と推定される。覆土は暗灰色粘土・灰色粘土・青灰色粘土を基本とし、土師器が出土する。

SD84は、SB83の南側桁行に平行しており、距離は0.65~1.11mを測る。幅0.2~0.4m・深さ13~20cm・底面標高3.75~3.82mを測る。掘り込みは南東から北西にかけ深くなる。断面形U字状で、覆土は暗灰色粘土である。須恵器・土師器が出土する。

SB83の桁間、SD84の方位はともにN-52°-Wである。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SD85

13区42Dグリッドに位置する溝で、SD71と平行する。規模は、幅0.7m・深さ5~9cm・底面標高3.72~3.76mを測る。断面形皿状で暗灰色粘土を覆土とする。土師器が出土する。出土遺物から推定される時期は平安時代だが、位置からSD57との関連も考えられる。

SB86

13区43Dに位置する掘立柱建物跡で歪みがある。桁方位はN-47°-Wと、ほぼSB83と等しい。全容は不明だが、確認されただけで桁行2間(4.5m)×梁間1間(2.0m)を測る。桁間柱間は東より2.31m・2.19mを測る。柱掘り形は円形で直径23~37cm・深さ20~26cm・底面標高3.45~3.48mを測る。覆土は褐色シルト質粘土を主体とし、土師器が出土する。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SK87

5区43Dグリッドに位置する土坑で、南側は排水溝に破壊され全容は不明であるがほぼ円形を呈す。直径2.71m・深さ13cm・底面標高3.83mを測り、底面は平らで、断面形皿状である。覆土は暗灰色粘土を基本とし、酸化鉄・炭化物を多量に含み一部は黒褐色・赤褐色を呈す。多量の須恵器・土師器が出土して

おり、その他に搬入礫がある。形状・規模は異なるが、覆土・遺物出土の状況はS K79に類似する。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S D88・S D89

それぞれ5区43G・44Fグリッドに位置する溝で、いずれもN-60°-Wと平行関係にある。畝状小溝か。長さは前者が4.53m・後者が5.45mを測る。幅0.3~0.5m・深さ8~12cm・底面標高3.85~3.86mの範囲内にありほぼ同一規模である。ともに断面形皿状で、灰色シルト質粘土を覆土とする。距離は9.5mあるが、その間に他の溝は検出できなかった。S D88からは土師器、S D89からは須恵器・土師器が出土する。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S K90・S K91

いずれも5区44Fグリッドに位置する平面楕円形の土坑である。S K90は長径0.98m・短径0.68m・深さ21cm・底面標高3.71mを測る。S K91は長径1.81m・短径0.56m・深さ17cm・底面標高3.74mを測る。いずれも断面形皿状で、覆土は灰色シルト質粘土・粘土を主体とし、土師器片が出土する。出土遺物から時期は平安時代と推定される。

S D92

5区44~47D~Fグリッドをコの字状に延びる溝であり、ほぼ直角に折れ曲がる。東西方向の方位はN-75°-Wで、南北方向の方位はN-20°-Eである。途中で途切れる部分や、暗渠排水溝で一部破壊される部分があるため、全容は不明である。確認できる範囲では、幅0.4~0.9m・深さ4~20cm・底面標高3.54~3.88mを測る。断面形皿状で底面の凹凸は著しい。覆土は黒褐色~暗青灰色シルト質粘土を主体としレンズ状堆積を呈す。須恵器片・土師器片が出土する。S D93・94を切る。その形状から、用排水路に使用されたとは考えにくく、何らかの境界に使用された可能性がある。出土遺物から推定される時期は平安時代である。しかし、平安時代の溝のS D93・94を切り、中世の溝のS D111との新旧関係が不明なこと、この溝に区切られた区画内に中世の遺構が多いことなどから、時期は中世と判断される。

S D93・S D94

5区44G~11区47Dグリッドを延びる溝で、途中S D94が枝分かれするが、これを切り、S D92に切れ、S D120に直行するが切られる。方位はN-60°-Eである。幅0.6~1.7m・深さ12~50cm・底面標高3.41~3.73mを測る。断面形皿状で、覆土は褐色シルト・灰色粘土のレンズ状堆積で、須恵器・土師器・砥石が出土する。

S D94は46Fグリッドから枝分れし45Gグリッドに延びる溝で、S D93同様S D92に切られる。方位は途中で変化するが、N-55°-Eを測る。幅0.7~1.0m・深さ13~24cm・底面標高3.58~3.68mを測る。断面形皿状で、覆土は灰色粘土である。須恵器・土師器が出土する。ともに、出土遺物から平安時代と推定される。

S K95

5区45FグリッドのS D93・94の間に位置する平面楕円形の土坑で、長径1.0m・短径0.85m・深さ17cm・底面標高3.66mを測る。断面形皿状で、覆土は暗灰色粘土である。土師器が出土する。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S X96

5区44Fグリッドに位置する平面楕円形の遺構である。長径3.23m・短径1.39m・深さ7cm・底面標高3.82mを測る。断面形皿状で、覆土は暗灰色シルト質粘土である。土師器片が出土する。出土遺物から、

3. 遺構各説

時期は平安時代と推定される。

S K 97

5区44Eグリッドに位置する楕円形の土坑である。長径0.67m・短径0.24m・深さ8cm・底面標高3.79mを測る。断面形皿状で、灰色シルト質粘土を覆土とする。

S D 98・S D 99

5区44Dグリッドに位置する平行関係にある溝で、方位はN-65°-Wである。距離は1.55~1.62mある。S D 98は幅0.5~1.1m・深さ16~26cm・底面標高3.68~3.73mを測る。S D 99は底面標高3.7~3.91m・長さ5.38m・深さ5~9cm・幅0.4~0.5mを測る。ともに断面形皿状で、覆土はS D 98が灰色シルト質粘土、S D 99が暗灰色粘土である。ともに土師器片が出土する。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S K 100

5区45Eグリッドに位置する平面楕円形の土坑で、III c層中で検出した。炭化物を多く確認したが平面プランの検出は困難であった。規模は、長径1.28m・短径0.48m・深さ10cm・底面標高3.76mを測り、底面は平らである。断面形皿状で、覆土は灰色粘土である。

S E 101

5区45Eグリッドに位置する平面円形の井戸跡である。長径1.48m・短径1.4m・深さ67cm・底面標高3.36mを測る。断面U字状で、側壁の前面にテラス状の段をもつ。覆土は暗灰色シルト質粘土を主体としたレンズ状堆積で、それらの層に挟まれるように、IV層に近い灰色シルト質粘土がブロック状に堆積する。これは遺構が埋没する経過で、壁面が崩落して覆土に混入したものと推定される。

S D 102

5区45Dグリッドに位置する溝で、S D 92に平行する。平面プランの確認が困難であった。規模は、長さ4.6m・幅0.5~0.7m・深さ8~16cm・底面標高3.85~3.92mを測る。断面形皿状で、暗灰色シルト質粘土を主体とする。

S K 103

5区45Eグリッドに位置する平面円形の土坑である。規模は長径1.03m・短径0.88m・深さ20cm・底面標高3.77mを測る。断面形皿状で、覆土は暗灰色粘土・灰色粘土のブロック状堆積を呈する。

S E 104

5区46Eグリッドに位置する井戸跡である。排水溝に西側を破壊されるが、平面円形と推定される。規模は、直径1.2m・深さ101cm・底面標高2.98mを測る。断面形U字状で円筒形を呈するが、底面の中心から円形曲物が出土しており、その部分のみ深く掘り込まれ、2段掘り状になっている。覆土は黒褐色・暗灰色・明緑灰色の粘土・シルトなどが交互に重なり、レンズ状堆積を呈す。出土遺物としては、円形曲物・箸などの木製品のほか、土師器がある。箸などの木製品はS K 108・109などの中世の遺構から多く出土していることから、時期は中世と推定される。

S E 105

5区46Eグリッドに位置する平面楕円形の井戸跡で、長径1.6m・短径1.4m・深さ80cm・底面標高3.04mを測る。断面U字状で円筒形を呈し、覆土は暗灰色粘土・青灰色粘土などがレンズ状堆積する間に、IV層に近い明灰色シルトなどがブロック状に混入する。これは、S E 101同様、埋没の過程で壁面が崩落して覆土と混入した結果と考えられる。覆土には炭化物塊が多く混入する。出土遺物としては須恵器・搬入

礫がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

46E-P4

5区46Eグリッドに位置する柱根で平面円形である。直径0.3m・深さ58cm・底面標高3.42mを測る。断面形U字状で、灰褐色粘土質シルトの覆土を持つ。柱根(235)が立ったまま出土する。

SD106

5区46Eグリッドに位置する溝で、SD111と平行する。幅0.3~1.2m・深さ8~9cm・底面標高3.75~3.76mを測る。土層断面は崩落により不明であった。

SD107

5区46グリッドに位置する溝で、SK108から分かれてその東側側面をめぐるが、新旧は不明である。幅0.2~0.3m・深さ9~12cm・底面標高3.74~3.77mを測る。断面形皿状で、覆土は暗灰色粘土である。

SK108・SK109

SK108は5区46Fグリッドに、SK109は47Eグリッドに位置する、いずれも平面隅丸方形の土坑である。SK108はSD92・107と重複するが切り合いは不明である。

SK108は長径4.7m・短径3.0m・深さ56~61cm・底面標高3.17~3.22mを測る。断面形U字状で底面は平らである。底面の端にピット状の落ち込みが2ヶ所あるが、木の根など自然の力でできた可能性が高い。覆土は褐灰色・暗灰色のシルト・粘土などを主体としたレンズ状堆積で、炭化物を多量に含む。特に底部に存在する未分解植物層は、植物性の繊維質が変化して腐食土状になったと考えられる。出土遺物としては、箸などの木製品の他、珠洲焼播鉢片・須恵器片・土師器片・搬入礫が出土する。珠洲焼片は覆土の比較的上部から出土し、木製品や木片・樹皮・木の葉などの植物遺体は下部の未分解植物層から出土する。

SK109の規模は、西側が排水溝に破壊されているため全容は不明であるが、長径3.8m以上・短径3.15m・深さ62cm・底面標高3.18mを測る。断面形・平面形状・覆土の内容や堆積状況などについてはSK108と殆ど等しい。出土遺物としては、箸(229)の他、珠洲焼播鉢片・搬入礫・木片がある。出土状況もSK108と等しく、底部の未分解植物層から木製品・植物遺体などが出土している。2遺構に共通するこの未分解植物層については、遺構が使用された当時、何らかの理由で植物性の物質が堆積した結果と推定される。出土遺物から、ともに時期は中世と推定される。

SE110

5区47Eグリッドに位置する平面円形の井戸で、長径1.0m・短径0.94m・深さ74cm・底面標高3.16mを測る。断面形U字状で円筒形を呈す。暗褐色・暗灰色・灰白色のシルト・砂質粘土の他、炭化物などがレンズ状に堆積する。出土遺物として、珠洲焼粟片・漆加工が施された烏帽子が出土する。珠洲焼は6層の直下、7層から出土しており、烏帽子は珠洲焼の真下に貼り付いた状態で出土している。出土遺物から時期は鎌倉時代と推定される。

SD111

5区46G~48Fグリッドを延びる溝で、SD120から枝分れし、これに切られる。方位はN-45°-Eである。幅1.0~1.5m・深さ4~37cm・底面標高3.32~3.69mを測る。断面形皿状だが、北側は両側面がテラス状の段をもつ。覆土は褐灰色・灰褐色の粘土を主体とするレンズ状堆積で、灰白色粘土がブロック状に混入する。搬入礫が出土する。出土遺物から時期は不明だが、SD120と近い覆土を持っており、時期は中世ではないかと考えられる。

3. 遺構各説

SK112

5区47Gグリッドに位置しSD111を切る平面隅丸方形の土坑である。長径1.7m・短径1.62m・深さ77cm・底面標高2.97m測る。断面形U字状で、覆土は暗灰色・灰色・灰白色の粘土・砂質粘土・砂土のブロック状堆積である。中世と推定されるSD111に切られることから、それより古いと考えられる。

SD113

5区47Gグリッドに位置する溝で、幅0.3～0.4m・深さ12cm・底面標高3.68mを測る。断面形皿状で黒褐色粘土を覆土とする。

SK114

5区47Gグリッドに位置する土坑で、47G-P1のトレンチに一部破壊され全容は不明であるが、判明する範囲では長径は1.0m、断面形皿状で覆土は灰白色・暗灰色粘土の混合するブロック状堆積である。

SD115

5区47～48Fグリッドを延びる溝で、SD120に切られる。幅0.7～1.3m・深さ9～18cm・長さ14.4m・底面標高3.52～3.60mを測る。断面形皿状で底面の凹凸は著しい。覆土は灰色・灰白色の砂質粘土・砂質粘土などのレンズ状堆積である。

SK116

5区47Fに位置する平面隅丸方形の土坑で、SD115と重複するが新旧は不明である。規模は長径1.4m・短径0.9m・深さ67cm・底面標高3.0mを測る。断面形U字状で、覆土は灰色・灰白色シルト質粘土、灰褐色シルト質粘土・灰色砂土のブロック状堆積である。

SK117

5区48Gグリッドに位置する土坑である。全容は不明であるが平面円形と考えられる。SD119と重複するが新旧は不明である。判明する直径は1.42m・深さ20cm・底面標高3.62mを測る。断面形皿状で、覆土は暗灰色・灰白色粘土のブロック状堆積を呈する。

SK118

5区48Gグリッドに位置する土坑で、SD120を切る。全容は不明だが平面円形と考えられる。判明する直径は1.4m・深さ43cm・底面標高3.35mを測り、側壁に段をもつ。暗灰色シルト質粘土を覆土とする。

SD119・SD121

ともに5区48G～Fグリッドを、途中途切れながらSD120と平行して延びる溝である。SD119はSD111・SK117と重複、SD121はSD127・155と重複するが新旧は不明である。SD119は幅155と0.5m・深さ11cm・底面標高3.68mを測る。断面形皿状であり、暗灰色粘土を覆土とする。SD121は、幅0.2～0.3m・深さ4～6m・底面標高3.7～3.78mを測り、断面形皿状である。灰白色粘土を覆土とする。

SD120

5区48G～11区～13区47Cグリッドに延びる溝である。SD111が途中で枝分かれするがこれを切り、SD127と重複するがこれも切る。方位はN-10°-Eで、SD127と重複後、N-25°-Wに変化する。幅0.8～4.5mで、南側ほど幅広になる傾向あり。深さ17～46cm・底面標高3.14～3.63mで・底面は凹凸しながら北から南に傾斜する。

断面皿状で、部分的に両側面にテラス状の段がある。また、底面に溝状の掘り込みがあり、5区では以上だが11区では2条になり、13区では1条に合流してから再度2条に分かれる。覆土は黒褐色・褐色のシルト・シルト質粘土を主体としたレンズ状堆積である。出土遺物としては、珠洲焼・中世土師器・須恵

器・土師器・古式土師器・鉄滓・搬入礎がある。出土遺物である珠洲焼三耳壺(84)は、他の破片がSD136から、珠洲焼壺(87)は、破片がSD127から出土しており、これらの遺構がSD120と近い時期に埋没した可能性が高い。出土遺物から、時期は中世と推定される。

SK122

5区47Fグリッドに位置する土坑である。SD111に重複し全容は不明であるが平面は隅丸方形と考えられる。確認できる範囲で長径2.1m・深さ54cm・底面標高3.21mを測る。断面形U字状で底面は平らである。覆土は褐灰色粘土・灰白色砂土等のブロック状堆積であったが、土層断面の崩落により記録できなかった。

SD123

5区47Eグリッドに位置する灰褐色シルト質粘土で幅0.3~0.6m・深さ5cm・底面標高3.73mを測る。SD111から枝分かれし、これを切る。断面形皿状で覆土は灰褐色シルト質粘土である。

SK124・SK125・SK126

いずれも11区47・48Dグリッドに位置する土坑である。SK124はSD127に、SK125・126がSD120に重複するが、溝を掘り進める過程で検出されたため、新旧・本来の形状は不明である。いずれも暗灰色・灰白色・褐灰色・暗青灰色などのシルト・粘土などがブロック状に混合・堆積している。SK124は平面円形と考えられ、確認できる長径0.95m・深さ40cm・底面標高は3.19mを測る。断面形U字状である。SK125の確認できる規模は、長径1.77m・短径1.36m・深さ40cm・底面標高3.18mを測る。断面U字状で底面は平らである。SK126は平面円形の土坑で、確認できる長径0.97cm・短径0.74m・深さ63cm・底面標高2.98mである。断面形U字状で、底面は平らである。

SD127

5区49G~11区~13区46Cグリッドを延びる溝である。SD93を切りSD127に切られる。方位はN-25°-Wで、SD120の重複後N-20°-Wに変化する。幅2.3~6.0m・深さ52~96cm・底面標高2.87~3.22mを測る。断面形皿状で底面の凹凸は著しい。両側面にテラス状の段が何段かあり、底面に溝状の掘り込みが1条入る。覆土はレンズ状堆積を呈する。上部が黒色・暗青灰色の粘土・シルト質粘土を主体とし、下部は灰白色・青灰色のシルト・砂質粘土が主体となる。48・49Fグリッドの底面からは、溝状掘り込みに沿って、直径5cm前後の丸太杭が立ったままの状態ですべて出土する。B地区の中では、このような溝に伴う何かの設備は検出されておらず、貴重なものといえる。48Dグリッドの底面の溝状掘り込みからも杭が立ったまま出土するが、その場で切り合っているSD120のものである可能性があり、形状も異なり、四角く面取りされている。出土遺物は、丸太杭などの木製品のほか、珠洲焼・中世土師器・土師器がある。出土遺物から、時期は中世と推定される。

SD128

5区48E~Fグリッドを延びる溝で、幅0.4~1.0m・深さ3~15cm・底面標高3.59~3.7mを測る。断面形皿状で底面の凹凸は著しい。暗青灰色・灰白色の粘土・シルト質粘土などのブロック状堆積である。位置からSD127・131との関連が推定される。

SD129

5区49Fグリッドに位置し、SD127に切られる溝である。幅0.3~0.8mを測る。断面形皿状で、覆土は褐灰色・灰白色粘土、灰白色砂土のブロック状堆積である。

3. 遺構各説

S K 130

5区49Fに位置し、S D127と重複する平面楕円形の土坑である。S D127の完掘中に検出されたため新旧・本来の形状などは不明だが、確認できる範囲では、長径1.82m・短径1.53m・深さ55cm・底面標高3.15mを測る。断面形U字状で灰白色・暗青灰色・青灰色の粘土・砂土などがブロック状に堆積する。S D127と同様に丸太杭が3本立っただけのまま出土する。S D127と同様の目的を持つ施設であるならば、時期は中世である可能性がある。

S D 131

5区49F～11区～13区47Cグリッドを延びる溝である。方位はN-20°-Eである。幅0.6～2.0m・深さ9～41cm・底面標高3.66～3.6mを測る。断面形は底面・掘り込みの凹凸が著しく皿状～U字状に変化する。覆土は灰褐色・灰白色のシルト・シルト質粘土などのブロック状堆積である。出土遺物としては土師器・青磁・搬入礫がある。出土遺物から、時期は中世と推定される。

S D 132

5区49Fグリッドに位置しS D131から枝分かれする溝だが、その新旧は不明である。幅0.3～0.5m・深さ7cm・底面標高3.66～3.73mを測り、途中で一部途切れる。断面形皿状で暗灰色・灰白色の粘土がブロック状に堆積する。

S K 133・S K 134・S K 135

5区49E・Fグリッドに位置する土坑群であり、平面形や規模はそれぞれ大きく異なっている。S K133は平面楕円形・長径2.44m・短径1.86m・深さ50cm・底面標高3.23mを測り、断面形皿状である。南側の側壁にテラス状の段をもつ。S K134は平面楕円形・長径1.17m・短径0.8m・深さ32cm・底面標高3.4mを測り、断面形皿状である。S K135は平面はヒョウタン型で長径3.38m・短径0.67m・深さ41～69cm・底面標高3.05～3.33mを測り、断面形U字状である。いずれも灰白色の粘土・シルト質粘土を主体とする。

S D 136

5区48・49D～13区48・49Cグリッドを円形にめぐる溝状遺構である。幅1.5～5.4m・深さ5～26cm・底面標高3.60～3.71cmを測る。底面の凹凸が著しく断面は不定形であり、円周の内側にはテラス状の段がある。覆土は灰褐色粘土を主体と灰白色粘土がブロック状に少々まじる。

出土遺物としては、珠洲焼・須恵器・土師器・搬入礫がある。出土遺物から、時期は中世と推定される。

S D 137

11区48Dグリッドに位置する溝で、幅0.4～0.5・深さ8～15cm・底面標高3.67～3.76mを測る。断面形皿状で、暗灰色粘土を覆土とする。

S K 138・S K 139・S K 143・S K 144・S K 145・S K 147・S K 148

49・50D・Eグリッドに点在する、覆土がブロック状堆積を呈する土坑群である。形状は基本的には平面円形・断面U字状を呈し、底面は平らであるが、規模は大きく異なる。基本的にはS K124～126と同一のものと考えられる。灰色・灰白色・褐色・青灰色などの砂土・シルト・粘土などがブロック状に混合・堆積する。

S K138は長径3.04m・短径1.97m・深さ66cm・底面標高3.07～3.21mを測る。S K139はS D136と重複するが、S D136完掘中に検出されたため、切り合い・本来の形状は不明であった。長径2.12m・短径1.61m・深さ63cm・底面標高3.06～3.1mを測る。S K143は長軸1.4m・断面0.97m・深さ54m・底面標高3.16～3.18mを測る。S K144は長径2.44m・短径2.02m・深さ52cm・底面標高3.15～3.26mを測る。S K

145は長軸2.94m・短軸・短軸2.76m・深さ58cm・底面標高3.12~3.24mを測る。SK147は長径2.38m・短径1.43m・深さ52cm・底面標高3.1mを測る。SK148は長径1.07m・短径0.94m・深さ46cm・底面標高3.22mである。

これら人為堆積の土坑は、他の遺構との切り合いが判明しているのはほとんど無く、遺物の出土もないため時期の特定ができない。SK144・145から土師器が出土しているが、細片のため明確でない。

SD140

49Eグリッドに位置する溝で、幅0.7~1.3m・深さ9~16cm・底面標高3.61~3.74mを測る。断面形皿状で、覆土は灰白色シルト質粘土に灰色粘土がブロック状に混入する。

SK141

5区50グリッドに位置する土坑である。全容は不明であるが、平面円形と推定され、断面形U字状を呈す。覆土は灰色・灰白色の粘土・砂土のブロック状堆積である。

SK142

5区50Eグリッドにある土坑で、調査区の境界に位置するため全容は不明である。判明した径は4.8m以上・深さ79cm、底面標高2.87mを測る。覆土はレンズ状堆積を呈す。上部は黒褐色・黒色などの粘土中心で炭化物を多量に含む。下部は青灰色・灰色の粘土主体であり、底部から木片が多く出土する。その他の出土遺物には須恵器片・土師器片がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。SD149と重複し新旧は不明だが、SD149より先に検出したため、SD149より新しいものと考えられる。

SK146

11区50Dグリッドに位置する平面楕円形の土坑である。周辺にはブロック状堆積の土坑群が位置するが、これらとは形状・覆土が異なる。長軸1.83m・短軸1.21m・深さ47cm・底面標高3.12mを測る。断面形皿状で、覆土は、明褐色粘土・暗灰色粘土のレンズ状堆積である。

SD149

5区50F~11区51Dを延びる溝である。SD154に合流するが新旧は不明である。方位はN-35°~65°-Eである。幅1.61~3.21m・深さ46~93cm・底面標高2.28~3.19mを測る。部分的に両側面にテラス状の段をもつ。断面形皿状で、覆土はレンズ状堆積を呈す上部は黒色・暗青色・褐色などの粘土を主体とする。下部は灰白色のシルト・シルト質粘土を主体とする。出土遺物としては須恵器片・土師器片がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SD150・SD151・SD157・SD159・SD177

11区から10区にかけ平行関係を保ちながら延びる溝で、底面は凹凸著しく、覆土は褐色・暗灰色・灰白色の粘土などのブロック状堆積である。

SD150は全容は不明であるが、深さ12~18cm・底面標高3.46~3.62cmを測る。SD151と一部重複関係にあるが、切り合いは不明である。

SD151は、幅0.4~2.9m・深さ4~54cm・底面標高3.19~3.73mを測る。SD154を切る。9区ではSD157・159と平行関係にある。SD159とは0.18~0.83mの距離を保ち、一部重複するが新旧は不明である。また、SD157とは2.69~4.55mの間隔で平行関係にある。11区では、SD177と2.28m~3.48mの距離を保つ。出土遺物としては、須恵器・土師器がある。

SD157は、幅0.4~1.6m・深さ1~42cmで浅い部分は一部途切れながら延びる。底面標高3.26~3.82mを測る。SD154・163を切る。11区では、SD177と1.61m~2.52mの間隔で平行関係にある。出土遺

3. 遺構名説

物としては、須恵器・土師器片・鉄滓がある。

S D159は幅0.5～1.5m・深さ1～22cm・底面標高3.56～3.85mを測り、一部途切れながらに延びる。出土遺物としては須恵器片・土師器片がある。

S D177は、10区内で検出した限りでは2条の独立した溝だが、他の溝との関係から同一遺構として解釈した。幅0.6～3.4m・深さ1～24cm・底面標高3.13～3.46mを測る。南側は底面凹凸著しく、最大4条の細い溝に分かれる。

これらの溝を通して見ると、掘り込みが非常に浅くかつ底面の凹凸が著しい。また幅の変化が激しく用排水路とは考えにくい。S D151・157・177はそれぞれ1.61m～4.55mの間隔で平行関係を保っており、これらの溝に挟まれた空間は道路として機能し、溝は道路の境界となっていたのでは、と推定される。S D151・159は道路の補修のため幾度も溝を掘り直したものと考えられる。但し、このような道路遺構の出土例ではしばしば、溝同士の間空間に礫や粘土などを敷きつめて高く土盛りしてある。溝の間およびその周辺にはそのような跡は検出されていない。出土遺物から推定される時期は平安時代であるが、平安時代の溝のS D154を切り、やはり平安時代の遺構であるS B164の中央を横切ることなどから、時期は中世と考えた方がよいと思われる。

S D152・S D153

11区51Dグリッドに位置する溝で、ともにS D154と重複するが新旧は不明である。S D152は、幅0.7～0.9m・深さ5～12cm・底面標高3.3～3.54mを測る。断面形皿状で炭化物を含む褐色粘土を覆土とする。S D153は幅0.8～2.0m・深さ16～33cm・底面標高3.2～3.34mを測る。断面皿状で覆土は褐色粘土・灰白色粘土のレンズ状堆積である。S D154との切り合いが検出できなかったことから、同時期の平安時代と考えられる。

S D154

11区51D～9区52Fグリッドを延びる溝で、S D151・157に切られる。方位はN-15°～30°-Wである。9区では古墳時代包含層発掘時に掘り残しが検出されたため正確な確認面は不明である。確認できる範囲では、幅1.3～3.7m・深さ37～77cm・底面標高2.91～3.29mを測り、部分的に両側面にテラス状の段をもつ。断面形皿状で、覆土はレンズ状堆積を呈す。上部は褐色・黒褐色粘土、下部は灰色・灰白色粘土が主体である。出土遺物としては、須恵器・土師器・輪羽口がある。52Eグリッドの底部からは土師器杯が集中して出土する。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S D155

11区52Dに位置する溝で、S D154と合流するが新旧は不明である。幅1.3～2.6m・深さ28～50cm・底面標高2.96～3.09mを測る。S D154に合流する際に、両側面にテラス状の段ができる。断面形皿状で底面凹凸著しい。覆土は多量の砂が混入した青灰色砂質粘土で、上部に酸化鉄が混入する。出土遺物としては、須恵器・土師器がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S X156

9区52Fグリッドに位置する性格不明遺構で、S D220を切るが、S D151に切られる。全容は不明であるが、判明する長径2.07m・深さ5cm・底面標高3.72～3.75mを測る。断面形皿状で、暗灰色粘土に炭化物の層が帯状に混入する。土師器が出土する。出土遺物から推定される時期は平安時代である。

S D158

9区53E～55Dグリッドを延びる溝で、一部途切れる。幅0.5～0.6m・長さ39m・深さ1～17cmを測る。

断面形皿状で、酸化鉄を多く含む暗灰色粘土を覆土とする。出土遺物としては、須恵器・土師器が出土する。出土遺物から、時期は平安時代と推定されるが、中世の溝と考えられる S D151 と平行関係にあることから、何らかの関連をもつ可能性もある。

S E 160

9区54F グリッドに位置する井戸跡で、S D151 に切られる。暗渠排水溝に上部を破壊されたため全容は不明であるが、直径1.56m・深さ123cm・底面標高2.32mを測る。断面形U字状で円筒形、覆土はレンズ状堆積を呈す。上部は黒灰色粘土、下部は暗灰色粘土が主体となる。底部には井戸枠部材が原形を保ったまま出土した。

井戸枠の形状は、一辺が0.96m～1.43mの方形である。井戸枠に組み形は出土状況から以下のように推定されている。まず四方に杭を立て、その間に幅14～20cmの幅広側板を、1枚のみあるいは2枚重ねにして何枚か立て、面を作る。その両側面から横木を添え支えとする。内側は丸木、外側は幅5～8cmの板木を使用する。内側横木の両端はホゾに加工され、杭にはホゾ穴が開けられているため、これらが対になっていたものと推定される。更に外側の横木を押さえるため、幅6～8cmの幅狭縦木を立て、枠の一面が完成する。

井戸枠内の底部からは方形曲物が出土した。水汲みに利用されたものと考えられる。底部からは井戸枠内外から礫が多く出土した。その他、底部の覆土には草木が多く混んでいた。その他の出土遺物としては、土師器がある。出土遺物、および中世の遺構と推定される S D151 に切られることなどから、平安時代の遺構と推定される。

S K 161

9区54E グリッドに位置する、やや歪んだ楕円形の土坑である。長径2.07m・短径1.63m・深さ13～16cm・底面標高2.7～2.72mを測る。断面形皿状で暗灰色粘土が覆土となる。出土遺物としては土師器がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S E 162

9区55F グリッドに位置する平面円形の井戸跡である。S D157 と重複するが溝発掘中に検出されたため、覆土・切り合いは不明である。確認された範囲では、長径0.76m・短径0.63m・深さ61cm・底面標高3.21mを測る。断面形U字状である。

S D 163

9区55E～F グリッドに延びる溝で、S D151・157 に切られる。幅0.5～0.6m・深さ4～13cm・底面標高3.64～3.77mを測る。断面形皿状で、底面の凹凸著しい。覆土は、暗灰色粘土である。S B164の北側に位置し、桁間と2.27m～2.66mの距離で平行関係にある。但しS B81に対するS D80、S B83に対するS D84と異なり距離が離れており、関連性は不明である。須恵器片・土師器片が出土する。S D159・157との新旧関係・出土遺物などから、時期は平安時代と推定される。

S B 164

9区55・56E グリッドに位置する独立柱建物跡である。形状はやや歪んでいる。S D151・157・159との新旧は不明であるが、溝のプラン内に位置するはずの幾つかの柱穴が検出できなかったことは、溝に柱穴が破壊されたものと考えられ、溝より時期は古いと推定される。

規模は柱穴が一部欠けており、明確で無いものもある。桁行5間(南側10m・北側10.17m)×梁間2間(東側5.5m・西側5.46m)を測る。桁行の両側に庇があり、庇の出は東側1.9m～2.07m・西側2.12m～

3. 遺構各説

2.13mを測る。身舎桁間は南側は5.96m・北側5.96mを測る。身舎梁間は東側5.48m・西側5.46mを測る。桁行柱間は、北側は東より2.24m・1.9m・11.82mを測る。南側は東より2.2m・1.92mである。柱穴は平面円形・断面U字状で、直径25~47cmを測る。深さ16~30cm・1基のみ8cm・底面標高3.39~3.6cmを測る。柱穴の規模には桁・梁・庇の区別は無い。覆土は暗緑灰色あるいは黒褐色粘土で、土師器片が出土する。方位N-45°-Wを測る。出土遺物から時期は平安時代と推定される。

S K 165

9区55Fグリッドに位置する平面楕円形の土坑で、長径2.01m・短径0.76m・深さ10~11cm・底面標高3.69m~3.71mを測る。断面皿状で暗灰色粘土を覆土とする。出土遺物としては、須恵器・土師器がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S K 166

9区56Eグリッドに位置する平面楕円形の土坑で、長径1.69m・短径0.88m・深さ35~36cm・底面標高3.3~3.32mを測る。断面形U字状で、覆土は暗灰色・褐色粘土・暗灰色シルトがブロック状に混入する。5区・11区で多く検出されたブロック状堆積の土坑のひとつであろう。須恵器・土師器が出土する。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S K 167

9区56Fグリッドに位置する土坑である。全容は不明だが楕円形と推定される。判明する長軸2.86m・深さ25~28cm・底面標高3.58~3.62mを測る。断面形皿状で暗灰色粘土が堆積するが、土層断面が崩落したため記録できなかった。出土遺物としては須恵器・土師器がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S E 168

9区57Eグリッドに位置する平面円形の井戸跡である。長径1.07m・短径0.44m・深さ46cm・底面標高3.21mを測る。断面形U字状で、炭化物を大量に含む暗灰色粘土を主体としたレンズ状堆積を呈す。出土遺物としては土師器がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S K 169

9区57Eグリッドに位置する平面円形の土坑である。長径0.52m・短径0.46m・深さ29cm・底面標高3.33mを測る。断面形U字状で、覆土は暗灰色粘土を主体としたレンズ状堆積を呈す。

S K 170・S K 171

ともに9区58Fグリッドに位置する平面円形の土坑で、断面形皿状で暗灰色粘土を覆土とする。S K 170は長径1.04m・短径0.96m・深さ23cm・底面標高3.6mを測り、土師器が出土する。S K 171は長径0.74m・短径0.68m・深さ13cm・底面標高3.74mを測る。出土遺物としては土師器片がある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

S K 172

10区58Cグリッドに位置する平面円形の土坑で、長径0.54m・短径0.44m・深さ27cm・底面標高2.88mを測る。断面形U字状で、暗青灰色粘土を覆土とする。須恵器・土師器を出土遺物とする。出土遺物から時期は平安時代と推定される。

S D 173・S D 174・S D 175

10区59Cグリッドに位置し平行関係にある3条の溝である。S D 173~174の距離は0.22~0.37mを、S D 174~175の距離は0.18~0.71mを測る。いずれも断面形皿状で底面凹凸著しく、幅0.5~0.8m・深さ6

～9cm・底面標高3.31～3.41mの範囲内にある。覆土も共通しており、植物遺体を含む暗褐色粘土を主体とする。SD174から土師器、SD175から須恵器が出土する。出土遺物より、ともに時期は平安時代と推定される。

SD176

10区59Cグリッドに位置する溝で、SD157と平行関係にある。幅0.5～0.8m・深さ6cm・底面標高3.34～3.41mを測る。断面形皿状で底面の凹凸著しい。覆土は暗褐色粘土で、須恵器が出土する。出土遺物より、時期は平安時代と推定されるが、位置から、中世の溝であるSD176との関係も考えられる。

SD178

10区59Dグリッドに位置する溝で、SD177に重複しこれを切る。幅0.6～1.1m・深さ3～15cm・底面標高3.34～3.47mを測る。断面形皿状で底面の凹凸が著しい。覆土は暗灰色粘土を主体とするレンズ状堆積を呈す。

SD179

10区60Eグリッドに位置する溝で、幅0.4～0.5m・深さ7～15cm・底面標高3.24～3.31mを測る。断面形皿状で暗灰色粘土を覆土とする。

SK180

10区61Eグリッドに位置する平面円形の土坑で、直径0.38cm・深さ81cm・底面標高2.85cmを測り、断面U字状で、炭化物大量に含む、暗灰色粘土を覆土とする。須恵器・土師器が出土する。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SD181・SD182

10区61Eグリッドで平行関係にある2条の溝である。ともに幅0.4～0.7m・深さ1～7cm・底面標高3.24～3.31mの範囲内にある。断面形皿状で暗褐色粘土を覆土とする。SD181からは土師器、SD182からは須恵器・土師器が出土する。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

SK183

10区61Dグリッドに位置する平面円形の土坑で、長径0.88m・短径0.78m・深さ19cm・底面標高3.18mを測る。断面形皿状で、灰白色粘土を主体とするレンズ状堆積を呈する。出土遺物としては須恵器・土師器がある。特筆すべきこととして、覆土の2層と3層の間に須恵器の大型甕が出土する。これは横倒しになった状態で出土しており、上向きになった体部半分は失われていた。埋蔵であった可能性もある。出土遺物から、時期は平安時代と推定される。

第V章 遺 物

沖ノ羽遺跡では、古墳時代・平安時代・中世の各時期にわたる遺物が出土している。今回報告するB地区の遺物は平安時代のものが多く、次いで古墳時代の遺物である。中世の遺物は少量である。遺物出土総量は平箱（箱サイズ54×34×10cm）で34箱であり、土器がその大半を占める。このほか平箱に入らない木製品があり、古墳時代の木柱2点（232・233）を除き、平安時代から中世に所属するものと推定される。土器の内容は、平安時代の須恵器・土師器が主体で、全体の80%以上を占める。古墳時代の土師器は16%で、中世土師器・珠洲焼などの中世遺物は2%にも満たない。その他の遺物としては、平安時代から中世に所属すると思われる石製品・土製品、中世の烏帽子などがある。

土器の整理は、洗浄・註記・接合後、図化可能なものはなるべく実測した。遺構の所属時期と異なるものでも残りが良いものは実測した。掲載方法は古墳時代の遺構とこれ以降の遺構では明確に識別できるため、遺物も別々に掲載した。さらに遺構に伴うものは遺構毎に、包含層出土のものは一括した。木製品・石製品・土製品は出土量がそれほど多くないため、それぞれ種別毎に時代を問わず一括掲載した。

以下、遺物について説明するが、土器は古墳時代、平安時代、中世の3区分し、木製品・石製品・土製品は時期を問わず一括記述した。

1. 古墳時代の土器

B地区9区の東側から11区、5区、13区にかけて出土している。中でも5区の南側から13区にかけて多く出土した。多くは土坑に伴うものであり、包含層出土としたものも土坑周辺からのものである。

なお、包含層や本来土器が含まれない地山（基本層序IV層）上部からの土器の中には、一箇体で出土したものもある。遺構の覆土が周辺の地山（基本層序IV層）に極めて近似し、遺構の検出漏れも考えられることから、実際には遺構に伴う可能性が高い。土器はすべて土師器で、出土量は平箱で約4箱である。器種は高杯、小型丸底壺、甕が主体を占め、壺、甌は各1点のみの出土である。

A 遺物各説

(1) 遺構内出土土器（図版24・25・61・62）

S K186 出土土器（図版24・61）

甕、高杯、小型丸底壺が出土している。

甕（1） 口縁部破片で、口径21.4cmを測る大型品である。「く」の字に外反する口縁は端部が丸くおさまる。内外面ヨコナデされる。

高杯（2） 杯部のみで脚部を欠く。口径16.6cmを測る。水平ぎみの杯底部から体部は内湾ぎみに開き、端部でやや強く外反する。底部と体部の境に稜を持つ。内面の一部にハケ目が認められることから、ハケ調整の後、内外面ヘラミガキされたものと推定されるが、風化が激しく不明瞭である。口縁端部はヨコナデされる。

小型丸底壺（3～5） 3は風化が激しく、細かな破片になっていたものであるが、1個体あったものと推定される。やや大きめの器形で、口径10.45cm、体部径15.2cm、器高15.35cmを測り、体部径に比べ口

径はやや小さい。口縁部は内湾ぎみに急傾斜にひらく。体部内面には粘土組織が明瞭に残り、外面にはハケ目が認められる。4は体部のみで、口縁部を欠く。体部径16.2cmを測りやや大きめの器形である。比較的薄手の作りであるが、風化が激しく調整不明である。5は体部のみで、口縁部を欠く。体部径9.2cmを測り、小型品である。底部はやや平底風で器壁は厚い。風化が激しく調整不明であるが、内面の一部に粘土組織が認められる。

SK189 出土土器 (図版24・61)

小型丸底壺(6) 口縁部を約1/2欠くが、もともとは完形であったものと思われる。口径10.5cm、体部径10.9cm、器高11.0cmを測り、口径と体部径はほぼ同じ。口縁部はほぼ直線状にひらく。器壁は厚く、外面はハケ目後、ミガキ、口縁部はヨコナデされる。体部内面には粘土組織が明瞭に残る。

SK195 出土土器 (図版24・61)

甕、高杯、小型丸底壺が出土している。

甕(7) 口縁部と体部の破片で、底部を欠く。口径16.0cm、体部径19.1cmを測る。「く」の字状の口縁部はやや外反ぎみにひらき、端部は丸くおさまる。体部内外面ハケ目、口縁部はヨコナデされる。

高杯(8) 杯部のみで、脚部を欠く。口径16.8cmを測る。水平ぎみの杯底部から体部はほぼ直線状にひらき、口縁部で外反する。底部と体部の間には弱い稜がある。内外面ハケ目後、ミガキされたと思われるが、風化が激しく不明確である。口縁端部はヨコナデされる。

小型丸底壺(9) 口縁部の一部を欠くが、もともとは完形であったものと思われる。口径7.7cm、体部径9.9cm、器高9.3cmを測り、体部径に比べ器高はやや小さい。口縁部はやや内湾ぎみに急傾斜にひらく。外面にハケ目が認められるものの、比較的ていねいな作りで体部内面の粘土組織はナデ消されている。

SK212 出土土器 (図版24・61)

高杯(10) 杯部のみで、脚部を欠く。口径18.1cmを測る。水平ぎみの杯底部から体部はほぼ直線状にひらき、口縁部で緩く外反する。底部と体部の間には明瞭な稜がある。風化が激しく不明確なものの、内外面ハケ目後、ミガキされたと思われる。

SK196 出土土器 (図版24・61)

高杯(11) 杯部のみで、脚部を欠く。やや大型品で、口径19.6cmを測る。水平ぎみの杯底部から体部はほぼ直線状にひらき、口縁部で緩く外反する。底部と体部の間には弱い稜がある。風化が激しく不明確なものの、内外面ハケ目後、ミガキされたと思われる。

SK220 出土土器 (図版24・61)

甕、高杯が出土している。

甕(12~15) 12は口縁部破片で、口径18.5cmを測る。口縁部がやや長く、端部はやや強く外反する。器形から壺の可能性もある。風化激しいため調整不明である。13~15は口縁部から体部上半の破片で、13はやや大型の、14・15はやや小型の器形である。頸部は「く」の字に外反し、口縁端部は丸くおさまる。

高杯(16) 杯部上半部を欠く。太い脚筒部を持ち、中位がふくらみ、裾部は屈折して広がる。脚部内面の粘土組織は消される。風化激しく器面の剝落著しいものの、杯部内面の一部にミガキが認められる。

SK197 出土土器 (図版25・62)

甕(17) ほぼ完形のやや大型な器形である。口径19.3cm、高さ25.5cmを測る。口縁部は「く」の字に外反し、端部は丸くおさまる。体部は径が器高とはほぼ同じで球形に近く、底部はわずかに平坦部をもつ。口縁部内外面は横ナデ、体部内外面はハケ目、その後内面のみナデ調整される。

1. 古墳時代の土器

S K 185 出土土器 (図版25・62)

壺 (18) 底部から体部下半の破片で、体部下半は大きく開く。体部は球形に近いものと推定される。風化が激しく器面は荒れているものの内外面にハケ目が認められる。

S K 205 出土土器 (図版25・62)

壺 (19) 口縁部破片で、「く」の字に外反し、端部は丸くおさまる。風化が激しいものの口縁部外面には横ナデが、体部内外面にはハケ目が認められる。

S K 189 出土土器 (図版25・62)

壺 (20) 底部から体部下半の破片で、底部と体部の境はやや抉れた後、大きく開く。体部は球形に近いものと推定される。内外面ハケ目、その後外面のみナデ調整される。

(2) 包含層出土土器 (図版25・62)

小型丸底壺 3点、壺 2点、壺・甌・高杯各 1点を図示した。前述のように21・23は遺構に伴う可能性が高いと推定される。

壺 (21・22) 21は口縁部と体部の一部を欠くもののほぼ全体の器形が分かる。やや大型で口径19.3cm、推定器高32.7cmを測る。頸部は直立気味で口縁端部近くで外反し、端部は丸くおさまる。体部外面にはハケ目が認められる。22は口縁部から体部上半の破片である。やや大型で口径19.3cmを測る。口縁部は「く」の字に外反し、端部は丸くおさまる。風化が激しく器面の剝落が著しいものの口縁部内面に横ナデ、体部内外面にハケ目が認められる。

壺 (23) 二重口縁の口縁部の破片である。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさまる。口縁部中位は肥厚するが稜は弱い。風化が激しいものの外面の一部にハケ目がかすかに認められる。

甌 (24) 底部から体部下半の破片で、B地区では1点のみの出土である。やや丸底風の底部からはほぼ直線状に開く。風化が激しいものの内面にはハケ目が認められる。

小型丸底壺 (25・26・27) 26は口縁部が一部遺存するが、他は体部のみのものである。器高、体部径がおよそ10cm前後の小型品と推定される。風化が激しく不明瞭であるが、26は比較的ていねいな作りで体部外面はハケ目後ミガキ、内面は横ナデで粘土組織は消されている。25・27は粗雑な作りで内面に粘土組織が明瞭に残る。

高杯 (28) 杯部を大きく欠く。水平気味の杯底部から立ち上がる体部との境には弱い稜が認められる。脚筒部はやや太く、内面には粘土組織が明瞭に残る。脚筒部で屈折して広がる。風化激しいものの脚筒部内面にはわずかにハケ目が認められる。

2. 平安時代・鎌倉時代

A. 土器の概観

今回の調査で検出された平安時代・中世の遺物は、土坑・井戸等の遺構が多く集中する5区を中心に出土した。出土遺物は土器と石器・石製品、木製品、漆器がある。平安時代の土器は須恵器有台杯・無台杯・杯蓋・短頸壺蓋・長頸壺・甕・横瓶・円面碗、土師器無台碗・鉢・長壺・小壺・鍋がある。木製品は井戸枠部材・曲物・斎串・箸・棒・杭が出土した。中世の遺物は白磁碗・中世土師器杯・皿・珠洲焼壺・珠洲焼槽鉢が見られる。

平安時代

器種分類 分類は山三賀Ⅱ遺跡〔坂井1989〕における器種分類を参考にした。今回の報告では須恵器有台杯・無台杯、土師器碗と壺類について大きさと形態で分類を行った。

本遺跡の分類は、同一器種のうち法量が異なるものについてローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）を用いた。各器種で細分可能なものについてはアルファベット（A・B）を使用する。

須恵器

有台杯 口径で3分類した。Ⅰ類：口径14～15cm。Ⅱ類：口径13cm台。Ⅲ類：口径11cm前後。体部の形態では3分類（A・B・C）した。

A類は口径に比して身の浅い型。B類は口径に比して身の深い型。C類は口径に対して身が深く小型。文中の説明や遺物観察表は有台杯ⅠA、有台杯ⅢC等と表す。

無台杯 口径で2分類した。Ⅰ類：口径13cm以上。Ⅱ類：11～12cm台。体部の形態で2分類（A・B）した。A類は体部と底部の境は丸みを帯び、体部はあまり開かず立ち上がる。器壁は厚い。

B類の体部は底部から直線的に大きく開いて立ち上がり、底部との境は比較的明瞭。器壁は薄い。

文中や観察表では無台杯ⅡA、無台杯ⅠB等と表した。底部はヘラ切りが主で、糸切りは1点(60)しか見られない。

胎土分類 出土した須恵器を肉眼観察により3群（A・B・C）に分け観察表にはA群などと表記した。

A群は5mm以下の長石や石英が大量に含まれる。器面は多孔質で小礫が器面に露出するほど見られ、手触りもやや軟質で粗い印象がある。

B群は白色細砂が目立ち、大きな砂礫はごく少ない。色調は灰色から黒灰色が多く、器面には粘土泥がロクロ回転により溝状に見られる特徴がある。胎土の質は緻密であるが焼成はやや軟質な印象を受ける。

C群は先述の2群以外を一括した。胎土には白色細砂を極少量含み、焼成堅緻なものや砂礫を多く含むが比較的緻密な土器がある。色調も暗灰色、オリーブ灰色、灰橙色等が見られる。

各群の産地については山三賀Ⅱ遺跡〔坂井前掲〕資料と比較検討してみた。A群は阿賀北地方の笹神・真木山丘陵周辺の窯跡群。B群は佐渡郡羽茂町小泊窯跡群産。C群の多くは新津市の新津丘陵周辺に産地があると考えられる。

土師器

無台碗 今回の調査では土師器の有台碗は検出されていない。出土量の多い無台碗を対象に口径で3分類

した。Ⅰ類は口径18cm前後、Ⅱ類は口径14～17cm、Ⅲ類は口径11～14cmとした。更に体部の立ち上がり形態で2分類(A・B)し、それぞれを口径に対する身の深さで2分類(1・2)した。

A 1類は口径に比して身は深く、体部は内彎気味に立ち上がる。

A 2類は口径に比して身は浅く体部は内彎気味に立ち上がる。

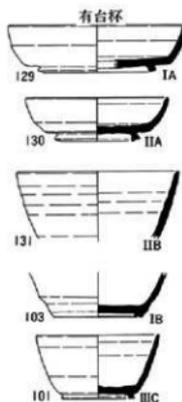
B 1類は口径に比して身は深く、体部は直線的に立ち上がる。

B 2類は口径に比して体部は直線的に立ち上がる。

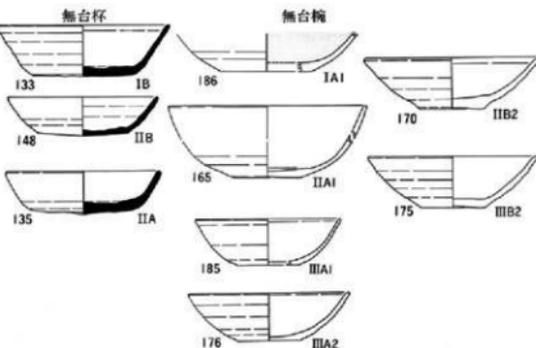
文中の説明や遺物観察表はⅡA 1、ⅢB 2等と表す。体部の立ち上がり形の種類では、中間的な形態を呈するために類型に当てはめることが難しい土器もある。

壺 長壺と小壺がある。長壺はロクロ¹⁾を使用した(ロクロ土器)割の長い壺で煮炊具の主体をなす。調査では器形全体を知る資料の出土はなかったが、体部や底部の破片から見て「北陸型」の壺である。口縁部は「く」の字状に外反し、体部は緩くふくらみ底部は丸い。体部下半から底部にはタタキ形成の痕が残り、上半部にはロクロ回転によるカキ目が見られる。本遺跡では非ロクロ成形の壺は出土していない。

須恵器



土師器



須恵器・土師器の器種分類

B. 遺物各説

(1) 遺構出土の遺物

S D57 (図版26、63) 出土遺物は白磁碗(31)、土師器無台碗(32)・小壺(35)・鍋(33・34)がある。

31は体部破片でいわゆる「口禿げの白磁」と呼ばれるものである。口縁内端の輪を削り取る内そぎを施す。外面の一部に不純物が付着する。年代は13世紀後半と推定される【森田1982】。32は土師器碗ⅡB 1小壺 器形を復元できる資料はない。口径12～17cm台。底部は糸切り底である。ロクロ土器で基本的に

1) 山三貫Ⅱ遺跡の報告では、古代の「ロクロ」は粘土塊より水挽き成形が可能なものではなく、調整(整形)に使用する程度の一種の「回転台」と考えられる。したがって、「ロクロ土師器」は「ロクロ水挽き」の土師器ではなく、須恵器の製作技法でつくられた土師器を意味する(坂井1989)と観察している。本遺跡の報告もロクロ土師器は同じ意味で使用される。

長壺に類似するが、口縁部形態は2種類(A・B)ある。A類は長壺の口縁部と同様な作りである。B類は器壁が薄く、頸部から外反した口縁部が内彎し直立する。文中の説明や遺物観察表は小壺A等と表す。身深で体部は直線的に立ち上がる。35は土師器小壺Aである。器壁は薄く、口縁端部が上方につきみ出される。胎土には5mm大の石英粒など小礫が目立ち、須恵器の胎土A類に似る。33の鍋は胎土に砂粒が多い。焼成は比較的良好。口縁部はナデられ端部は内側に巻き込まれる。外面のくびれ部以下と内面にはカキ目が見られ、体部下半にはタタキ目が残る。34は口縁が外反し、端部は内側に巻き込まれる。胎土に砂が多く焼成はやや甘い。

S K 58 (図版26、63) 出土遺物は須恵器無台杯(29)、土師器無台碗(30)がある。

29は無台杯II Bの完形品。底部と体部の接合面で破損している。底部はほぼ円板状に割れており、底面に体部の粘土を縫いで作る様子が見られる。30は土師器碗I A 1。口径18.2cmと土師器碗では最大値を測る。内面は丁寧に磨かれ黒色処理されている。

S D 66 (図版26、63) 出土遺物は土師器碗(39)である。

39は碗II A 2。内面は丁寧に磨かれ黒色処理される。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は尖りぎみになり僅かに外反する。底部はヘラ削り、体部はナデ調整だが風化し器面はほとんど剥落する。

S D 68 (図版26、63) 出土遺物は須恵器有台杯(36)、土師器碗(37)・鍋(38)がある。

36は有台杯II B。外面の一部に自然釉がかかる。底径よりかなり小さい高台がつけられる。内面底部にはヘラ記号「×」が見られる。胎土には礫も入るが総じて緻密で、焼成も良好。37は土師器無台碗II B 1と思われる。胎土には細砂が入り、焼成は甘い。38の鍋は口縁部小破片。口縁端部を肥厚させ面を持たせ凹線がめぐる。胎土には細砂が多く、焼成は軟質である。

S E 69 (図版27、63、72) 出土遺物は須恵器杯蓋(46)、土師器碗(47・48・49)・長壺(50・51)・鍋(52・53)・斎串(226)がある。

46は推定口径15.6cmあり、これと組む杯身は復元実測を含めても確認されていない。外面頂部はクロロ削りされ、端部と内面はクロロナデ。つまみは中央が深く窪む。胎土には砂礫が多い。47は口径13.3cm、器高4~4.4cm、底径6.7cmと比較的大きい。成形時の歪みが見られる。内彎して立ち上がる器形はIII A 2の典型。胎土には細砂が入るが精良で焼成も良好。48はIII B 2、49はIIIに分類される。50は胎土に砂が多く入り、浅黄橙色で軟質。口縁部外面には、端部を仕上げる際にはみ出した粘土を隆帯状に巡らす。51は口縁部の小破片。胎土に砂が少量入る。焼成は極めて軟質。52は口縁部から内面にはナデ、外面体部はカキ目調整。胎土には5mm大の礫や白色の砂が多い。焼成は須恵器のように良好。53は1mm以下の砂がごく多い。内面にカキ目が認められるが、焼成は軟質で器面の風化が激しい。226 斎串は木製品の項で説明。

S K 70 (図版26、63) 出土遺物は土師器碗(40~42)・小壺(44)・長壺(43)・鍋(45)がある。

40の碗は内面が丁寧に磨かれ黒色処理される。III A 1に分類できる。焼成は軟質で外面は剥落。41はIII A 2。胎土に砂が多いが焼成は良好。40と41は口縁端部が僅かに外反する。42は身深のIII B 1。細砂を含み焼成は甘い。口径に対し小さな糸切り底を持つ。43は口縁端部を上方向に尖らす。頸部を強くナデ、口縁部には小さな段ができる。焼成は良好。44は小壺の胴部下半。糸切り底と思われるが、器面の風化が著しい。45は内面に炭化物が付着する。胎土には砂が多く、浅黄橙色で焼成は甘い。

S K 71 (図版27、63) 出土遺物は須恵器杯(54)、土師器鍋(55)がある。

54は浅く開く器形で、口縁端部を非常に薄く仕上げる。体部下半にはヘラ削りが施される。胎土は精良である。佐渡小泊産。55は頸部で外反し短い口縁部を持つ。端部はやや丸みを持って仕上げる。5mm大の

白色砂などを多く含む。焼成は甘く、器面の風化が激しい。

S K 79 (図版28、64) 出土遺物は須恵器無台杯 (66)、土師器碗 (67~78)、長甕(80)、小甕 (79)、鍋 (81) がある。

66は体部が開き立ち上がる無台杯ⅡBに分類される。口縁内面に窪みが巡る。胎土には白色の細砂が多く胎土B類に入り、佐渡小泊産。本土坑からは土師器碗が多く出土した。大きさと形態で分類すると76がⅡA1。67がⅡB1、71・73がⅢA1、70がⅢA2、68・69・72・74・75がⅢB2類となる。67は体部が直線的に開き、口縁端部がやや外反する。胎土には砂礫が多量で、器面の内外から見られる程の礫も含まれる。76は内面黒色処理されている。底部はロクロ削りされ、体部はロクロ削り後ナデ調整が入る。胎土は67以外は砂の混入も少なく比較的良好である。いずれも焼成が甘く、器面の風化が著しい。77・78は底部破片で分類は不明。80は長甕口縁部。「く」字状に外方に屈曲した口縁端部を細めて直立させる。79の小甕は頸部から外反した口縁が内彎気味に立ち上がる。器壁は薄く3mm程である。砂粒が多いが焼成は良い。81は長い口縁部が端部で内彎する。胎土には砂粒が多く、焼成は悪く風化が進む。

S K 87 (図版27、64) 出土遺物は須恵器瓶 (56)、土師器碗 (57・58)、小甕 (59) がある。

56は瓶類の底部で太く四角い高台が付く。底部もナデられている。57は体部が内彎して立ち上がる。器面の風化が著しい。褐色で焼成は悪い。58は底部の半分が残る。磨きが入り黒色処理されるが、剥落が進む。59は小型甕の体部下半である。底部と体部下位はヘラ削りされる。

S D 93 (図版27、64) 出土遺物は須恵器杯 (60)、土師器碗 (61・62・63)・小型瓶 (64)・小型甕 (65) がある。

60は回転糸切り底の杯。体部は直線的に大きく開く。胎土には5mm以下の礫が少量と1mm大の石英砂が入り、胎土C群に含まれる。糸切り底の杯はこの1点のみである。61は2mmほどの器壁で底部から直線的に立ち上がる。胎土には砂少量、焼成は悪く器面の風化が激しい。62は黒色処理されている。底部は糸切り後にロクロ削りを施すが、糸切り痕を完全に消していない。体部下位にもヘラ削りが行われる。胎土には細砂が含まれ、焼成は良好である。63は体部下位が強くナデられ窪む。底部の糸切りはそのままだに格子状のヘラ記号(図版70)が見られる。64は底部破片ではあるが、ロクロ挽きの凹凸が内面に残ることから瓶類と考えられる。底部は静止糸切り。胎土には砂が少量含まれ焼成は甘い。65は小型甕に分類した。頸部で強く屈曲し端部は立ち上がる。胎土に細砂が多いが焼成は良好。

S E 110 (図版31、66) 出土遺物は珠洲焼壺 (128) がある。

叩打による成形後、タタキ目を消去した壺の体部破片である。体部には櫛目格子目文が描かれている。珠洲焼編年[吉岡1995]のⅡからⅢ期に相当すると思われる。

S D 120 (図版28、64、114) 出土遺物は須恵器蓋 (86)、土師器碗 (87)、中世土師器 (82~83・114) 珠洲焼三耳壺 (85) がある。

86は蓋の端部小片で推定口径14.2cm。天井部はロクロ削り、周縁部の幅3cmはナデられ端部を短く下につまみ



第8図 黒書土器(82)実測図 1:2

出す。肉厚で胎土には砂がほとんど無く精良、焼成は堅緻である。胎土C群のうち胎土・焼成とも最も良いものである。87は身深で端部がやや外反する。製作時にロクロから取り上げる際の器形の歪みが器形に大きく残る。底部は糸切り未調整。胎土に砂は少なく焼成も良い。中世土師器杯(82・84)いずれも底部の破片である。ロクロ成形後、底部は回転糸切りされている。82の底部外面には「新」の墨書がある(第8図)。83は皿で1/5程度の遺存であるが、器形は推定できる。小型品で口径8.8cm、底径5.8cm、器高1.6cmを測る。ロクロ成形後、底部は回転糸切りされたものと推定される。114は杯の底部破片である。糸切りの低い柱状高台を持つ。胎土には細砂が多いが焼成は堅い。器内外面ナデられる。85はロクロ成形の壺の口縁部から肩部にかけての破片である。弧状に外反する口頸部の口端部は外傾する面を持ち肥厚する。肩部には横位の環状把手が3個付くものと推定される。珠洲焼福年〔吉岡前掲、以下略〕のI・II期に相当する。

S D 127 (図版28, 64) 出土遺物は平安時代土師器碗(90)、中世土師器杯(89)・皿(91・92)・珠洲焼壺(88)がある。

90は身深で底部径が口縁部の約1/3と小さい。底部糸切り未調整。焼成は良い。89は底部から体部の破片で、ロクロ成形、底部回転糸切り。91・92はいずれも口径8cm前後、器高2cm程度の小型品である。底部から斜めに立ち上がった体部は、口縁部で92がやや外反する。口端部は丸く収まる。ロクロ成形、底部回転糸切り。焼成は堅い。

S K 136 (図版29, 65) 出土遺物は古式土師器甕(102)、須恵器有台杯(101)がある。

102は甕の口縁部から肩部の約1/2が残る。張りを持つ胴部は頸部で強くくびれ、口縁部が外反する。頸部にはハケ目が僅か残る。胎土は浅黄褐色で砂粒を多量に含む、焼成は柔らかく器面の摩滅が著しい。101は小型で身深の皿C類。体部は直線的に立ち上がる。高台は底部周縁に付けられ、その底面には凹線が巡る。胎土B群で小治産。

S K 151 (図版29, 65) 出土遺物は須恵器円面碗(106)、土師器長甕(105)がある。

106は円面碗の器り面(陸部)破片と思われる。陸は滑らかで光沢を持ち、墨が薄く残る。全体の器形復元ができないながら円面碗とした根拠は、高台に当たる部分が体部の厚さ1cmに比べて薄すぎ、裏面(見込)のナデ調整が粗いことなどの理由による。陸部の口径は9.8cmを測る。胎土C群に含まれる。105は口縁部小破片、口縁部は比較的薄く端部は鋭くつまみ上げる。焼成は堅い。

S K 154 (図版29, 65, 73) 出土遺物は須恵器瓶(93)・土師器碗(94~98)・鉢(99)・鍋(100)、土製品輪羽口(245)がある。

93は瓶類の胴部破片。外面はロクロ削りの後、弱くナデ調整されている。肩部は丸みを持つ。胎土は精良で焼成は堅緻である。94は身浅で開いて立ち上がる。95~98は口径に比してやや身深である。胎土はいずれも砂が少なく浅黄褐色系で焼成も比較的良い。他の遺構出土の土師器と胎土、焼成で分離できる。99は口径16.6cmで内響気味に開いた体部を持ち、口縁部を外傾肥厚させ口端部を細める。器厚は約3mmと薄い。胎土、焼成とも碗と類似する。100の口縁部は短くわずかに外反する。端部は面を持ち、内端を緩くつまむ。器蓋は厚く、胎土・焼成とも良好である。

S K 158 (図版29, 65) 出土遺物は須恵器有台杯(103)、土師器碗(104)がある。

103は身深の有台杯の体部下半である。高台は低く底部外周に付き体部との境も不明瞭。胎土B類の小治産である。104は黒色処理された碗の底部。底部は糸切り未調整。器面の風化が進む。

S K 161 (図版30, 65) 出土遺物は土師器碗(108・109)がある。

108はほぼ完型。体部は浅く開き、胎土には5mm以下の砂礫が多い。焼成は悪く、器面の風化が進む。109は内面黒色処理された底部片である。内面は磨きが入り、底部外面及び体部下位はロクロ削りが施される。体部上半を欠くが一部にナデが見られる。胎土には細砂が多いが焼成は良好である。

次に遺構出土の遺物ではあるが、単独出土あるいは単数を図化したものは器種毎にまとめて表した。

(図版29-107、30-110~113、31-115~126、図版65、66) 遺物番号と遺構番号は以下のように対応する。

107 (4E20-p2)、110 (SK180)、111 (SK165)、112 (SD157)、113 (SK183)、115 (SK167)、116 (SD149)、117 (SD98)、118 (SK18)、119 (SD59)、120 (SD155)、121 (SK171)、122 (SK95)、123 (SE83)、124 (SK14)、125 (SK62)、126 (SK73)、127 (4E56p1)

107は須恵器甕の胴部上半である。口径32.5cm、肩の丸い器形で胴部中位で最大径となる。体部外面は平行タタキ目、内面当て具痕は同心円文。口縁部は緩く開き、上部は薄く端部を水平に短くつまみ出す。胎土には白色の礫が多く入る。焼成は良い。胎土C群。110は須恵器有台杯の底部である。底径に比して径が小さく高い高台を付ける。高台内側は強く内彎する。胎土には5mm以下の砂礫が多く入る。胎土C群。111は長頸壺の肩部と考えられる。肩は丸く器面にはロクロヘラ削りが施される。オリーブ灰色の自然釉がかかる。胎土C群。112は推定口径61.7cmの大型の甕口縁部である。口端部内側はつまみ上げられ外面には突帯が巡る。胎土には5mm以下の砂礫が入るが、焼成は堅緻である。胎土C群。113は須恵器甕の口縁部を欠いた胴部である。器形は肩が張り体部上半で最大径を持つ。焼成時に頸部と底部が歪む。体部外面は細かい平行タタキ目、内面は僅かな曲線をとる平行叩き目を持つ。遺存高は50.7cm、胴部最大径は50cmを測る。外面は黒灰色で焼成は堅緻。底部に融着した欠片がある。115~121は土師器碗である。116は身は浅く内彎して立ち上がる。焼成は甘く器面の風化が進む。117はやや肉厚な体部は直線的に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する。外面下半と底面はロクロ削り、外面上半と内面は丁寧なナデ調整がなされる。胎土精良、焼成はやや甘い。118は身が浅く内彎気味に立ち上がる。器壁は薄く胎土・焼成とも良い。120、121も同様な胎土と焼成の碗の底部である。122は土師器小甕の底部である。ロクロ成形され糸切り底を持つ。123~125はロクロ成形の土師器長甕である。124は端部が内彎している。焼成は軟質で器面の風化が進み、器面調整は見えない。126は土師器小甕Aに分類される。頸部で外反した端部を短くつまみ上げている。胎土には砂を含み焼成は軟質で器面の風化が進む。127は土師器鍋である。外面体部はタタキのあと一部に削りが入る。内面は口縁部にまでカキ目が見られる。

(2) 包含層出土遺物 土器 (図版32~36、67~69)

遺物は須恵器、土師器、珠洲焼を器種毎にまとめて図化し説明を加えた。

須恵器

有台杯 (129~132) 129・130・132は口径に対して身が浅い (A類)。

129は口径14.2cm。身浅で体部はほとんど開かず立ち上がる。高台は底部周縁よりかなり内側に付けられる。底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面もナデられている。胎土C群。130は身浅で体部はあまり開かず内彎気味に立ち上がる。胎土には砂が多いが、焼成は明るい灰色を呈し良好である。130、132とも高台径は小さく内端部が接地する。胎土C群。131は底部を欠くが、身深で器壁は薄く体部は直線的に開く。胎土B群の小泊産。

無台杯 (133~150) 133は口径13.7cm、身深で体部の器壁は薄く直線的に大きく開く器形を持つ。底部

はヘラ切り、体部はナデ調整。器面の内外には焼成時に胎土より生じた黒色の噴出物（最大1cm、平均4mm以下）が付着する。胎土B群、小泊産。134～145は器形分類のA類。このA類は体部と底部の境は丸みを帯び体部はあまり開かず立ち上がり、器壁は比較的厚い。134～141は口径12cm台にまとまる。

142～145は口径11cm台にまとまり、器形の大きさに対し肉厚で重量感がある。134・139・140・144は底部にヘラ記号「×」が描かれ、143も破損して全体は不明であるが一部に同様なヘラ指痕が見られる。このA類の胎土の特徴は、2mm以下の砂が入るが、B類程多くなく細砂の割合も少ないことである。一般的な色調は口径12cm台では灰色（淡オリーブ灰）を呈し、焼成は良いがやや軟質な感じがある。一方、口径11cm台の（140、143、144等）杯の胎土はより緻密となり焼成も堅緻である。色調は暗い灰色を呈する。A類のうち色調によって分離できる一群がある。137・138の2点はA類と相似した胎土を持ちながら、色調が橙色から明褐色のものである。これと同様に焼成時の還元状況が維持されなかったような須恵器が新津市内の他遺跡でも検出されている。¹⁾B類（146～150）の器形の一般的な特徴は、体部は直線的に大きく開いて立ち上がり底部との境は比較的明瞭で、器壁は薄い。また、底部と体部の屈曲点は粘土の接合面にあたり、器内面のその部分には窪みが巡る個体も一般的に認められる（146～149）。B類は胎土は白色細砂が含まれるものの精良で、焼成も良好である。色調は灰色から暗灰色を呈する。

151は短頸壺蓋と思われる。口径は11.6cm、天上部を欠き全体の器形は不明であるが、外面の一部には緑灰色の自然釉が見られる。口縁部はやや外反気味になり、端部は杯のようにまとめられる。口端部には外方向からの加撃による欠損が全周の6か所以上で見られる。この器面剝離は蓋を身に被せて焼き、焼成後に壺から剝がす際に、工具によって付けられたものと考えられる。

152は風類底部である。高台外径は9cm。体部の器形は若干、開きながら立ち上がる。高台内及び体部下半15mmにはロクロ削りが施され、上部はナデ調整される。高台の造りは低く幅広く、底部外縁に付く。

153～156は杯蓋である。153は口径18.6cmと大型でこれに対応する杯身は出土していない。天井部は高く口縁部は水平になり、口端部を短く折る。天井部外面はロクロ削りが施され沈線が1条見られる。端部と内面はナデられる。胎土には5mm大以下の石英小礫等が多量に入り粗い。本遺跡には少ない胎土A群である。154は口径13.0cm。口縁端部を一部欠く。器高は約2cmで口縁部まで緩やかなカーブを描く。端部を短く垂下しまとめる。天井部外面には中心から半径の2/3程ロクロ削りが施される。内面と口縁部はナデ調整が見られる。内面中央は滑らかになっている。155は口径12.7cm、外周の約1/4が残る。器高は低く天井部は緩く口縁部に続き、端部を短く垂下し丸める。器外面は中心から約2/3ほどがロクロ削り、口縁部と内面はナデ調整。胎土には1mm以下の白色砂を少量含む焼成は堅緻である。胎土はC群。156は口径12.2cm。器形は天井部が水平で口縁部は屈曲し直線的に続き、痕跡的な端部が付く。胎土には3mm以下の白色砂が多く入るが焼成は良好である。胎土はC群。

頸類（157～161） 長頸壺と横瓶がある。157～159は長頸壺の口頸部である。157は口径15.1cmで口縁端部を上下に鋭くつまみ出し広い口縁帯を作り出し、そこに突帯を巡らす。胎土には6mm大以下の砂礫が多く混入するが焼成は良好である。胎土C群。158は口径10.5cm。緩やかに開く口縁部は端部を上につまみ上げ、外面をナデ窪める。胎土B群。159は直立気味の頸部から口縁部が強く外反する。口縁端部を短くつまみ上げる。胎土は須恵器であるが、色調は鈍い橙色で一見土師器のようである。焼成は悪く粉のように風化する。胎土C群。160は長頸壺の胴部と考えられる。胴部最大径は17.4cm。肩部は丸みを持つが上

1) 新津市上浦遺跡の出土資料の中に該当する遺物が相当量含まれている。また、岡市細池遺跡（小池ほか1994）でも確認されていることから、新津市近辺に窯が存在すると思われる。

半と底部を欠いている。胴部下半には成形時のタタキ目が見られ、ロクロ削りが施される。実測破片の上部から1/3以下はナデ調整が入る。胎土C群。161は横瓶口縁部である。口径12.1cm。口頸部は外傾し、端部を水平方向につまみ出す。体部は格子タタキ目、内部は同心円の当て具痕が見られる。胎土はB類で焼成は良好である。162～164は壺である。162は壺口縁部。推定口径26.8cm。外傾する口縁外端部を斜め下に長く折り出し、口縁部内側をナデで端部を作る。胎土は精良で焼成は堅緻。163は壺の胴部上半。口径23.4cm、胴部最大径49.4cmを測る。肩部は緩く丸みを持ち、口縁部はやや外傾する。口縁外端部は短く横につまみ出し、内端部は小さく直立する。器面は外が平行タタキ目、内部は同心円の当て具痕が見られる。胎土C群。164は口径21.2cm、器高46.2cm、胴部径47.7cm。器形はなで肩で最大径は中位よりやや上となる。口縁部は水平につまみ出す。器面外部には平行叩き目、内側は同心円当て具痕。胎土には白色の砂礫が多い。色調は外面灰褐色で焼成は良好である。

土師器

碗 (165～190) 碗は先述したように大きさで3分類し、器形では4分類した。ここでは分類毎に記載する。

I A1類 (186)、II A1類 (165・168)、II A2類 (166・169)、II B2類 (167・170・189)、III A1類 (184・185・187・188・190)、III A2類 (171・176・180～182)、III B2類 (172～175・177・178・179・183)。

I A1類は口径18cm前後で身は深く、体部は内彎気味に立ち上がる。186は底径7.2cmで底面と体部下半はロクロ削りが施される。内面は磨かれ黒色処理されている。

II A1類165は底部余切り未調整。口径15.9cm、器高5.8cmを測る。底部は余切り未調整。胎土には5mm以下の砂礫が多く入る。器面の風化が著しい。168は口径15.4cm、底部余切り未調整。内面は黒色処理されている。胎土には2mm以下の砂が含まれ焼成は軟質である。器面は風化が著しい。

II A2類は口径14～17cmで身は浅く、体部は内彎気味に立ち上がる。166は口径15.2cm、器高4.4cm、底径5.5cm。口径に比して小さな底部を持つ。器面の風化が進むが底部のヘラ削りは見られる。胎土には細砂が含まれる。169は口径14.4cm、体部外面にはロクロ削りが見られる。器内面は丁寧な磨きが入り、黒色処理されている。底部は風化しているが、体部の調整から見てロクロ削りが施されたと考えられる。

II B2類は口径14～17cmで身は浅く、体部は直斜的に大きく開く。167は浅く開く器形を持つ。内面は黒色処理されている。胎土は砂が少なく精良であるが焼成は悪く、器面の風化が著しい。170は口径に比して小さな底部を持ち、大きく開く器形をとる。底部は余切り未調整。189は内面黒色処理される。内面は丁寧に磨かれ、外面は底部が余切り後ロクロ削りされ、体部下半にも削りが入る。

III A1類は口径11～14cm。身は深く、体部は内彎気味に立ち上がる。184は底部余切り未調整。胎土は精良で焼成良好。188は内面底部に余切用と思われる紐の匠痕が残る。器面で見られる幅は約1mm、原体は右撚り2段(RL)である。胎土、焼成とも良好。本類に黒色処理された碗はない。

III A2類は口径11～14cmで、身は浅く体部は内彎気味に立ち上がる。180は口径12.2cm、口縁部はまっすぐ伸び端部を薄く作る。胎土には3mm以下の砂礫が少し入る。焼成は軟質で器面の風化が著しい。176・182は胎土に細砂が多く入るが焼成は良い。181は口径12cmで内面黒色処理され磨きが入る。外底部はロクロ削りで体部はナデられる。胎土には細砂が入るが焼成は良い。182は口径12cm。他よりも器壁が厚い。

III B2類は口径11～14cmで身は浅く体部は直斜的に大きく開く器形をとる。体部が直線的あるいは口縁部が外反する。この類では内面黒色処理されたものはない。本類の典型は172・179に見られる。172は口径に比して底径が大きく器高が低い。回転余切り底に厚みを足すために粘土を雑に貼りつける。胎土には

砂がやや多く、焼成も甘い。175は口径13.5cm、底径5.2cmで口径に対して小さい底部を持つ。胎土には細砂が多いが焼成は良い。179は口径13.8cmで器壁は薄く、口縁端部はやや外反する。

甕 (191~207) 長甕(192~203)はすべてロクロ成形されている。器形は頸部で屈曲し、胴部は緩く膨らむ。胴部の整形は叩きの後、内外面カキ目調整を施し、口縁部はナデ調整を基本とする。底部片は図示していないが丸底ある。今回の調査では器形全体を復元できる遺物は検出されなかった。そのため主に口縁部の形態に注目して記述したい。

口縁部が「く」字状に屈曲し、短く外反した口縁部を持つ。口縁端部に面を造り内側をつまみ上げる口縁部形態のものを一括した。胴部は膨らむものと、ほとんど膨らまないものがある (193~197・200・202)。口縁部は頸部で強く外反し端部をつまみ上げる。口縁部はやや長く端部のつまみ出しが長い (192)。口縁部を短く水平に外反させ、端部は幅広の面を持たせる。口縁端部は長く上方につまみ出す (199)。口縁部を緩く屈曲させ端部を短く内屈させる (203)。口縁部は緩く外反し端部を鋭く内屈させる。胴部の膨らみはないと考えられる。器壁は薄い (198)。頸部は強く屈曲し口縁部は短く外反する、口縁端部は折り返し状の口縁となる (201)。

小甕 (191・204~207) 204は小甕Aで大型の長甕と同じ口縁部形態をとる。器壁は比較的厚い。205は小甕Bで頸部で外反した口縁部が内彎気味に立ち上がる。器壁は薄い。底部の206・207は回転糸切り。小甕の底部は平底形態を持つものと思われる。

鍋 (208~213) 208は口縁部を外反、肥厚させ端部をつまみ出す。焼成は軟質で器面の風化が激しいが、内面にはカキ目痕が残る。209は口縁部を僅か外反させ端部に面を持たせる。端部内面をつまみ上げる。胎土には細砂が多いが焼成は良好。210・211は長さ1.5~2cmの口縁部を若干外反させ、端部を短くつまみ上げる。212は浅く開く器形で口縁部は水平に折り、内端部を三角形につまみ上げる。213は身深な器形で口縁部を短く僅か外反させ端部に面を持たせる。

鉢 (214) 口径15.2cm、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部を内屈させ口縁端部は鋭く細める。胎土には3mm以下の砂礫が多いが比較的良質で焼成も良い。内外面ロクロナデ調整。この鉢は胎土から見ると須恵器に近い。土師器の鉢は99とこの214だけである。

珠洲焼播鉢 (215・216) いずれも底部から体部下半にかけての破片である。おろし目は215が密に、216がやや粗に付けられている。

木製品 (図版37-217~225・38-226~236、図版71~73)

木製品は井戸杵部材、曲物、斎串、箸、棒、枕、柱根が出土した。

井戸杵部材 (217~223) 217は井戸杵部材の杖である。板目取りの材で断面は方形、四方の側面は平らに加工される。上部の腐食を除けば加工痕が残りに、本来の形状を留めている。下端部は6面に削られ尖る。一面は数回かけて加工され削り痕は僅かに窪んでおり、手斧痕の可能性が高い。下端から48cmの位置に2面から直交するように縦6.1×横2.7cm、縦6.3×横2.9cmの長方形のホゾ穴が穿たれ、内部で一部分つながる。

218は側板である。板目に加工したため湾曲している。風化により加工・調整痕不明。下部には4×3cm 2.8×1.8cmの長方形の通し穴がある。また上部側面には8.7×2cmの切り込みがある。構造上はいずれの穴も使用されたとは考えにくく、転用材と考えられる。下端部には刃物で叩き切った段差が残る。加工痕は幅6cmで刃物は丸みを帯び横向きに使用されている。手斧の可能性が高い。上端部は腐食している。

219は側板である。板目で加工されるが表面の風化が著しく加工痕不明。片側縁は平らに調整される。数回かけて切断されたらしく加工の一単位は僅かに窪んでいる。下部は斜めに切断され地山に打ち込み易くされている。上部は腐食している。220は側板である。板目で加工されるが加工痕不明。片面に横木の当てられた痕が残る。221は枕である。板目で断面方形である。四方の側面は平らに加工される。上端部に加工痕があり、本来の形状として尖らされていたと考えられる。風化が著しいが下端部も尖らせていたものと思われる。片側面に木の当てられた痕が残る。222は外側横枠である。板目で加工されるが表面の風化が著しく加工痕不明。片面端部は切断痕明瞭。他方は腐食が著しい。223は内側横枠である。板目で断面楕円に加工される。両端はホゾに加工される。

曲物 (224・225) 224は円形の曲物である。板材を2枚重ねる。外側板材の縫い合わせは2列綴じてある。ともに皮(樹皮)紐は幅1cmである。皮紐は部分的にしか残っていないが、類例では一本の皮紐で作られている場合が多い。前列(端部側)の皮紐に沿うように2本の鋸目が1~1.4cm間隔で入る。綴じ方は二列前外五段後内四段綴じの可能性もある。内側板材は一列綴じて幅1.4cmの皮紐で縫いつけられる。綴じ方は一列外七段綴じと思われる。板材の内面には1cm前後で縦位の鋸目が入られる。上部や皮紐の一部が破損している(破片はある)。225は方形曲物である。板材の一枚物である。縫い合わせは一列綴じて皮紐は幅1cmである。皮紐が一部破損しているために縫い方は不明であるが、2段のみ確認される。内面の4か所に18~19cmの幅で鋸目が数ミリ間隔に入る。

斎串 (226) 薄片を加工。両側面の下端部を削り尖らしている。表裏面とも無字。上部左側面には切り込みがある。右側は欠損している。

箸 (227~230) 227は板目で断面方形。四角に面取りされ、角も調整される。下端部は尖り、上端部は欠損する。228は板目で扁平な断面長方形。両端部が尖る。229はやや扁平な断面五角形。一端は尖り他方は欠損。いずれも表面は風化して加工痕は不明。

棒 (231) 板目で断面方形の筋帯状の木製品である。風化が進み加工痕は不明瞭。上端部は尖り気味になる。下端部は欠損。道具の柄か。

柱根 (232・233・235) 232・233は対で検出された(第IV章3参照)。232は丸太材を14面に面取り加工。下端部から約19cm上に約10cmの方形の孔が対であり、内部でつながる。穴の間は1~3cmの柱状になる。柱上端部は腐食が著しい。柱下端部は平らに加工される。風化が著しい。下端部は平らに加工され、一部に手斧による削り痕が確認される。233は丸太材を14面に面取り加工している。下端部から約15cm上に12.5×10.5cm、約11.5×10.5cmの2か所の方形穿孔があり、内部でつながる。穴の間は約3.5cmの柱状になる。柱上端部は腐食が著しい。下端部は平らに加工される。風化が進むが全面に手斧による削り痕が見られる。各柱の下部に穿たれた穴は柱を掘り形に立てる際に綱を通し人が携え、柱を柱穴に徐々に入れるために穿たれたものと考えられる。235は丸太材を加工。原形が不整形であったらしく加工面と自然面が併存する。下部は四角が平面加工された断面方形で何回かに分けて削られる。下端部は四方向から切断される。上部は下部より細く側面は加工されず節が残る。一部は腐食が進み大きく抉れ原形を留めない。

枕 (234・236) 234は丸太材。側面は原形を留める。上端部は腐食が進み原形不明。下端部は斜めに切断されている。切断面は数面確認され、数方向から加工されている。236は板目で断面は方形であり、四方の側面は平らに加工される。上端部ほど長幅が狭くなる。下端部を尖らせ地山に打ち込み易くなっている。

石器 (図版39-237~246、図版73)

今回の調査では礫石・磨石・砥石が検出された。

237は端部に敲き面、一方の端部に磨面を持つ。238は一端部と片側面に敲き面が残る。239は砥石の破損品。断面長方形で四面いずれも磨られている。上端面は自然面が残る。240は砥石。前面と片面に磨り面あり。241は砥石の一部か。断面長方形で三面および上端が磨られている。裏面は欠損。242は砥石の一部。三面が磨られる。243は砥石の一部。断面台形で二面が磨られる。244は砥石の一部。断面台形で二面が磨られる。243・244は軽石状の安山岩を使用。

土製品 (図版39-245・246、図版73)

籬羽口が2点出土した。245は内径2.3cm、遺存長7.5cm。棒に粘土を巻つけて製作。板状工具を巻いて固めたものか、外面は12面を持つ。先端には融着物あり。胎土に石英細砂が多量に含まれ、砂岩状を呈する。246は先端の一部が残る。内径2.3cm。先端に融着物あり。胎土は245に類似する。

烏帽子 (図版59・73・75)

SE110からは烏帽子が出土した。烏帽子は井戸の下位から発見され、珠洲焼の壺胴部片が上を覆っていた。遺物はセクション面で切断されたため全体が遺存していない。現在は大きな塊が1個と5cm程の大きさの破片数個に分解している。烏帽子は布に漆が塗布されていて、検出当初は光沢があった。遺物の大きさは一番大きなもので長さ20cm、幅15から9.5cm。烏帽子の時期は伴出した珠洲焼から13世紀のものと考えられる。烏帽子の詳細の第VI章3を参照。

第Ⅵ章 自然科学分析

1. 古墳時代の土坑覆土分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

沖ノ羽遺跡（新津市大字七日町字沖ノ羽3522他所在）は、能代川右岸と阿賀野川左岸に挟まれた低地（沖積平野微高地）に立地する。本遺跡では、これまでの発掘調査により古墳時代～中世にわたる遺構・遺物が検出されている。とくに平安時代（9～10世紀）および中世（12～13世紀）の各時期には、掘立柱建物跡を主体とした集落跡が検出され、当時の集落の様態を知る上で貴重な資料が得られている。また、古墳時代の遺構確認面から土坑が確認された。これらの土坑内は、平面プランは不定形であり、深さ30～50cmのものが主体的である。また、土坑内から変形土器などが検出されたものがある。これらの土坑の性格は不明であるが、発掘調査所見では土層堆積の状態から墓塚の可能性が指摘されている。

今回、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団より、土坑の性格について自然科学的手法を応用した分析調査を考古学研究室に要望があった。当社では、同埋蔵文化財調査事業団と分析内容に関する協議を行った結果、土坑の性格を検討するためにリン分析を行うこととした。

一般に気候が温暖多湿で、土壌環境が酸性、排水良好（酸化状態）などところでは、土壌中の有機物は分解されやすく、また水溶性の成分は土壌中を下方へと流亡してしまふ。したがって、動植物体などが長い年月にわたり土壌中でその形状を保つことは稀である。これは埋葬された遺体、人骨などについても同様である。今回調査対象となる土坑も変形土器などは出土しているものの、人体埋葬を示唆する骨片は検出されていない。したがって、土坑が墓塚としての用途を有していたと仮定するならば、埋葬された遺体は分解してしまった可能性が高い。

墓塚内に骨などが遺存していない場合に人体の痕跡を検証する分析手法として次の2つの方法がある。ひとつは、人体特に人骨に多量に含まれ、土壌中で比較的流亡しにくいとされるリンの覆土中の含有量を測定し、そこでのリンの局所的高まりから人体の痕跡を定性的に推定するリン分析〔竹迫ほか1980など〕である。もうひとつは、動植物の有機成分の中で土壌中に残留する脂肪酸組成を測定し、その組成値から人体の痕跡を推定する脂肪酸分析〔中野1986〕である。現在では、動植物の判定ができる点やその種類を具体的に判別できる点で脂肪酸分析の方が優れた面の多い分析手法とされているが、試料の取扱いと分析の繁雑さ、あるいは土壌を対象にした場合の信頼性に問題が残る。したがって、今回は考古学において土壌試料を対象にした分析調査事例が豊富で、分析操作が比較的簡便なリン分析により人体の痕跡を検証する。また、遺跡の基本層序を対照試料として遺構内覆土のベースとなるリン含量を測定する必要がある。そこで、今回の分析調査では南壁面試料を対照試料としてリン分析を実施した。

A. 試料

分析調査対象とした土坑は、規模・形態などが異なる4基（SK199,SK200,SK207,SK208）であり、こ

これらの土坑の埋積物から試料採取を行った。また、本遺跡南壁土層断面（基本層序）から土坑埋積物の対照試料として併せて採取した。

次に、採取試料から分析調査課題を考慮して分析試料を当社にて選択した。SK199では、5点（試料番号2, 4, 6, 9, 11）、SK200では6点（試料番号2, 3, 4, 6, 9, 11）、SK208では、3点（試料番号2, 3, 5）、基本層序については7点（試料番号6, 10, 13, 15, 17, 19, 24）の合計21点である。なお、SK207については、形態・規模がSK208とほぼ類似するので、分析調査の対象から外した。

B. 分析方法

測定方法は、土壌標準分析・測定法委員会 [1986]、土壌養分測定法委員会 [1981]、京都大学農学部農芸化学教室 [1957]、農林省農林水産技術会議事務局 [1967]、ペドロジスト懇談会 [1984]などを参考にした。以下に操作行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料 2.00gをケルダール分解フラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO₃）約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。このろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン含量（P₂O₅mg/g）を求める。

C. 結果・考察

分析結果を表2に示す。以下、調査地点（土坑）毎にその結果を述べ、土坑内の人体埋納の可能性を検討する。

(1) 基本層序（南壁土層断面）のリン含量

分析試料7点の最高値は、Ⅲa層（試料番号10）の2.00P₂O₅mg/g、最低値はⅤ層（試料番号24）の0.36P₂O₅mg/gである。各試料間の含量をみると、基本層序のリン含量は上層～下層へと減少する傾向にあり、特にⅢ層とⅣ層の間ではその減少が顕著になる。この上層～下層への減少傾向は自然堆積した土層断面によく認められ、一般的な層位的変化として捉えられる。

ところで、土壌に通常含有されるリン含量については、幾つかの調査例がある。Bowen [1983]の調査では中央値が2.0P₂O₅mg/g、Bolt and Bruggenwert [1980]で1.0～2.5P₂O₅mg/gとされる。わが国のものである、川崎ら [1991]のリン含量が比較的高い黒ボク土を対象とした調査で平均値が未耕地で2.1P₂O₅mg/g、既耕地で5.5P₂O₅mg/gとされ、天野ら [1991]ではわが国のリンの自然賦存量は2.7P₂O₅mg/g以下であるとされる。なお、含量の記載単位が各報告で異なるため、本文中ではすべてP₂O₅mg/gで表示する。

これらの事例から推定される土壌中の自然賦存量は、最高で3.0P₂O₅mg/gと考えられ、この値を著しく越える土壌では土壌生成過程で集積した以上のリンが外的要因によって富化されたと言える。基本層序では、この3.0P₂O₅mg/gを著しく越える試料は認められない。特に、土坑確認面とほぼ同レベルの試料（試料番号15, 17, 19）の含量範囲は0.64～1.31P₂O₅mg/gである。これより、外的要因によるリンの富化は基本層序にはないと判断できる。したがって、土坑内埋積物本来の含量をこの範囲として捉え、各土坑のリン含量と比較する。

1. 古墳時代の土坑覆土分析

調査地点	層位	試料 番号	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	土色・土性	
基本層序	II	6	1.89	灰黄褐 (10YR4/2)	HC
南壁断面	III a	10	2.00	黒 褐 (10YR3/2)	HC
	III b	13	1.59	灰黄褐 (10YR4/2)	HC
	III c	15	1.31	鈍い黄褐 (10YR4/3) >黄褐 (10YR5/6)	SC
	IV	17	0.82	灰白 (5Y7/2) >>>明褐 (7.5YR5/6)	HC
	IV	19	0.64	灰白 (5Y7/2) >>>明褐 (7.5YR5/6)	HC
	IV	24	0.36	灰オリーブ (5Y6/2) >明褐 (7.5YR5/6)	SiC
SK199土坑		2	0.74	灰白 (5Y7/2) >>>明褐 (7.5YR5/6)	SC
		4	0.42	灰 (5Y5/1) >>明褐 (7.5YR5/6)	HC
		6	0.46	灰 (5Y5/1) >>>明褐 (7.5YR5/6)	SiC
		9	0.46	灰白 (5Y7/1) >明褐 (7.5YR5/6)	SC
		11	0.45	灰オリーブ (5Y5/2) >>>明褐 (7.5YR5/6)	SC
SK200土坑		2	0.60	灰白 (5Y7/1) >明褐 (7.5YR5/6)	SiC
		3	0.50	灰 (5Y6/1) >明褐 (7.5YR5/6)	SiC
		4	0.82	灰オリーブ (5Y6/2) >>>明褐 (7.5YR5/6)	HC
		6	0.58	灰白 (5Y7/1) >>>明褐 (7.5YR5/6)	HC
		9	0.56	灰 (5Y6/1) >明褐 (7.5YR5/6)	HC
		11	0.39	灰 (5Y6/1) >>明褐 (7.5YR5/6)	HC
SK208土坑		2	0.92	灰 (5Y6/1) >>明褐 (7.5YR5/6)	HC
		3	0.84	灰 (5Y6/1) >>>明褐 (7.5YR5/6)	HC
		5	0.84	灰 (5Y6/1) >>>明褐 (7.5YR5/6)	HC

注. (1) リン酸含量の単位は、乾土1gあたりのmgで表示。

(2) 土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

> : 混じる, >> : 含む, >>> : 富む

(3) 土性の判定は、土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ベドロジスト懇談会編，1984）による。

HC : 重粘土, SC : 砂質粘土, SiC : シルト質粘土

第2表 リン分析結果

(2) 土坑のリン含量

・SK199土坑

分析資料5点の範囲は $0.42\sim 0.74\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ であるが、土坑床面資料(資料番号4, 6, 9, 11)と埋積物中位資料(資料番号2)で異なる。すなわち、土坑床面資料の含量範囲は $0.42\sim 0.46\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ であり、各資料に差異は認められないのに対し、埋積物中位資料は床面より明らかに高い値を示す。これは、埋積物中位に何らかの外的要因によりリンが局所的に富化したことを予測させる。ただし、基本層序で想定された埋積物本来の含量範囲を越える値はみられないことから、現段階では土坑内にリン成分の高い内容物の痕跡を指摘することは難しい。

・SK200土坑

分析資料6点の含量範囲は $0.39\sim 0.82\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ であり、SK18土坑より含量にかなりばらつきが認められる。そのなかで、土坑の中心にあたる埋積物中位資料(資料番号2)を含めた床面の窪んだ部分(資料番号3, 6, 9)では、その値が比較的近似している。ただし、いずれも埋積物本来の含量は越えておらず、土坑内にリン成分の高い内容物の痕跡を指摘することは難しい。

・SK208土坑

分析資料3点の含量範囲は $0.84\sim 0.92\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ であり、近似した値を示す。また、他の2つの土坑と比較して床面の含量が高い傾向にある。しかし、いずれも埋積物本来の含量範囲内にあり、上記2基の土坑同様、リン成分の高い内容物の痕跡を指摘することは難しい。

D. 遺体の痕跡について

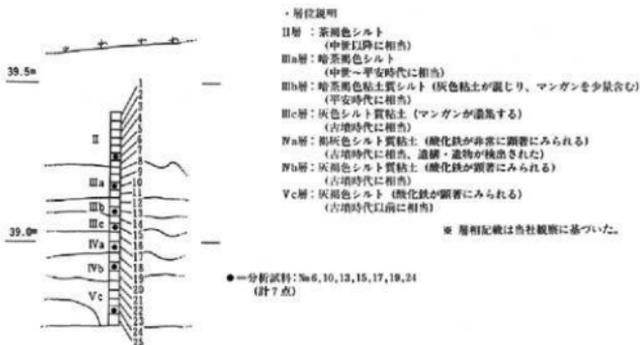
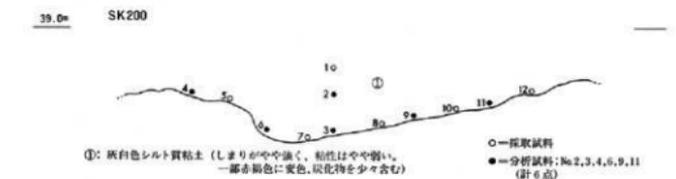
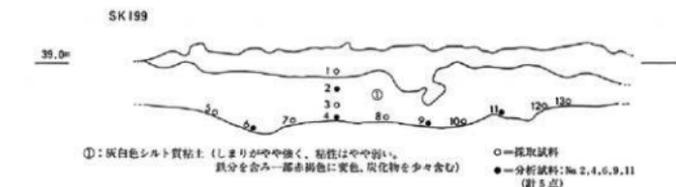
SK18, SK19, SK21土坑3基について、人体の痕跡はリン含量の富化の様子から検討したが、その存在を明確に示唆する著しい濃集は認められなかった。また、埋積物本来の含量範囲を越える資料は認められなかった。したがって、今回の結果では土坑の性格を墓墳として考えることは難しい。

ただし、埋積物本来の含量範囲がやや広いため、資料相互の僅かな差を評価しにくいところがある。つまり、覆土全体が本来の範囲の中で最も低い $0.64\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を含有する覆土で埋積されたかすると、SK199の資料番号2、SK200の資料番号4、SK208の全資料は外的要因による富化の可能性がある。そこでこれが局所的な富化を示すのか否かを確認する必要がある。なお、今後同様の土坑の性格を検討する上で次の点を課題として指摘しておきたい。

- ① リン分析実施前の段階の情報として、遺構内埋積物の堆積状況(自然堆積、一括した埋め戻し等)あるいは用途の重複性の有無を把握する。これは、遺構の断り割り調査の際に埋積物の断面を層位的に調査することで得られる。また、遺構内埋積物が自然堆積土層のどの部分と対応するのか見極め、その部分のリン含量を詳細に調査する。
- ② これまでのリン分析調査例によれば、遺体が埋納されていた場合には局所的にリン成分の濃集がみとめられることが多い。したがって、その局所的濃集を的確に把握するために、埋積物を層位的・空間的に採取し、分析する必要がある。例えば、埋積物断面に幅 $10\sim 20\text{cm}$ の資料採取を行うための列を2~3列設けて資料を採取し、列内の層位の変化や列間の平面的変化を比較する方法がある。
- ③ 土坑の性格が墓墳以外にも想定される場合は脂肪酸分析、植物珪酸体分析など他の分析との併用による多角的な調査を行う。
- ④ 今後の調査研究により、土中に比較的残存しやすく、しかも土壌の構成無機成分には稀な元素が確認

1. 古墳時代の土坑覆土分析

されれば、リンと併用して測定する。



2. 出土柱根の樹種同定・放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

A. 出土柱根の樹種同定

(1) 試料

試料は47G-P1と47G-P2から出土した柱根2点である。

(2) 方法

試料からカミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

同定結果は以下に表に示し、同定根拠となった特徴を記載する。なお各断面の顕微鏡写真を示した。

試料	樹種	(和名 / 学名)
47G-P1出土柱根	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
47G-P2出土柱根	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.

第3表 樹種同定結果

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

図版74

横断面：年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火災状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質からクリに同定される。クリは北海道の西南部・本州・四国・九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く湿湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、建築・家具・器具・土木・船舶・彫刻・薪炭・椎茸はだ木など広く用いられる。

B. 出土試料の放射性炭素年代測定

沖ノ羽遺跡B地区から出土した試料について年代測定を行った。その結果を表次に示す。なお、年代値は1950年よりの年数 (B.P.) である。

年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代である。また、試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値 (B.P.) と表示してある。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素 (MODERN STANDARD CARBON) についての計数率との差が 2σ 以下のときは、Modernと表示し、 $\delta^{14}C\%$ を付記してある。

試料No	出土地点	試料	年代値	コードNo
サンプル1	47G-P 1	柱根	1,530±90 (A.D.420)	GaK-18613
サンプル2	47G-P 2	柱根	1,420±90 (A.D.530)	GaK-18614

第4表 沖ノ羽遺跡B地区の放射性炭素年代測定結果 (学習院大学年代測定室)

<引用文献>

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 [1991] 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p.:p.28-36.
- Bowen, H. J. M. [1983] 環境無機化学—元素の循環と生化学—, 浅見輝男・茅野充男訳: 297p., 博友社 [Bowen, H. J. M. [1979] Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. [1980] 土壌の化学. 岩田進午・三輪春太郎・井上隆弘・陽捷行訳
- 309p.: p.235-236, 学会出版センター [Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. [1976] SOIL CHEMISTRY].
- 土壌標準分析・測定法委員会編 [1986] 土壌標準分析・測定法. 354p., 博友社.
- 土壌養分測定法委員会編 [1981] 土壌養分分析法. 440p., 養賢堂.
- 川崎 弘・吉田 澤・井上恒久 [1991] 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p.:p.23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 [1957] 農芸化学実験書 第1巻. 411p., 産業図書.
- 中野益男 [1986] 真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂。『真脇遺跡』配石遺構の土壌に残存する脂肪の分析, 大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書, 第1巻, 46p., 秋田県鹿角市教育委員会.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 [1967] 新版標準土色帖.
- ベドロジスト懇談会編 [1984] 野外土性の判定。「土壌調査ハンドブック」, 156p:p.39-40, 博友社.
- 竹迫 欽・加藤哲朗・坂上寛一・黒部 隆 [1980] 神谷原遺跡への土壌学的アプローチ. 神谷原I, p.412-416, 八王子市門田遺跡調査会.

<参考文献> 出土柱根の樹種同定

- 島地謙・伊東隆夫 [1982] 図説木材組織, 地球社.
- 島地謙ほか [1985] 木材の構造, 文永堂出版.
- 日本第四紀学会編 [1993] 第四紀試料分析法, 東京大学出版会.

3. 沖ノ羽遺跡出土の烏帽子について

国立歴史民俗博物館 永嶋 正春

A. はじめに

標記遺跡の井戸中からは、布の痕跡を留める漆膜片が出土したが、それらは残存状況や諸特徴から烏帽子の断片と推定された。土ごと取り上げられた漆膜片は、その後の保存処理を経て、計6個のブロック（大小あり）にまとめられて今日に至っている。なおこれらの土ブロック以外に、遊離した漆膜の小片・微小片類が若干量存在する。烏帽子の出土事例は、新潟県下では初めてであり、貴重な資料である。

発掘調査報告書の刊行に向け、遺物の整理担当者より筆者に、これらの資料が烏帽子であることの確認と材質・技法についての詳細調査の依頼があり、以降に延べるような調査を行うこととなった。ここではそれらの調査結果を中心に報告する。

B. 調査結果（図版75 図1～8）

調査報告 調査対象となる資料全点を借用し、歴博を調査場所として次のような調査を実施した。

肉眼並びに光学顕微鏡による観察

今までの資料観察の経験を踏まえれば、資料全体を細部から散視的部分に至るまで丁寧に観察することにより、相当程度確度の高い資料情報すなわち材質・構造・技法・傷み方等に関する情報が得られる。筆者の元では、栃木県下、東京都下、宮城県下などで出土した中世の烏帽子を観察した経緯があり、それらの内容を参考にして情報抽出を行うことになる¹⁷。

X線透過像の観察

漆塗膜断片や、土塊についてのX線透過情報を得ることにより、漆塗膜の構造や技法あるいは土塊中に残存する遺物の有無などについて検討する。

漆塗膜断面資料の観察

漆塗膜断片について、それらを構成する素材や塗装工程を調査することにより、資料製作の全体像を検証する。具体的には、しかるべき部位から微少な漆試料を採取し、これを無色透明なポリエステル樹脂に埋包固定の後、目的とする面で切断、鏡面研削した上で鉱物用スライドガラスに貼り付け、最終的には極めて薄い薄片試料に調製する。こうすることにより、漆のような暗色資料であっても、層構成やそれらの素材内容を良好に検討することが可能になる。

蛍光X線分析

対象とする資料について、非破壊で元素情報を得ることができる。本資料には赤色漆は認められず、したがって顔料識別の目的としては必要性は小さいのであるが、他に何らかの有用な情報が存在する可能性を考え、念のため漆塗膜面についての蛍光X線分析を実施した。

調査結果 以上のように、いくつかの手法によって漆塗膜片の調査を行った。ここでは、対象となる資料がどのようにして製作されたのかという観点にたって、それらの調査結果を報告する。

3. 沖ノ羽遺跡出土の烏帽子について

これらの漆資料で目立つもののひとつは、布の痕跡である（図版75 図1～5）。粗いながらもきわめて規則的な布目様の配列を示すもの（図1, 3, 4）は麻布によると考えられるのであるが、これは別に、大変繊細な布目様の配列を示すもの（図2, 5）を留める漆膜片が存在する。これは絹布に由来すると考えてよい。程度の強弱はあるものの、大半の漆片にこれらの布痕が残存する。したがって麻布と絹布は、この漆資料を製作する上で必要かつ重要な素材であったと見るべきである。それらの織り密度は後出のごとくになるが、布目の粗さから見る限り、いずれも1種類ずつの布が使用されたものと考えたい。

ところでそれらの布目痕の在り方は、製作技術を考える上で大変重要な手掛かりとなる。布そのものが漆に塗り込められ包み込まれて残存しているのか、あるいは布は漆に保護されることなく単独で存在し、その布痕のみが漆膜に投影されているだけに過ぎないのかを見極めることが必要である。まずは麻布痕についてであるが、結論から言えば後者である。遊離した漆膜片で観察する限り、片面に顕著な麻布痕のある断片は、その反対面に必ず絹目痕を有しており〔この種の漆膜片を、ここではタイプAの漆膜片と呼ぶことにする〕、漆膜の厚さは薄く、布痕から予測される麻布の厚さを内包し得ない状況である。一方、絹目のある漆膜片は、前述のような反対側が麻布痕のもの（タイプA）に加えて、反対面が平滑で半光沢を有する良好な漆塗膜面からなるもの〔タイプBと呼ぶ〕も多い。図5, 6はタイプBの例であり、同一の漆塗膜片の裏と表である。絹目の残存状況には良否の幅があるが、最良好のもので見れば、漆様の樹脂状物質で固められて絹の繊維そのものが遺存しているものとみることが出来る。

塗膜の現状で見る限り、ここに示した2種類の漆塗膜は、水平方向に連続した層であるとは考えられず、むしろ、元々は互いに重なり合って一体の層を成していたものが、脆弱な部分で肌別れたものと判断せざるを得ない。両タイプに見られる絹布痕は、元は全く同じ絹布層を持ち、さらにその下層には漆層を介して麻布層が存在したことになる。この麻布層は最も下層あるいは最も内部の層として存在したわけである。以上が資料の観察から判明する大まかな層構成であり、層断面試料を検討するときの骨格となる。

このような層構成の在り方を踏まえて、資料の種類や制作技法を考えることになるが、一部に折り返しを有する縁部片（図3の断片もこれである）が存在すること、いずれの片についても木質の布痕が全く観察されないこと、これらの漆資料の所属時期が共伴の珠洲壺片から見て13世紀半ば～後半あるいはそれ以降と推定されていることなどを考慮すると、いままでの調査事例をも参照した場合、中世の烏帽子以外の資料になる可能性はほとんど考えられない。よって免担並びに整理担当者の予測された通り、烏帽子と見て間違いないものと判断する。

図7, 8に、折り返しを有する縁部の漆片（図3に示した個所）の層断面を薄片化して示したが、この試料中にはタイプAとタイプBの漆膜片が複合して遺存している。他に、反対面に絹布痕を持つ麻布痕のある漆塗膜片（タイプA）、表面が平滑な漆塗りで裏面に絹布痕を持つ漆塗膜片（タイプB、図5, 6）についても層断面薄片試料を製作した。これらの持つ情報と前述のような観察結果とを総合して、以下に烏帽子の製作技法を検討する。

まずは麻布である。ここで使用されている麻布の織り密度は、いずれの漆膜片（タイプA）で見ても経緯糸共に、1cm当たり10～11本である。この麻布が烏帽子本体を構成する芯と考えられる。中世における麻布の状況については承知していないが、古代における麻布の調査事例でいえば、この織り密度はごく普通の麻布のものといえる。²⁷ ところで麻布には、一般に大麻布と学麻布とがあり、同じ麻布といえども布としての性質は両者で異なっている。本資料の場合、布目がきわめて整然としていること、糸を構成する繊維に不規則な乱れや曇れがほとんど無かったものと推定できることなどから、学麻布が使用されたものと

考えたい。一般的にいえば、苧麻布の方が大麻布よりもその白さ、柔軟性、風合いなどで優っており、麻布としては良質である。布目氏の調査（註2参照）によれば、正倉院に遺存する調羅布等の麻布の8割ほどが苧麻布となっており、奈良時代であっても、すでに苧麻布の方が大麻布を圧倒していた状況が知れる。後の中世においてもその状況に変化が生じたとは考え難く、麻布の中では苧麻布が一般的であったと思われることから、布の種類と織り密度の点ではごく当たり前の布が烏帽子の芯として使用されていたものと判断できる。

図7に示した層断面で見れば、この苧麻布は図の中央部に縦方向の位置を占めて存在し、その下部端は折り返されて反転していたものと考えられる。図の右方に縦方向に2条見えている漆塗膜では、内側にある屈曲した漆膜（タイプA）のすぐ左方に密接して麻布があり（この状態が、図3では麻布の圧痕として見られた漆層の麻布側の面は、布目に対応した凹凸の存在を除けば、それなりに漆としての平滑さが保たれており、この漆が麻糸の繊維の間に浸透して固化した形跡はほとんど認められない、苧麻布は、大麻布に比し、漆とはるかに馴染みやすいものであり、したがって苧麻布に塗られた漆は、通常であれば糸の内部へと浸透することで布と一体化する。この場合には、当然ながら布は圧痕としてではなく、漆で強化処置された層として残存する。したがってこの烏帽子の場合、麻布は全面にわたって漆以外の何らかの素材によってコーティング素材の役割は重要である。すなわちこの素材が、やや軟質さのある苧麻布を固めることで基本的には烏帽子としての形態を整え維持していたことになる。しかしながら現時点においては、麻布本体共々全く消滅しており、その実体を窺い知ることはできない。‘そくい’の様な糊や、膠などが用いられたと考えられるものの確定はできない。中世以降の漆器生産に重用された柳炭なども候補に挙げるべきであるが、その場合には少なくともその痕跡程度は残ることが期待できるので、可能性は小さいものと判断したい。なお芯となった麻布の重なり枚数であるが、縁部を除いては1枚（一重）であったと考えたいが、実質が消失しているため、複数枚からなるやや厚手の芯であった可能性も残されている。

以上の様な苧麻布からなる烏帽子の芯の上に、絹布が貼り込められたわけであるが、その目的は、織り密度の小さな麻布の経緯糸が作り出す荒い凹凸面を、織り密度が大きく薄手で繊細な絹布で覆うことによって、平坦な面を作り出すことにある。使用された絹布の織り密度は、経緯糸共に1cm当たり40~45本を数えるものであり、芯の苧麻布の4倍程度になっているが、当時の絹布であれば概ね普通の織り密度のものと考えている。この絹布は芯の表面に漆で貼り付けられており、その漆が今に残存してタイプAの漆塗膜を形成している。この時、絹糸中に漆が浸透し堅固な絹布層を構成したものと思われるが、層断面図料で見ると絹布層の遺存状態はさほど良好ではない。絹糸の通直性が良く、布目の乱れもほとんど認められない状況からすると、麻布芯の場合と同様な素材で事前に処理をされていた可能性も考える必要がある。

この絹布層の上に漆塗りが施され、資料表面すなわち烏帽子の外表面が出来上がっている。表面の漆塗り層は、図8（タイプBの漆塗膜層断面）に示したごとく、何回かの繰り返しの漆塗り層と捉えることが可能である。3層ほどの層構成を読み取ることもできるのであるが、絹布寄りの層内容は複雑であり、断定は控えたい。なおこの図で、漆塗り層の下に見えるのが絹布層であり、経緯糸共に斜め横断面が显示されているが、一部には網織の断面が認められる。繊維の周囲を完填して残存する淡黄褐色物は漆であり、少なくともこの部分の絹布には漆が浸透していたことを示している。この絹布層と漆塗り層との境界には、部位によって斑ではあるものの、薄い黒色層が存在し、そのためか、絹布層と漆塗り層との密着度が低下しているように観察される。この黒色物は、高倍率で見ても粒状性が捉えられず、しかもある種の凝集状態を示しており、きわめて不透過性が高い。これらの性状は、この黒色物が‘墨’である可能性

3. 沖ノ羽遺跡出土の烏帽子について

が強いことを物語っている。したがって、表面の漆色をより濃く、より黒く見せる目的で、絹布層の表面に塗塗りした可能性を考える必要がある。

今まで検討してきた烏帽子の製作技法、層構成の内容は、縁部の折り返し箇所を除けば、烏帽子の外表面すなわち人から見える面を対象としており、烏帽子の内側の面すなわち着装する人の頭側の面については及んでいない。遺存する烏帽子は傷み方が複雑であり、残された漆断片の重なり方から内面の様子を追うことも困難である。しかしながら内面は、その機能上の必要性と製作技術上の制約とからみても、外面よりは簡易な扱いに留まっていたことが推察される。したがってここでは、とりあえず、麻布の面がそのまま内面を構成していたものと考えてみたい。

最後に、X線透過像と蛍光X線分析の結果について簡単に触れることとする。烏帽子断片を残したままの6個の土ブロックのX線透過像には、特に注目すべき点は認められず、したがって土の中にX線不透過性の何らかの遺物が残存している状況は考えられない。また、遊離した漆膜片のX線透過像には、塗膜の凹凸に応じて付着した粘土のために、麻布目が強調されているが、他には取り立てて有用な情報は認められない。最外面である塗塗り面について行った蛍光X線分析は、空気通路下での測定のため、軽元素を測定対象外としたが、重元素系では特に注目すべき元素は検出されなかった。

C. おわりに

標記の遺跡から出土した漆塗膜片を調査し、それらが中世の烏帽子の断片であることを確認の上、製作技術について検討を加えた。対象資料の持つ情報を元にしながらも、資料の損壊状況に合わせて幾つかの推察を加える必要があり、結果としてどの程度確度の高い議論ができたのかについては不安がある。

中世の烏帽子には各種の形態があり、また製作材料や技法にもある種の選択幅があったと考えてよい。したがって、できるだけ正確な製作技術的議論を行うためには、烏帽子についての有職故実や、現在作られている烏帽子についての製作技術を知ると共に、遡った時代の伝世する烏帽子について技術的な検討を加える必要もある。本出土資料については、その後の機会に更に再検討すべきものと考えている。

註1) これらの内、東京都新宿区に所在する早稲田大学下戸塚遺跡(安部塚跡地)から出土した烏帽子片(14世紀後半～15世紀初め)については、調査結果を下記のなかで報告している。永嶋正春「中・近世漆製品の塗装技術」『下戸塚遺跡の調査 第4部 中近世編 一中世一』早稲田大学校地理蔵文化財調査室編 1997

2) 春日明郎「正倉院の織物類について」『書院部紀要』26号 1974

第七章 まとめ

1. 遺構

A. 古墳時代

検出された遺構の内容は、土坑33基、溝2条、性格不明遺構2基、ピット7基で土坑主体の遺構群といえる。大半は5区43～46、D・Eグリッドに位置する。

土坑の平面形は、不定形ないし楕円形がほとんどである。分布状況にある程度集中性が認められるものの、土坑位置等の法則性は見られない。覆土は灰白色粘土・シルト・シルト質粘土を主体とする場合が多いが、第III章でも述べたように、これは古墳時代の遺構確認面であるIV層の土性と近く、実際には大半の遺構はV層で検出している。したがって、これより多くの未検出の遺構が存在した可能性が高い。SK186・195・220では遺物が比較的集中出土する傾向があり、甕・小型丸底壺・高杯が多く出土している。これらの土坑では一個体分あるいは完形に近い状態での出土もあることや周辺に住居跡などの生活に密接に結びつく遺構がないことから、単なる遺物廃棄場とは考えにくい。その他にはSK191から小型丸底壺が、SK197からは甕がほぼ一個体分出土している。特にSK197の場合は、甕が立てられた状態で埋まった可能性が高く、何らかの目的で人為的に埋設されたものと思われる。調査中より墓墳ではないかと推定しリン分析を行った。分析結果ではリン濃集部は認められなかった。

ピット7基のうちで重要なものに47G-P1・P2の2基のピットがある。ともに直径約1.3m・深さ80cmを測り、底面上には直径50cm以上の大型柱根が立ったままの状態でも出土した。当初は伴出遺物がないことや上部が耕地整理の際の削平を受けたため、遺構確認面が明確でないこともあり、時期不明であった。柱根の放射性炭素年代測定の結果、P1は1,530 ±90(A.D.420)GaK-18613、P2は1,420 ±90(A.D.530)GaK-18614という値が得られ、5世紀前半から6世紀前半の遺構と推定される。このピット周辺からは類似する遺構が検出されず門、鳥居、木柱など独立した遺構を推定したい。

これらの土坑とピットとの関係では土坑は伴出土器から古墳時代前期後半に位置づけられることから同時期に存在していたものと推定される。また、土坑の性格については、古墳時代前期の土坑群の類例では金沢市高島遺跡〔南はか1975〕、上越市一之口遺跡東地区〔鈴木・春日1994〕があり、前者では庶民群(玉作工人)の集団墓地、後者では墓墳である可能性をもつが認定材料が無いとしている。当遺跡の土坑も墓墳と考えたいが、積極的に判断できる材料に乏しい。今後、大型柱根のあるピットと土坑の類例の増加を待ちたい。

B. 平安時代・鎌倉時代

遺構は溝が69基、土坑が49基、井戸が8基、掘立柱建物跡が4基、性格不明遺構が3基、ピットが200基ほど検出された。

出土遺物の内容、遺構の新旧関係などから時期を分類すると、平安時代と推定される遺構は溝が24基、土坑が22基、井戸が4基、掘立柱建物跡が4基、性格不明遺構が2基となる。中世と推定される遺構は溝

1. 遺構

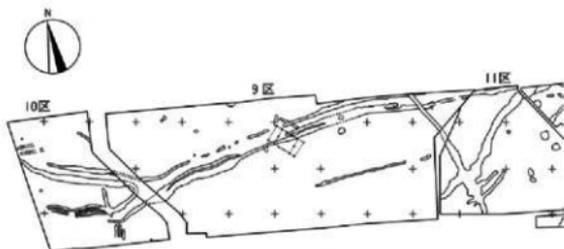
が13基、土坑が2基、井戸が2基である。残りの遺構は時期を推定する材料を欠き、平安時代か中世かを判断できなかったものである。ピットは出土遺物から判断するかぎりでは、大多数が平安時代と推定される。

平安時代の遺構は掘立柱建物跡が4基検出された。SB81・SB83・SB86の3基は42・43Dグリッドに集中している。桁行方向はいずれもほぼ等しく、同時期か近い時期に建てられたものと推定される。遺構周辺にはピットが多数集中しており、これらの他にも建物が存在した可能性もある。その付近には井戸（SE69）のほか、SK70・SK79・SK87などの土器を多量に包含する土坑が複数検出されており、ゴミ捨て穴とも考えられる。また畝状小溝と推定される溝群SD64～68は建物の桁行方向とほぼ平行しており、何らかの関係があるとも考えられる。

その他の建物跡、55Eグリッドに位置するSB164の場合も同様に付近に井戸（SE160）・土坑（SK161・SK165・SK166・SK167）が存在する。但し畝状小溝に相当する遺構は検出されなかった。その他、平安時代の大規模な遺構としてはSD93・94、およびSD149・154・155などの溝がある。使用目的は明確には判断できないが、SD149・154・155は幅・深さなど規模が大きく、用排水路として機能していた可能性がある。

以上のように堅穴住居を伴わない遺構の組み合わせは上越市一之口遺跡西地区〔坂井ほか1986〕、新潟市小丸山遺跡〔藤塚ほか1987〕に類例がある。これらの例は堅穴住居が集中して集落を構成する律令期の典型的なものではなく、「農業経営においても自立した単位であり、それぞれが一定の区画からなる宅地を所有した遺跡〔坂井ほか1989〕である。また、9世紀後半以降の集落立地もそれまでの砂丘上や河岸段丘上から沖積地内の敷高地に進出するようになる〔坂井前掲〕という。本遺跡例も以上のような古代集落の動向のなかで理解されるものである。

中世（鎌倉時代）の遺構は溝が中心であり、その他は少ない。土坑（SK108・109）・井戸（SE104・110）は全て46・47-E・Fグリッドに位置する。遺構出土の遺物は土器よりも曲物・箸など木製品が主体となる。SE110からは漆加工の鳥帽子が珠洲焼壺片と共伴出土している。これらの遺構を囲むようにSD92が方形状に巡っている。溝の規模は東西方向の長さは北が約53mと南が約41m。溝間は23mから25.5mを測り、南北方向は東側だけに溝が確認された。溝の内側には中世の土坑や井戸、掘立柱建物の柱穴と考えられる多数のピットが集中している。このSD92からは時期決定できる遺物の出土はないが、内側への遺構の集中、走行方向が平安時代の溝と違うことや三辺の溝は方位にほぼ一致していること等から居住空間を区画する溝と推定される。



第9図 沖ノ羽遺跡B地区遺構配置模式図
(平安時代・中世のみ、一部重複部分あり)

1:1,600

そのほかの溝は断面皿状ないし「U」字状の深いものと、底面の凹凸が著しい浅いものに大別される。前者にはSD57・SD111・120・127が相当する。うちSD111・120・127は47C～48Eグリッドにかけて重複しており、何回も溝が掘られた様子が分かる。溝の使用目的はSD127の場合は、底部から杭が規則的に立ったまま出土しており、用排水路に使用されたものと推定される。

浅い溝にはSD131・136・150・151・157・159・177が相当する。このうちSD150・151・157・159・177はブロック状堆積の覆土を持ち、ほぼ等間隔を保ちつつ延びることなどから、一つの道路状遺構を形成するものと推定される。SD131の場合、形状・覆土は道路状遺構に近似するが、SD127に等間隔で平行しており何らかの関係が考えられる。SD136は覆土がやはり近似するが、円形状にめぐる形態はこの遺跡では類似するものは無く使用目的は不明である。

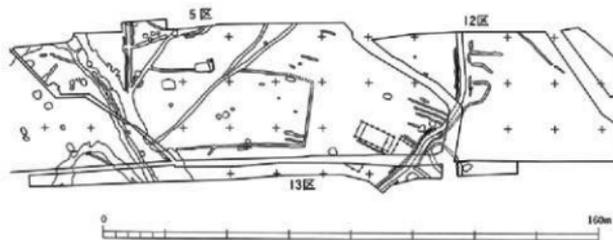
水路と水田遺構（遺構実測図1・2）

B地区では水路跡や溝が検出されている。41グリッドで調査区をほぼ南北に横切るSD57、48・49グリッドを西北西方向に向かうSD127・131等は調査区で主体となるものである。その時期は出土遺物から中世の遺構と考えられている。その水路SD57に隣接する41C・DグリッドのSD59は遺構確認面からの掘り込みが浅く、底面の凹凸が激しい。平面形は調査区内においては楕円形のプランを持つ。同様に曲線的な溝として、40EグリッドのSD56も確認面からの掘り込みが1～10cmと浅く、やはり底面の凹凸が激しい。48・49C・Dグリッドでは水路SD131に隣接して半円形の平面プランを持つSD136がある。掘り込みが浅いことや底面形状は前者に類似する。

これらの溝の類例としては当遺跡のA地区14～16グリッドで検出された「畑田」と呼ばれる、水田に類似した遺構SX26・27・30（石川ほか1994）がある。他には新津市大字飯柳にある畑池遺跡の「凹地遺構」と呼ばれる溝群に類似する（小池1994）。この2例の時期は、神ノ羽遺跡例では出土した遺物から平安時代に比定されている。また、畑池遺跡例は中世と考えられ、さらに凹地遺構を水田遺構と捉えている。

本遺跡の水路に隣接する先述の溝（SD56・SD59・SD136）は平地を浅く広く掘り込み、さらにその周辺を溝状に掘る技法から水田遺構である可能性が高い。調査区西端の59グリッドから61グリッドにあるSD177も長楕円形の平面プランをもつことから、やはり水田遺構と考えられる。このSD177は遺物の出土がなく時期の決定は難しいが、遺構の類似性から中世の所産と考えられる。

そのほかの溝については、本報告では出土遺物から時期を決定している。しかし平安時代の住居跡が重



2. 遺物

復している部分もあることから遺物包含層中の土器が、中世に造られた溝の覆土に混入する可能性も否定できない。従って平安時代とした遺構の時期も慎重な検討を要する部分もある。

2. 遺物

A. 古墳時代

古墳時代の遺物は平箱4箱程度であった。この他、放射性炭素年代測定で5世紀前半～6世紀前半と推定される柱根2点(232・233)が出土している。柱根を除き、これらに遺物は土坑およびその周辺から出土したものであり、器種組成、各器種の特徴から限られた時期のものと思われる。

土師器は甕・高杯・小型丸底壺を主体に壺・甕がわずかで器台は出土していない。それぞれの器種では、つぎのような特徴がある。

甕は球胴ぎみの体部で、口縁部は「く」の字口縁、口縁端部は丸くおさまる特徴をもつ。高杯は水平ぎみの杯底部から体部は立ち上がり口縁部でやや外反する。杯底部と体部の境には稜をもつがそれほど強くない。脚部は資料数が少なく不明確であるものの、筒部はやや太く基部で屈折し広がる。つくりは粗雑で筒部内面には粘土紐痕が認められる。小型丸底壺はもっとも多く出土しているが、器形の分かるものでは口径、体部径、器高がほぼ同じものが多く、やや小型のつくりである。体部は球形またはややつぶれた球形で口縁部は短い。つくりは粗雑で器壁は比較的厚く、体部内面には粘土紐痕が明瞭に残るものが多い。この壺(23)は二重口縁が形骸化し後は弱い。

これらの諸特徴や器種組成を古墳時代の土器編年に照らすと、北蒲原郡聖籠町山三賀Ⅱ遺跡〔坂井1989〕のⅡ期、上越市一之口遺跡東地区〔鈴木・春日前掲〕のⅢ期、石川県漆町編年〔田島1986〕の10・11群に相当するものと思われる。

B. 平安時代

本遺跡の主体を占める遺物は平安時代の須恵器・土師器である。遺物は土坑・井戸・溝・ピットと包含層から出土したが良好な一括資料に恵まれず、出土遺物から集落全体の時間的変遷は捉えられない。しかし、まとめて遺物が出土した遺構の遺物についてその時期を考えてみたい。

SE69(図版27-46-53)の須恵器蓋(46)は天井部外面はヘラ削りされ、大き目のつまみの中央は深く窪む。端部は面を持ち、短く下方へ引き出される。編年的には山三賀Ⅱ遺跡〔坂井前掲〕のⅢ期(8世紀第4四半期～9世紀第1四半期)に併行するものと考えられる。しかし、これに伴う須恵器杯は出土しておらず土師器碗が食膳具として見られる。無台の土師器碗は後出的な有台碗よりも古い様相を呈するが、山三賀Ⅱ遺跡のⅢ期には土師器碗が見られない。このため本遺構出土の土師器碗は須恵器蓋よりも年代的に下がるものと考えられる。

SK79(図版28-66-81)出土の食膳具のほとんどを土師器碗が占める。そのうち黒色処理された1点(76)は底部がヘラ削りされるが、それ以外で底部が確認できるものは回転糸切り無調整である。大きさは口径12～13cm台が多い。須恵器杯(66)は口縁の外傾度が大きく、器壁が比較的薄い。形態と胎土からみて佐渡小泊窯跡の製品である。製品の年代は「カメ畑1～3窯跡」段階〔坂井ほか1991〕9世紀第3四

半期に比定できる。一方、本遺構出土の土器には有台碗が伴わない。土器器食器具が豊富に出土した和島村八幡林遺跡Ⅰ地区〔田中1995〕の9世紀第4四半期に比定された資料には有台碗が含まれる。このため有台碗を持たない本遺構の資料は八幡林遺跡例に先行するものと考えられる。ゆえにSK79は9世紀第3四半期所産の遺物が含まれる遺構と言える。

包含層出土の遺物では、須恵器杯(29、36、54、66、101、103、129～150)について、器形と胎土でその産地を推定することができる。

有台杯を見ると、口径に比して身の浅い型(A類)の胎土は「胎土C群」に含まれる。身深(B、C類)は「胎土B群」に属する。器形の違いと胎土から、前者は新津丘陵周辺の窯で製作されたものと考えられ、後者は佐渡郡羽茂町小泊窯跡群に産地を求めることができよう。

無台杯は器形と胎土から大きく2分できる。134～145は体部と底部の境は丸みを帯び、体部はあまり開かず立ち上がる。器壁は肉厚感がある。この中でも焼成方法の違いによって、質や色調の違いが認められるが、周辺の遺跡出土例から見て新津丘陵の窯で製作されたものと考えられる。本文中ではこの一群をA類とした。一方、体部が直線的に大きく開いて立ち上がり、底部との境は比較的明瞭で器壁の薄いものをB類とした(29・54・66・133・146～150)。このB類の産地は器形と胎土から小泊窯跡に求められよう。

これら須恵器無台杯の年代について簡単に述べてみたい。新津丘陵周辺の窯跡で焼かれた製品についての編年表的検討は集落遺跡出土の良好な資料に恵まれないこともあり、十分なされていない。小泊窯跡の編年案〔坂井前掲〕に従って本遺跡の資料をみたい。ここで述べる遺物は包含層出土資料という制約があることを考慮しなければならないが、大半は「カメ畑1～3号窯跡」段階すなわち9世紀第3四半期に対比するものと考えられる。この年代観と対照して、須恵器無台杯A類もほぼ同時期に対応するものと考えられる。

C. 鎌倉時代

中世の遺物は土器・陶磁器類が平箱1箱程度と少ない。その他、鳥帽子(図版73)や曲物(224)をはじめとする杭、箸などの木製品などが出土している。出土場所は5区、12区から散漫に出土するが、この中でも5区からの出土が多く、土器・陶磁器類の多くは遺構に伴うものである。遺物包含層からの出土が少ない理由は、昭和15(1940)年以降に始まった耕地整理のため包含層の多くが消失したためと考えられる。土器・陶磁器類の出土割合では中世土器器皿・杯が多い。珠洲焼は壺が3点出土しており三耳壺(84)や柳目文(87・128)のある良品である。珠洲焼編年で84・87はⅠ～Ⅱ期(12世紀後半～13世紀前半)、SE110の鳥帽子の直上から出土した128はⅡ～Ⅲ期(13世紀)相当するものと思われる。船載磁器の白磁碗(31)は13世紀後半に比定される。

該期の阿賀野川周辺の中世土器器の資料は少なく不明確〔品田1991〕であるが、当遺跡の中世土器器は伴出した珠洲焼・白磁から12世紀後半～13世紀と仮定し、今後の資料の増加を待ちたい。

要約

1. 沖ノ羽遺跡B地区は新潟県新津市大字七日町字沖ノ羽3255他に所在する。
2. 遺跡は新潟平野の東に位置する新津丘陵に近く東は阿賀野川、西は信濃川、北は小阿賀野川に囲まれている。細かくみると遺跡は能代川・阿賀野川・小阿賀野川に囲まれた沖積平野に立地し、標高は4～5.8mを測る。
3. 遺跡付近の旧状は水田よりも50～80cm高い畑が散在していた。この地形は自然堤防によって形成されたと考えられるが、この地形も昭和15～25年に行われた土地改良事業により一面の水田となった。
4. 遺跡の調査は磐越自動車道の建設に伴って、平成2年4～6月に一次調査を実施した。その結果、二次調査必要面積は61,600㎡に上った。二次調査は平成3・4年度に実施した。調査中に不要部分を対象地から除外し、実質調査面積は41,016㎡とした。
5. 調査の結果、古墳時代の土坑33基・溝2条・2本の柱根、平安時代と中世の土坑49基・溝69基・井戸8基・掘立柱建物4基・ピット約200基が検出された。中世の遺物が検出された井戸もあるが数は少ない。大きくみて古墳時代の土坑群と平安時代の掘立柱建物・井戸・溝で構成される集落遺跡である。
6. 遺構の時期は、古墳時代の土坑は墓坑の可能性も考えられ、土壌中のリン分析を行った。その結果、実際に遺体を埋葬した痕跡は検出できなかった。土坑群は伴出遺物から古墳時代前期後半に位置付けられる。古墳時代の2本の柱根は放射性炭素年代測定法の結果から5世紀前半から6世紀前半の所産と考えられるが、用途は不明である。

平安時代の掘立柱建物は周辺に9世紀後半のものと考えられる。その頃から沖積地中の散高地上に集落が進出する傾向に一致する。また、その集落は散村的な形態をとる。中世の井戸（S D110）からは烏帽子と珠洲焼が検出された。その年代は13世紀代と考えられる。周辺では溝に「コ」字状に囲まれた区画からピットが多く検出されたが、中世の掘立柱建物は確認できなかった。

7. 古墳時代の遺物の年代は前期後半に比定され、県内の聖籠町山三賀II遺跡のII期、上越市一之口遺跡東地区のIII期、石川県漆町遺跡の10・11群に相当するものと思われる。平安時代の土器は9世紀第3四半期にその主体がある。須臾器の産地をみると新津丘陵周辺の窯跡製品と佐渡小泊窯跡の製品がみられる。中世の遺物は珠洲焼I～II期、II～III期の13世紀代を中心とした遺物がみられる。

第5表 遺物観察表

凡 例

- 種 別 古式土師は古墳時代の所産 土師は平安時代の土師器 須恵は平安時代の須恵器を表す。
- 器 種 本文参照
- 出土地 カッコ () 内の数字は調査区の番号を表す。例 (5) は5区を表す。
- 法 量 口：口径 高：器高 体部：体部(胴部) 最大径 底：底径
- 残存度 分数表示は遺存割合を示す。
- 色 調 『新版 標準土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修) に従い器壁色調を記す。

沖ノ羽遺跡B地区出土遺物観察表

No	種別	器種	出土地	出土遺物番号	形状	残存度	胎土	色調	焼成	技法	その他
1	古式土師	壺	G43D・E	SK186	□21.4	口縁1/3	2㎞以下の砂多く混入	外・灰濁内・灰色口縁・褐色	やや不良		黒化重しい 外面口縁一部スス付着
2	古式土師	高杯	G43D・E	SK186	□16.6	杯部1/3	2㎞以下の砂混入	浅黄緑	やや不良	内外面ハケのち1ガキ 口縁部は灰ナデ	黒化重しい
3	古式土師	小型丸底	G43D・E	SK186	□10.35 体部15.2 高13.35	体2/3 口1/5	5㎞以下の砂多量混入 石灰目立つ	浅黄緑	やや不良	内外面ハケあり 内面体部輪痕み痕明瞭	外面黒化重しい 内面胎土層痕あり
4	古式土師	小型壺	G43D・E	SK186	体部16.2	体部3/5	3㎞以下の砂混入	浅黄緑	やや不良		黒化により調整不明
5	古式土師	小型壺	G43D・E	SK186	底4.2 体部9.2	体部のみ	1㎞以下の砂粒多量に混入	黄	良	内面体部輪痕み痕残	黒化により調整不明
6	古式土師	小型壺	G43E	SK191	□10.5 体部10.9 高11.0	口縁1/2 体部	2㎞以下の砂多量混入	浅黄緑	良	外面ハケのち1ガキ 一部ハケ目残る 内面体部輪痕み痕明瞭	
7	古式土師	壺	G43・44E	SK195	□16.0 体部19.1 連存高19.9	口縁1/3 体部1/3	2㎞以下の砂多く混入 石灰多く含む	浅黄緑	やや不良	外面体部ハケ目 口縁部ナデ	口縁の体部への取り付け痕あり
8	古式土師	高杯	G43・44E	SK195	□16.8	杯部2/3	4㎞以下の砂粒混入	浅黄緑	やや不良	外面ハケ後ミガキ 内面調整不明	黒化重しい 器形の歪み重しい
9	古式土師	小型壺	G43・44E	SK195	□7.7 底9.3 体部9.9	略丸形 口縁一部欠損	5㎞以下の砂混入	浅黄緑 内外に黒染	良	外面ハケ後ミガキ 体部内面ハケ残る 口縁・体部にハケ残る 両部ミガキ 内面輪痕み痕ナデ消し	
10	古式土師	高杯	G46E	SK212	□18.1	杯部2/3	3㎞以下の砂粒混入	浅黄緑	やや不良	内外面ハケ後ミガキ 磨鉢工具で横方向に黒染 外面下ナデ残る	黒化重しい
11	古式土師	高杯	G43・44D	SK196	□19.6	杯部のみ	2㎞以下の砂やや多く含む	灰濁	やや不良	内外面ハケ後ミガキ	黒化重しい
12	古式土師	高杯	G52F	SK220-1・2層	□18.5	口縁部破片	細砂多く混入	にぶい黄	やや不良	口縁部ナデ 体部内外面ハケ目	黒化により調整不明
13	古式土師	壺	G52F	SK220-2層	□19.1	口縁部・体部破片	細砂多く混入	浅黄緑	やや不良	口縁部破片ナデ	外面の一部スス付着
14	古式土師	壺	G52F	SK220-3層	□16.8	口縁部・体部破片	細砂多く混入	黄	やや不良	体部内外面ハケ目、ナデ 口縁部破片ナデ	外面の一部スス付着
15	古式土師	壺	G52F	SK220-2層	□15.7	口縁部・体部破片	細砂やや多く混入	浅黄緑	やや不良	体部内面ナデ、外面ハケ目、口縁部内外面調整ナデ	
16	古式土師	高杯	G52F	SK220-2層	底11.7 連存高10.2	杯部上半欠	細砂含む	黄	やや不良	杯部内面ミガキ	黒化重しい、器形の割落重しい
17	古式土師	壺	G44D	SK197	□19.6 高25.5 底2.3 体部22.0	略丸形	2㎞以下の砂多く混入	浅黄緑	やや不良	体部内外面ハケ目後内面ナデ、口縁部内外面調整ナデ	外面体部にスス付着
18	古式土師	壺	G43E	SK185	底部7.3	底部・体部下平	3㎞以下の砂多量混入	外黄 内浅黄緑	やや不良	内外面ハケ目	黒化重しい
19	古式土師	壺	G44D	SK205-1層	□17.0	口縁部破片	2㎞以下の砂多く混入	浅黄緑	やや不良	口縁部外面調整ナデ 体部内外面ハケ目	黒化やや重しい
20	古式土師	壺	G43E	SK189	底6.7	底部・体部下平 体部下半	5㎞以下の砂多量混入 内外灰濁	外浅黄緑 内灰濁	良	体部内外面ハケ目後内面ナデ	
21	古式土師	壺	G46E5・F	□19.3 体部28.0 底6.3	口縁部・体部一部欠入	4㎞以下の砂多量混入	浅黄緑	良	外面ハケ目	狭間で一括出土 土灰出土と推定される 体部下平外面二次焼成で淡灰色	
22	古式土師	壺	G43E・IIIb	□19.3	口縁部・体部破片	2㎞以下の砂多く混入	浅黄緑	やや不良	口縁内面ハケ目後調整ナデ 体部内外面ハケ目	黒化重しい、外面割落重しい	
23	古式土師	壺	G44F23・F	□17.8	口縁	3㎞以下の砂多量混入	浅黄緑	やや不良	外面ハケ目	黒化重しい 口縁の磨合痕明瞭に残る	
24	古式土師	瓶	G46E12・IIIc	底5.2	底部体部下平	2㎞以下の砂多く混入	浅黄緑	やや不良	内外面ハケ目後、ナデ	黒化重しい、外面調整不明	
25	古式土師	小型壺	G46E19・IIIc	胴部最大径9.4	体部のみ	2㎞以下の砂多く混入	にぶい黄	やや不良	体部内面輪痕み痕明瞭	黒化により調整不明	
26	古式土師	小型壺	G44F18・IIIc	□(8.8) 体部9.3 高(9.2)	口縁1/8・体部	1㎞以下の砂多く混入	浅黄緑	やや不良	体部外面ハケ目後ミガキ 内面ナデ	内面胎土層痕はナデ消されている 内面下平焼成時黒色変化	
27	古式土師	小型壺	G46E5・IIIc	体部9.1	体部2/3	2㎞以下の砂多く混入	浅黄緑	やや不良	内面輪痕み痕明瞭	黒化重しい、外面調整不明	

No.	種別	図種	出土地	出土遺構番号	深さ(m)	残存状況	胎土	色調	焼成	技法	その他
28	古式土師	高杯	G34F20-Fa-b		底12.8	杯部1/4	2mm以下の砂粒多く灰入・石英多い	灰黄緑	やや不良	外蓋ミゴキ 胴部内面輪痕或明線に残る。胴部内面ハケ目残る 胴部と杯部の接合痕明瞭	風化進む
29	須恵	無台杯II B	G34D	SK58	口12.1 高3.8 底7.4	完整	精良 B群 白色粒子少量含む 0.5~1mm	灰	堅緻	回転へう切り ロクロナデ	外底部縦溝あり。黒色の吹き出し最大1mm 小片産
30	土師	無台碗I	G34D	SK58	口14.2 高4.2	口縁1/3	1mm以下の砂粒入	外・灰黄緑 内黒	やや軟質	内面黒色処理・ミゴキ	外周風化 口縁一部黒色
31	白磁	碗	G34F	SD57・1層	口13.8	口縁部破片	精良	灰	良	乳白色釉 口縁部内面輪割製	中世「ロウビの白磁」 後部内面に不純物付着
32	土師	無台碗II	G34E	SD57	口14.5 高5.5 底7.7	7/8	3mm以下の砂多く灰入	灰褐色	良	回転糸切り	内外周風化
33	土師	鍋I	G34E	SD57・1層	口38.8	口縁1/13	4mm以下の砂粒多く灰入	黄	良	口縁ナデ 内外周体部上カキ目 下埋さ目	内外周風化著しい
34	土師	鍋II	G34E	SD57	口34.0	口縁1/12	2mm以下の砂粒大量	洗黄緑	良		内外周風化著しい
35	土師	小罌I	G34D	SD57	口14.6	口縁1/9	4mmの砂粒混入	にぶい黄	良		風化進む
36	須恵	有台杯IA	G34I+42E	SK68	口13.4 高3.5 高台外径6.9	4/5	精良 3mm以下の砂粒含む C群	灰 外周一部 褐色	堅緻	ロクロナデ 回転へう切り	外周自然釉あり 高台内周縁地
37	土師	無台碗II B 1	G34I+42E	SK68	口16.1 高3.8	口縁1/7	1mm以下の砂粒やや含む	洗黄	やや軟質		風化進む
38	土師	鍋I	G34I+42E	SK68	口48.0	口縁1/27	5mm以下の砂粒やや含む	にぶい黄	軟質		風化進む
39	土師	無台杯II A 2	G34E	SD66	口15.0 高4.4 底4.3	口縁1/8	1mm以下の砂粒やや含む	外・灰白 内黒	良	内面黒色処理・ミゴキ 回転糸切り後へう削り	外周風化著しい
40	土師	無台碗II B 1	G34I D+E	SK70	口13.3	口縁1/5	4mm以下の砂粒比較的含む	外・洗黄緑 内黒	軟質	内面黒色処理・丁寧なミゴキ	外周風化して調整不明
41	土師	無台碗II A 2	G34I D+E	SK70	口11.6	口縁1/8	2mm以下の砂粒多い	にぶい黄	軟質	内面ミゴキ	風化進む
42	土師	無台碗II B 1	G34I D+E	SK70	口12.6 高4.5 底5.0	1/3	1mm以下の砂粒含む	洗黄緑	良	回転糸切り	
43	土師	長頸B	G34I D+E	SK70	口24.0	口縁1/6	4mm以下の砂粒含む	外・黄 内・黄灰	良	外周体部カキ目	
44	土師	小罌A	G34I D+E	SK70	底6.6	底部	石英など砂粒多く含む	内・洗黄 外・赤灰	良	回転糸切り	内外周風化著しい
45	土師	鍋II	G34I D+E	SK70	口37.8	口縁1/5	5mm以下の砂粒混入	洗黄緑	軟質		風化進む
46	須恵	杯蓋	G34E	SB69	口15.5 高3.8	1/2	5mm以下の粒含む C群	灰	堅緻	外周上部へう削り ロクロナデ	口縁外周面の焼きにきり黒色
47	土師	無台碗II A 2	G34E 4	SB69	口13.3 高4.5 底4.7	2/3	砂粒多く含む	赤灰	良	回転糸切り	
48	土師	無台碗II B 2	G34E 4	SB69	底4.5 底寸24.0	1/3	砂少々含む	洗黄緑	やや不良	外周外周下ハケ目 回転糸切り	内外周風化進む
49	土師	無台碗III	G34E 3+4	SB69	底5.4	底部2/3	1mm以下の砂少々含む	外・洗黄緑 内黒	軟質	回転糸切り	風化進む
50	土師	長頸B	G34E 3+4	SB69	口29.2	口縁1/6	3mm以下の砂粒多数	洗黄緑	軟質	外周体部カキ目少々残る	内外周風化進む
51	土師	長頸B	G34E 3+4	SB69	口23.5	口縁1/10	1mm以下砂やや多く含む	洗黄緑	軟質		風化進む
52	土師	鍋I	G34E 4	SB69	口49.2	口縁1/6	砂粒混入少ない	洗黄緑	良	外周体部カキ目あり	外周一部スス付着あり
53	土師	鍋I	G34E 3+4	SB69	口46.3	口縁1/8	砂少量混入	洗黄緑	良	外周外周ケズリ痕あり 内面カキ目混	風化著しい
54	須恵	無台杯II B	G34I D24	SD71	口12.6 高2.8 底7.4	1/4	精良 B群	灰	堅緻	外周体部下へう削り 回転へう切り ロクロナデ	内外面に鉄・マンガン結核付着 小片産
55	土師	鍋II	G34I D25	SD71	口38.2	口縁1/8	5mmの砂粒混入	外周灰 内洗黄緑	軟質		風化進む

No	種別	部 種	州土地	州土道調査号	位置	残存度	土 質	色 調	地 成	注 意	そ の 他
56	須 恵	Ⅲ	0343D	SK37	底12.2	底層	良 A群 白色粘土層を含む	灰	堅硬		高台外端接地 内面・マンゴシ結核付着
57	土 師	無台納 II B 2	0343D	SK37	口14.4 高3.9 底5.9	1/9	1mm以下の砂少量	褐色	軟質	回転糸切り質	内外面とも表面の大部分が剥落
58	土 師	無台納	0343D	SK37	底5.9	底層 1/2	細砂少量	外・灰質 内黒	良	外周部へう削り 回転糸切り後一部へう削り	
59	土 師	小渠	0343D	SK37	底6.7	底層 1/7	細砂少量	にぶい黄	良	外周部へう削り 回転糸切り後へう削り	
60	須 恵	無台杯 I C	0347E 2	SD93-2層	口13.4 高3.7 底6.8	1/4	剛良 C群 直径5mm以下の砂粒 やや含む	灰	堅硬	回転糸切り コクロナダ	内外面に灰・マンゴシ結核付着。各部は先味を持って立ち上がる。身はやや硬い
61	土 師	無台納 III B 2	0346E 18	SD93	口12.7 高3.7 底5.7	1/2	3mm以下の砂少々	洗黄褐色	不良	回転糸切り	風化著しい
62	土 師	無台納	0344G 5	SD93	底5.8	底層 1/2	4mm以下の砂少量混入	外 洗黄褐色 内・黒	良	外周部へう削り 回転糸切り後へう削り 回転糸切り後へう削り	
63	土 師	無台納	0347E 1	SD93-2層	底5.0	底層 2/3	砂粒少々混入	外・黄褐色 内・黒	良	回転糸切り	底面へう記号
64	土 師	小渠	0345F 9	SD93	底4.8	底層	2mm以下の砂少々混入	外黒褐色 内黒へ赤	良	静止糸切り	
65	土 師	長壁 B	0345F 21	SD93	口17.4	口線 1/6	2mm以下砂粒多く含む	洗黄褐色	良		風化して調整不明
66	須 恵	無台杯 II B	0342E	SK79	口12.4 高2.7 底7.2	1/6	白色砂混入 B群	暗灰	堅硬	回転へう切り	口唇と器内底面は平ずれて摩滅している 小治産
67	土 師	無台納 III B 1	0342E	SK79	口14.8 高5.1 底6.0	4/5	径5mm以下の石灰粒・礫など少量を含む	外・赤灰 内・結核	やや軟質	回転糸切り コクロナダ	内外面風化著しい
68	土 師	無台納 III B 2	0342E	SK79	口13.8	口線 1/7	2mm以下砂少々混入	にぶい黄	軟質		風化進む
69	土 師	無台納 III B 2	0342E	SK79	口13.3	口線 1/6	2mm以下砂少量含む	洗黄褐色	やや軟質		風化進む
70	土 師	無台納 III A 2	0342E	SK79	口13.2 高4.1 底4.8	1/3	4mm以下の礫～細砂含む	外・灰褐色 内・洗黄褐色	軟質	回転糸切り	内面風化
71	土 師	無台納 III A 1	0342E	SK79	口13.0 高4.7 底4.8	1/3	1mm次の砂粒含む	薄茶	軟質	回転糸切り コクロナダ	内外面風化著しい
72	土 師	無台納 III B 2	0342E	SK79	口12.8 高(3.5)	1/3	2mm以下の小礫含む	良			
73	土 師	無台納 III A 1	0342E	SK79	口12.6 高4.5 底5.4	1/4	2mm以下の砂混入	硬	良硬	回転糸切り	外周マンゴシ結核付着 全体に風化著しく元の器型見えない
74	土 師	無台納 III B 2	0342E	SK79	口12.5 層厚3.3	1/2	3mm以下の砂粒やや含む	洗赤灰	良		歪みあり 内外面風化進む
75	土 師	無台納 III B 2	0342E	SK79	口11.7 層厚3.6	1/5	細砂少量	硬	良		風化して調整不明
76	土 師	無台納 II A 1	0342E	SK79	底6.3	底層	2mm以下の砂粒含む	外・暗褐色 内黒	良	外周へう削り後一部ナダ 内面黒色処理・ミゴシ 底面切り難し後へう削り	
77	土 師	無台納	0342E	SK79	底5.5	底層 1/3	砂粒少々混入	洗黄褐色	やや軟質		風化進む
78	土 師	無台納	0342E	SK79	底5.1	底層	1mm以下砂粒含む	洗黄褐色	良	外周部へう削り 回転糸切り	風化進む
79	土 師	小渠 II	0342E	SK79	口13.7	口線 1/4	2mm以下の石灰粒など含む	洗黄褐色	良		
80	土 師	長壁 B	0342E	SK79	口19.5	口線 2/5	砂粒少量に混入	灰白	良		内外周部へう削り
81	土 師	納 II	0342E	SK79	口32.6	口線 1/8	1mm以下の砂粒多く含む	にぶい黄	やや軟質		内外面風化進む
82	中世土師	杯	0347D 20	SD120	底6.5	底層のみ	細砂少量	硬	良	コクロナダ 底面回転糸切り	底面内面黒色「新」あり
83	中世土師	皿	0348E 1	SD120	口8.8 高1.5 底5.8	1/8	1mm以下砂粒多く含む	洗黄褐色	良	コクロナダ 底面回転糸切り	

No	種別	設備	出土地	出土地積算番号	法面幅	残存度	砂土	色調	組成	柱法	その他
84	中世土師	無台杯	0447D25	SD120	底6.8	底部 1/4	精良・砂少ない	明灰一部 黒褐色	良	ロクロナデ	内面に漆状の付着物あり
85	珠洲焼	三平型	0448D8 47D15 47C22	SD136 SD120 SD120-2層 SD136	09.6	口縁 1/2 胴部 1/4	精良 細砂混じる 細砂骨針あり	灰	良	ロクロ成形	肩部に横位の環状把手の痕あり。焼き歪みあり。外面自然釉。口縁に灰かぶりがある付けた残付着
86	須恵	杯型	0447D25	SD120	014.2 埋存高1.6	肩部 1/8	精良 C群	灰黒色	堅緻	ロクロナデ 外面上彫へう削り	
87	土師	無台杯 ⅢA1	0447D20-25	SD120	0(11.2) 高(3.3) 底(5.7)	0/10	1~2mm大の礫含む	灰黄褐色	良堅	回転糸切り	口縁歪む 溝は中堅
88	珠洲焼	壺	0447D20 47D20	SD120 SD127-4層	底8.5	底部 1/2	精良・細砂少し含む 細砂骨針あり	灰	良	ロクロ成形。底部回転糸切り。砂混あり	唇目波状文あり
89	中世土師	無台杯	0447D20	SD127	底7.6	底部のみ	細砂多量	灰白	良	底部回転糸切り ロクロナデ	
90	土師	無台杯 ⅢB2	0447D14	SD127-9層	012.8 高4.4 底4.5	3/4	細砂少量含む	灰黄褐色	良	回転糸切り ロクロナデ	内外風化著しい 口縁歪みあり
91	中世土師	皿	0447D20	SD127-4層	08.8 高2.9 底5.9	1/3	精良 細砂含む	褐色	良	回転糸切り ロクロナデ	
92	中世土師	小皿	0449F17	SD127	07.7 高2.2 底5.4	4/5	細砂多量	にぶい橙	良	回転糸切り ロクロナデ	
93	須恵	瓶	0451D14	SD154-6層	胴部最大径 20.6		細砂多量 C群	外・灰 内・灰	堅緻	外面上へう削り後ナデ	
94	土師	無台杯 ⅢB2	0452E12	SD154-5層	012.8 高4.9 底5.6	2/3	3~5mmの砂粒を少量含む	灰黄褐色	軟質	回転糸切り	内外風化著しい
95	土師	無台杯 ⅢA2	0452E11	SD154	012.3 高4.1 底4.6	1/3	精良・砂少量含む	灰黄褐色	良	回転糸切り	内外風化進む
96	土師	無台杯 ⅢA1	0452E12	SD154-6層	012.0 高4.6 底5.5	1/3	3mm以下砂粒多く含む	にぶい橙	中や軟質		風化著しい
97	土師	無台杯 ⅢA2	0452E12	SD154-5層	011.8 高4.1 底4.9	1/4	1mm以下の砂粒やや含む	明赤灰	良	回転糸切り	内外風化著しい
98	土師	無台杯 ⅢA1	0452D25	SD154	011.0	口縁	2mm以下の砂少量含む	灰黄褐色	良		全体に歪む
99	土師	鉢	0452E1	SD154-5層	016.6	口縁 1/6	精良・2mm以下の砂含む	灰黄褐色	良		内外風化進む この遺物唯一の器形
100	土師	鍋 Ⅱ	0451D25	SD154	032.4	口縁 1/10	良・砂少し入る	灰黄褐色	良	口縁縁ナデ・外部外面ナデ・ホキ目一部	
101	須恵	有台杯 ⅢC	0448D8	SD136	09.8 高5.2 高台外径0.9	1/2	良 B群 白色・黒色粒子 やや多く含む	灰	堅緻	回転へう切り ロクロナデ 蓋台つけロクロナデ	外部口縁直前帯で黒い 高台接地に灰質
102	土師	兵型 A	0448D20	SD136	023.9	口縁 1/2	2mm以下砂粒多量	灰黄褐色	良		
103	須恵	有台杯 ⅠB	0454D18	SD158	埋存高(3.7) 高台外径7.0	口縁無し	良・白色粒子やや含む B群	灰	堅緻	回転へう切り ロクロナデ	高台外周縁地
104	土師	無台杯	0454D23	SD158	底5.9	底部 1/3	3mm以下の砂粒少量はいる	灰黄褐色	良	内面黒色帯電・1ガキ 回転糸切り	内外風化著しい
105	土師	兵型 B	0454E25	SD151	022.1	口縁 1/8	細砂多量	灰黄褐色	良		風化進む
106	須恵	円筒型	0456E11	SD151	胴部口径 9.8	底部 1/4	精良 C群	灰	堅緻		断面光沢あり 墨付着
107	須恵	壺	0444E20	44E20-P2	032.5 胴部最大径 55.5	032.5 胴部最大径 55.5	8mm以下の石質主体 砂礫含む C群	上・黒灰 下・灰 内・灰	良	口縁縁ナデ 外部外面平行叩き目 内面同心円面器具痕	
108	土師	無台杯 ⅢB2	0454E	SK161	0(12.8) 高(4.1) 底(6.1)	0/10	2mm以下の小礫多く含む	明褐色	不良	回転糸切り	内外風化進む 口縁歪む
109	土師	無台杯	0455E	SK161	底5.2	底部	砂粒少量混じる	外・灰白 内・黒	良	回転糸切りのち底・下平 へう削り ナデ	
110	須恵	有台杯 ⅡA	0461E	SK180	高台外径6.4	底部のみ	1~5mm石末など多量 に含む A群	堅緻	回転へう切り ロクロナデ		内周接合・曇り付着

No	種別	器種	出土地	出土遺物番号	法量(㎝)	残存度	胎土	色調	焼成	技法	その他
111	須恵	煎	095 F	SK165	胴部最大径 21.2	胴部 1/5	2~3mmの緑少量含む C群	外・黒灰 内・明灰	堅軟	外面へう割り	外面自然蝕
112	須恵	甕	095 E 24	SD157	口径 61.7	1/8	4mm以下の白色砂粒多 く含む C群	灰	堅軟		外面自然蝕かか
113	須恵	煎	096 D	SK183-2層と 3層の間	胴部最大径 53.0 遺存高50.7	胴部なし 1/3	緑白 C群	外・黒灰 内・灰	堅軟	外面平行叩き目 内面当て具痕やや平行	底部外面に、裏の底部に敷か れてきた須恵厚層破片が接着
114	中世土師	無台碗	0947 D20	SD120	径4.8	底部 1/2	緑砂多い	にぶい、黒	良		
115	土師	無台碗 II B 2	0956-57 F	SK167	口径 14.6	3/8	3mm以下の石灰粒など 砂粒含む	灰白	良		内外風化進む
116	土師	無台碗 III A 2	0951 E 17	SD149-3層	口径 13.1 高4.4 径3.6	1/7	3mm以下の砂礫や含む	灰白	良	回転未切り	内外風化著しい
117	土師	無台碗 III B 2	0944 D	SD98	口径 12.4 高4.0 径5.2	1/2	精白	灰白色	良	回転未切り後ナデ ロクロナデ	
118	土師	無台碗 III A 2	0957 E 24	SK168	口径 12.3 高4.0 径4.8	1/6	緑砂少量はいる	灰白	良	回転未切り	
119	土師	無台碗 III B 2	0941 D3	SD99	口径 11.2	口縁 1/9	1mm以下の砂混入	明褐色	軟質		風化進む
120	土師	無台碗III	0952 D11	SD155-1層	径5.2	底部	精白	淡黄緑	良	回転未切り	内外風化著しい
121	土師	無台碗 III	0958 F	SK171	径4.8	底部 1/2	1mm以下の砂少量混じ る	黄褐色	軟質	回転未切り	風化進む
122	土師	小甕	0945 F	SK95	径5.8	底部のみ	2mm以下の石灰粒多 く含む	外・赤灰 内・黒	良	回転未切り	
123	土師	長甕 B	0942 D25	SB83-P 4	口径 24.0	1/10	砂粒多量に含む	黄褐色	良		内外風化著しい
124	土師	長甕 B	0955 F	SK165	口径 23.2	口縁 1/6	2mmの砂礫多量	黄褐色	軟質		風化進む
125	土師	長甕 B	0941 F	SK92	口径 21.6	口縁 1/9	2mm以下の砂多い	黄褐色	軟質		風化して調整不明
126	土師	小甕 I	0942 E	SK73	口径 15.7	口縁 1/6	3mm以下の砂多く入 る	にぶい軟質			風化進む
127	土師	鉢 II	0942 E 6	42E6-P1	口径 38.3	口縁 1/10	10mm以下の石灰など 砂礫多量	黄褐色	やや良	内面のみ目 外面下叩きのち一部削り	
128	珠洲焼	壺	0947 E	S E 110	残存体最大 径34.8	体部破片	厚層青銅あり。5mm以 下の砂礫や含む	灰	良	叩き痕あり。叩き目を 剥き・剥ぎ。底部形状はロ クロナデ成形	目数9目の跡目没文あり
129	須恵	有台杯 I A	0949 F1-III c		口径 14.2 高4.0 高台11.0	1/3	黒・白色の小礫3mm以 下少量含む C群	灰	良	回転へう割り ロクロナデ	高台内端部 焼き込みあり
130	須恵	有台杯 II A	0953 C14- III c ~ IV		口径 11.4 高3.5 高台外径6.9	1/4	砂粒多量含む	灰	良	回転へう割り ロクロナデ	高台内端部 内面と高台内側に鉄・マンガ ン結核が付着
131	須恵	有台杯 II B	0942 D16- III c		口径 13.0	口縁 1/6	白色細砂含む	外・灰 内・灰	堅軟	ロクロナデ	小胎産
132	須恵	有台杯 II A	0957 C11-17- III c		高台内径6.0	底部 2/3	3mm以下の小礫混入 砂多	外・灰 内・黒灰	良	回転へう割り	高台内端部
133	須恵	無台杯 I B	0961 D11- 60 D15-IV		口径 13.7 高4.2 径3.8	1/2	黒・白色粒子含む	黒灰色	堅軟	回転へう割り ロクロナデ	口縁外縁面を焼きで黒灰色 外面体部下層部 小胎産
134	須恵	無台杯 II A	0961 E6-III c		口径 12.6 高3.0 径2.8	口縁 約半分	やや良 C群 最大3mm大の礫をば じり砂多	良 やや軟質	良	回転へう割り ロクロナデ	外面口縁面を焼きで黒色 底部にへう記号×
135	須恵	無台杯 II A	0960 E15-III c		口径 12.3 高3.5 径3.8	底部 3/4	径3mm大の礫混入 白色粒子含む C群	灰	やや軟	回転へう割り後調整ナデ ロクロナデ	外面底部面を焼きで黒灰色
136	須恵	無台杯 II A	0942 E5-III c		口径 12.1 高3.4	1/7	砂粒少量含む C群	黒灰	堅軟	回転へう割りのちナデ削 し ロクロナデ	瓶上に乗せた痕
137	須恵	無台杯 II A	0961 E2-		口径 12.6 高3.3 径5.8	1/7	精白 C群	明褐色	やや良	回転へう割り ロクロナデ	外面口縁面を焼きで黒灰色 やや軟質
138	須恵	無台杯 II A	0942 E5-III b		口径 12.0 高3.2 径2.5	2/3	精白 C群	黒	良	回転へう割り	焼成不十分で土層部に近い 焼き込みあり

No	種別	用途	出土地	国土建機番号	試験種	残存率	組成	色調	構成	検査	その他
139	灰 恵	無台杯 II A	0061E16・IIIc		□12.7 高3.2 底7.6	1/2	良 1mm以下の砂粒含む C群	灰	良 やや甘い	回転へう切り コクロナデ	底部へう記号×
140	灰 恵	無台杯 II A	0061D6・ IIIc～IV		□11.7 高3.2 底6.6	底部 口縁 2/5	精良 C群	灰	堅緻	回転へう切り コクロナデ	口縁外部重ね焼きで黒い 底部へう記号×
141	灰 恵	無台杯 II A	0060E10・IIIc		□11.8 高3.6 底6.7	1/8	精良 C群	灰～赤灰色	良	回転へう切り コクロナデ	口縁外部重ね焼きで暗灰色 底部へう記号×
142	灰 恵	無台杯 II A	0061D11・IV		□11.7 高(3.3) 底6.2	1/5	良 C群 白色粒子含む	灰	堅緻	回転へう切り コクロナデ	
143	灰 恵	無台杯 II A	0061D11・ IIIc～IV		□11.5 高3.1 底7.4	1/6	3mm大の小礫 白色細粒多く含む C群	灰	堅緻	回転へう切り コクロナデ	口縁外部重ね焼きによる黒灰 色底面へう記号×
144	灰 恵	無台杯 II A	0060D10・IIIc		□11.5 高3.5 底7.8	1/2	精良 C群	灰	堅緻	回転へう切り コクロナデ	口縁外部重ね焼きで黒色 底面へう記号×
145	灰 恵	無台杯 II A	0061D1・IV 61D15・III		□11.4 高3.3 底7.5	4/5	精良 C群 白色粒子含む 0.5～1mm	灰	堅緻	回転へう切り コクロナデ	口縁外部重ね焼きで黒色
146	灰 恵	無台杯 II B	0040D18・IIIb		□12.4 高3.5 底7.4	2/3	精良 B群	灰 灰	堅緻 堅緻	回転へう切り コクロナデ	口縁外部重ね焼きで黒色 小治産
147	灰 恵	無台杯 II B	0041E9・IIIc		□12.2 高3.3 底6.1	1/4	精良 B群	灰	堅緻 一部砂み	回転へう切り コクロナデ	内外面に鉄・マンガン結核付 着 小治産
148	灰 恵	無台杯 II B	0046G2・3・12		□12.0 高3.1 底7.4	1/7	白色細粒含む B群	暗褐色	不良	回転へう切り コクロナデ	切り難し或明瞭 部健全体薄い 小治産
149	灰 恵	無台杯 II B	0045G2		□11.9 高3.1 底6.0	1/2	良・白色粒子含む B群	灰	堅緻	回転へう切り コクロナデ	静電質い 小治産
150	灰 恵	無台杯 II B	0042E1・IIIc		□11.2 高3.7 底6.4	1/3	精良 B群	灰	堅緻	回転へう切り コクロナデ	口縁外部重ね焼きで黒色 内面に黒色吹き出し 小治産
151	灰 恵	短頸型	0060D15・IIIc		□11.6 口縁 1/2		4mm以下の砂粒比較的 含む C群	灰・緑灰 灰・内・灰	良	コクロナデ	内外面黒色吹き出し 外周自然釉
152	灰 恵	短頸	0060E18・IIIb		高台外径9.0	底部 1/3	3mm以下の白色砂粒含 む C群	灰 内・灰 外・暗灰	堅緻	外周体部下へう削り 回転へう切り コクロナデ	高台外周緑地
153	灰 恵	杯蓋	0061E3・IIIb		□18.6	1/7	1～5mmの砂粒多い A群	灰	堅緻	コクロナデ	外周端部重ね焼きで黒色
154	灰 恵	杯蓋	0060D20・IIIb		□13.0 高3.0	端部 1/7欠	白色粒ごく少量含む B群	灰	良	外周ナデ 外周上部へうケズリ 切り直し不明	内面中央部底面42mm厚らかに 厚焼
155	灰 恵	杯蓋	0060E15・IIIc		□12.7	外周 1/4	1mm大の砂粒多く含む C群	赤灰色	堅緻	外周上部へう削り	外周上部自然釉 内面使用により器壁薄らか
156	灰 恵	杯蓋	0061E6・IIIc		□12.2	1/10	1mm大白色砂粒多量に 含む C群	外・灰 内・青灰～ 赤灰	堅緻	外周ナデ へう削りか コクロナデ	外周端部重ね焼きで黒色
157	灰 恵	長頸型	(5)		□15.1 口縁 1/4		2～6mmの石灰を中心 とした粒多量を含む C群	赤灰色	良	コクロナデ	
158	灰 恵	長頸型	0040D18・IIIb		□10.6 口縁 1/4		細砂多量 C群	黒灰	良	コクロナデ	
159	灰 恵	長頸型	0055F14・IIIb		□9.4 口縁 1/5		細砂多く含む	にぶい塩	不純収質		バインダー処理前 酸化炭素質
160	灰 恵	長頸型	0047E4・IIIb 42E5・IIIc 42E11・I～ III		割部最大径 17.4	割部 1/4	良 C群 白色粒子0.5～1.5mm や含む	外・暗灰 内・明灰色	堅緻	外周へう削り	
161	灰 恵	換瓶	0040E12・IIIb		□12.1 口縁完 割部欠		白色粒子多く含む B群	外・灰 内・灰	堅緻	口縁ナデ 外面輪子印き 内面段内門当て具痕	各部外周自然釉
162	灰 恵	蓋	0060F3・IIIb		□26.8 口縁 1/10		精良 C群	暗灰	堅緻	コクロナデ	

No	種別	器種	出土地	出土遺構番号	出量(m ³)	採存量	動土	色調	構成	技法	その他
163	灰	壱	045E21-Ⅱb		口23.4 胴部最大径 49.4	口縁一部 胴部上半 2/5	最大5mmの礫を最高 に白色砂多い C群	外・暗灰 内・灰	堅緻	外周唇子印キ目 内面同心内面て具儀	
164	灰	壱	044 F 15 49D6など・ Ⅱb		口21.2 高(推定) 46.2 胴部径 (47.7)	3/5	白色の砂礫多い C群	外・灰褐色 内・灰	堅緻	内・平行印キ目 外・同心内文	
165	土	無台陶 ⅡA 1	042E 11		口15.9 高5.8 底5.2	口縁 1/5 底部 1/5	最大5mmの砂少量	にぶい橙	やや不良	回転糸切り	風化して異態不明
166	土	無台陶 ⅡA 2	042E5-Ⅱb		口15.2 高4.4 底5.5	2/3	細砂少量	内・黒～褐 外・灰黄緑	良	内面ミガキ 回転糸切り後ヘリ削り	外面風化著しい
167	土	無台陶 ⅡB 2	0440D9-Ⅱb		口15.8	口縁 1/5	精良	外・灰白 内・黒	良	内面黒色処理・ミガキ	外面風化激しい
168	土	無台陶 ⅡA 1	047D7-Ⅱb		口15.4 高6.0 底6.2	1/3	2mm以下の砂粒多く含む	灰黄緑	やや軟質	内面黒色処理・ミガキ 回転糸切り	内外面風化著しい
169	土	無台陶 ⅡA 2	042E16-Ⅱb		口14.4 高5.1 底5.8	1/5	3mm以下の砂粒少量	外・灰黄緑 部分的に明 褐色 内・黒	やや不良	外周一部ヘリ削り 内面黒色処理 ていねいなミガキ ロタム削り	外面風化進む
170	土	無台陶 ⅡB 2	042E5-Ⅱb		口14.0 高4.2 底5.6	9/10	細砂少量	灰黄緑	良	回転糸切り	内外面風化進む
171	土	無台陶 ⅡA 2	044F18-Ⅱc		口13.8 高3.8 底7.7	1/8	3mm以下の砂粒多く含む	灰黄緑	良	回転糸切り	内外面風化進む
172	土	無台陶 ⅢB 2	039E25-Ⅱc		口13.7 高3.7 底6.8	1/2	3～5mm以下の石英な どの砂粒多い	灰白	不良	回転糸切り	内外面風化著しい 回転糸切り後粗く磨土磨りつけ
173	土	無台陶 ⅢB 2	041E16-Ⅱc		口13.7 通径高4.0	口縁 1/5	2mm以下の砂礫多く混入	灰黄緑	軟質		風化進む
174	土	無台陶 ⅢB 2	045F11-Ⅱb		口13.6 高4.1 底7.4	1/3	精良 4mm次の礫あり	灰黄緑	良・ やや軟質		内外面風化進む
175	土	無台陶 ⅢB 2	042E4-Ⅱb		口13.5 高4.2 底5.2	1/2	石英・金雲母小粒混入	灰黄緑	良	回転糸切り	
176	土	無台陶 ⅢA 2	042E4-Ⅱb		口12.9 高4.0 底5.1	1/2	1mm以下の細砂少量	灰黄緑	良		内外面風化
177	土	無台陶 ⅢB 2	042E4-Ⅱb		口12.8 高3.8 底4.4	1/10	3mm以下の砂粒多く含む	灰白	軟質	回転糸切り	内外面風化して不明
178	土	無台陶 ⅢB 2	1990年51 T		口12.6 高4.3 底4.8	1/3	3mm以下の砂粒多い	にぶい橙	軟質	回転糸切り	風化進む
179	土	無台陶 ⅢB 2	042E4-Ⅱb		口13.8 高4.2 底5.0	底部 口縁あり	3mm以下の砂礫含む	外・橙 内・灰黄緑	不良	回転糸切り	内外面風化進む
180	土	無台陶 ⅢA 2	042E11-Ⅱ		口12.2 通径高3.3	口縁 通径高3.3	4mm以下の砂粒含む	灰黄緑	軟質		内外面風化進む
181	土	無台陶 ⅢA 2	035F4-Ⅱb		口12.0	口縁 1/5	細砂多く含む	灰黄緑 内・黒	良	内面黒色処理・ミガキ	外面口縁も黒炭
182	土	無台陶 ⅢA 2	042E5-Ⅱb		口12.0	口径完形	黒色細砂粒多く含む	灰黄緑	良	回転糸切り	口縁磨みあり
183	土	無台陶 ⅢB 2	039E4-Ⅱb		口11.6 高3.9 底5.4	1/5	砂礫混入	灰白	軟質	回転糸切り	内外面風化著しい
184	土	無台陶 ⅢA 1	0440D9-Ⅱb		口11.7 高4.2 底5.2	2/3	精良	淡赤灰	良	回転糸切り	内外面風化著しい
185	土	無台陶 ⅢA 1	042E 3		口11.6 高3.7 底5.0	1/10	2mm以下の礫少量含む	灰黄緑	不良	回転糸切りか	全体に風化進む

No	種別	部種	出土地	出土遺跡番号	遺層付	残存度	胎土	色調	焼成	技法	その他
186	土師	無台焼 I A 1	G55 F 4・III b		底7.2	底部	1mm以下の細砂混入	外にふい、内 内黒	良	表面・底部へう削り 内面黒色処理・丁寧な ゴキ	
187	土師	無台焼 III A 1	G44 D3・III b		底5.1	1/3	砂粒多く混入	灰白	不良・軟質	回転糸切りか	風化進む
188	土師	無台焼 III A 1	G54 E 10		底4.4	1/2	1mm以下の砂粒多く含 む	灰黄澄	良	回転糸切り	底部内面に糸切りを用いた赤 の圧痕あり
189	土師	無台焼 II	G44 E3・III b		底5.4	底部 1/3	2mm以下の砂粒や灰 入	外・灰黄澄 内・黒	良	回転糸切り裏へう削り 内面黒色処理・丁寧な ゴキ	
190	土師	無台焼	G47 E6・III b		底4.4	底部 1/4	細砂多量	灰白	中や良	回転糸切りか ロクロナデ	内外面風化進む
191	土師	小甕	G40 D9・III b		底6.4	底部 1/2	3mm以下の砂や灰入	外・灰赤 内・黒	良	回転糸切り ロクロナデ	風化進む
192	土師	兵衛 B	G40 D3・III b		G24.1	口縁 1/5	3mm以下石灰砂粒多く 含む	緑灰	良		内外面風化
193	土師	兵衛 B	G40 D9・III b		G23.4	口縁 1/5	2mm以下の白色砂粒や や目立つ	灰黄澄	良	鑿部ホキ目	内外面風化著しい
194	土師	兵衛 B	G42 D2・F		G22.9	1/8	砂粒少々混入	にぶい緑	良	内外面鑿部ホキ目 口縁ナデ	
195	土師	兵衛 B	G40 E24・III b		G21.8	口縁 1/12	5mm以下の砂多く石灰 多い	にぶい緑	軟質	内面鑿部ホキ目残る	風化進む
196	土師	兵衛 B	G45 F14・III c		G21.6	口縁 1/3	2mm以下の砂粒含む	灰黄澄	良		
197	土師	兵衛 B	G46 E 16		G21.4	口縁 1/7	4mmほどの小硬あるが 砂少ない	緑	良	内外面鑿部ホキ目 内面ホキ目をナデ消す	
198	土師	兵衛 B	G40 D3・III b		G21.4	口縁 1/5	3mm以下砂粒多い	にぶい緑	やや軟質		風化進む
199	土師	兵衛 B	G43 D4・III b		G21.2	口縁 1/16	灰多多く石灰・細砂含 む	灰黄澄	良		内外面風化著しい
200	土師	兵衛 B	G41 E3・4		G21.3	口縁 1/6	底1～2mmの白色砂子・ 小粒含む	灰黄澄	軟質		内外面風化進む
201	土師	兵衛 B	G42 E24・III c		G20.8	1/8	3mm以下の石灰めだつ	緑灰	良	内外面鑿部にホキ目	
202	土師	小甕 B	G45 E16・I ～III b		G20.3	1/14	細砂多量	外・緑灰 内・灰黄澄	良	口縁ナデ 表面鑿部ホキ目	
203	土師	兵衛 B	G40 D9・III b		G19.6	口縁 2/15	4mm以下の砂粒多く含 む	灰黄澄	不良		風化著しい
204	土師	小甕 II	G86 D18・19・ III		G13.4	口縁 1/8	最大6mmの砂多い	黒	良		
205	土師	小甕 II	G42 E2・I ～III		G12.0	口縁 1/5	2mm以下の砂粒多く混 入	灰黄澄	良		風化進む
206	土師	小甕 II	G45 E11・III b		底7.1	底部 1/4	3mm以下の砂粒多く入 る	にぶい緑	中や軟質	回転糸切り	外面風化進む
207	土師	小甕	G43 E11・II a		底5.2	底部のA	細砂多量含む	灰赤～灰白	不良	回転糸切り	外面風化進む
208	土師	鍋	G40 D13・III b		G(46.4)	口縁 1/16	3mm以下の砂粒や含む	緑灰	中や不良	内面鑿部にホキ目ある	
209	土師	鍋	G42 E4・III b		G41.0	口縁 1/16	5mm以下の砂粒多く混 入	黄緑	良		
210	土師	鍋	G40 D16・III b		G38.6	口縁 1/14	5mm以下の砂粒混入	灰黄澄	軟質		風化進む調整不明
211	土師	鍋	G40 D24・III b		G37.0	口縁 1/20	2mm以下の砂粒多量含 む	灰黄澄	中や軟質	内面鑿部に鑿ホキ目	風化著しい
212	土師	鍋	G43 D9・III b		G35.8	口縁 2/25	4mm以下の砂粒多く含 む	にぶい緑	良	外面口縁ナデ	風化進む
213	土師	鍋	G40 E4・III b		G32.4	口縁 1/10	3mm以下の砂粒多く含 む	灰白	中や不良		内外面風化著しい
214	土師	鉢	G65 F1・ 50 F3・10・F		G15.2	口縁 1/2	1～3mmの粒含む	灰白色	中や良	ロクロナデ	
215	珠河	磁鉢	G45 F11・ F11		底13.2	底部破片 1/6	漆繪骨針あり	灰	良	外面ロクロナデ 内面全面にオロン目 停止糸切り	目数8目のおろし目が見 られる
216	珠河	磁鉢	G45 F11		底12.2	底部破片 1/3	漆繪骨針あり	灰	良	外面ロクロナデ 内面中央から放射状にオ ロン目 停止糸切り	目数13目のおろし目が見 られる

木器観察表

No	種別	部 位	出土位置・層位	出土遺構(遺構番号)	備 考	注 量 (最大値)	そ の 他
217	非 戸 枠	N419杭	(9)	SE160	スギか	高さ83.6 長軸6.2 短軸4.9	
218	非 戸 枠	N434側板	(9)	SE160	スギか	長さ107.3 幅30.3 厚さ4.6	
219	非 戸 枠	N43側板	(9)	SE160	スギか	残存高92.2 幅10.8 厚さ1.8	
220	非 戸 枠	N43側板	(9)	SE160	スギか	長さ56.7 幅15.0 厚さ1.9	
221	非 戸 枠	N433	(9)	SE160	スギか	高さ68.8 長軸7.6 短軸3.6	
		縦木幅板					
222	非 戸 枠	N411 外側横枠	(9)	SE160	スギか	残存高46.7 幅3.2 厚さ2.0	
223	非 戸 枠	N41 内側横枠	(9)	SE160	スギか	高さ59.6 長軸3.7 短軸3.0	
224	木 製 品	円形曲物	(5)	SE106	側板 杉か松か 楡 板か榎か	高さ25.2 (内側板材) 17.2 (外側板材) 長径57.5 短径52.4 厚さ0.6 (外側板材) 0.7 (内側板材)	
225	木 製 品	方形曲物	(9)	SE160	側板 杉か松か 楡 板か榎か	高さ25.2 長径58.4 短径46.2 厚さ1.0	
226	木 製 品	吉串	(5)	SE69	杉か松か	残存高12.3 幅1.8 厚さ0.2	
227	木 製 品	箸	(5)46E 6	SE104	スギか	残存高18.9 径9.6	
228	木 製 品	箸	(5)46E 6	SE104	スギか	長さ21.5 長径9.4 短径0.7	
229	木 製 品	箸	(5)	SK109 炭化物層	スギか	残存高13.5 長径0.6 短径0.4	
230	木 製 品	箸	(5)46F 9	SK108 3層	スギか	残存高18.9 径0.6 榎目で断面方形。四角く削り取りされ、角も潤滑される。	
231	木 製 品	箸	(5)46F 9	SK108 4層	カンカ	残存高16.0 長径2.2 短径2.1 榎目で断面方形の筋彫状木製品である。	
232	木 製 品	柶類	(5)	47G-P 1	クワ	残存高73.9 径56.3 丸太材を14面に削り加工。風化著しく詳細な調査不明。	
233	木 製 品	柶類	(5)	47G-P 2	クワ	残存高76.5 長径65.7 短径52.3 丸太材を14面に削り加工。風化著しく詳細な調査不明。	
234	木 製 品	柶	(5)	SD127	スギか	残存高34.6 丸太材。側面は厚形を留める。上端面は削食して厚形不明。下端部は斜めに切断される。 長軸5.8 短軸5.7	
235	木 製 品	柱根	(5)46E 12	46E-P 4	スギか	残存高48.8 長軸11.2 短軸7.7 丸太材を加工。厚形が不整形だったらしく、加工面と自然面が併存する。	
236	木 製 品	柱根	(5)	SD127	スギか	残存高56.9 長軸3.8 短軸2.7 榎目で断面方形で、四方の側面は平らに加工される。	

石器観察表

No	種別	部 位	出土位置・層位	出土遺構	注 量	石 材	状 態	備 考
237	石 器	磨石・ 砥石	(5)42D 14	SK184 古墳	長さ29.25 幅2.9 厚さ6.9	花崗岩	完形	上端面に叩き面・下端面に磨り面
238	石 器	砥石	(5)46S17・田c		高16.4 幅7.0 厚さ6.4	安山岩	完形	上端面および側面側に叩き面あり
239	石 器	砥石	(5)41E 5	SK70	残存高 10.6 幅5.1 厚さ3.2	凝灰岩	欠損	砥石の一部分か。断面長方形で四隅いずれも磨られている。上端面は自然面のまま。下端面は欠損
240	石 器	砥石	(5)37E 1	SD151	長さ5.6 幅4.6 厚さ2.1	凝灰岩	完形	側面方側・前面に磨り面あり
241	石 器	砥石	(5)51F 2	SD60 1層	残存高1.1 幅2.2 厚さ2.9	凝灰岩	欠損	砥石の一部分か。断面長方形で上面および上端面が磨られている。裏面が欠損
242	石 器	砥石	(5)48E 9・田b		残存高1.9 幅2.7 厚さ2.3	凝灰岩	欠損	砥石の一部分か。三面が磨られている。
243	石 器	磨石	(5)44F24・Na		高さ8.6 幅50.5 厚さ3.0	軽石	完形	断面台形。二面が磨られる。
244	石 器	磨石	(5)44F24・Na		高さ9.9 幅6.4 厚さ4.5	軽石	完形	断面台形。二面が磨られる。

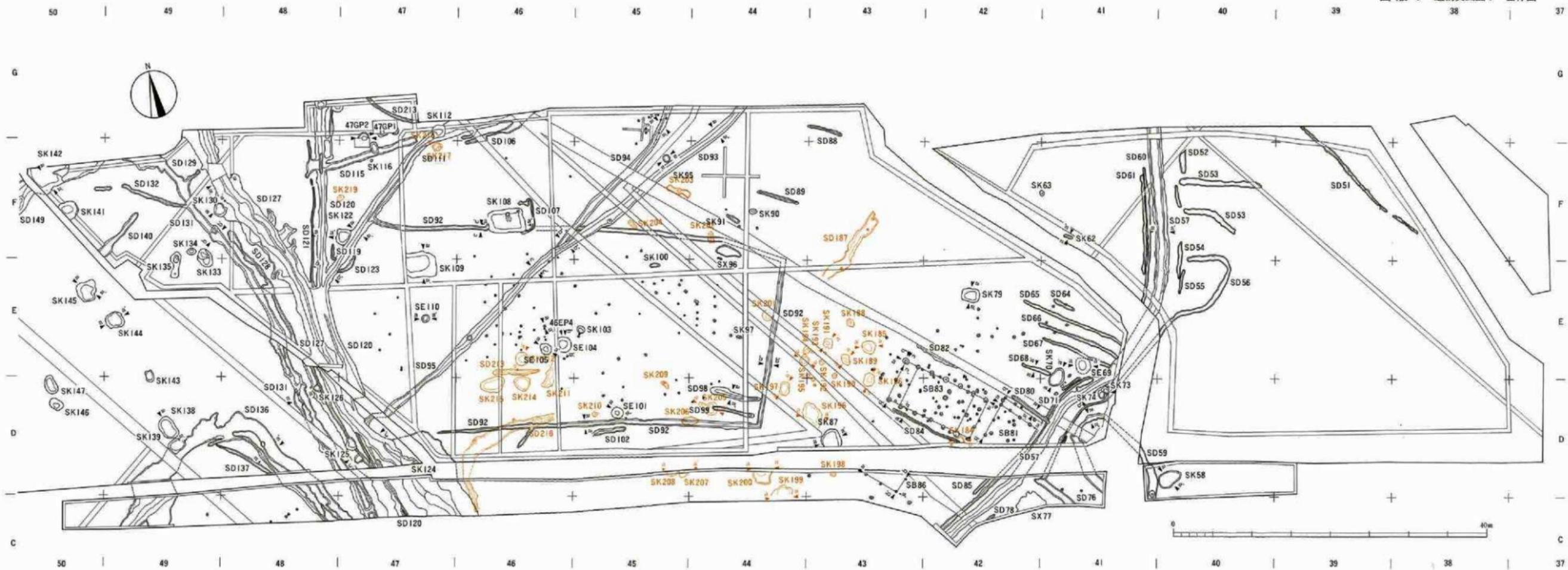
No	種別	部 位	出 土 地	出土遺構番号	注量(4)	残存状態	土 質	色 調	焼 成	技 法	そ の 他
245	土 製 品	輪引口	(5)52F 10	SD154・2層	遺存高7.5 外径5.5~ 7.05 内径2.4	先端部	砂少量で砂岩のよう	灰 先端は黒 一部赤黄	良		溝に粘土を巻き付けて製作 外は12面をもつ 取付工具を巻いて固めたか 先端に筋彫り付
246	土 製 品	輪引口	(5)45C21・田c		外径7.0 内径2.3	先端 1/3	細砂少量で砂岩のよう	灰・先端 は緑黄色			先端は削けた状態で付着 外側は熱により歪立つ

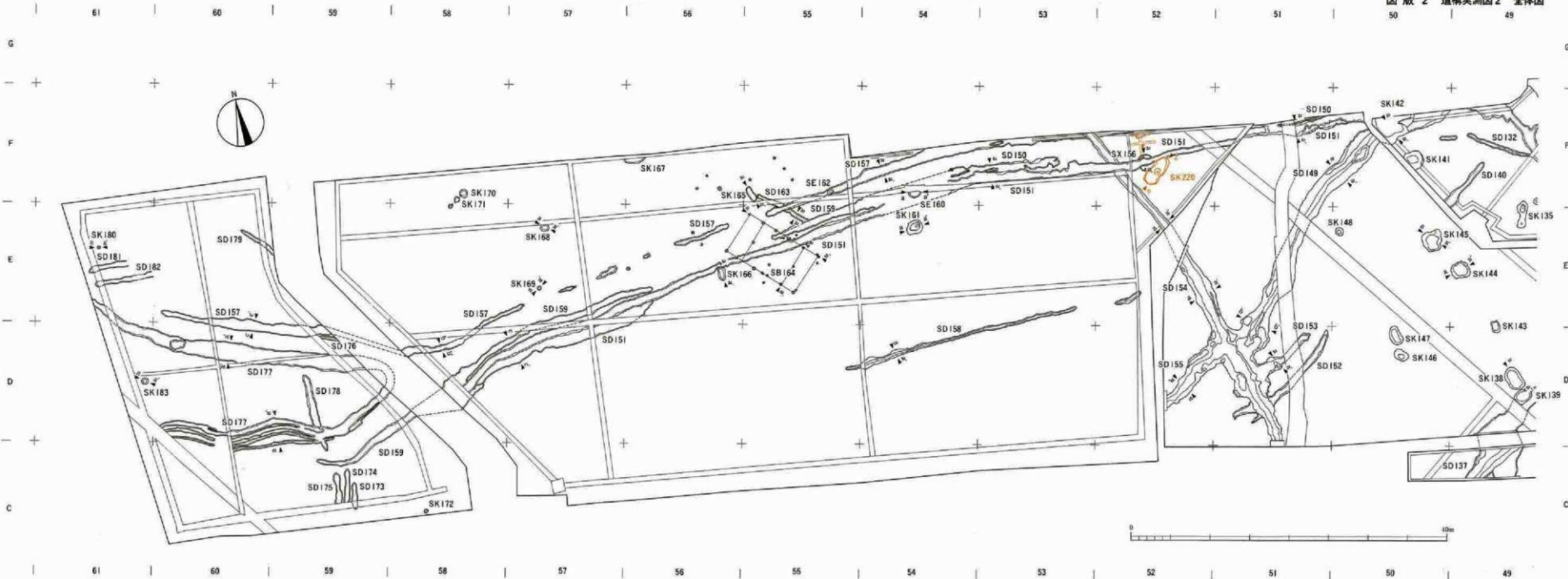
引用・参考文献

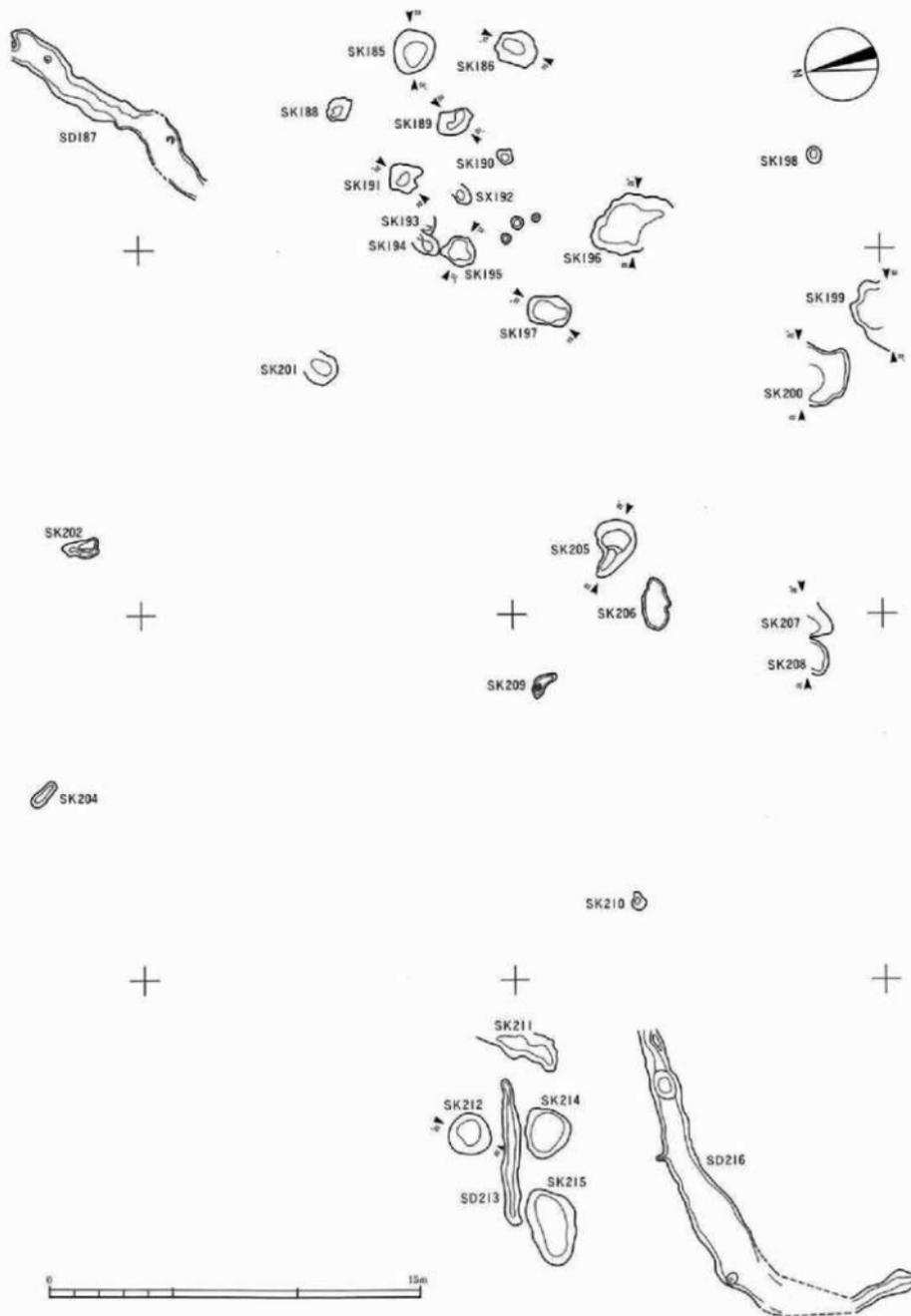
- ア阿部洋輔・田村裕ほか 1987 「中世の舞台」・「鎌倉武士と荘園」『新潟県史』通史編2 新潟県
 甘粕健・川村浩司ほか 1992 『古津八幡山古墳Ⅰ』 新潟市教育委員会
 甘粕健・荒木勇次ほか 1989 『保内三王山古墳』 三条市教育委員会
 植村敏秀・中村豊次郎ほか 1978 「蒲原低湿地帯における集落立地—亀田郷の場合—」
 『新潟県文化財調査年報17 亀田郷』 新潟県教育委員会
- 小村 弼 1983 「都市の統制」『幕藩体制の基礎的研究』 吉川弘文館
 温古談話会 1893, 1977復刊 『温古の采』(下) 歴史図書社
- カ川上貞雄ほか 1989 「考古」『新潟市史』資料編第1巻 新潟市
 木村茂光 1982 「大開墾時代の開発—その技術と性格—」『技術の社会史』1 有斐閣
 木村宗文 1986 「越後国延喜式内社の所在をめぐって」『政治社会史論叢』
 山田英雄先生退官記念会編 近藤出版社
- 木村宗文 1988 「古代蒲原郡の郷と式内社」『新潟中央高等学校研究年報』35
 木村宗文・竹田和夫・田村裕 1989 「文献」『新潟市史』資料編第1巻 新潟市
 木村宗文 1989 「城館跡」『新潟市史』資料編第1巻 新潟市
 小池義人ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 細池遺跡・寺道上遺跡』
 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小山正忠・竹原秀雄 1991 『新版標準土色帖1991年版』
 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・日本色研事業株式会社
- キ坂井秀弥・戸根与八郎ほか 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・
 子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 一之口遺跡西部地区』 新潟県教育委員会
 坂井秀弥ほか 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三貫Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会
 本田高志 1991 「越後の中世土器器」『新潟考古学談話会』第8号 新潟考古学談話会
 鈴木郁夫 1974 土地分類基本調査『新潟』新潟県農地部農地建設課
 鈴木郁夫 1989 「自然」『新潟市史』資料編第1巻 新潟市
 鈴木俊成・春日真実ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』
 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 関 雅之ほか 1989 『新五兵衛山遺跡Ⅰ』 新潟県豊栄市教育委員会
- ク田嶋明人ほか 1986 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
 田村 裕 1988 「中世越後国の地域構造」『北日本中世史の総合的研究』
 昭和61～62年度科学研究補助金研究成果報告書 代表羽下徳彦 東北大学文学部
- ク中蒲原郡役所 1915～1918, 1986 復刊 『中蒲原郡誌』新潟市編 臨川書店
- ク永田聡・神田章ほか 1973 土地分類基本調査『新潟』新潟県農地部農地計画課
 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代編』 資料第27冊
 新潟県 1983 『新潟県史』資料編4
 新潟県 1986 「『新潟県史』 資料編 中世 補遺(一)」『新潟県史研究』第19号
 新潟古砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡—新潟砂丘の形成史—」
 『第四紀研究』13-2 日本第四紀学会
- クハ藤塚 明ほか 1987 『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』 新潟市教育委員会
- クマ南 久和ほか 1975 『金沢市高島遺跡 第1・2次発掘調査報告書』 石川県金沢市教育委員会
 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』 No. 2
 日本貿易陶磁研究会
- クヤマ山田英雄 1981 「延喜式の弥彦神社について」『かみくむし』第43号 かみくむしの会
 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
 吉田東吾 1902 『大日本地名辞書』 富山房

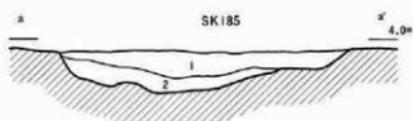
図 版

- 1 遺構平面図と断面図は原則的に対照できるように配置した。
- 2 遺物実測図は古墳時代から順に遺構別に掲載し、遺構外出土を後に一括した。
- 3 土器の表現
 - ・ロクロ調整のカキ目は定規で描き、それ以外のハケ目等は原則的にフリーハンドで表した。
 - ・土器の復元実測は、口縁部の遺存率が口径の1/10以下の個体では口径復元が困難な場合があるため、図の中心線と口縁・絞線・調整の線を離した。
 - ・須恵器の断面は墨で表した。
 - ・白磁と須恵器の胎土で橙色に焼けた製品には、断面に網掛けした。





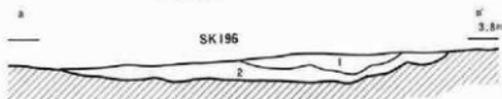




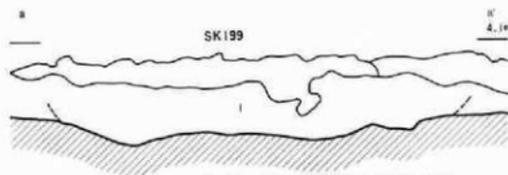
1 赤色粘土 (酸化鉄多量に含む)
2 赤色粘土



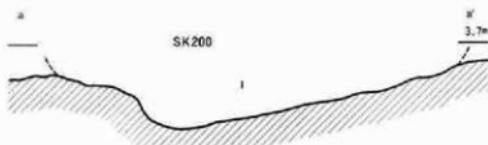
1 灰白色シルト (炭化物少量含む)



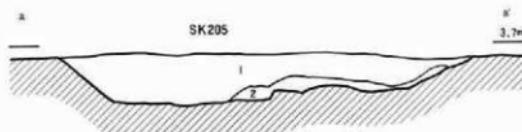
1 灰白色粘土 (酸化鉄少量含む)
2 灰白色シルト



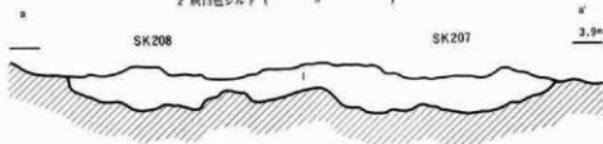
1 灰白色シルト質粘土 (酸化鉄含む・炭化物少量含む)



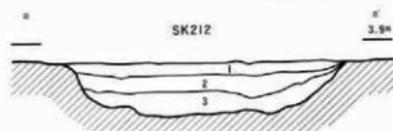
1 灰白色シルト質粘土 (酸化鉄含む・炭化物少量含む)



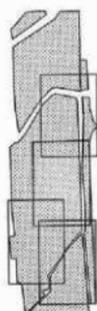
1 灰白色粘土 (酸化鉄・炭化物少量含む)
2 灰白色シルト

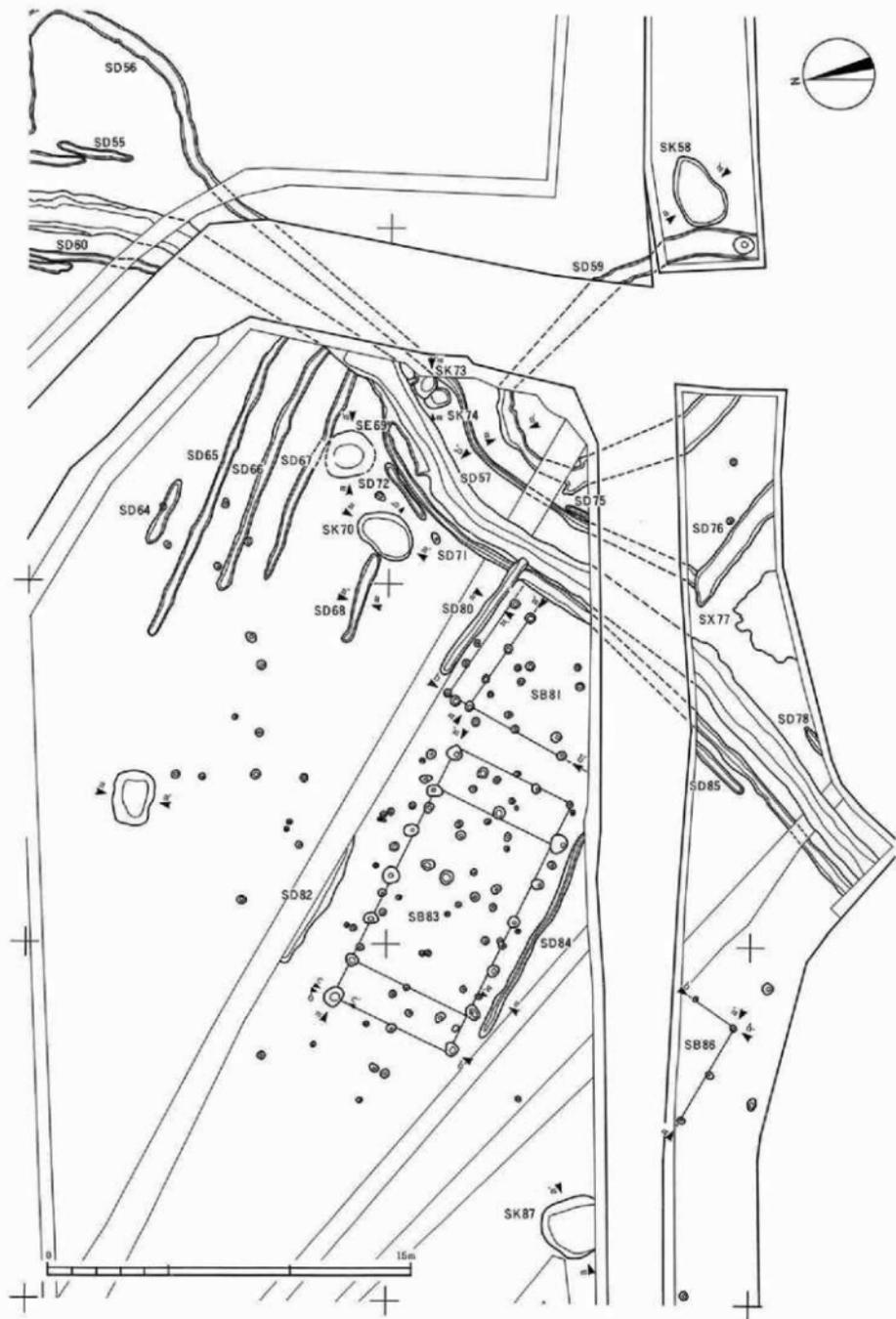


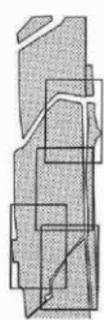
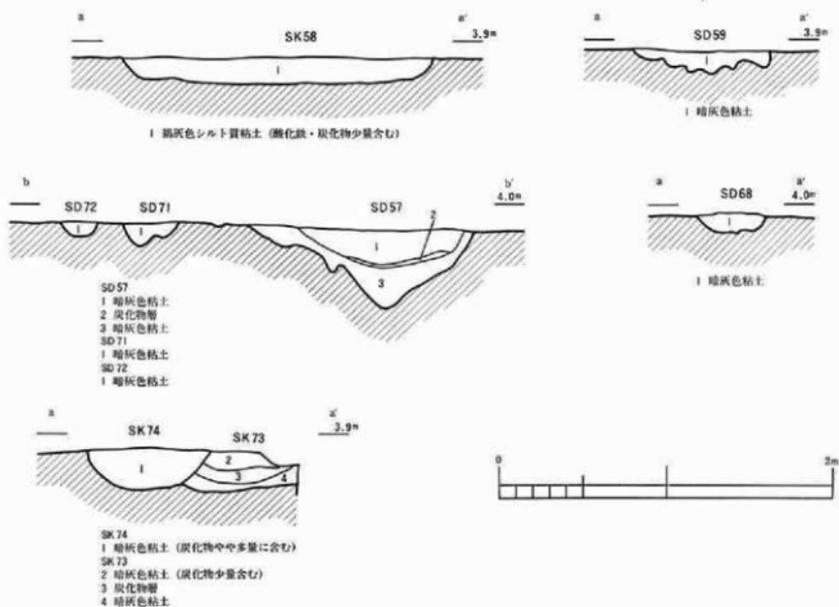
1 灰白色シルト質粘土 (酸化鉄少量含む)

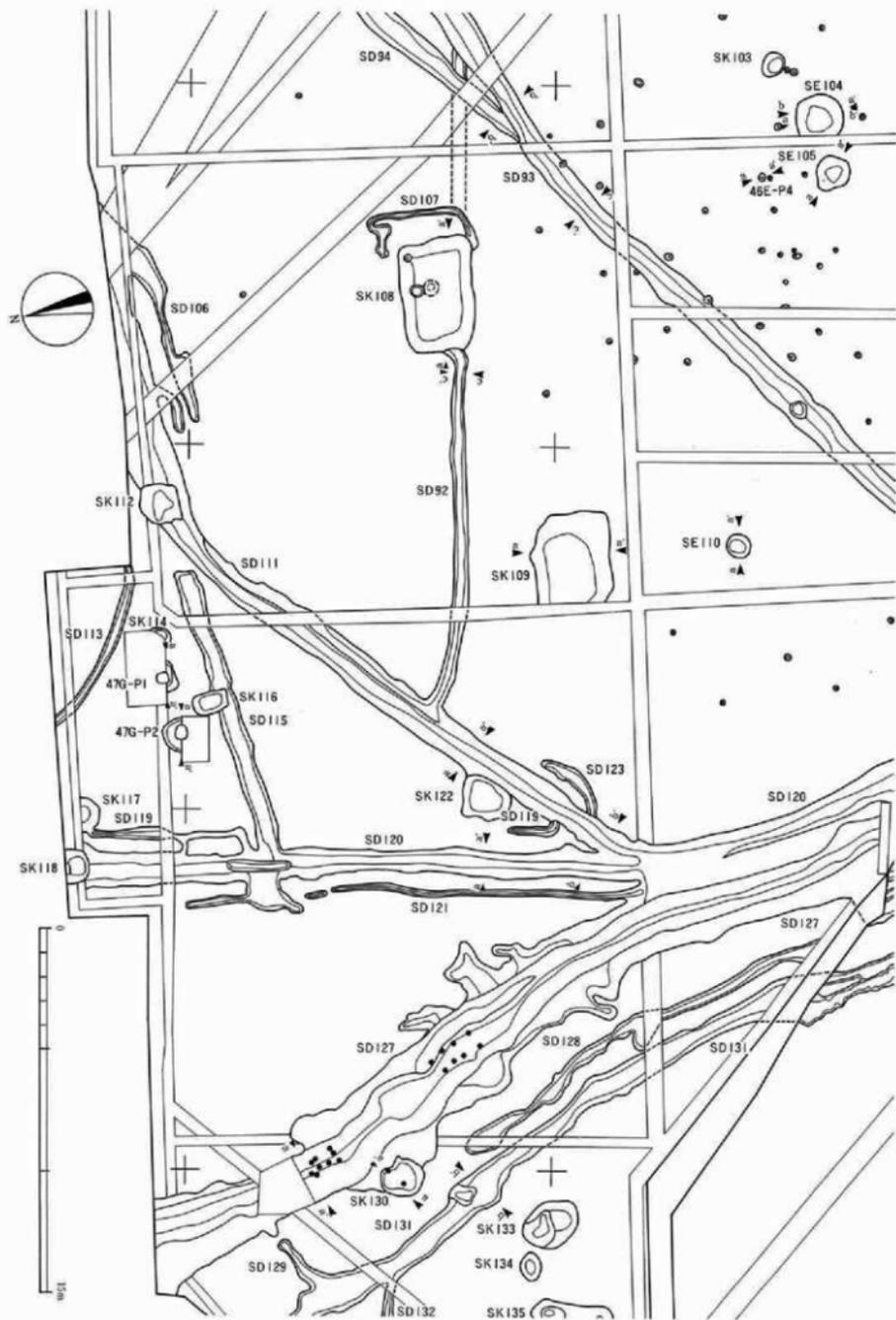


1 灰白色粘土 (酸化鉄多量に含む)
2 灰白色粘土質シルト (酸化鉄多量に含む)
3 赤色粘土質シルト (酸化鉄・炭化物多量に含む)



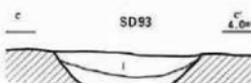








- 1 暗青灰色シルト質粘土
- 2 灰白色砂土
- 3 灰白色砂質粘土

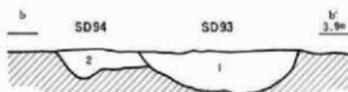


- 1 黒灰色シルト (酸化鉄含む、下部に灰色粘土混入)
- 2 灰色粘土 (酸化鉄多量に含む)



- 1 灰褐色粘土質シルト

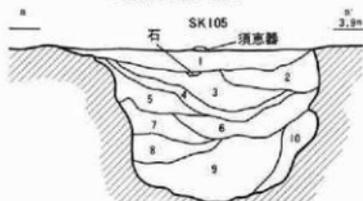
柱根 (235)



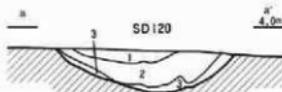
- SD 93
- 1 灰色粘土 (鉄少量含む)
- SD 94
- 1 灰色粘土 (鉄少量含む)



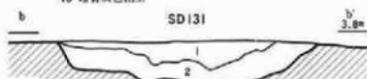
- 1 黒灰色シルト質粘土 (灰白色土のブロック混入)
- 2 灰褐色粘土
- 3 灰褐色砂質粘土 (灰白色土のブロック混入)



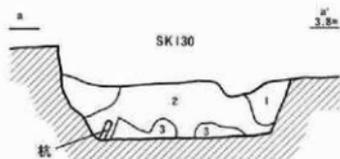
- 1 灰褐色シルト質粘土 (マンガン鉄多量に含む)
- 2 暗灰色シルト
- 3 暗灰色粘土
- 4 灰色粘土
- 5 暗灰色粘土
- 6 青灰色・暗灰色粘土の混入
- 7 青灰色粘土質シルト
- 8 黒色粘土 (青灰色粘土混入)
- 9 青灰色砂質粘土
- 10 暗青灰色粘土



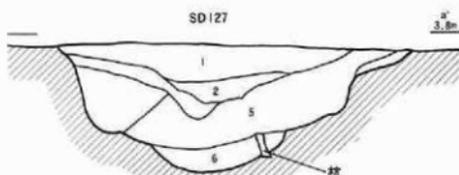
- 1 黒色シルト質粘土
- 2 暗灰色粘土
- 3 灰白色粘土質砂土



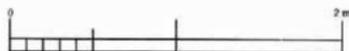
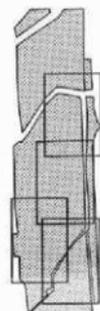
- 1 暗褐色シルト質粘土 (酸化鉄多量に含む)
- 2 灰白色砂質粘土



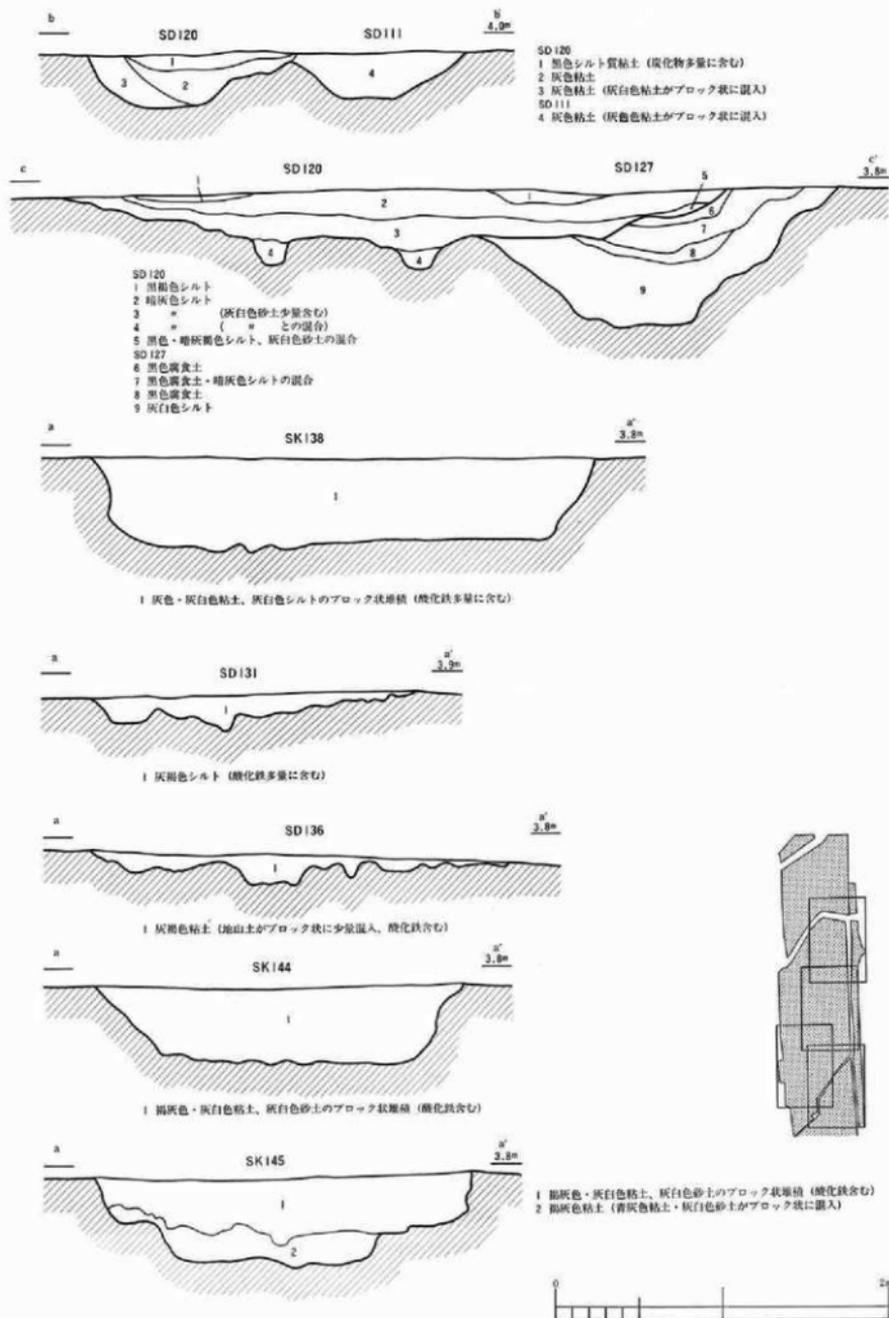
- 1 灰白色砂土
- 2 暗青灰色粘土 (灰白色粘土混入)
- 3 青灰色砂質粘土

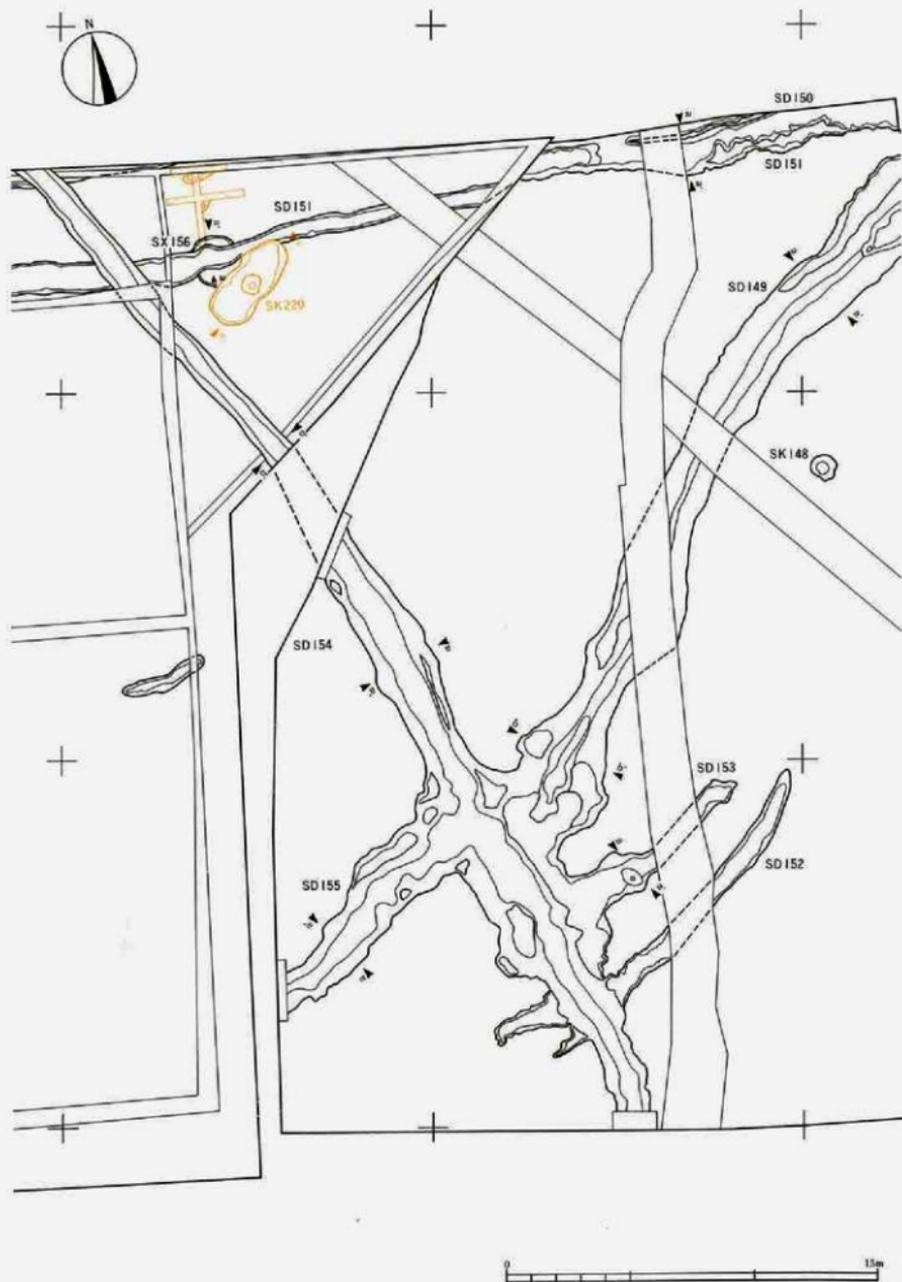


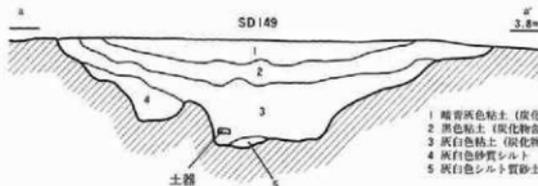
- 1 暗青灰色シルト質粘土 (酸化鉄多量に含む)
- 2 暗青灰色砂質粘土
- 3 暗青灰色粘土
- 4 灰白色粘土質砂土
- 5 灰白色砂質粘土
- 6 青灰色砂質粘土



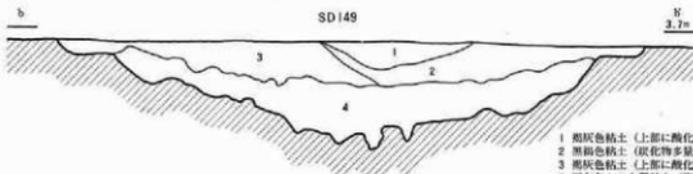




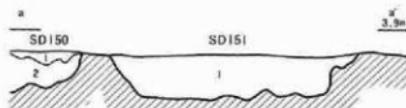




- 1 暗青色粘土 (炭化物含む)
- 2 黒色粘土 (炭化物含む)
- 3 灰白色粘土 (炭化物少量含む)
- 4 灰白色砂質シルト
- 5 灰白色シルト質砂土



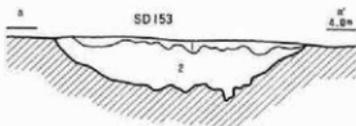
- 1 黒灰色粘土 (上部に酸化鉄含む・炭化物少量含む)
- 2 黒褐色粘土 (炭化物多量を含む)
- 3 黒灰色粘土 (上部に酸化鉄含む・炭化物少量含む)
- 4 灰白色シルト質粘土 (炭化物少量含む)



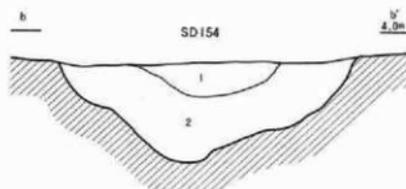
- SD150
- 1 黒灰色・灰白色粘土、灰白色砂土がブロック状堆積
 - 2 灰白色粘土
- SD151
- 1 黒灰色・灰白色粘土、灰白色砂土がブロック状堆積



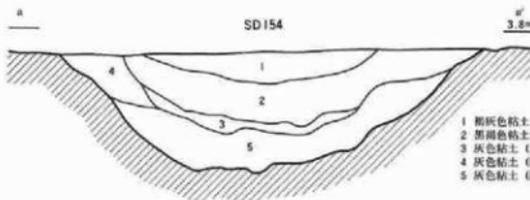
- 1 暗灰色粘土 (S D151層土・酸化鉄多量を含む)
- 2 暗褐色粘土 (炭化物の層が零装に埋積)



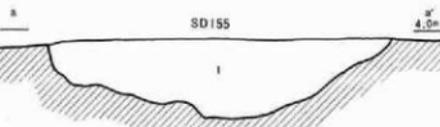
- 1 黒灰色粘土 (炭化物少々含む)
- 2 灰白色粘土



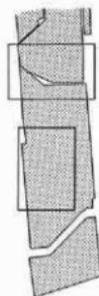
- 1 暗褐色シルト質粘土
- 2 灰褐色シルト質粘土 (酸化鉄含む)

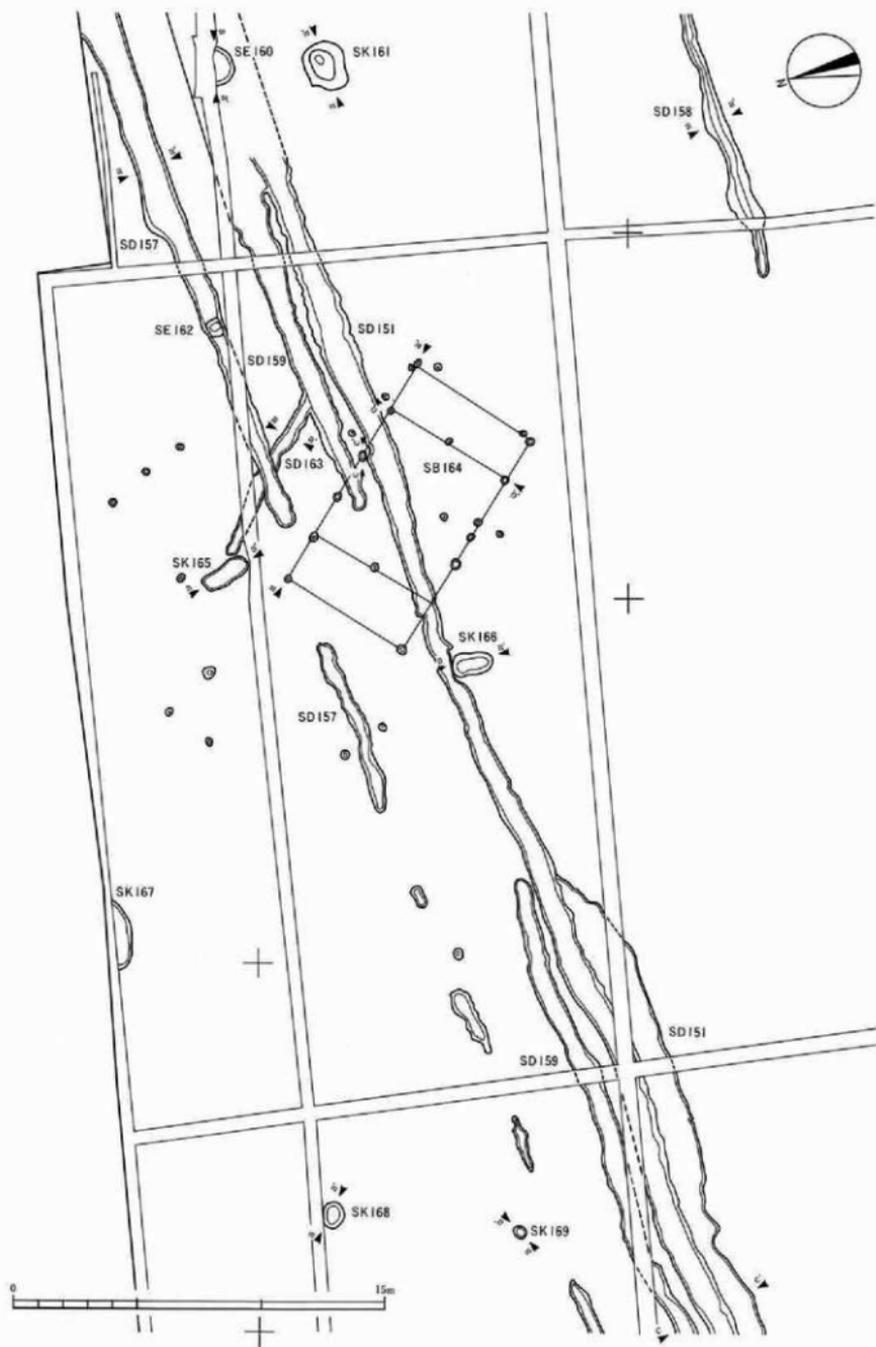


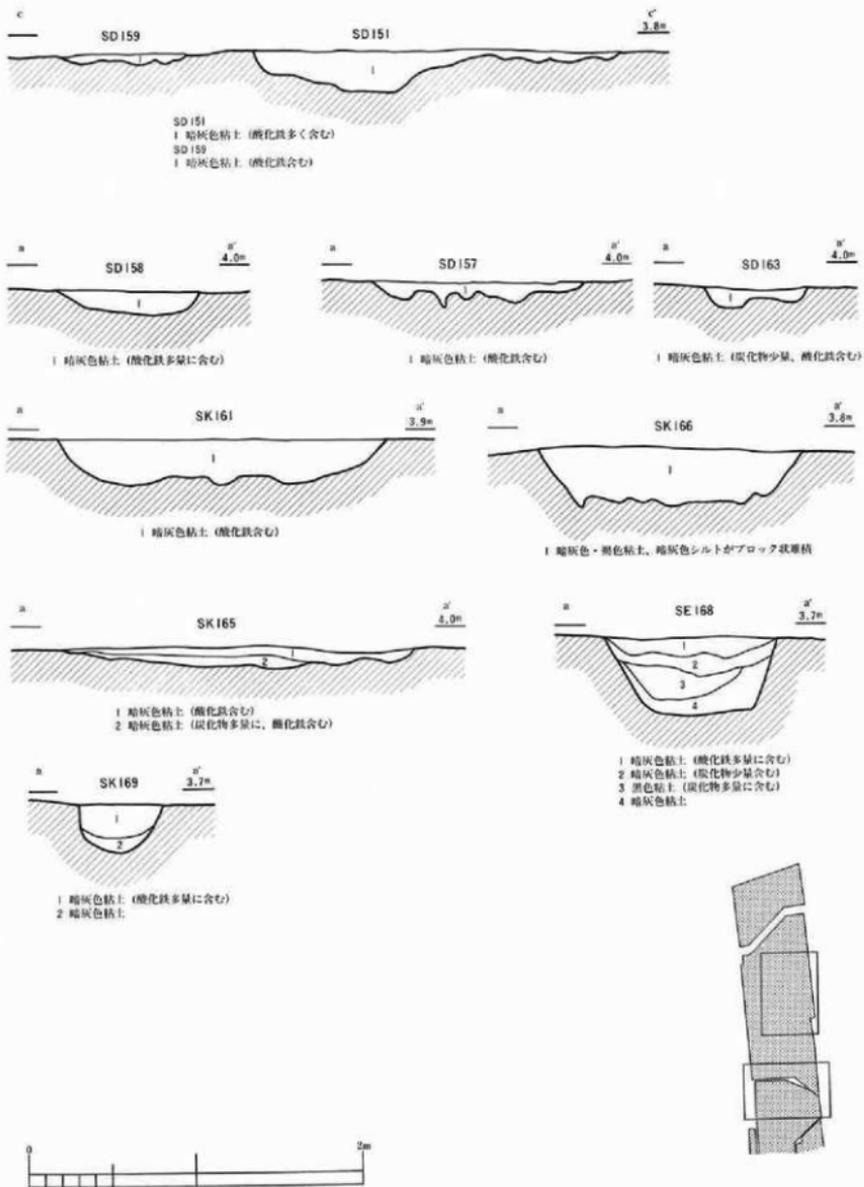
- 1 暗褐色粘土 (炭化物少量含む)
- 2 黒褐色粘土 (炭化物多量に含み腐蝕のある層をなす)
- 3 灰色粘土 (炭化物少量含む)
- 4 灰色粘土 (酸化鉄多量含む)
- 5 灰色粘土 (酸化鉄少量含む)

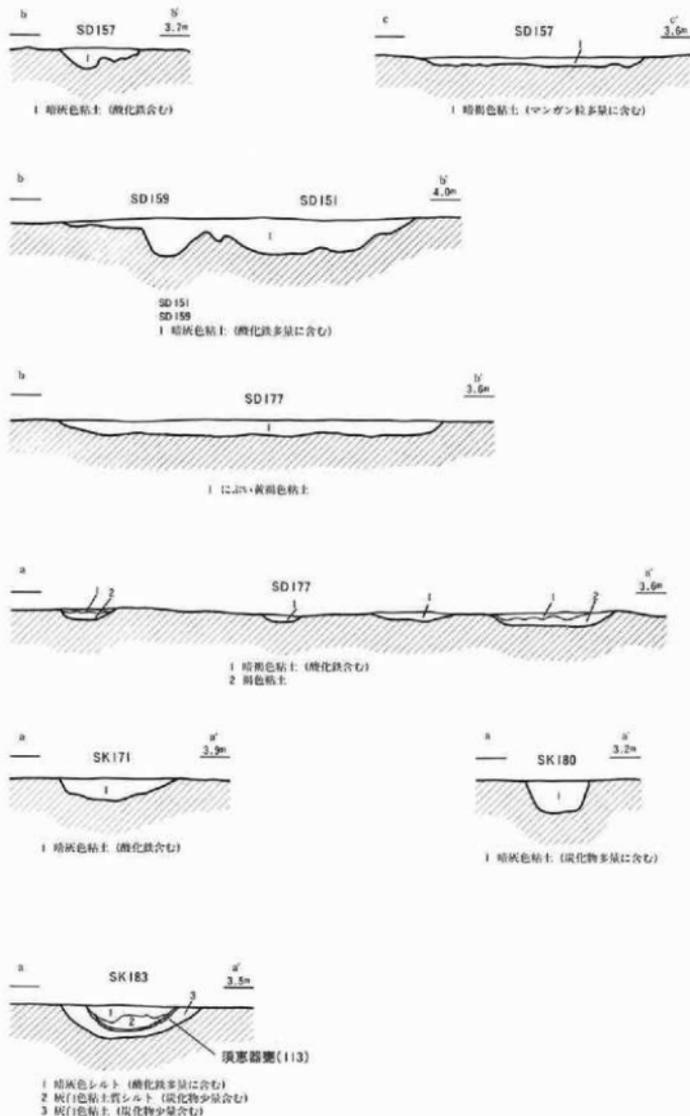


- 1 青灰色砂質粘土 (砂多量に混入・酸化鉄含む)



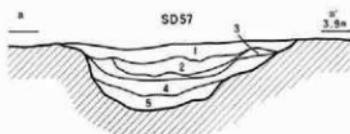








1 灰白色粘土 (マンガン酸少量含む)



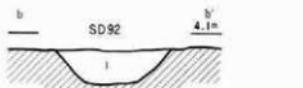
- 1 暗灰色粘土 (酸化鉄多量に含む)
- 2 " (酸化鉄少量含む)
- 3 灰色粘土 (")
- 4 暗灰色粘土 (")
- 5 灰色粘土 (")



1 灰色粘土 (酸化鉄少量含む)



1 黒褐色シルト質粘土 (酸化鉄少量、炭化物多量に含む)



1 黒褐色粘土 (酸化鉄多量に含む)



1 黒褐色シルト質粘土 (酸化鉄多量に含む、上部にマンガン酸少量含む)



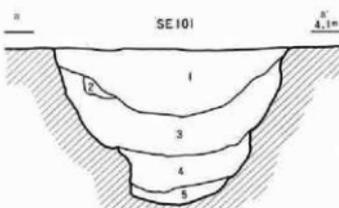
1 灰色粘土 (酸化鉄少量含む)



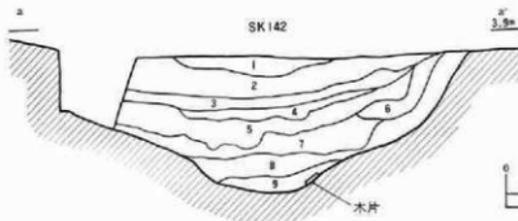
1 暗灰色粘土 (上部に酸化鉄含む、黒色粘土混入)



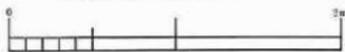
1 灰色シルト質粘土 (酸化鉄多量に含む)



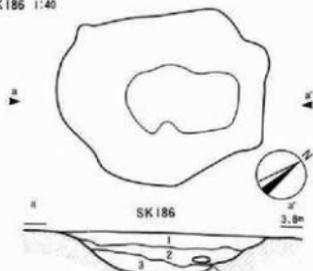
- 1 暗灰色シルト質粘土 (酸化鉄多量に含む)
- 2 暗灰色・灰色シルト質粘土のアロク状埋積
- 3 暗灰色シルト質粘土 (酸化鉄多量に含む・上部に炭化物を含む)
- 4 灰色粘土質シルト
- 5 暗褐色粘土 (炭化物を含む)



- 1 暗褐色シルト
- 2 黒褐色粘土・炭化物混入
- 3 褐色粘土・炭化物多量に混入
- 4 暗褐色シルト質粘土
- 5 灰褐色粘土質シルト
- 6 黄灰色粘土
- 7 灰色粘土
- 8 " (しまりややみ)
- 9 明灰色砂質粘土 (木片多数混入)

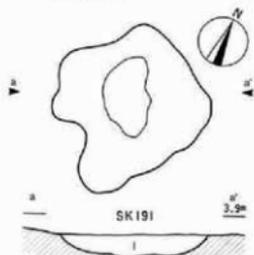


SK186 1:40



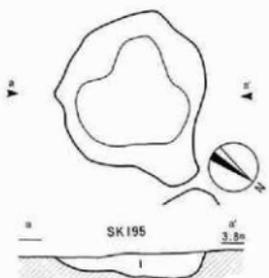
- 1 灰白色粘土 (炭化物・炭化物含む)
 2 青灰色粘土 (炭化物含む)
 3 青灰色シルト (=)

SK191 1:40



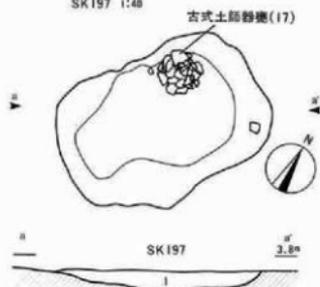
- 1 灰白色シルト (炭化物少量含む)

SK195 1:40



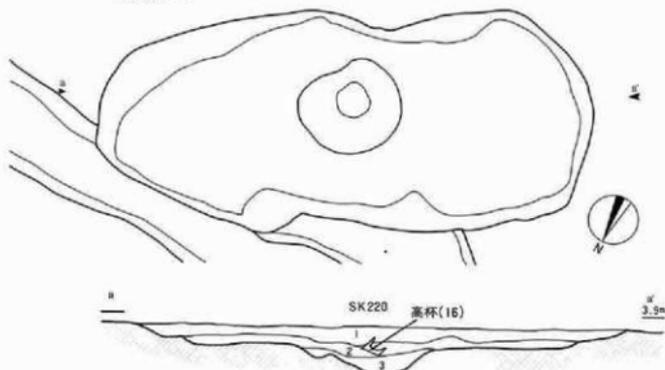
- 1 灰白色シルト (炭化物少量含む)

SK197 1:40

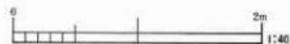


- 1 灰白色シルト (炭化物少量含む)

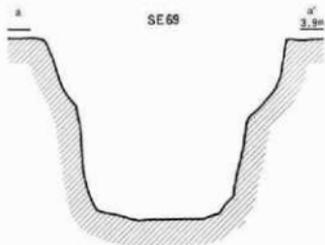
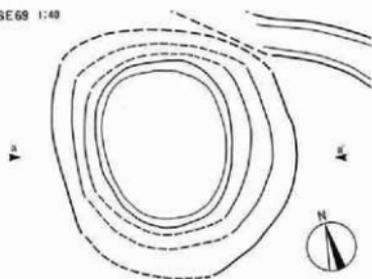
SK220 1:40



- 1 褐色粘土 (炭化物少量含む)
 2 灰白色粘土質砂土 (炭化物少量含む)
 3 暗青灰色砂土 (炭化物多量に含む)



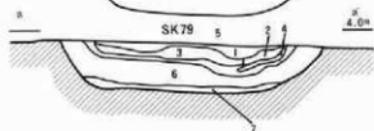
SE69 1:40



SK70 1:40



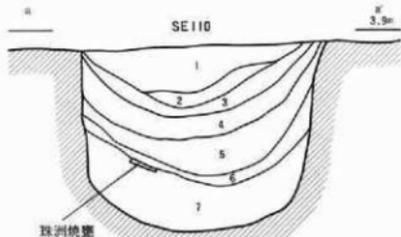
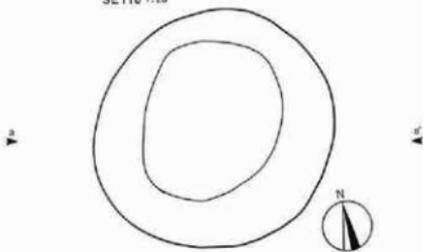
SK79 1:30



- 1 黒色炭化物
- 2 赤色粘土 (粘土がブロック状に混入)
- 3 黒褐色土 (粘土がブロック状に混入)
- 4 灰白色灰
- 5 黒褐色土
- 6 赤褐色土
- 7 暗灰色粘土

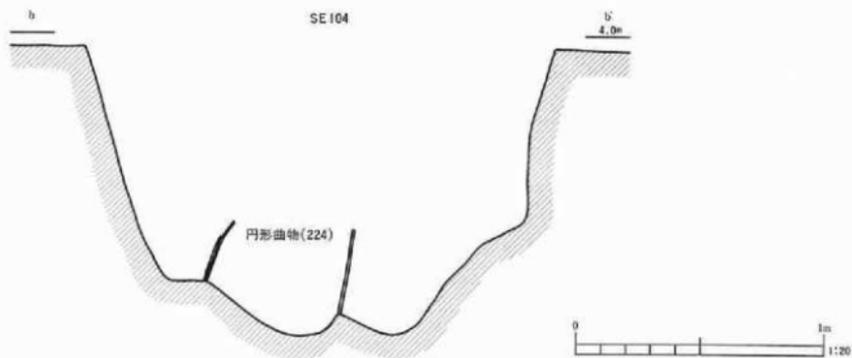
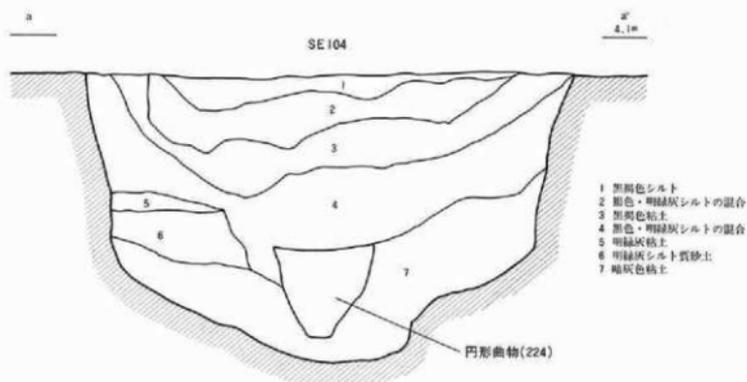
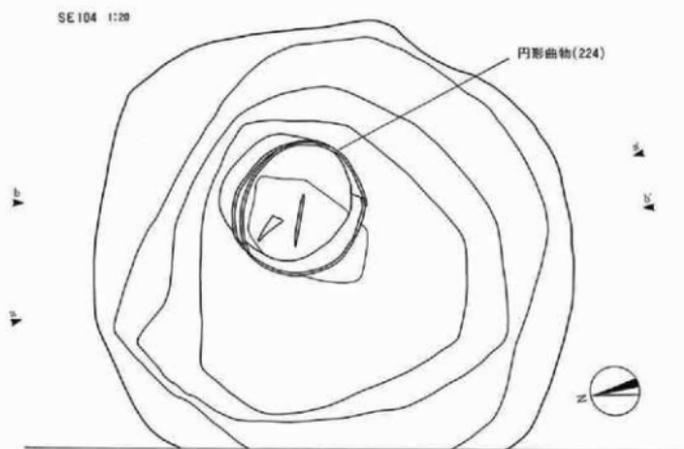


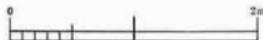
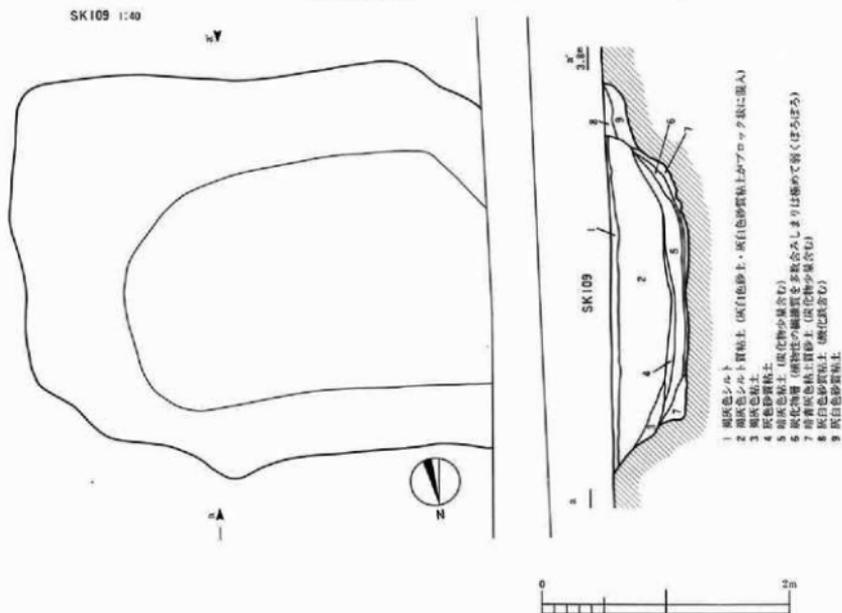
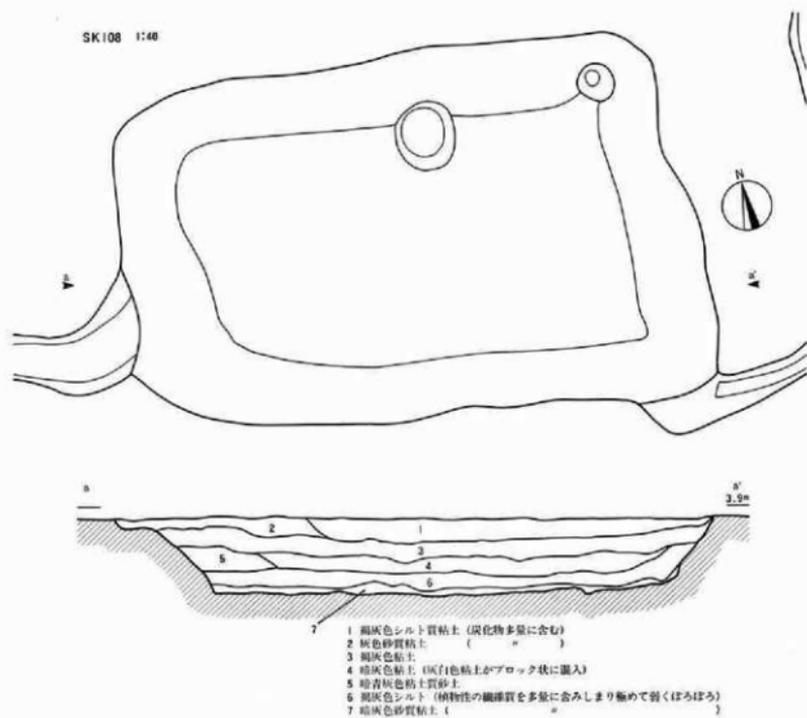
SE110 1:20



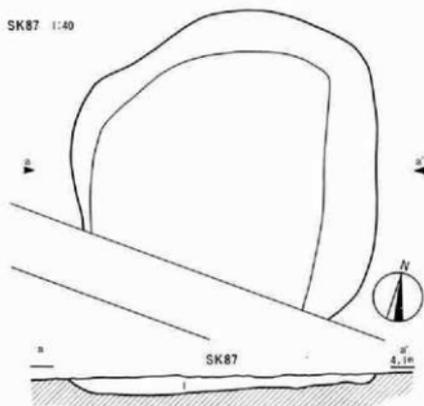
- 1 暗褐色シルト質粘土
- 2 黒色炭化物
- 3 灰白色シルト
- 4 灰白色砂質粘土
- 5 暗灰色砂質粘土
- 6 灰色砂質粘土
- 7 暗灰色砂土





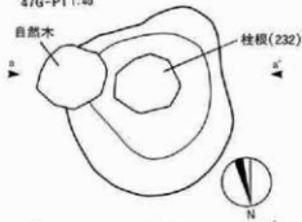


SK87 1:40



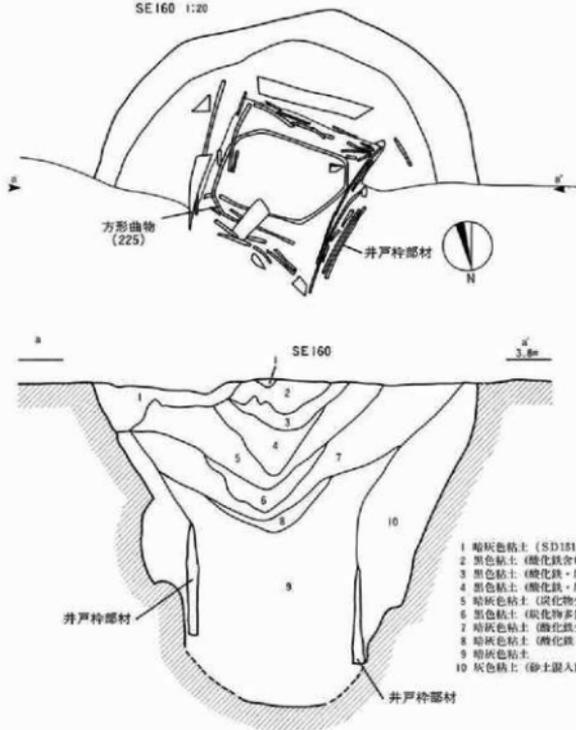
1 暗灰色粘土 (下部は赤褐色に変化・炭化物多量に含む)

47G-P1 1:40



1 灰白色粘土 (明褐色粘土混入)
2 灰白色砂質シルト
3 灰白色粘土
4 灰白色粘土・暗灰色砂質粘土の混入
5 黄灰色砂土 (暗灰色粘土がブロック状に混入)

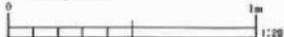
SE160 1:20



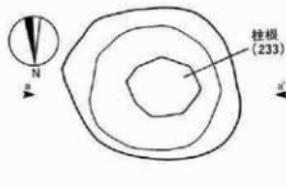
井戸枠部材

井戸枠部材

SK87、SE160



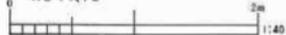
47G-P2 1:40

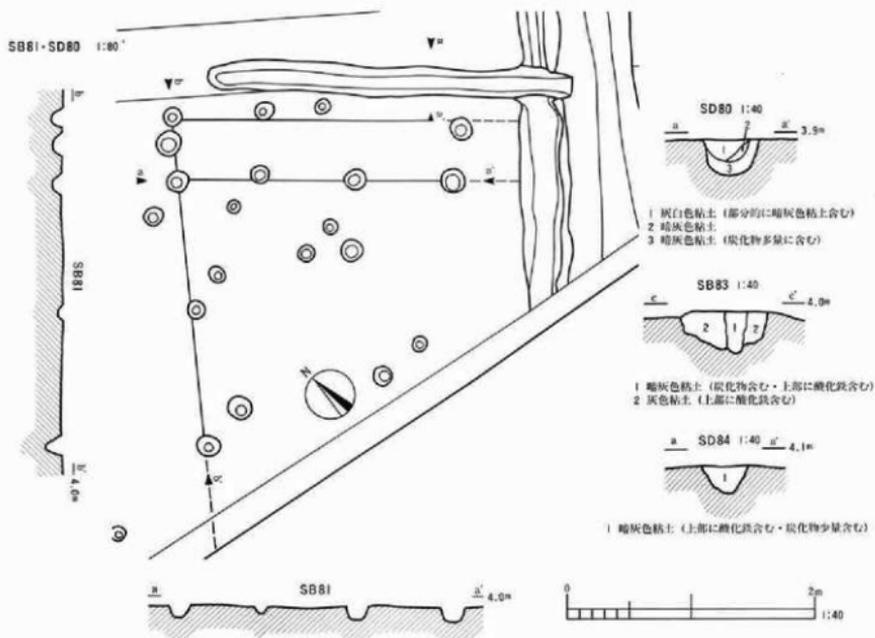


1 明褐色粘土
2 明褐色粘土・灰白色シルト質粘土・黄褐色砂土の混入
3 灰白色砂質粘土
4 明褐色粘土

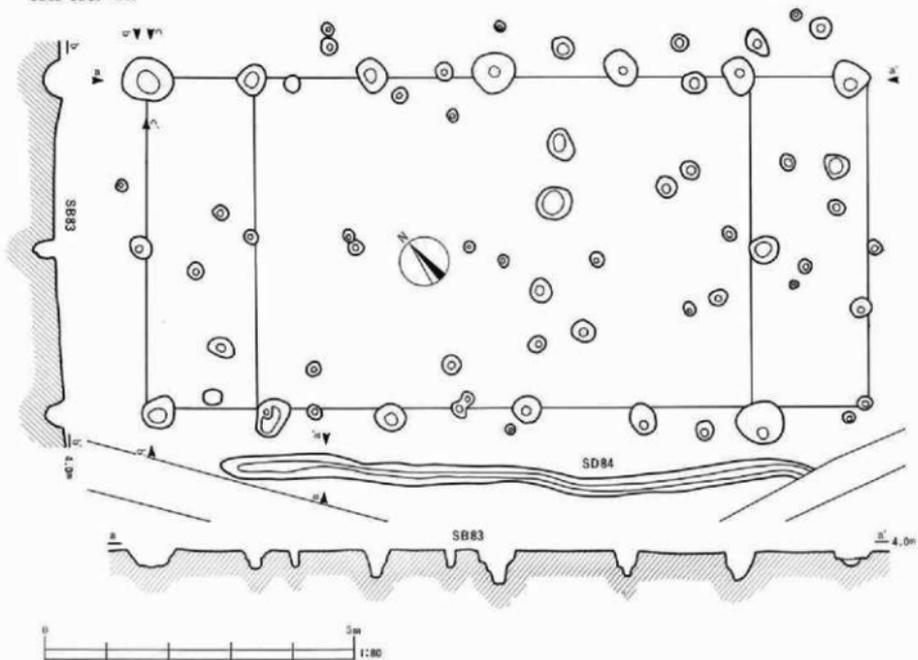
1 暗灰色粘土 (SD181質土・酸化鉄多量に含む)
2 黒色粘土 (酸化鉄含む、炭化物多量に含む)
3 黒色粘土 (酸化鉄・炭化物多量に含む)
4 黒色粘土 (酸化鉄・炭化物や空多量に含む)
5 暗灰色粘土 (炭化物少量含む)
6 黒色粘土 (炭化物多量に含む)
7 暗灰色粘土 (酸化鉄少量含む)
8 暗灰色粘土 (酸化鉄・炭化物少量含む)
9 暗灰色粘土
10 灰色粘土 (砂土混入)

47G-P1、P2

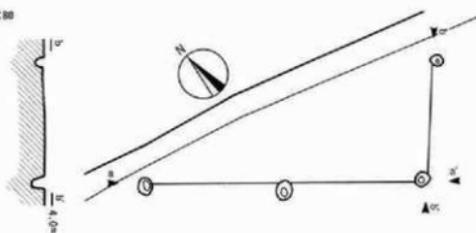




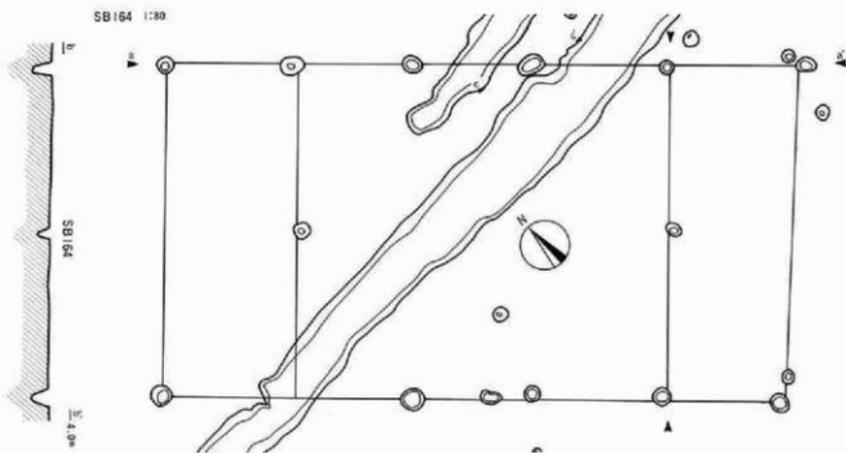
SB83・SD84 1:80



SB86 1:80



SB164 1:80



SB164 1:40



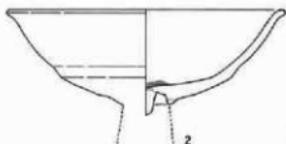
1 葦藁床・黒褐色粘土の混合 (炭化物含む)



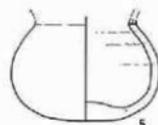
SK186



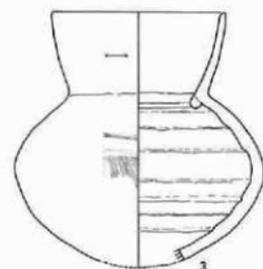
1



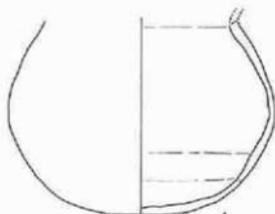
2



5

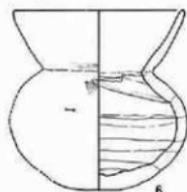


3



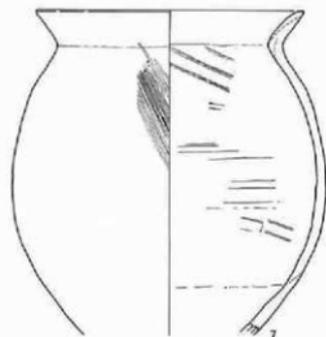
4

SK191



6

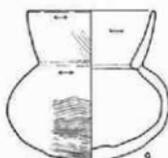
SK195



7

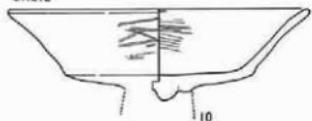


8



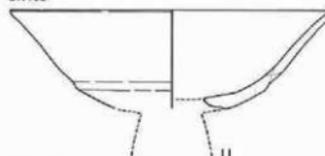
9

SK212



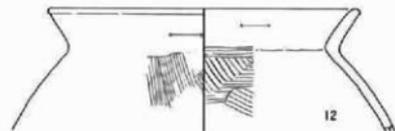
10

SK196



11

SK220



12



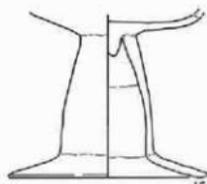
13



14



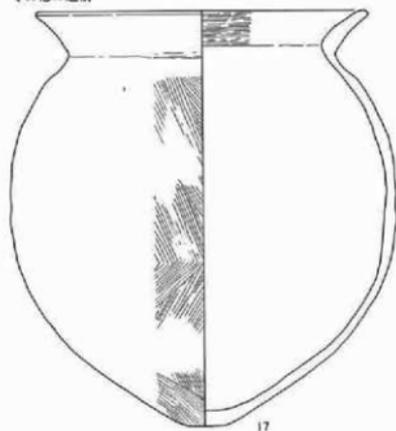
15



16



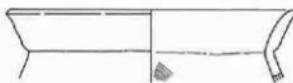
その他の遺構



17



18

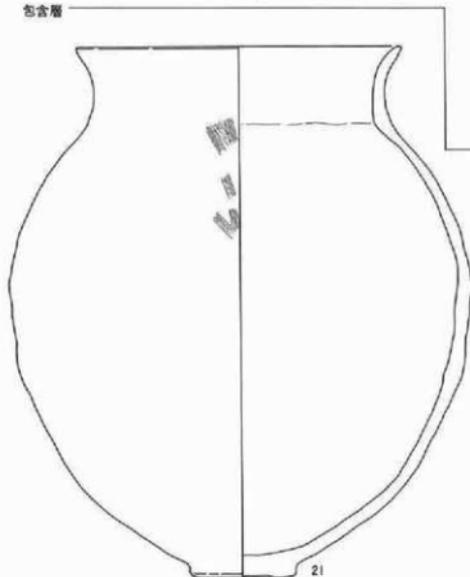


19



20

包含層



21



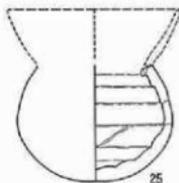
22



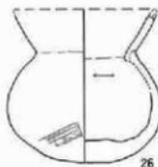
23



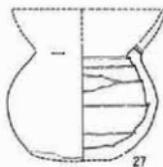
24



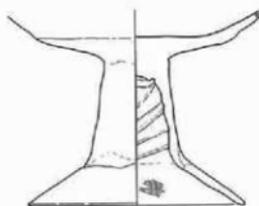
25



26



27



28



SK58

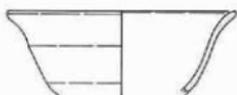


29



30

SD57



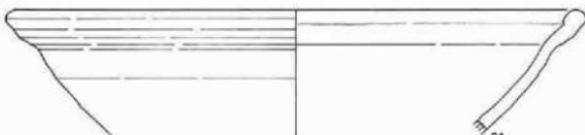
31



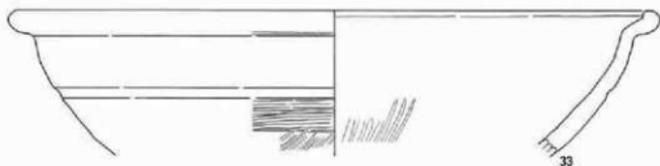
32



35

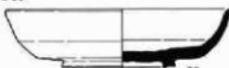


34



33

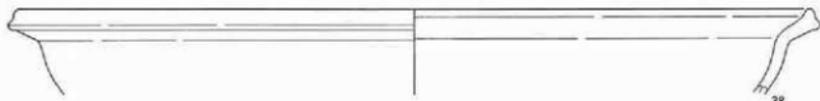
SD68



36



37



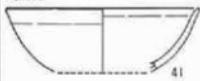
38

SD60

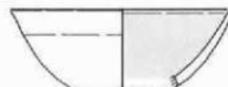


39

SK70



41



40



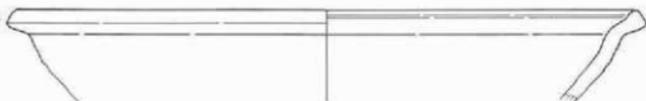
42



43



44



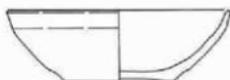
45



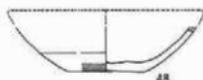
SE69



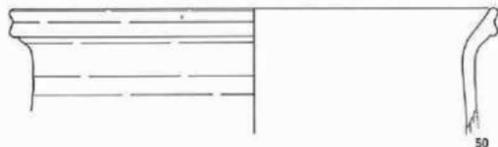
46



47



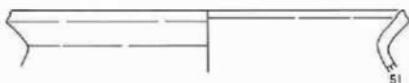
48



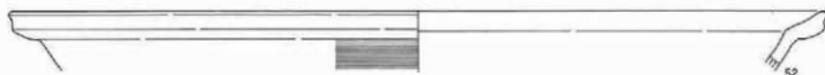
50



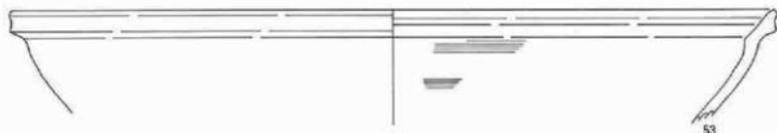
49



51



52

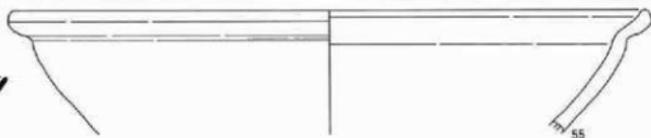


53

SK71

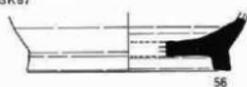


54

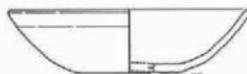


55

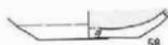
SK87



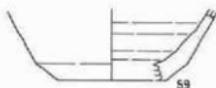
56



57

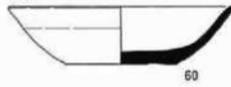


58



59

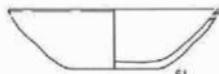
SD93



60



62



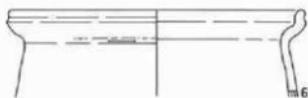
61



63



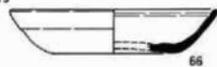
64



65



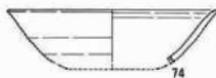
SK79



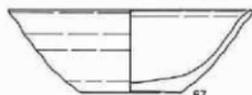
66



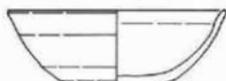
70



74



67



71



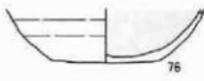
75



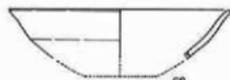
68



72



76



69



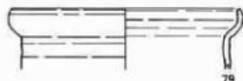
73



77



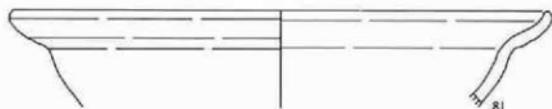
78



79

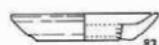


80

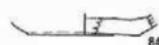


81

SD120



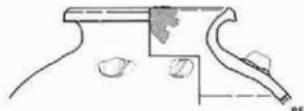
83



84



82



85

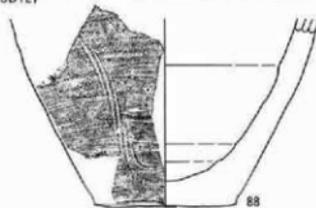


86



87

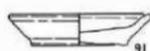
SD127



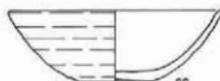
88



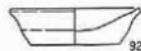
89



91



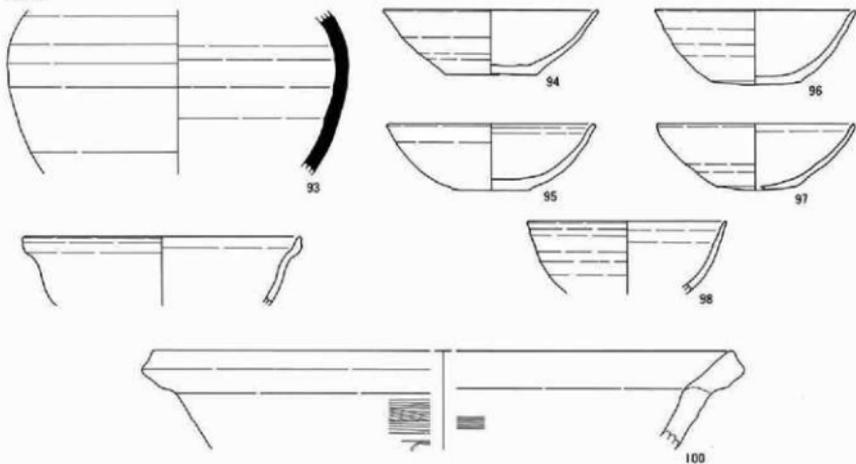
90



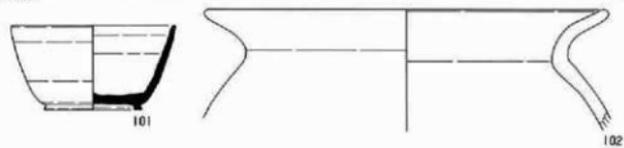
92



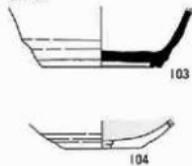
SK154



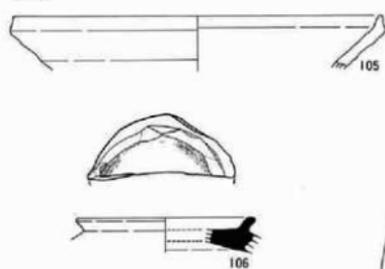
SK136



SK158



SD151



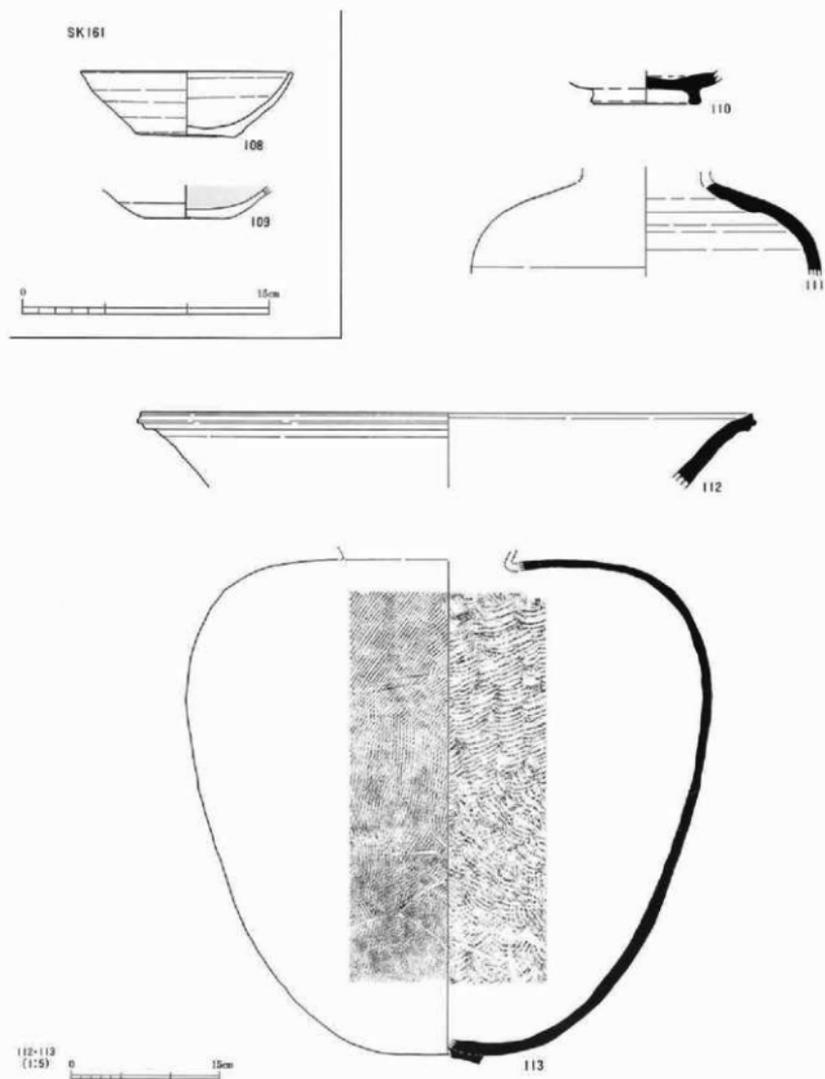
44EP2

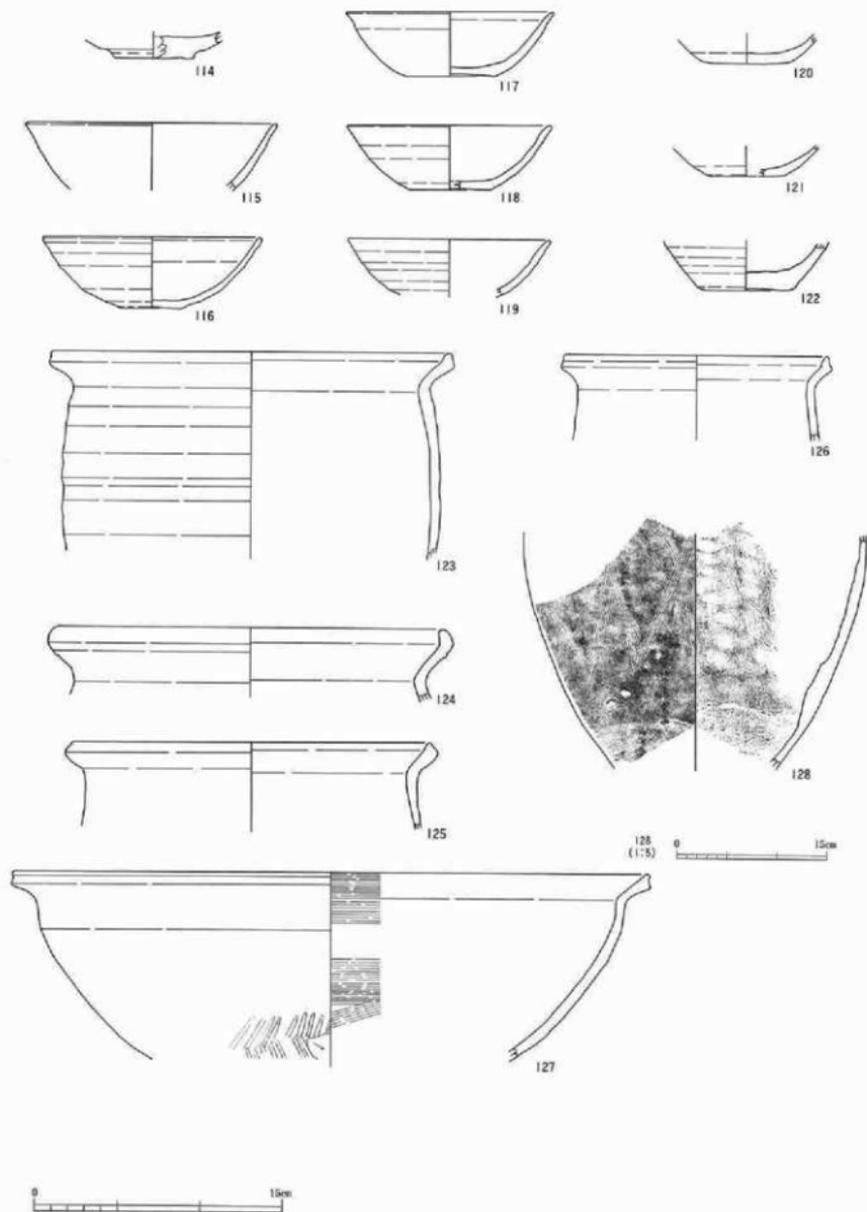


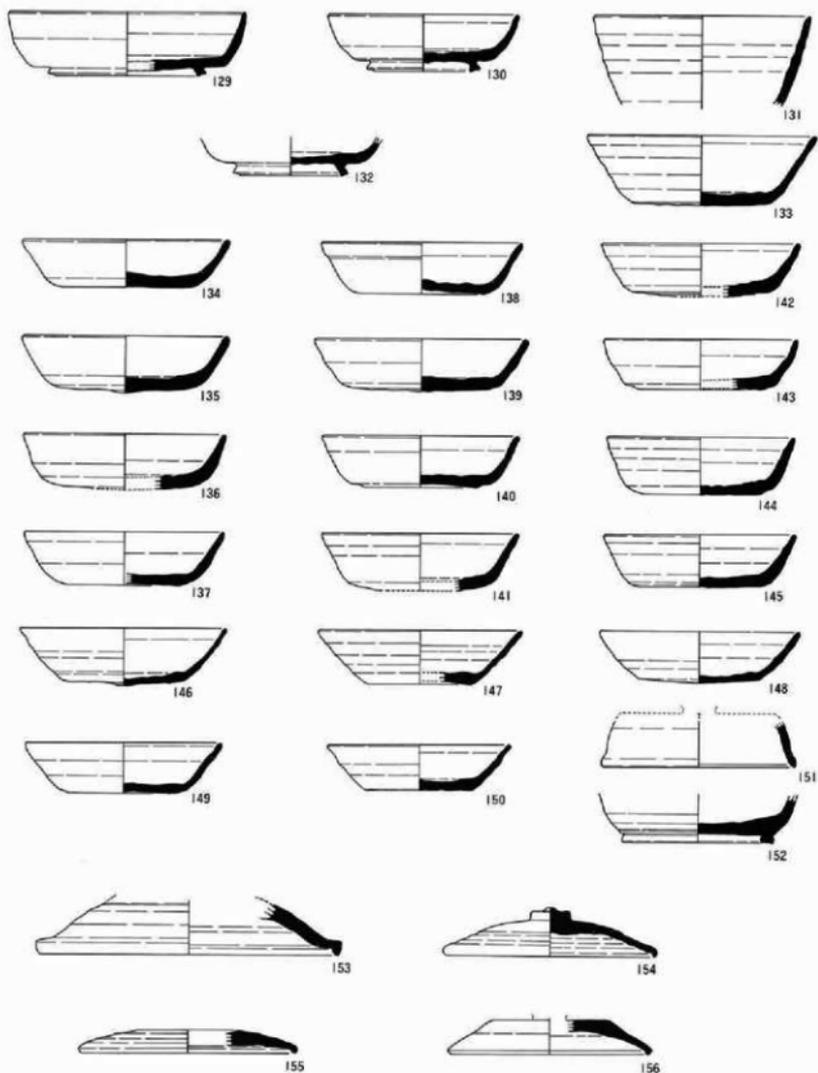
107

(1/5)

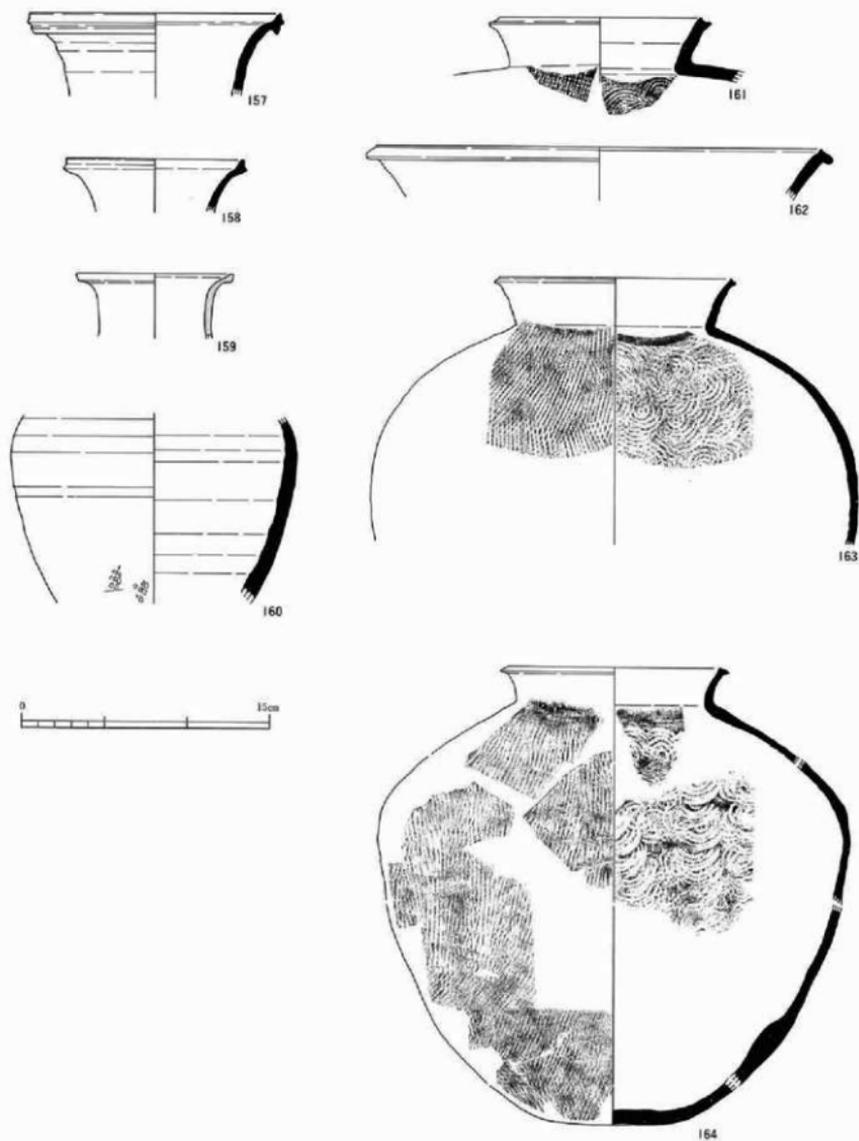






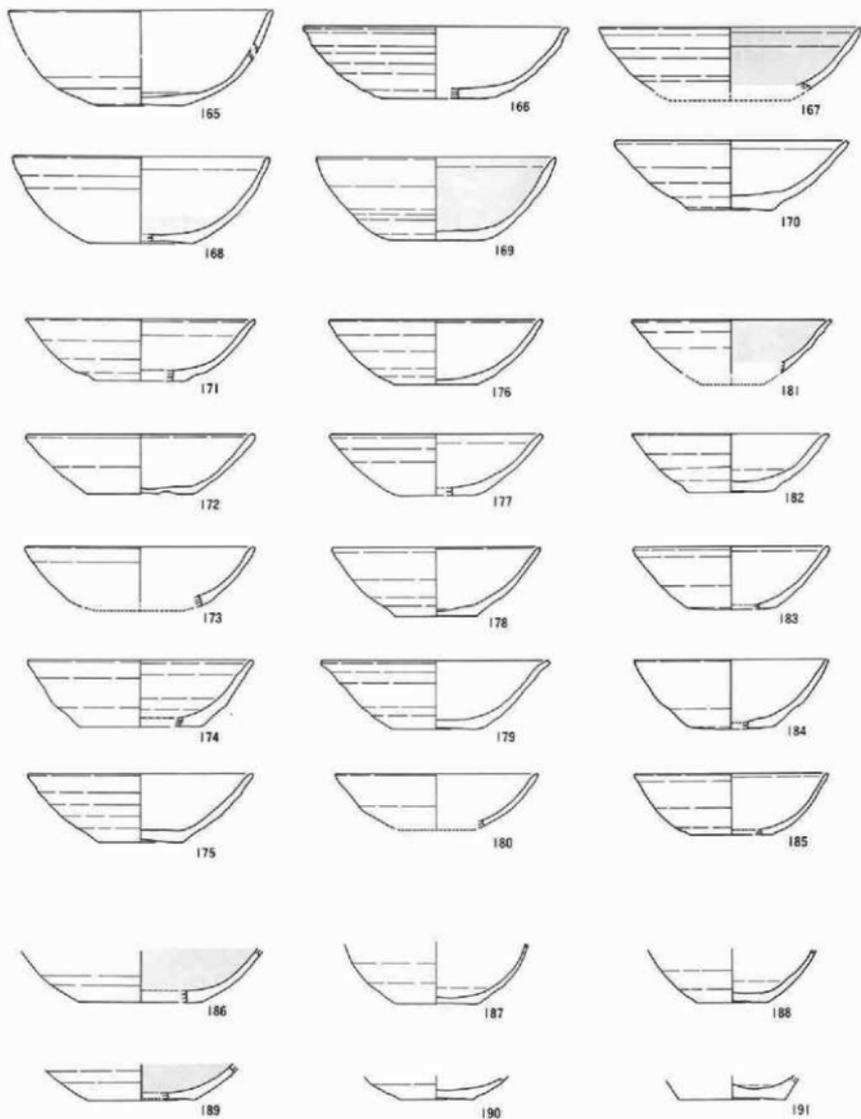


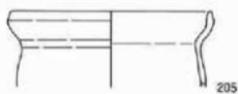
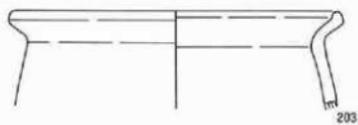
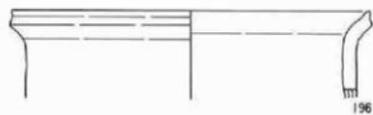
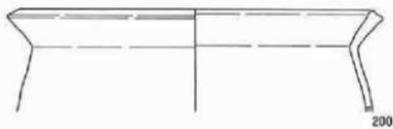
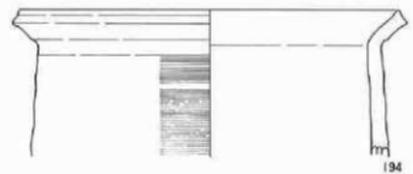
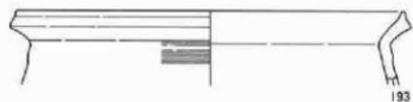
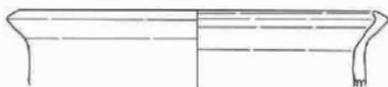
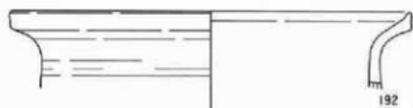
0 15cm

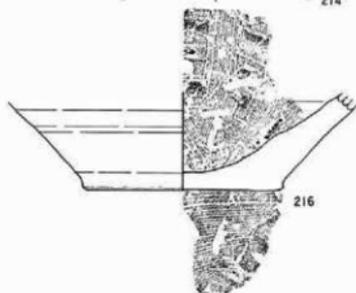
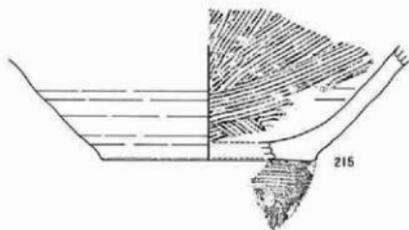
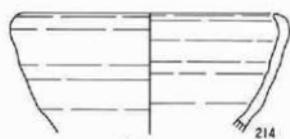
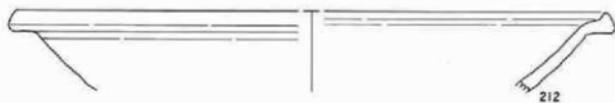
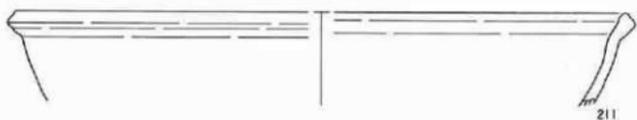
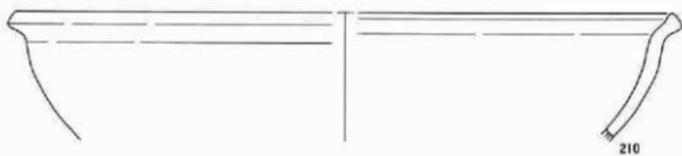


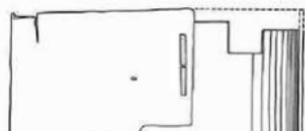
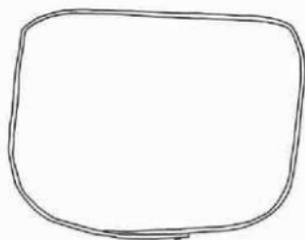
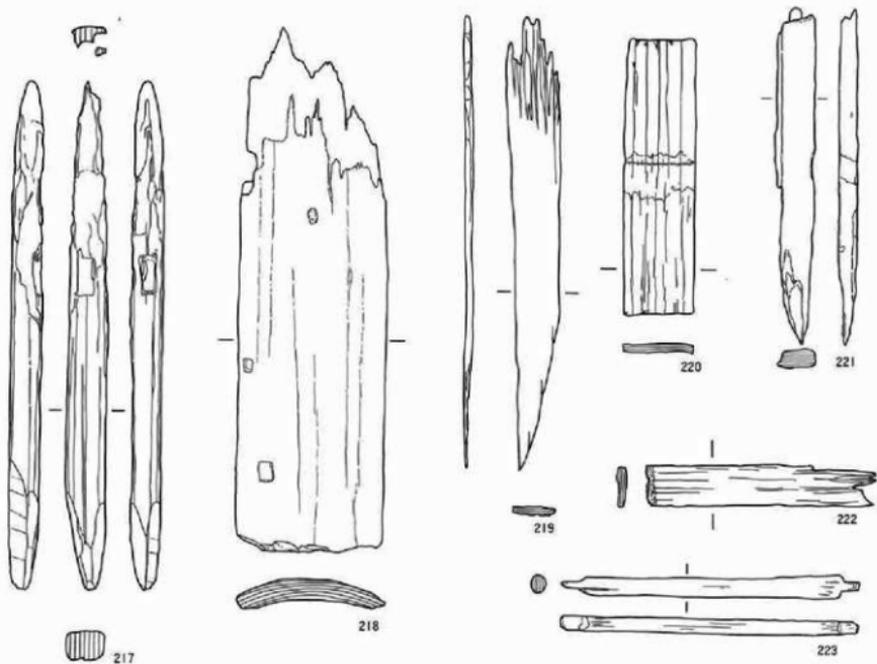
163-164
(1:5)

0 15cm





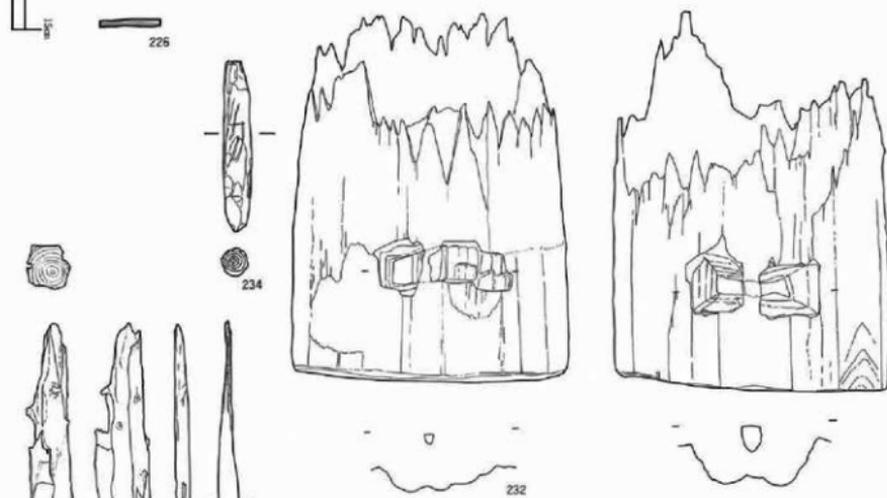
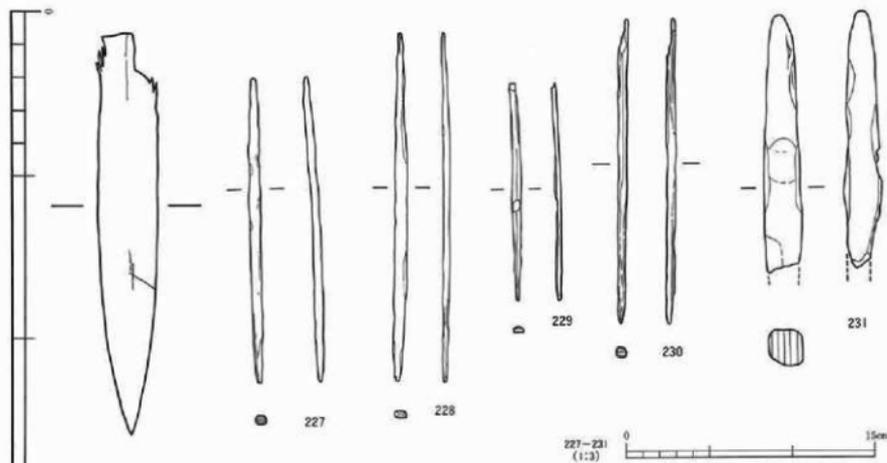




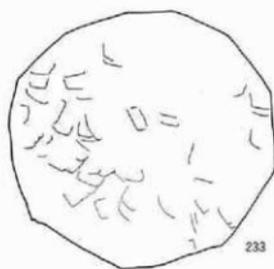
224

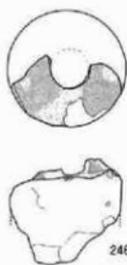
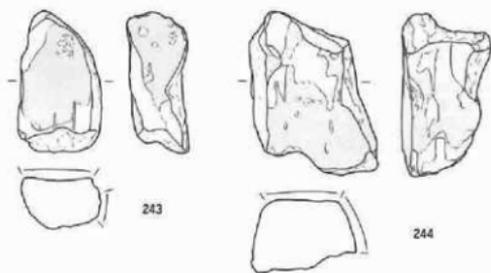
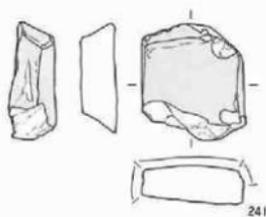
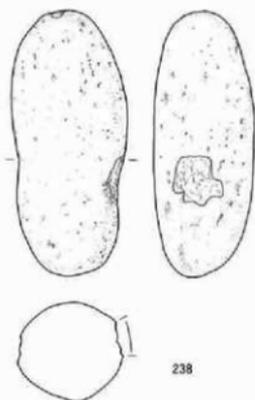
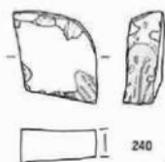
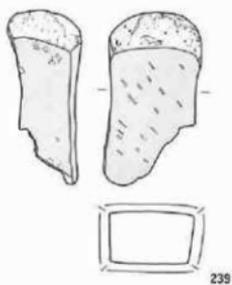
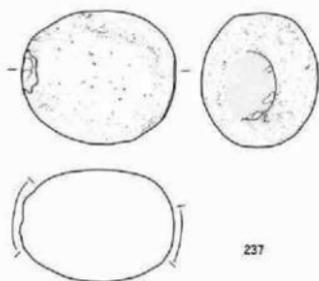
225





0 1m 232-236 (1:10)

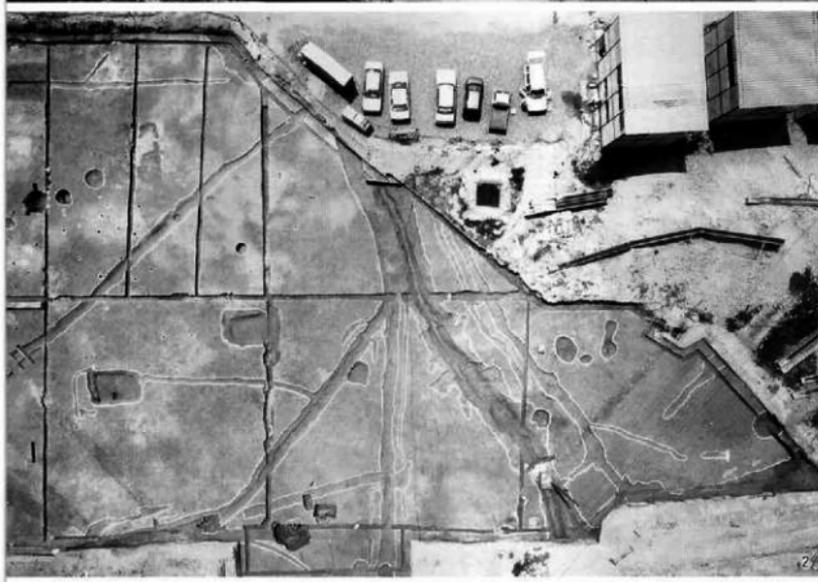




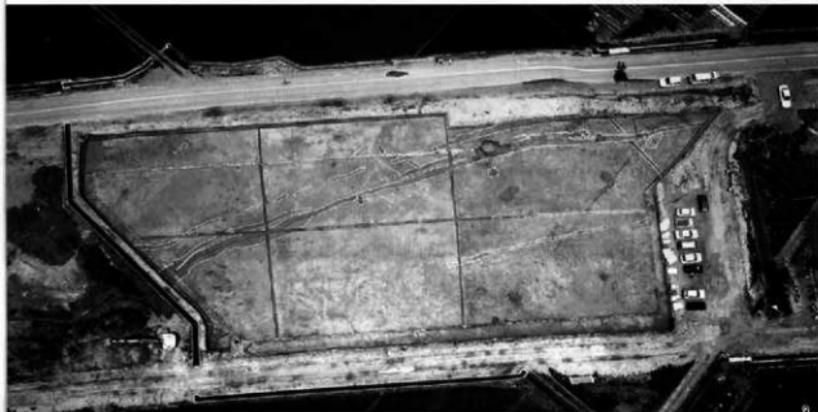




1. 5区上層東側空中写真
(上が南)



2. 5区上層西側空中写真
(上が南)



3. 9区東側空中写真
(上が北)



1. 5区下層空中写真
(上が南)



2. 10区全景
(東から)



3. 11区全景
(東から)



1. 12区全景
(西から)



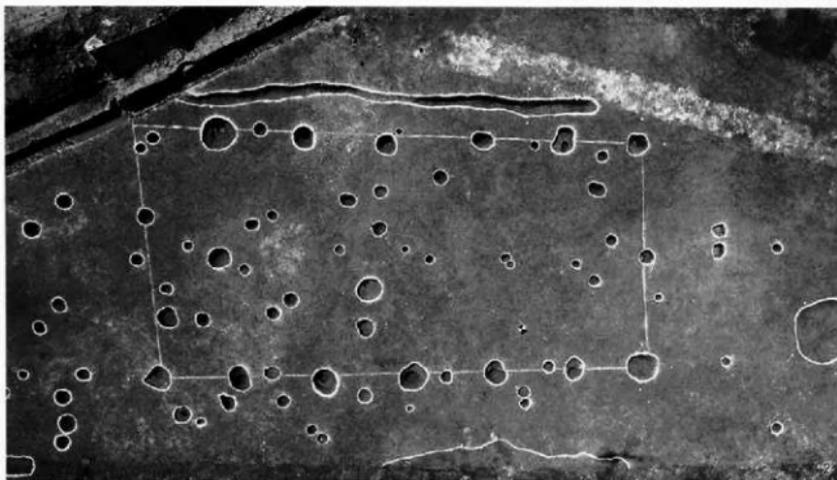
2. 13区全景
(東から)



3. 基本層序
(10区60C 21西から)



1. SB81空中写真
(上が南)



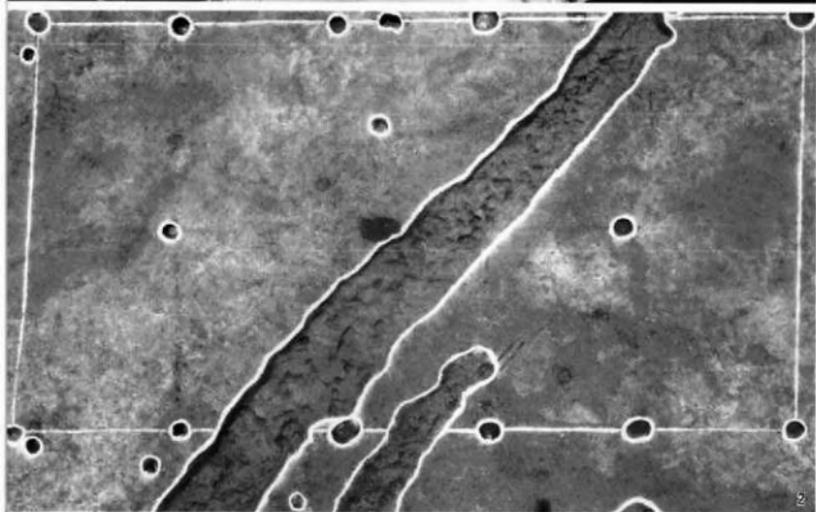
2. SB83空中写真
(上が南西)



3. SB86空撮
(北から)



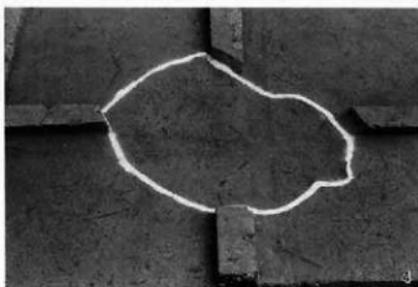
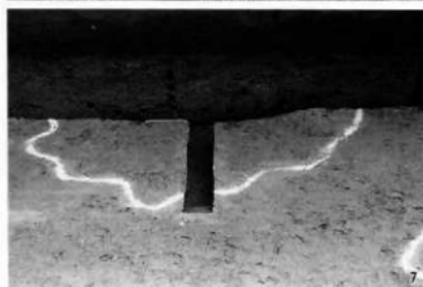
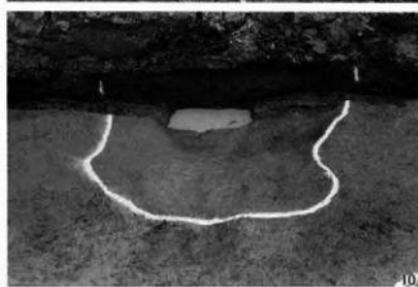
1. 9区全景空中写真
(北から)



2. SB164空中写真
(上が西)



3. SE160井戸側出土状況
(北から)

1. SK185土層断面
(北から)2. SK185完掘
(南から)3. SK189土層断面
(北から)4. SK189完掘
(西から)5. SK196土層断面
(南から)6. SK196完掘
(南から)7. SK199土層断面
(北から)8. SK199完掘
(南から)9. SK200土層断面
(南から)10. SK200完掘
(南から)



1



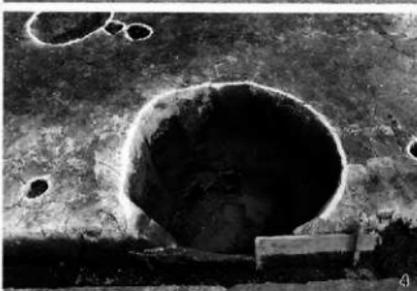
2

1. SK205完掘
(西から)

2. SK207・SK208
土層断面
(南から)



3



4

3. SK207・SK208
完掘 (南から)

4. SE104完掘
(西から)



5



6

5. SK58土層断面
(西から)

6. SK58完掘
(南から)



7



8

7. SD57土層断面
(西から)

8. 左からSD59・
56・57・71完掘
(東から)



9



10

9. SD68土層断面
(北西から)

10. SD68完掘
(北西から)

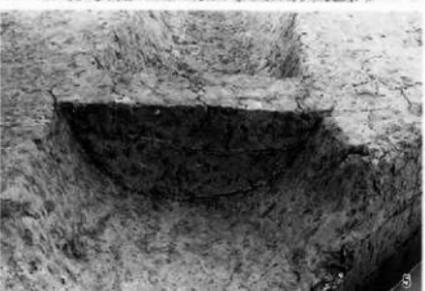
1. SK73・74
土層断面
(北から)



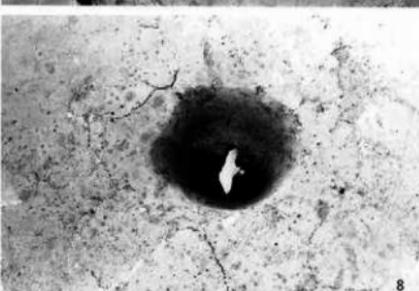
2. SK73・74完掘
(西から)



3. SD92土層断面
C-C'
(東から)



5. SD93土層断面
C-C'
(西から)



6. SD93特・94
土層断面
b-b'
(西から)



7. SD93特・94
完掘 (西から)

8. 46E-P4
(北から)

9. SE105土層断面
(西から)

10. SE105完掘
(南西から)

1

3

4

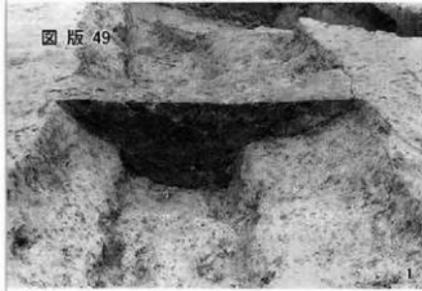
5

6

8

9

10



1. SD111土層断面
(西から)



2. SD111完掘
(西から)



3. SD127
杭出土状況
(南から)

4. SD127完掘
(中央左)
(南から)



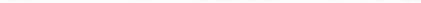
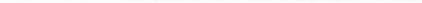
5. SK130土層断面
(南から)

6. SK130完掘
(南西から)



7. SD131土層断面
(南から)

8. SD131(左)完掘
(北から)



9. SD111・120
土層断面
(西から)

10. SD120完掘
(中央縦)
(北西から)

1. SD120号・127号
土層断面
(南から)



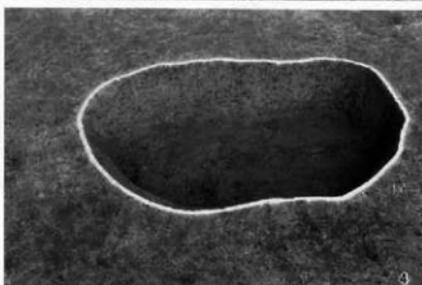
2. SD120号・127号
完掘
(北から)



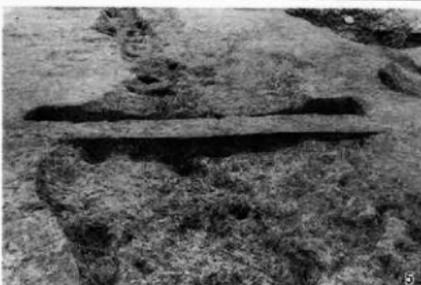
3. SK138土層断面
(西から)



4. SK138完掘
(西から)



5. SD131土層断面
(南から)



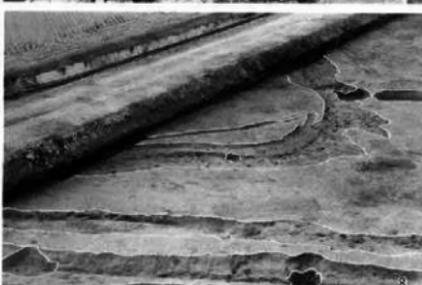
6. SD131・128・127
号 完掘
(南から)



7. SD136土層断面
(南から)



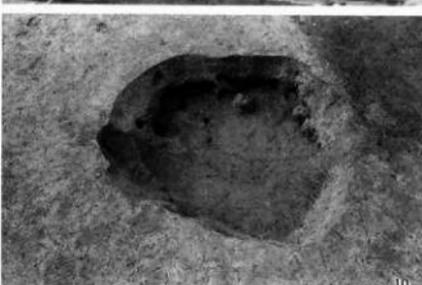
8. SD136完掘
(半円部)
(東から)

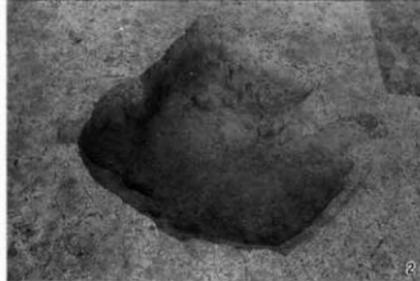
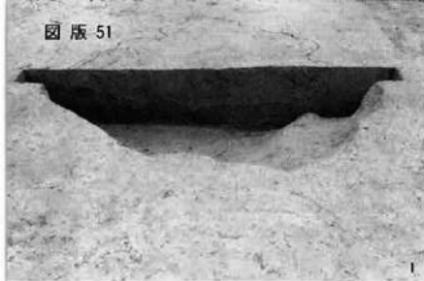


9. SK144土層断面
(南から)



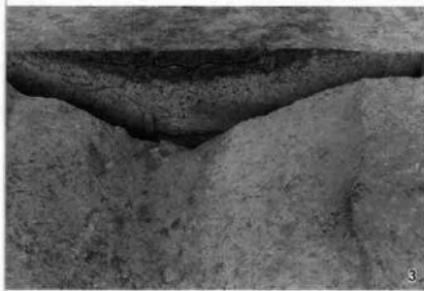
10. SK144完掘
(南から)





1. SK145土層断面
(西から)

2. SK145完掘
(西から)



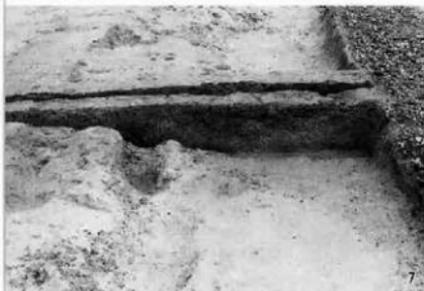
3. SD149土層断面
a-a'
(西から)

4. SD149土層断面
b-b'
(南西から)



5. SD149完掘
(東から)

6. SD150並-151並
土層断面
(西から)



7. SD151・159
土層断面
b-b'
(西から)

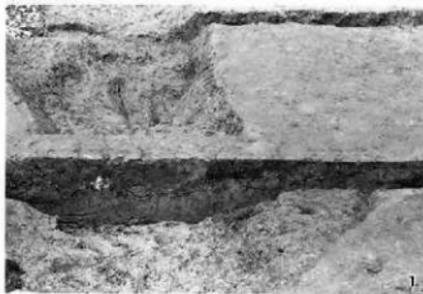
8. SD150並-151並
完掘 (西から)



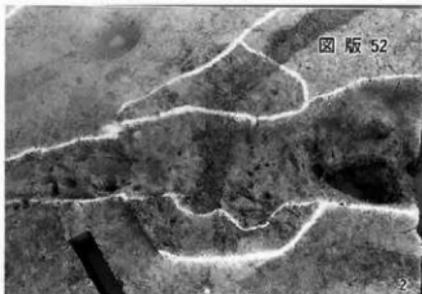
9. SD151土層断面
c-c'
(西から)

10. SD157並-159并・
151並完掘
(西から)

1. SX156土層断面
(東から)



2. SX156完掘
(北から)



3. SD153土層断面
(西から)



4. SD153完掘
(西から)



5. SD154土層断面
a-a'
(北から)



6. SD154土層断面
b-b'
(北から)



7. SD154 11区
遺物出土状況
(南から)



8. SD154 11区
完掘 (北から)



9. SD155土層断面
(東から)



10. SD155完掘
(西から)





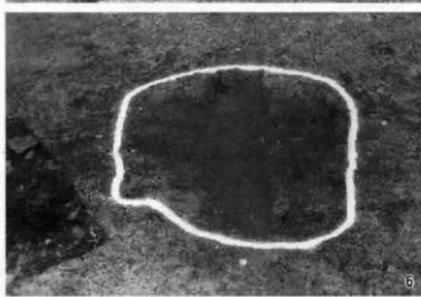
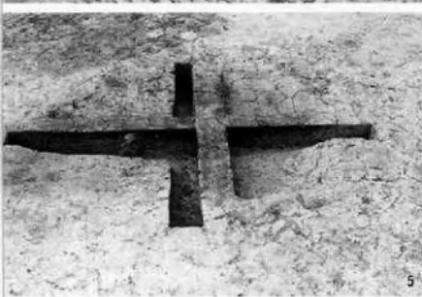
1. SD157土層断面
(西から)

2. SD157(白)
SD177(灰)
(東から)



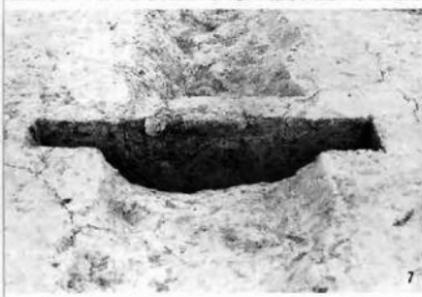
3. SD158土層断面
(西から)

4. SD158完掘
(西から)



5. SK161土層断面
(南から)

6. SK161完掘
(西から)



7. SD163土層断面
(北西から)

8. SD163完掘
(中央縦)
(北西から)



9. SK165土層断面
(西から)

10. SK165完掘
(西から)

1. SE168土層断面
(南西から)



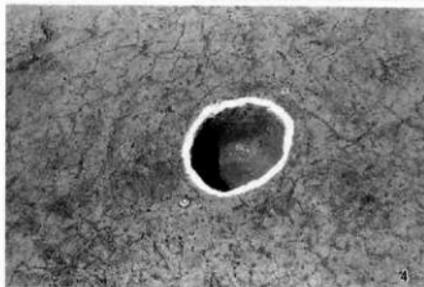
2. SE168完掘
(北から)



3. SK169土層断面
(南から)



4. SK169完掘
(北東から)



5. SD157土層断面
b-b'
(西から)



6. SD157土層断面
c-c'
(東から)



7. SD84土層断面
(南から)



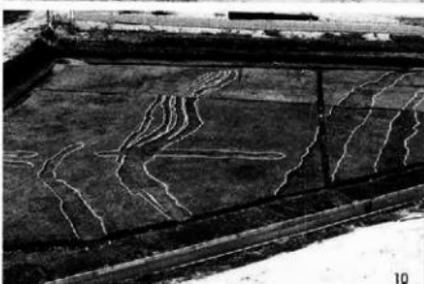
8. SK166完掘
(西から)

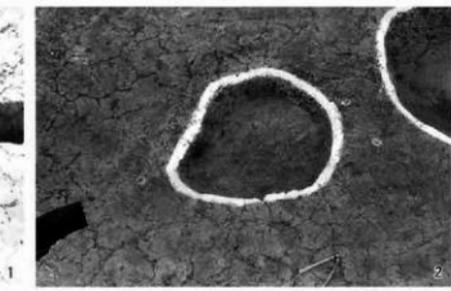


9. SD177土層断面
b-b'
(東から)



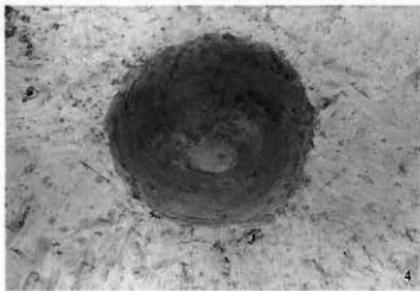
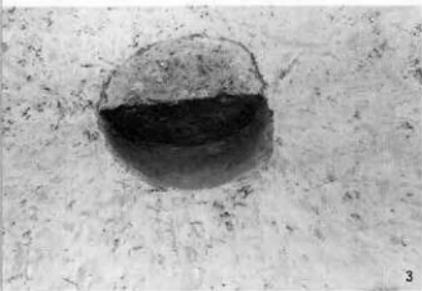
10. SD177完掘
(東から)





1. SK171土層断面
(南から)

2. SK171完掘
(南から)



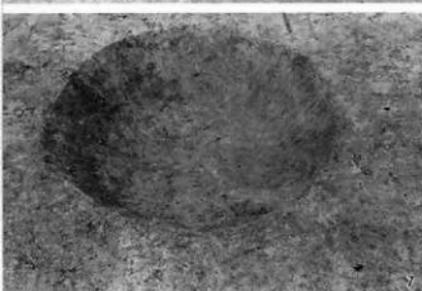
3. SK180土層断面
(南から)

4. SK180完掘
(南から)



5. SK183土層断面
(南西から)

6. SK183遺物
出土状況
(南西から)



7. SK183完掘
(南西から)

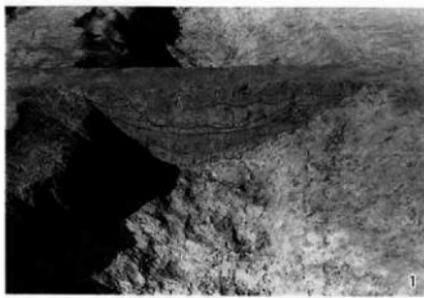
8. SD93土層断面
a-a'
(西から)



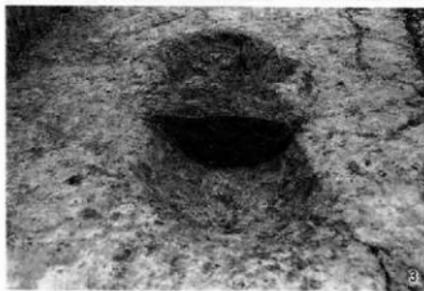
9. SK184土層断面
(北から)

10. SK184完掘
(北から)

1. SD57土層断面
a-a'
(南から)



2. SD57発掘
(中大)
(南から)



3. SK62土層断面
(南東から)



4. SK62発掘
(西から)



5. SD92土層断面
a-a'
(西から)



6. SD92土層断面
b-b'
(南から)

7. SD92発掘
(東から)

8. SD94土層断面
(西から)

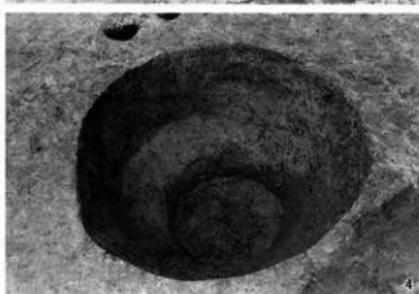
9. SK95土層断面
(北から)

10. SK95発掘
(南から)



1. SD98土層断面
(西から)

2. SD98完掘
図 (西から)



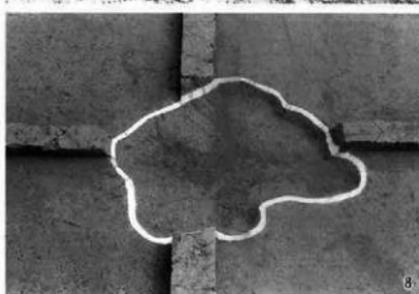
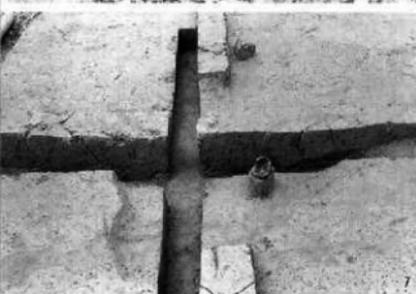
3. SE101土層断面
(西から)

4. SE101完掘
(西から)



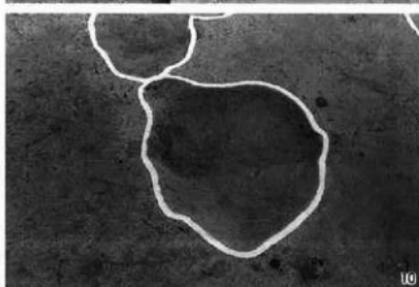
5. SK142土層断面
(西から)

6. SK142完掘
(北西から)



7. SK191土層断面
(南から)

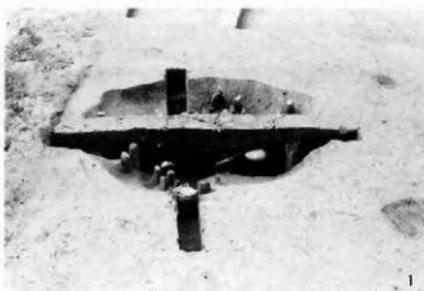
8. SK191完掘
(西から)



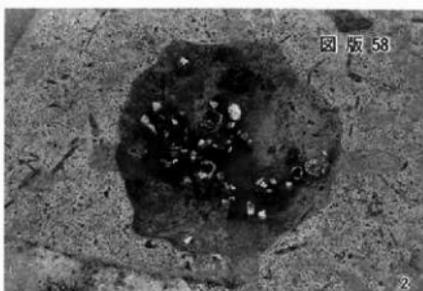
9. SK195土層断面
(西から)

10. SK195完掘
(西から)

1. SK186土層断面
(東から)



2. SK186遺物
出土状況
(南西から)



3. SK186完掘
(南西から)



4. SK220土層断面
(北西から)



5. SK220遺物
出土状況
(北西から)



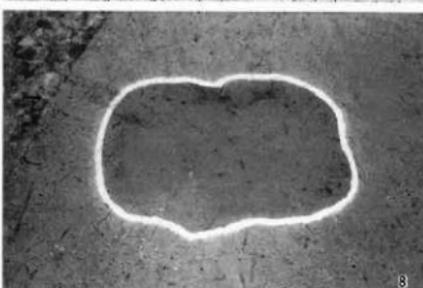
6. SK220完掘
(南東から)



7. SK197遺物
出土状況
(北西から)



8. SK197完掘
(南東から)

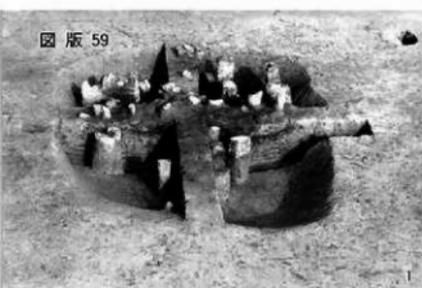


9. SK70土層断面
(北西から)

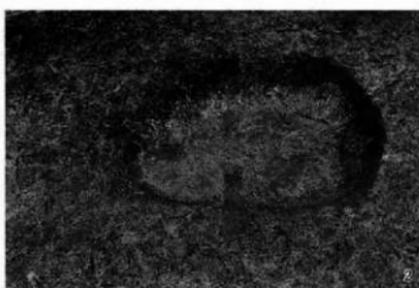


10. SK70完掘
(北西から)

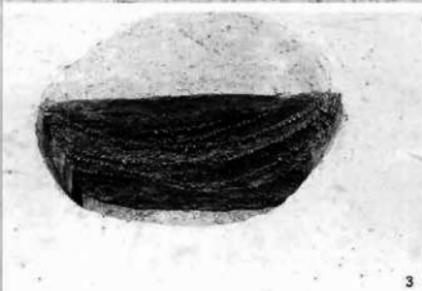




1. SK79遺物
出土状況
(西から)



2. SK79完掘
(南から)



3



3. SE110土層断面
(南東から)

4. SE110烏帽子
出土状況
(西から)

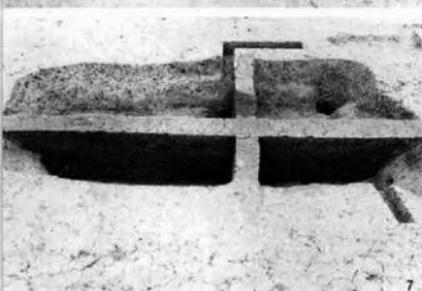


5



5. SE104土層断面
(西から)

6. SE104曲物
出土状況
(西から)

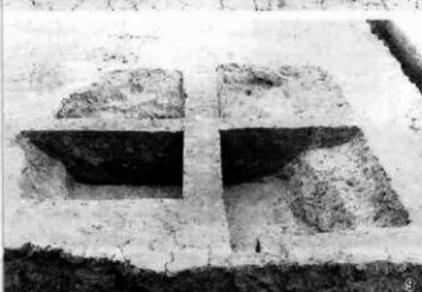


7

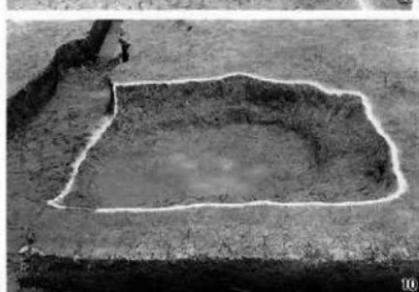


7. SK108土層断面
(南から)

8. SK108完掘
(西から)



9



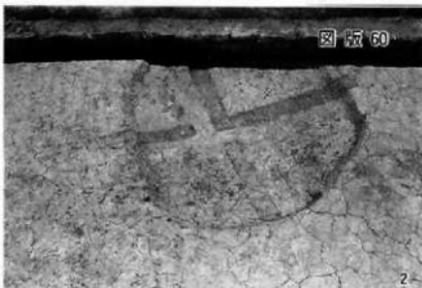
9. SK109土層断面
(西から)

10. SK109完掘
(南から)

1. SK87土層断面
(南から)



2. SK87完掘
(北から)



3. 47G-P1
土層断面
(北から)



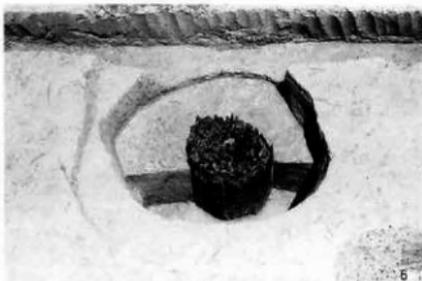
4. 47G-P1
柱根出土状況
(北から)



5. 47G-P2
土層断面
(北から)



6. 47G-P2
柱根出土状況
(北から)



7. SE160土層断面
(北から)



8. SE160曲物
出土状況
(北から)

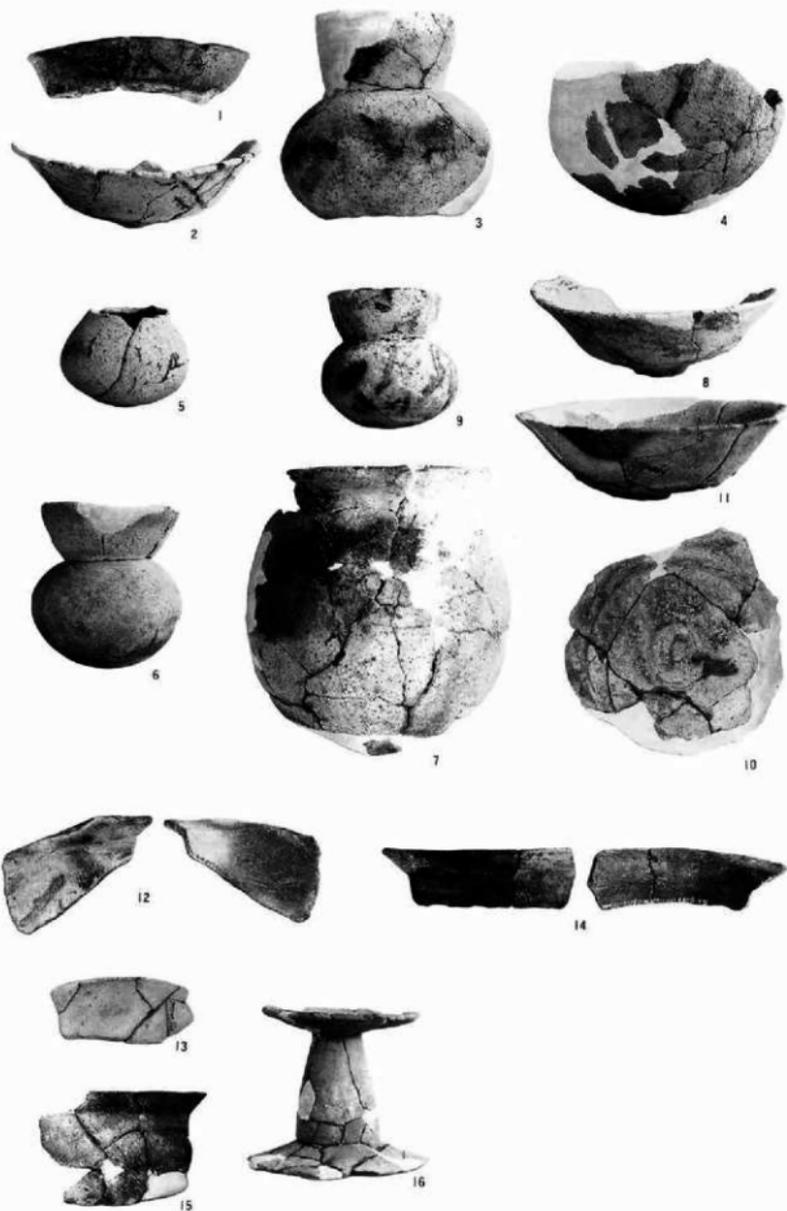


9. SD80土層断面
(北西から)



10. SD80完掘
(北西から)





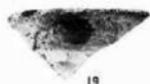
1~5 (SK186)、6 (SK191)、7~9 (SK195)、10 (SK212)、11 (SK196)、12~16 (SK220)



17



18



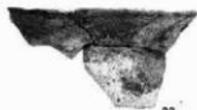
19



20



21



22



23



24



25



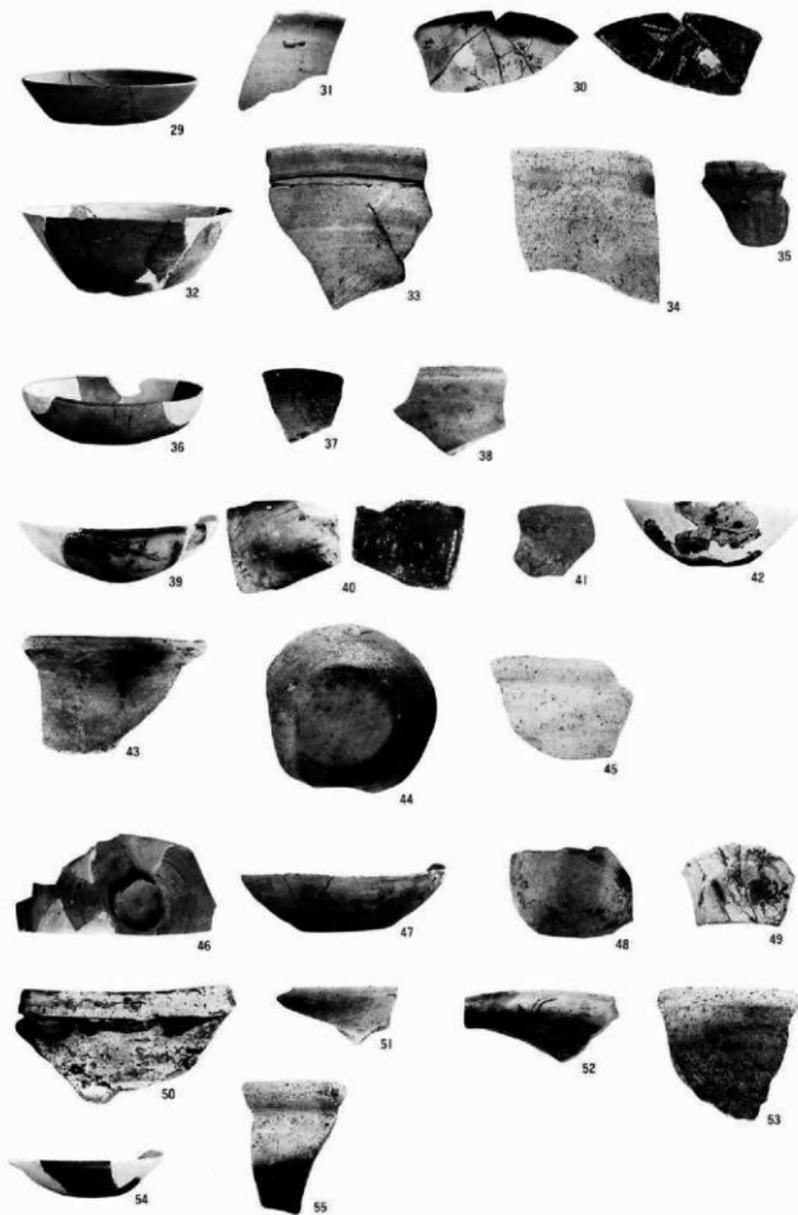
26

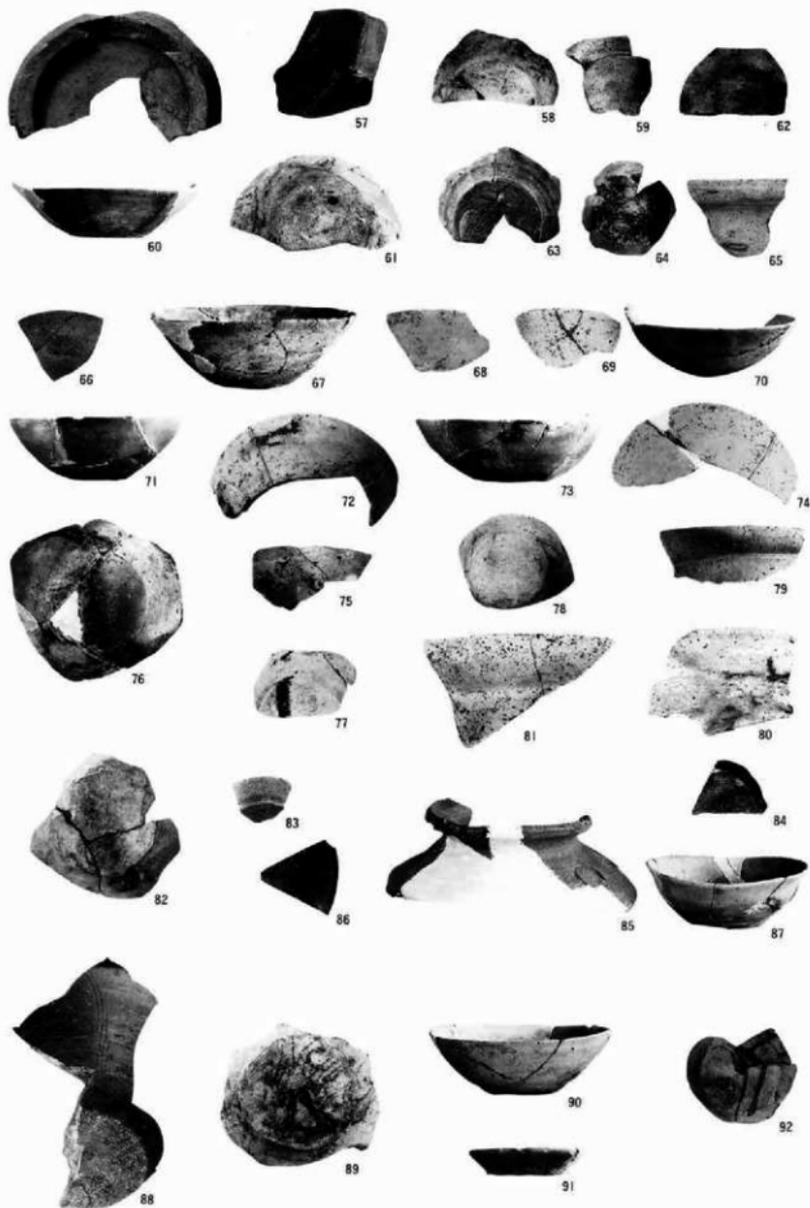


27

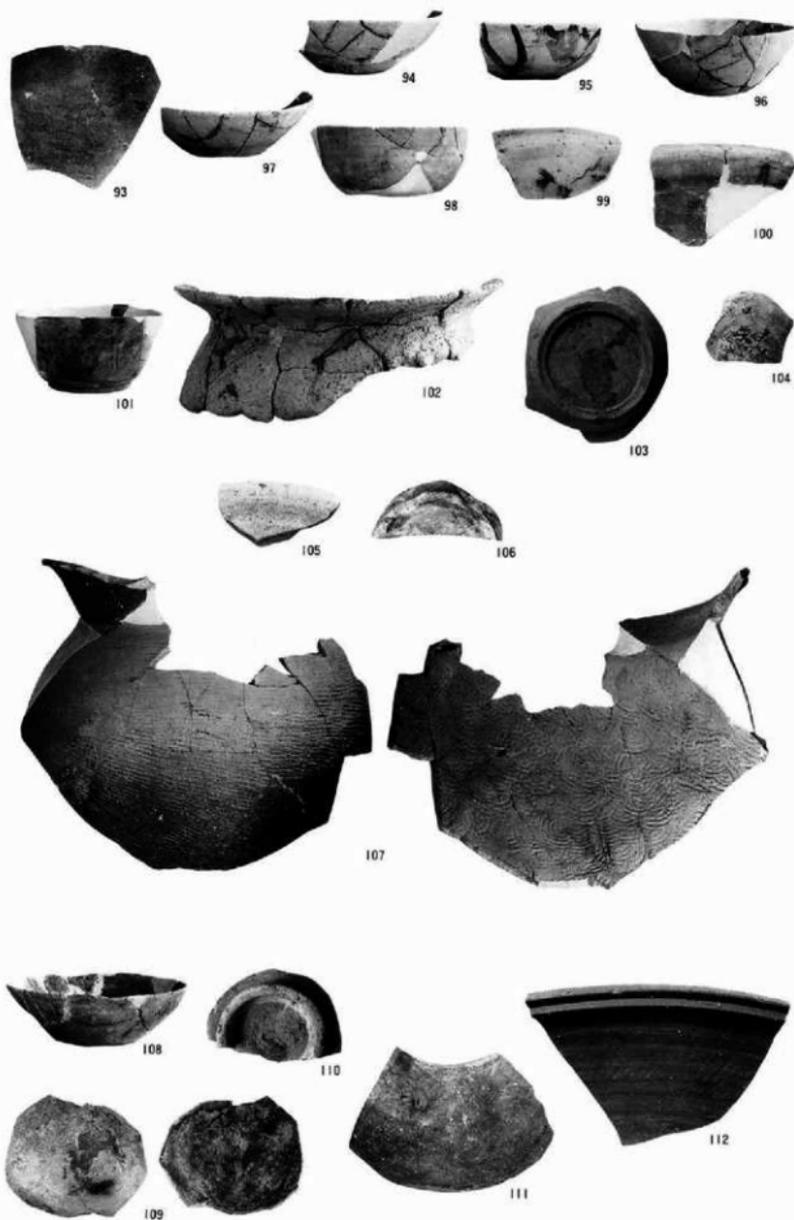


28

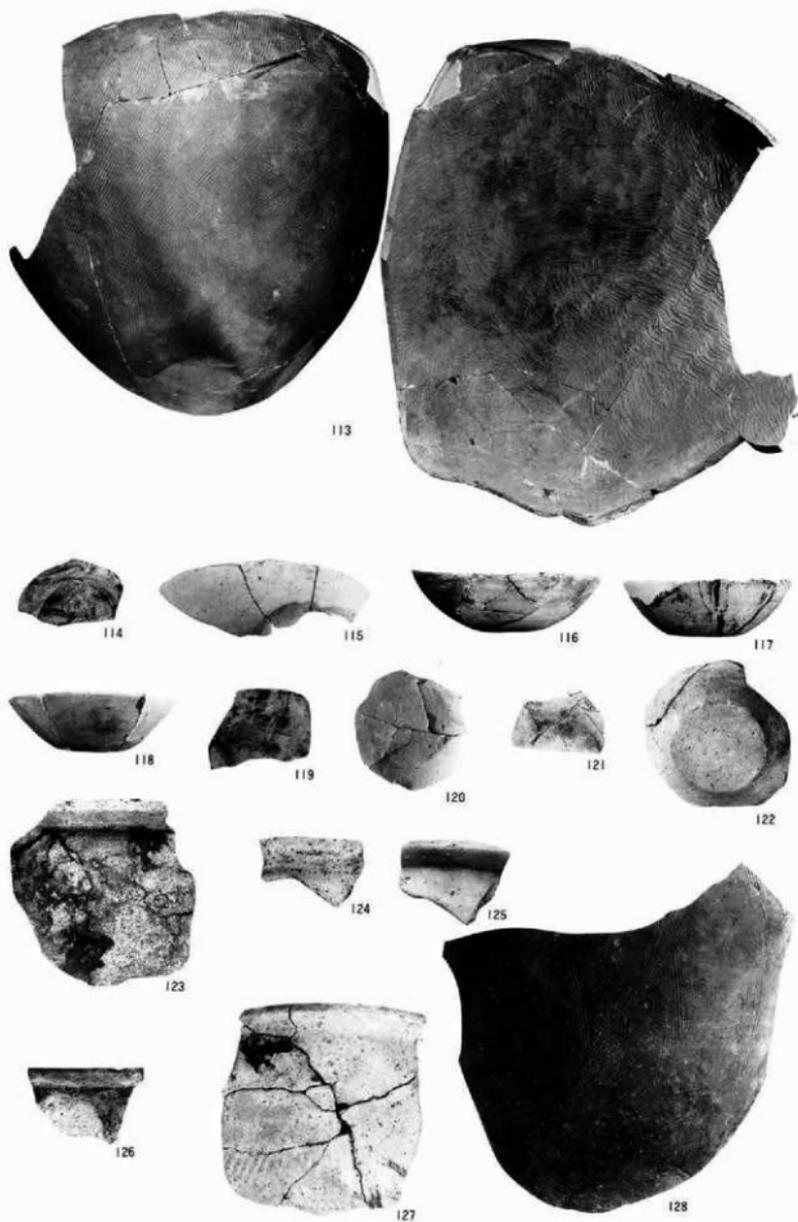




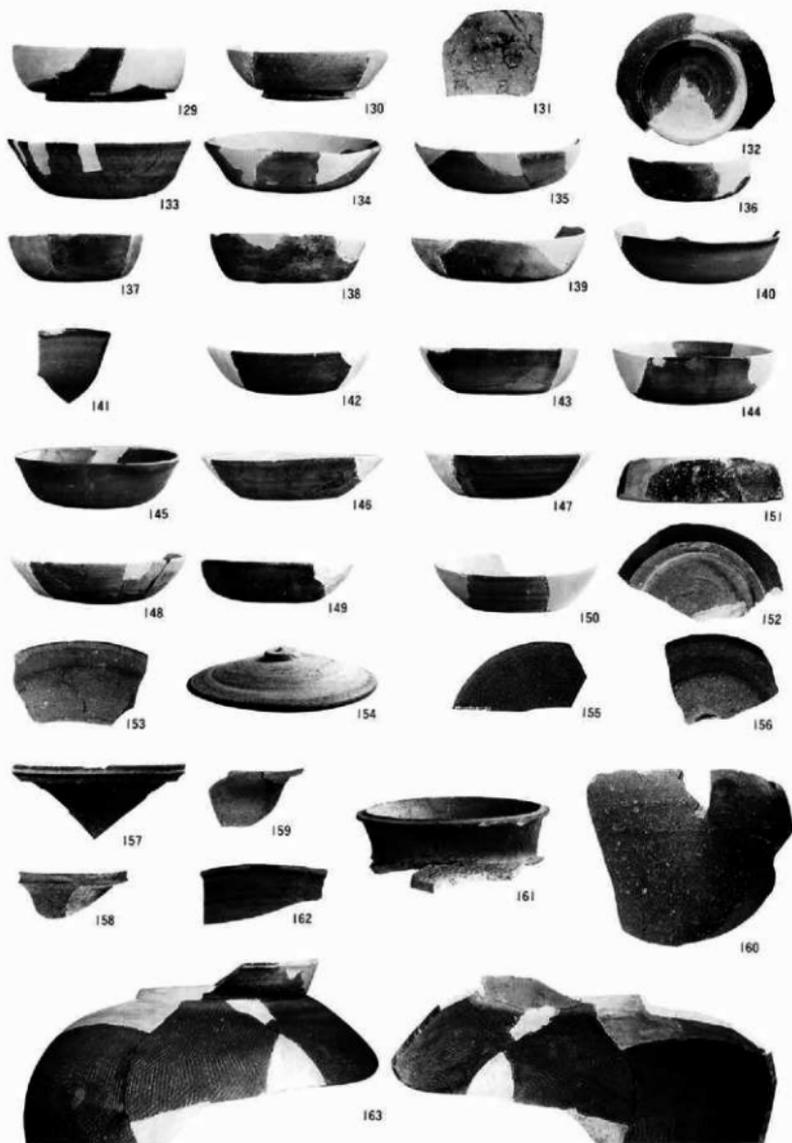
56~59(SK87)、60~65(SD93)、66~81(SK79)、82~87(SD120)、88~92(SD127)

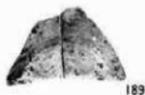
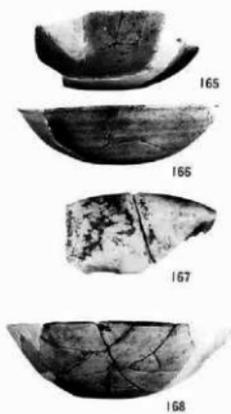


93~100(SK154), 101・102(SK136), 103・104(SK158), 105・106(SD151), 107(4E20P2), 108・109(SK161)
110(SK180), 111(SK165), 112(SD157)

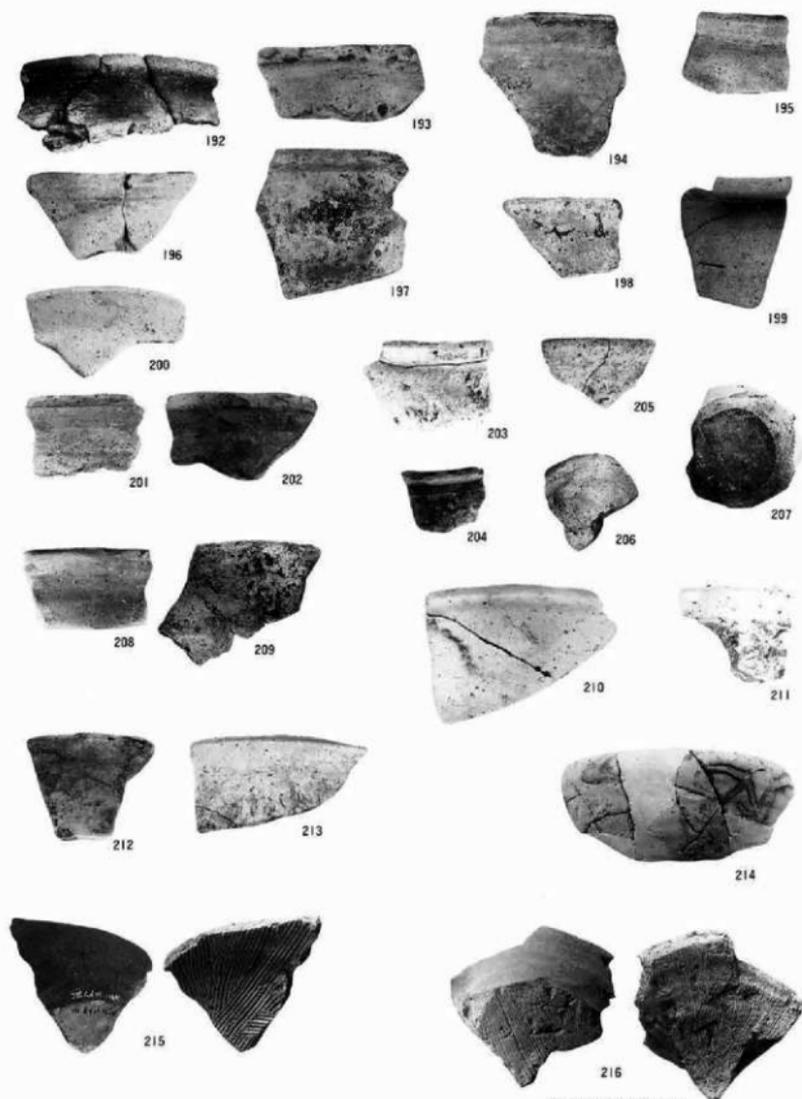


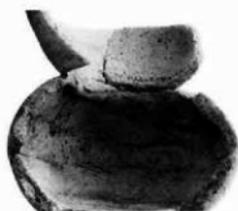
その他の遺構出土遺物



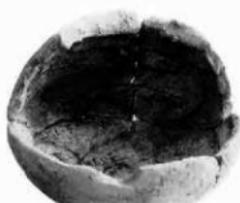


包含層出土遺物

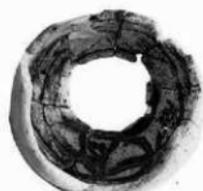




内面輪積み痕 6



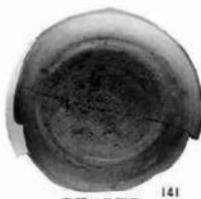
内面輪積み痕 25



内面輪積み痕 3



内面切り離し糸痕 188



底部へラ記号 141



底部外面へラ記号 135



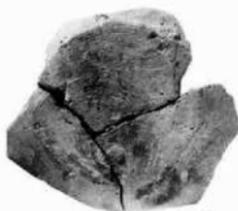
底部へラ記号 63



表面へラ削り痕 154



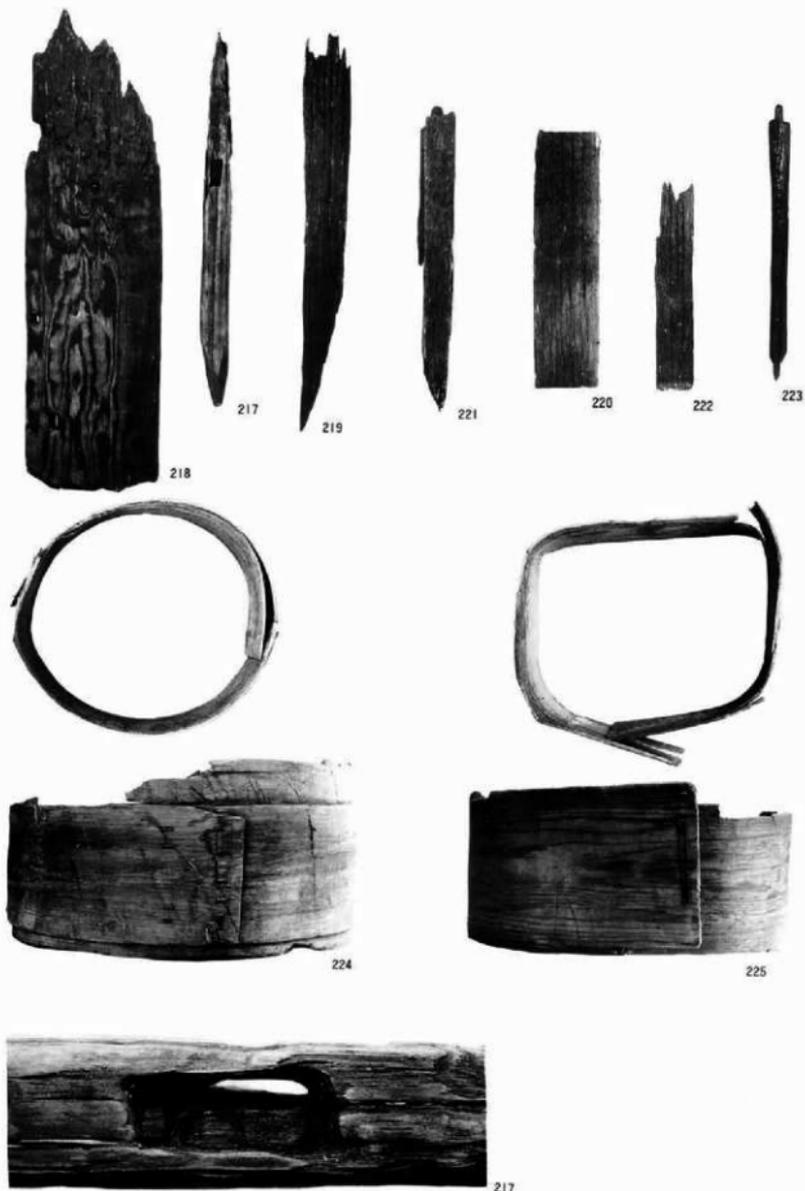
円面視 106

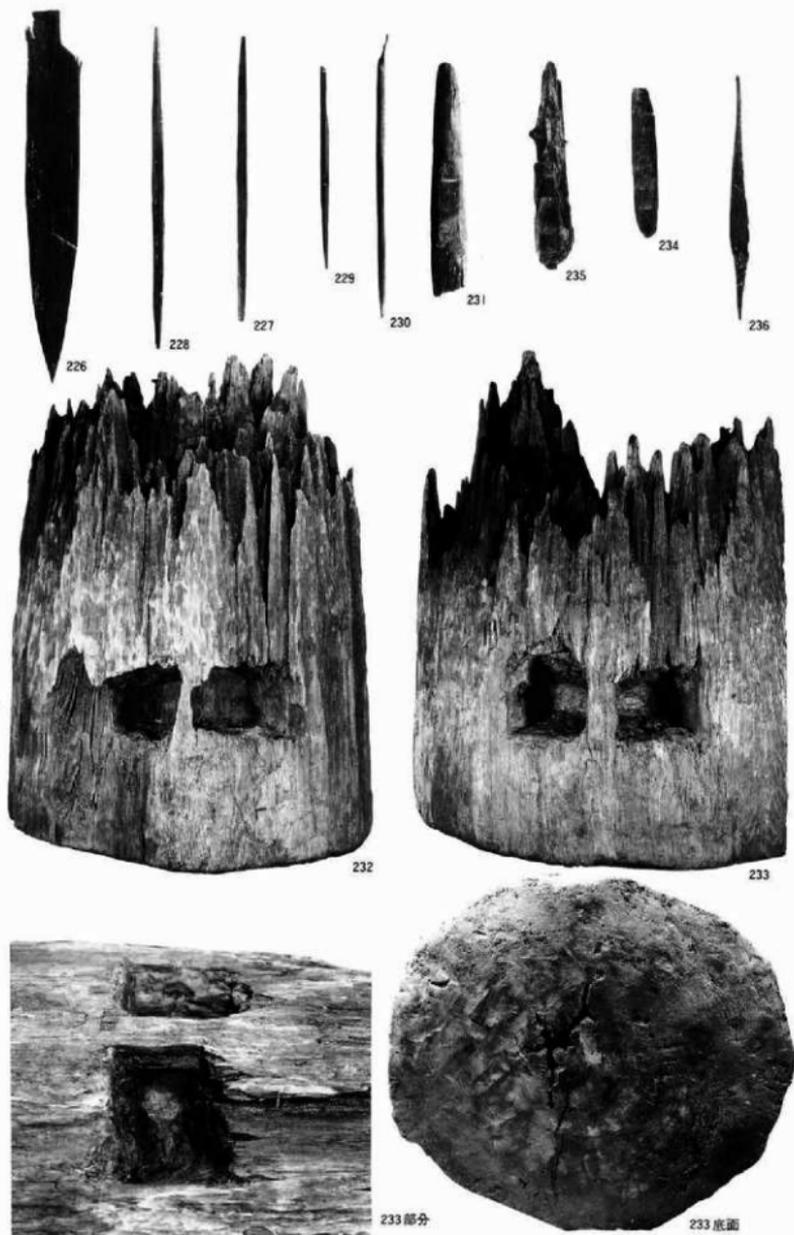


墨書 82



内面オロシ目 216





226(SE69)、227・228(SE104)、229(SK109)、230・231(SK108)、232(47G-P1)、233(47G-P2)、234(SD127)
235(46E-P4)、236(SD127)



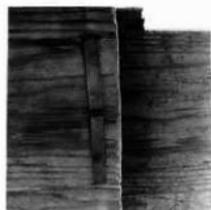
鳥帽子



鳥帽子



外面織じ皮紐

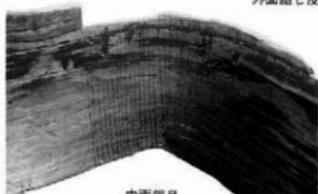


外面織じ皮紐



内面壁目

224



内面壁目

225



237



238



239



240



241



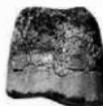
242



244



243



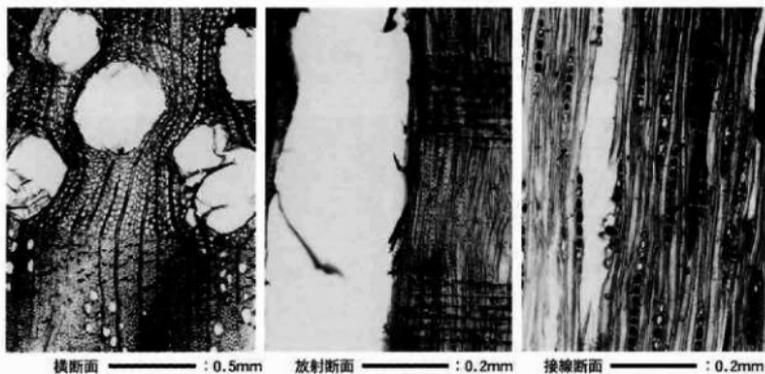
245



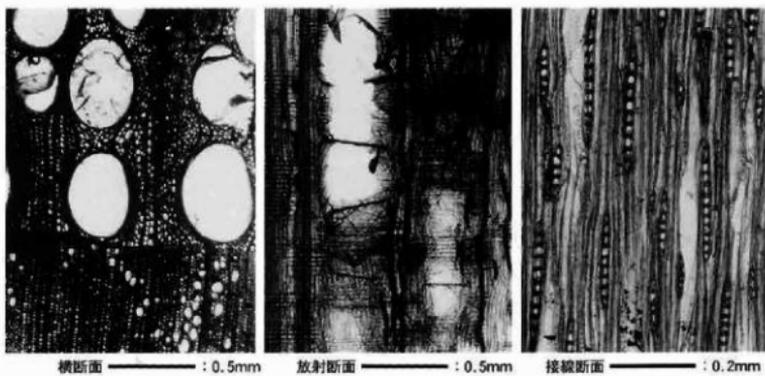
246



沖ノ羽遺跡B地区出土木材の顕微鏡写真



1. 47G-P1出土柱根 クリ



2. 47G-P2出土柱根 クリ



図1 布痕のある漆断片

約2×



図2 絹布痕のある漆断片

約2×



図3 麻布痕のある縁部漆片

約2×



図4 麻布目痕

30×



図5 絹布痕跡

30×

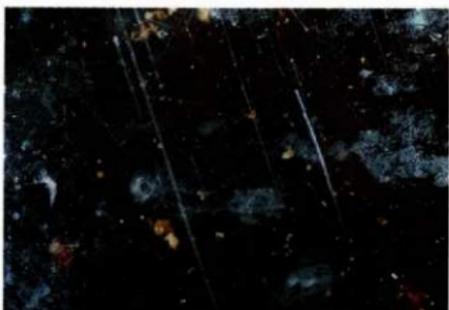


図6 最外面(表面)の漆塗り

30×



図7 麻布痕のある縁部漆片 層断面

30×



図8 最外面(表面)の漆塗りと絹布 層断面

230×

報告書抄録

書名	沖ノ羽遺跡Ⅱ（B地区）	
副書名	磐越自動車道関係発掘調査報告書	
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書	
シリーズ番号	第80集	
編・著者名	星野啓明・石川智紀・亀井功・木村康裕・佐藤正知・高橋保雄・田海義正	
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団	
発行年月日	平成8（1996）年3月31日	
所収遺跡	沖ノ羽遺跡（B地区） おきのはいせき	
所在地	新潟県新津市大字七日町字沖ノ羽3255他	
市町村コード	15-207	
緯度・経度	北緯37度48分58秒 東経139度7分54秒	
調査期間	19910415～19911219	19920409～19921210
調査面積	41,016㎡	
調査原因	磐越自動車道建設	
遺跡名	沖ノ羽遺跡	
種別	集落跡	
主な時代	古墳時代前期後半、平安時代（9世紀）、鎌倉時代（13世紀）	
主な遺構	古墳時代（土坑）、平安時代（掘立柱建物跡・井戸・土抗・溝）、鎌倉時代（井戸・溝）	
主な遺物	古式土師器、須恵器、土師器、珠洲焼、フイゴ羽口、柱根、畜車	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第80集

磐越自動車道関係発掘調査報告書

沖ノ羽遺跡Ⅱ（B地区）

平成8年3月25日 印刷

発行 新潟県教育委員会

平成8年3月31日 発行

編集 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒951 新潟市一番瀬通町5923-46印刷 北越印刷株式会社
〒940 長岡市福住1丁目6-27

正誤表

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第80集
磐越自動車道関係発掘調査報告書
沖ノ羽遺跡Ⅱ（B）地区

誤	箇所：最終頁 報告書抄録 編・著者名 星野信明・石川智紀・亀井功・木村康裕・佐藤正知・高橋保雄・田海義正
正	編・著者名に永嶋正春を加える